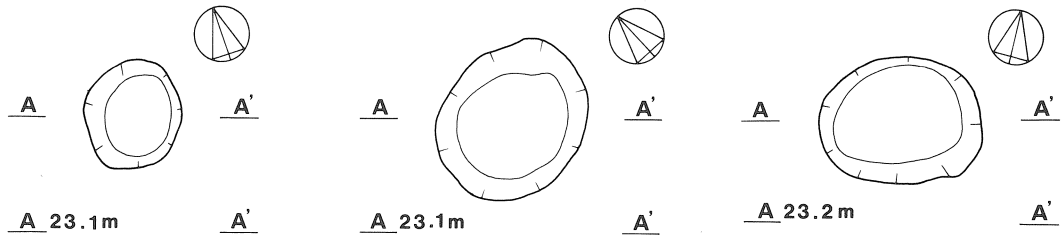


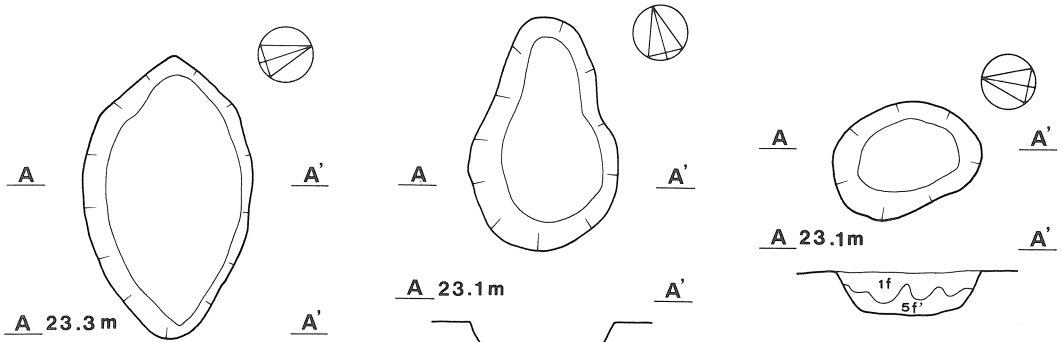
第568图 土壤実測図 (11)



SK-43

SK-45

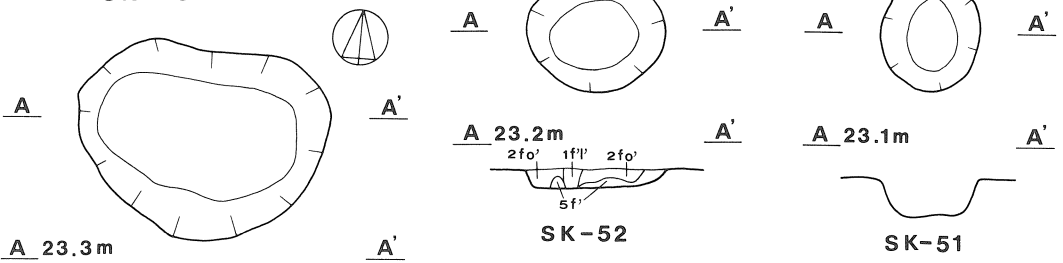
SK-46



SK-48

SK-49

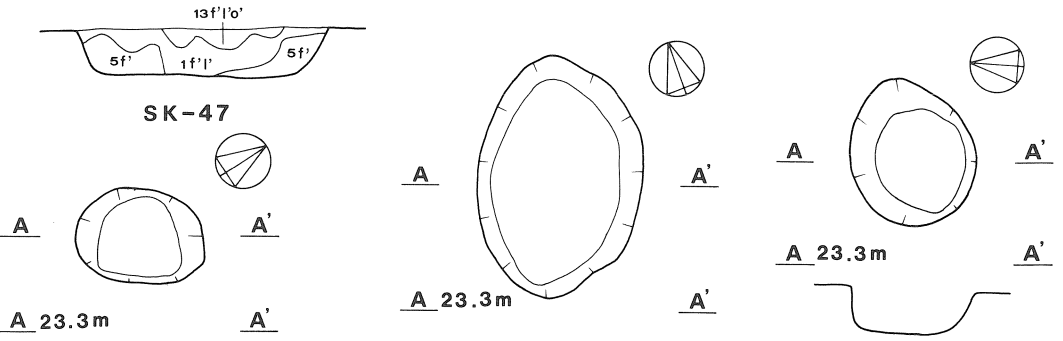
SK-50



SK-47

SK-52

SK-51



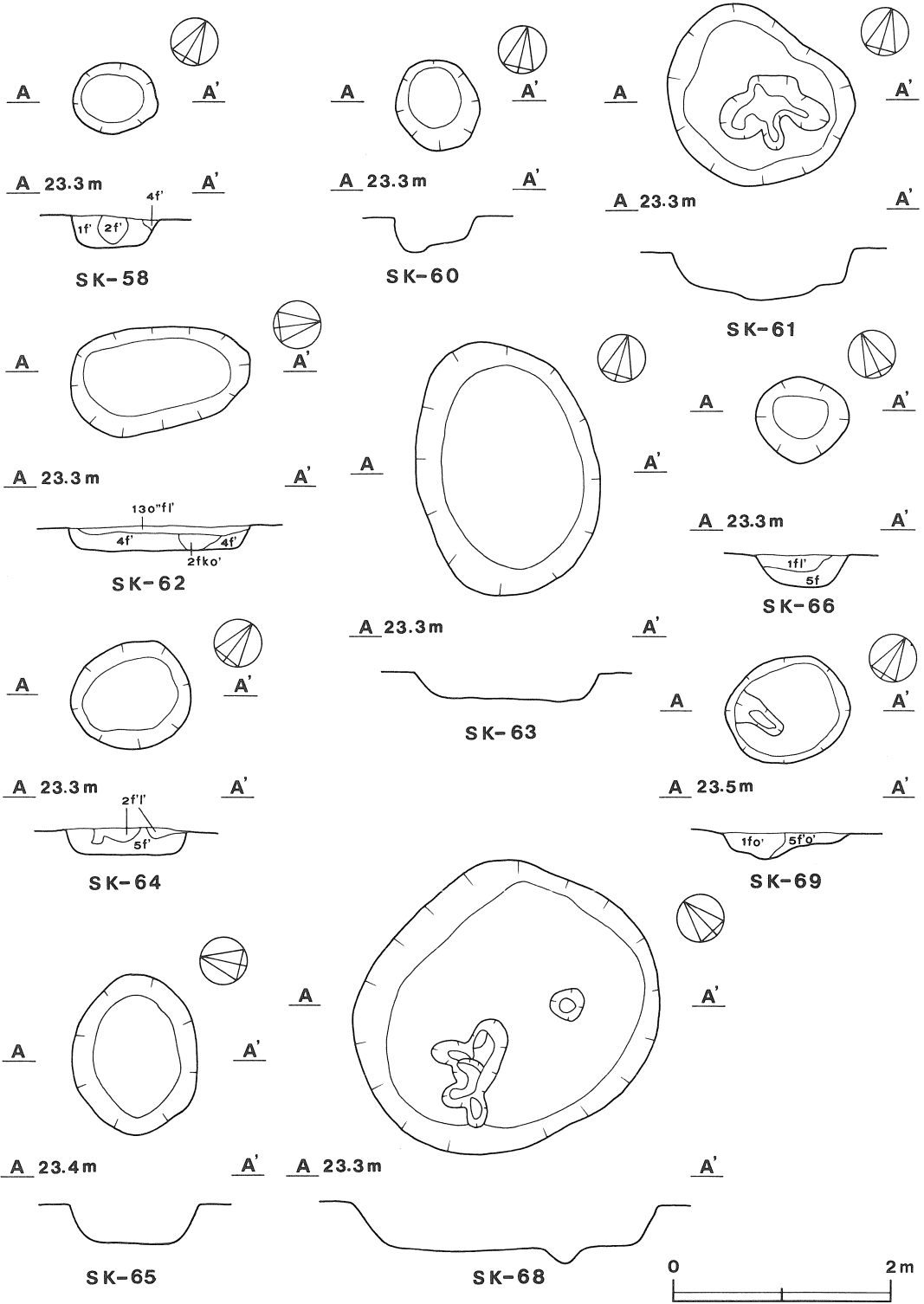
SK-56

SK-54

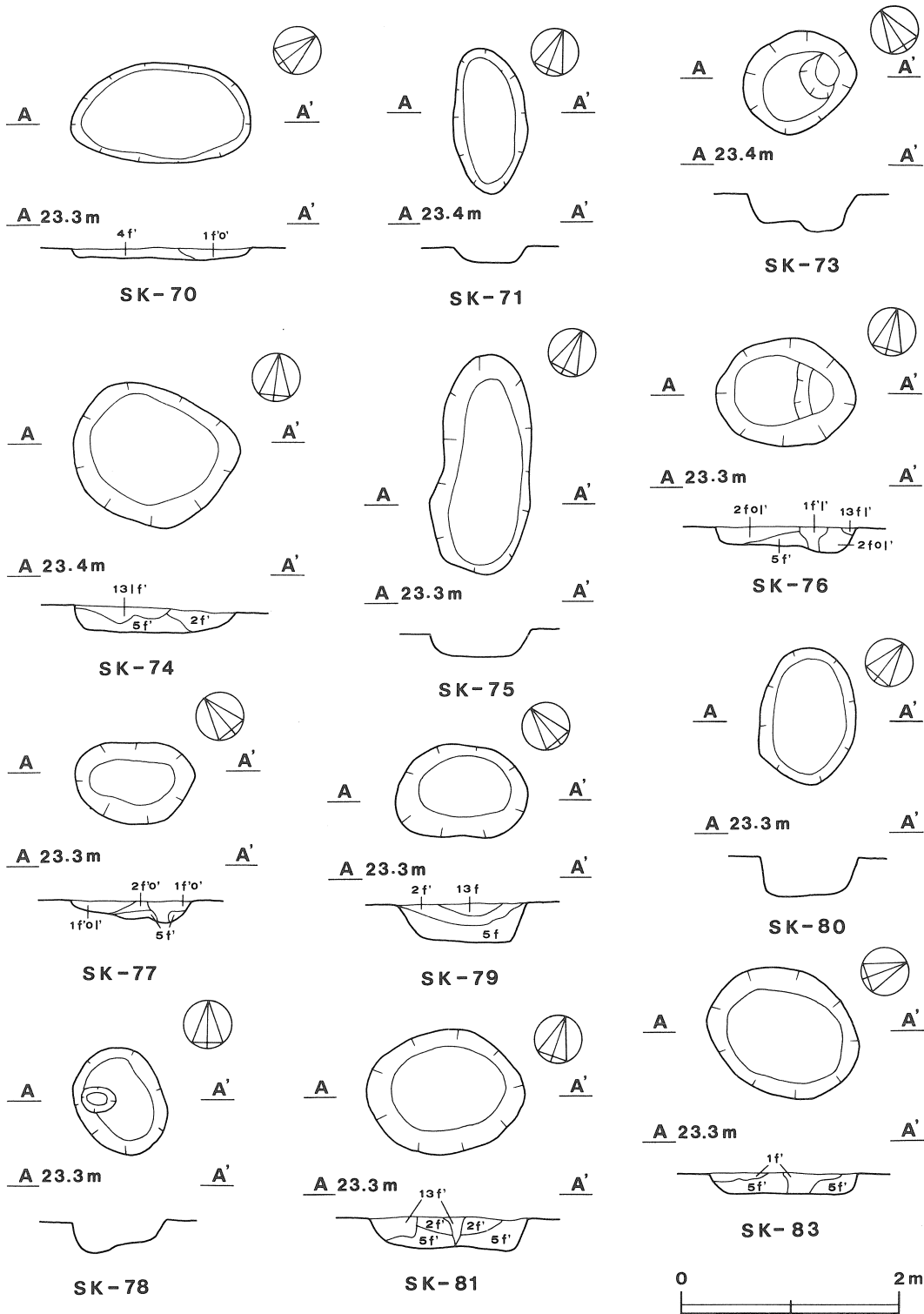
SK-57



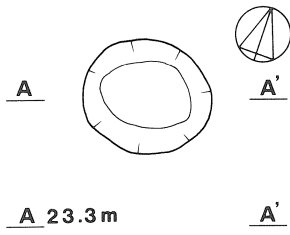
第569图 土壤実測図 (12)



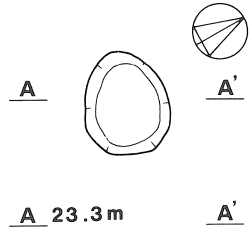
第570図 土壤実測図 (13)



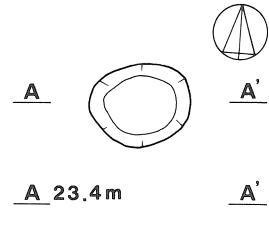
第571図 土壤実測図 (14)



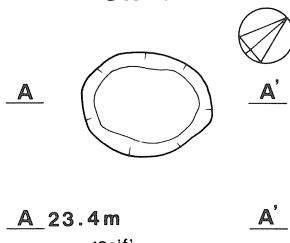
SK-85



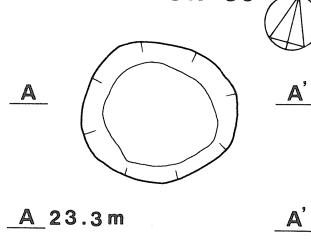
SK-86



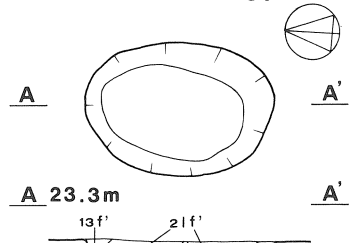
SK-87



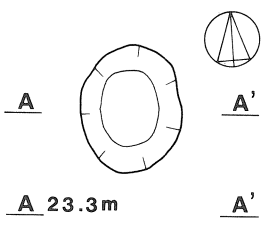
SK-88



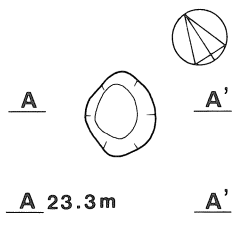
SK-91



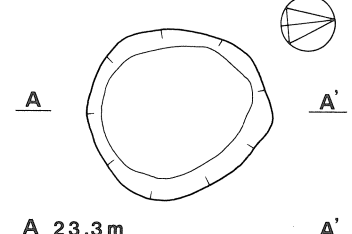
SK-92



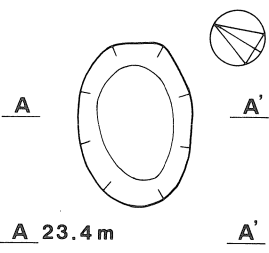
SK-93



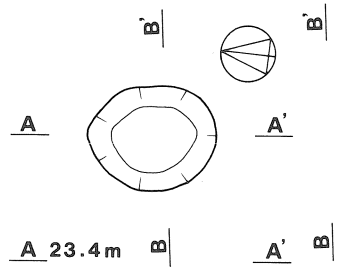
SK-94



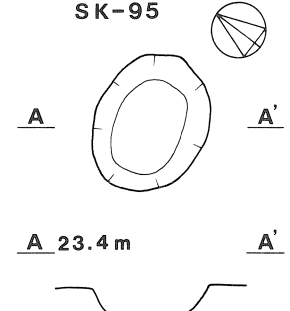
SK-95



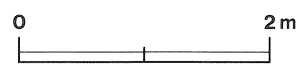
SK-96



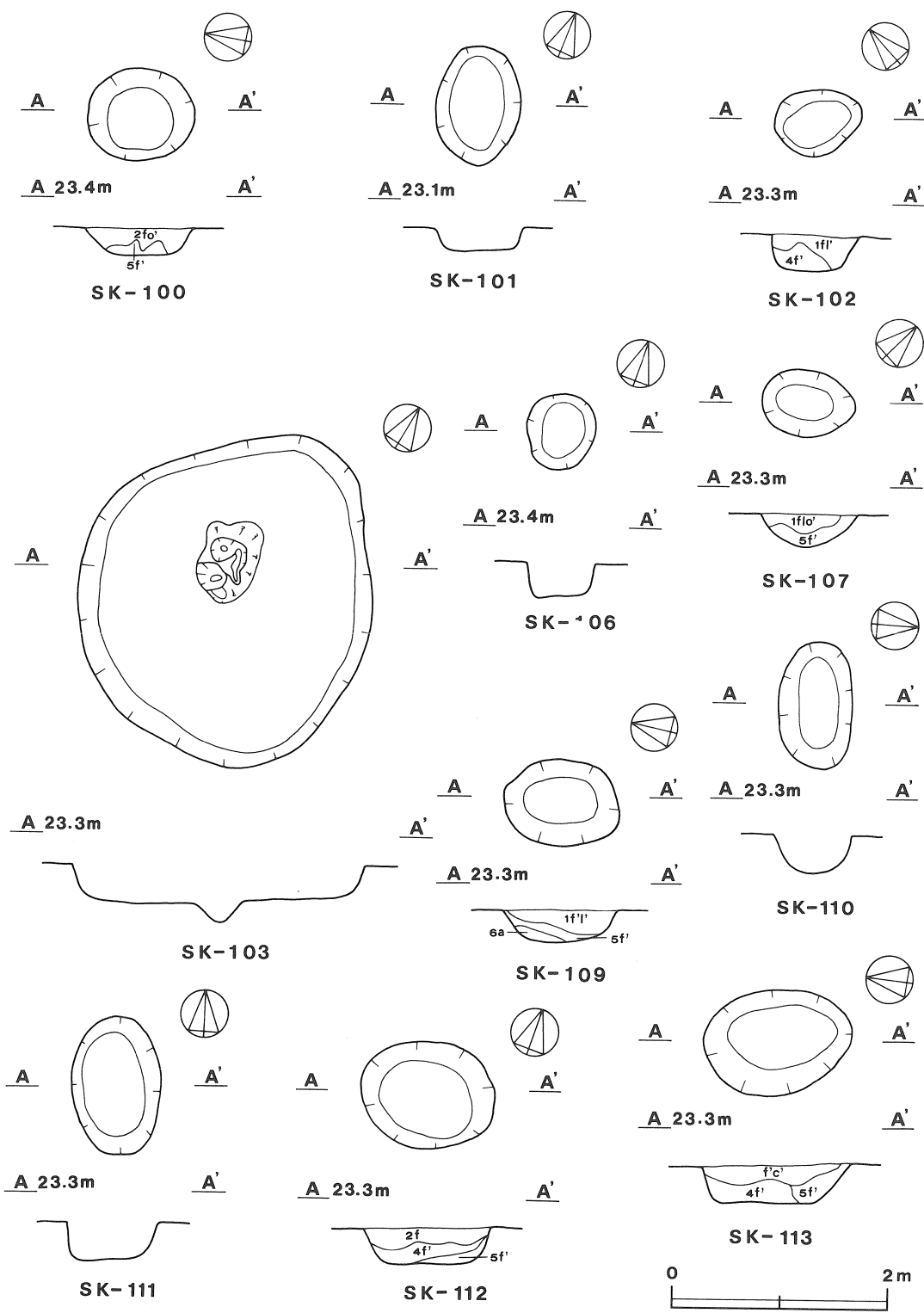
SK-97



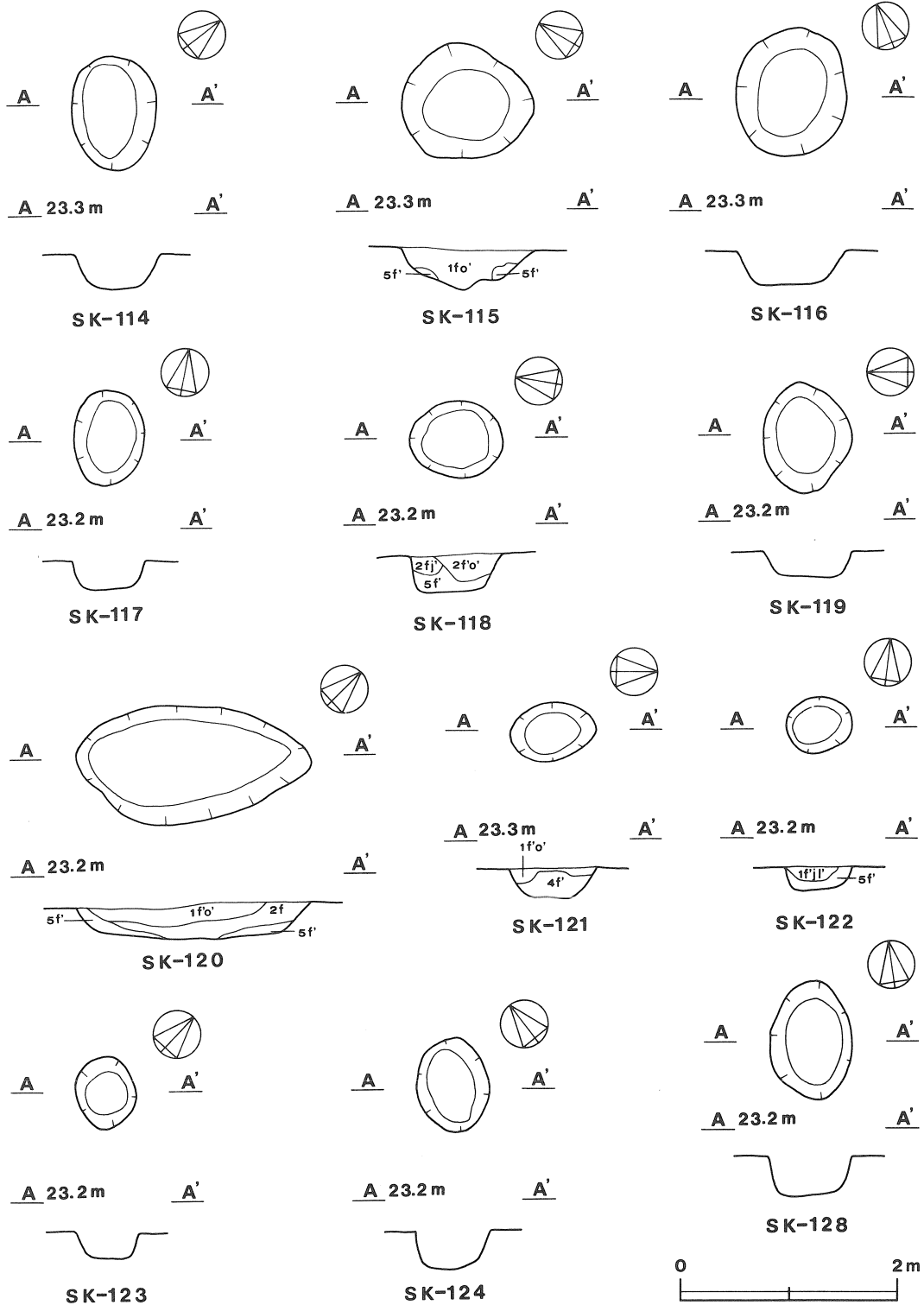
SK-99



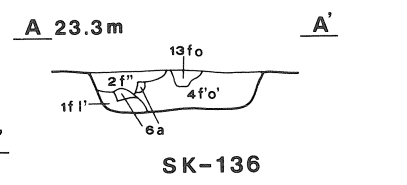
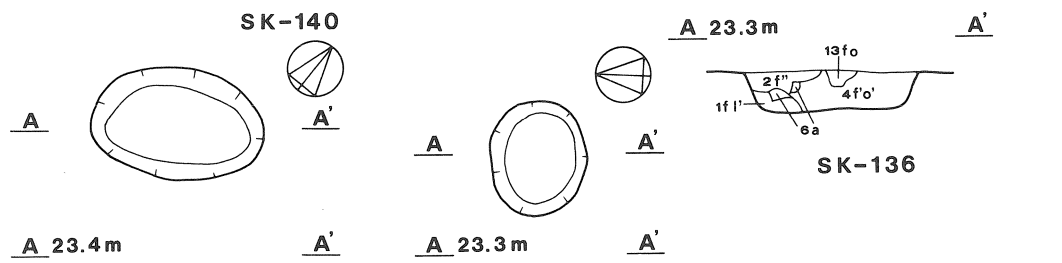
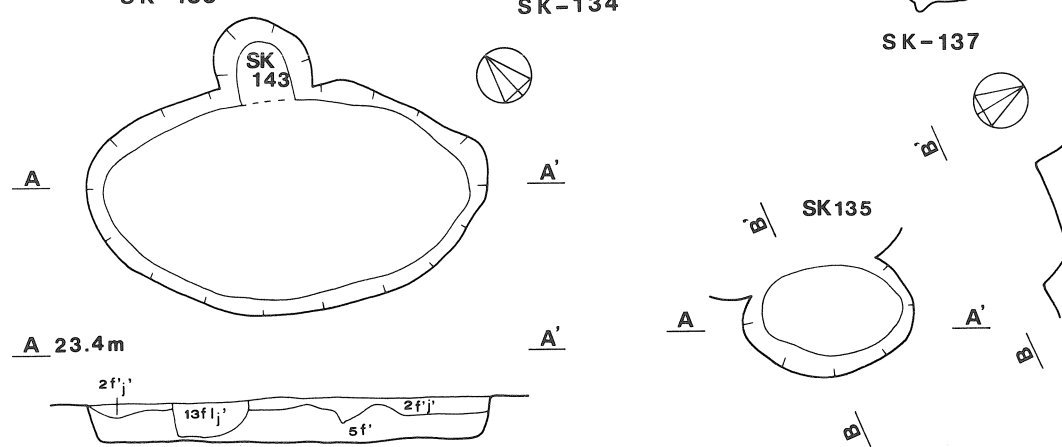
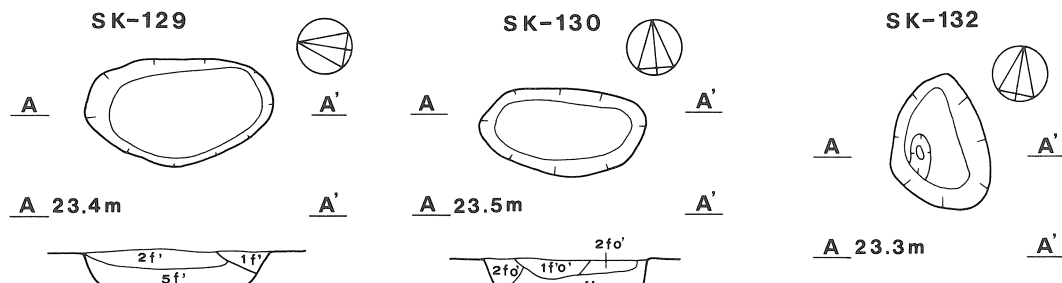
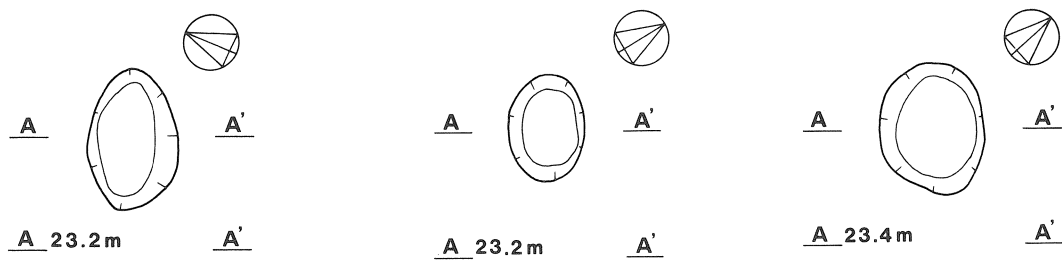
第572図 土壤実測図 (15)



第573图 土壤实测图 (16)

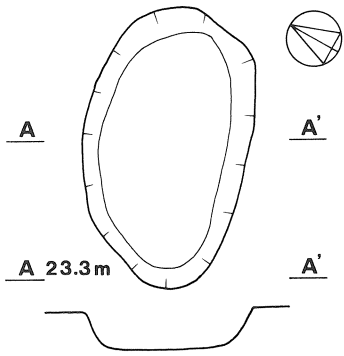


第574图 土壤实测图 (17)

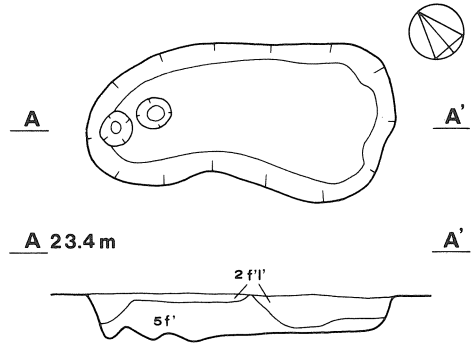


第575图 土壤实测图 (18)

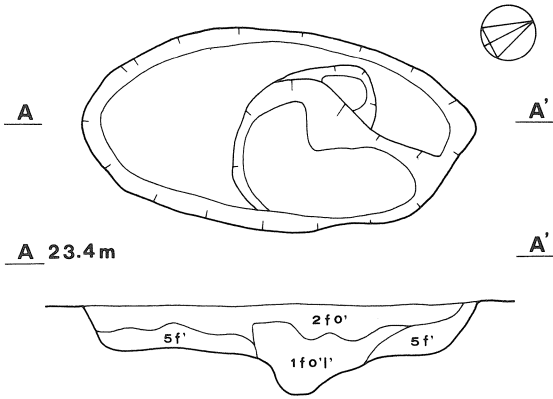




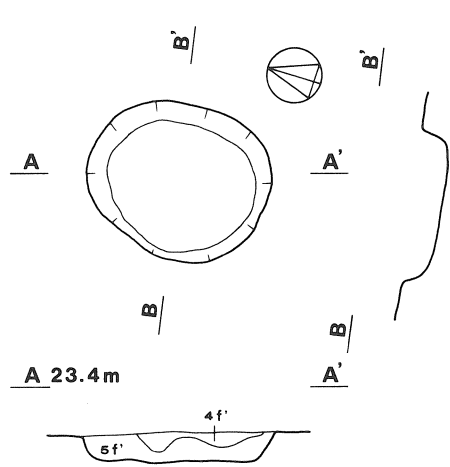
SK-148



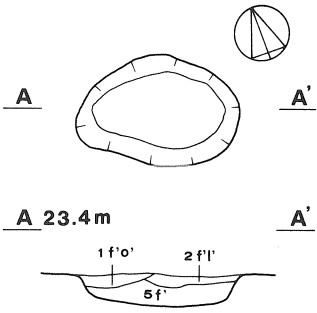
SK-149



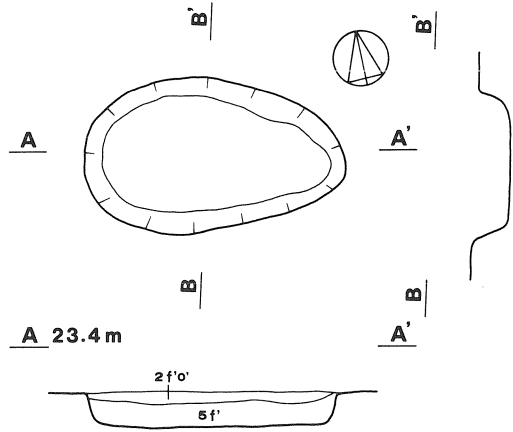
SK-150



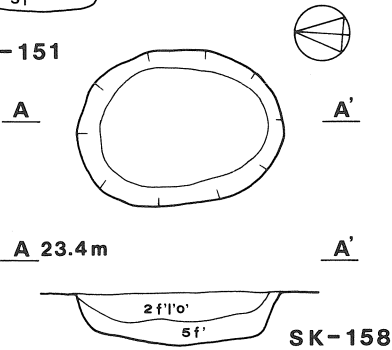
SK-153



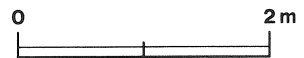
SK-151



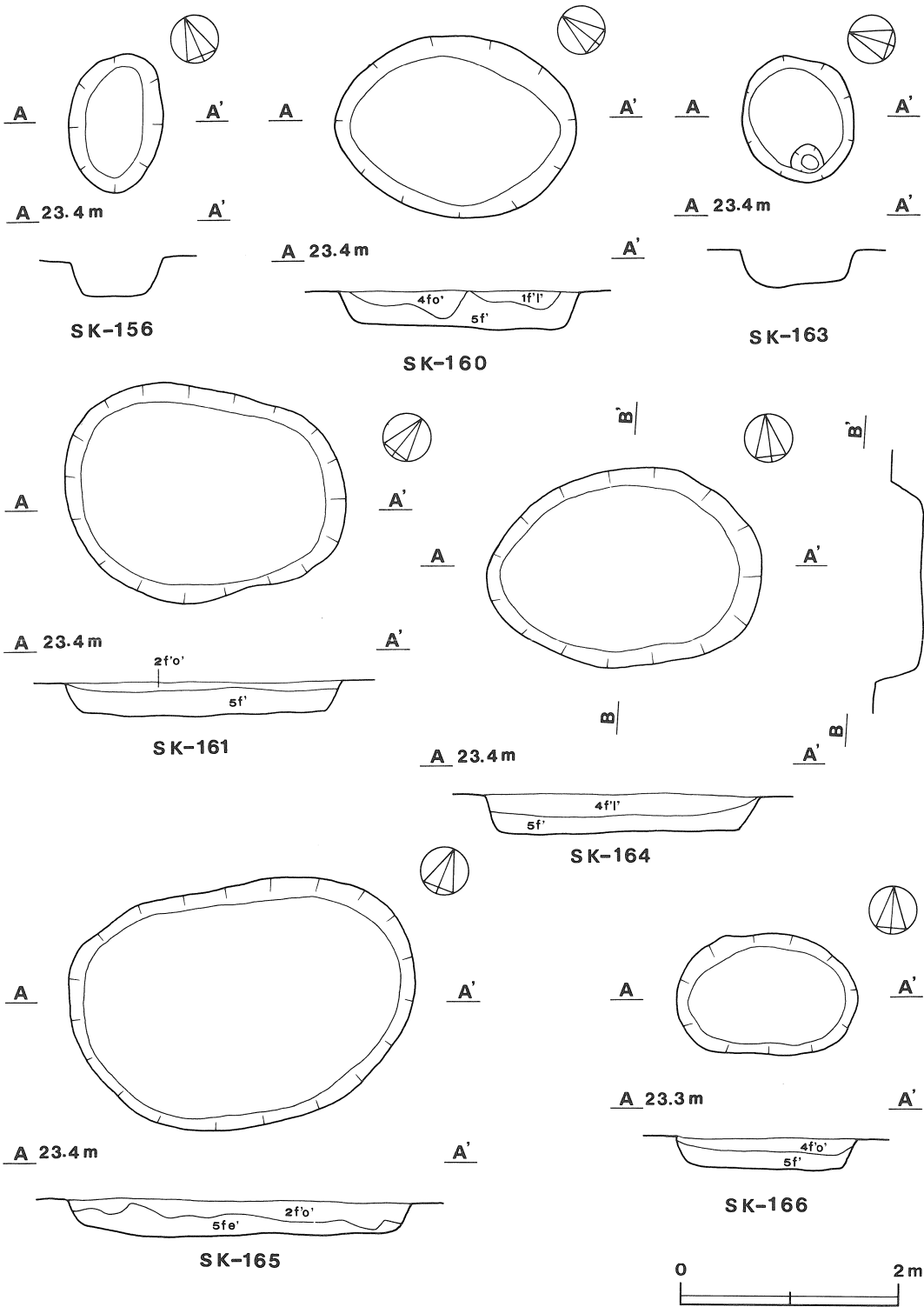
SK-155



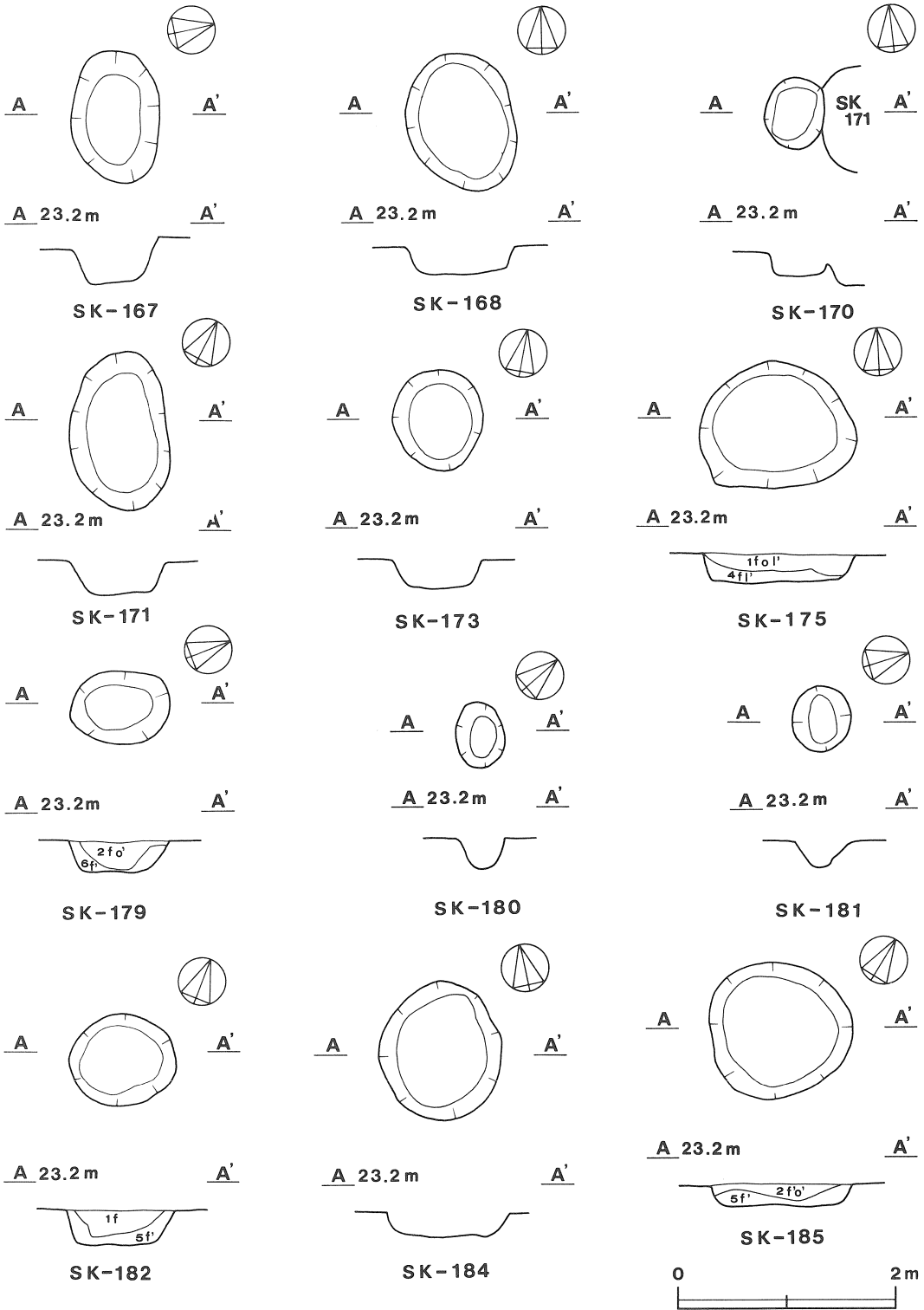
SK-158



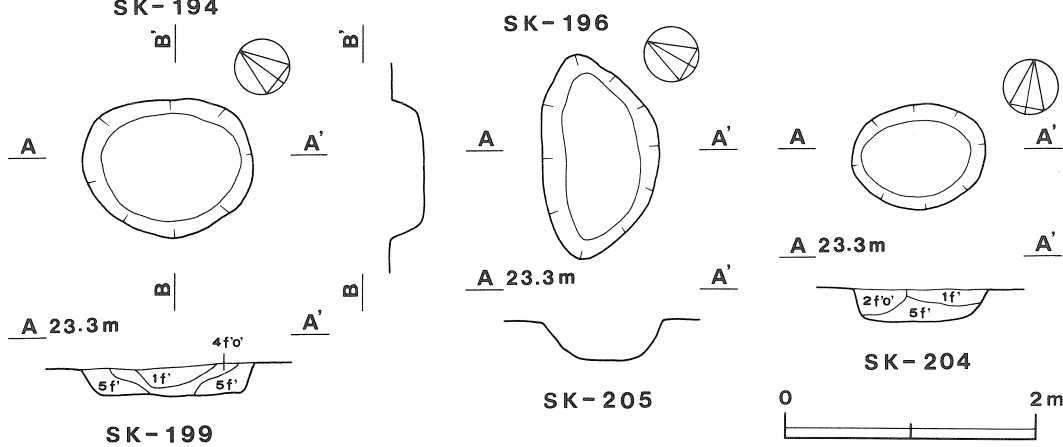
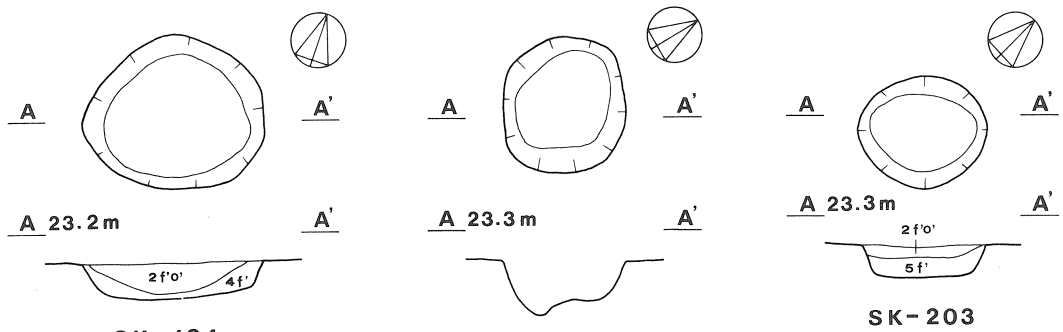
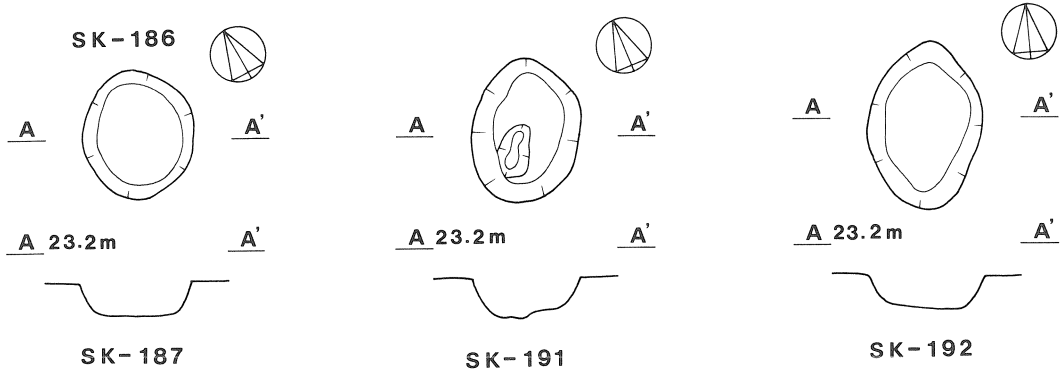
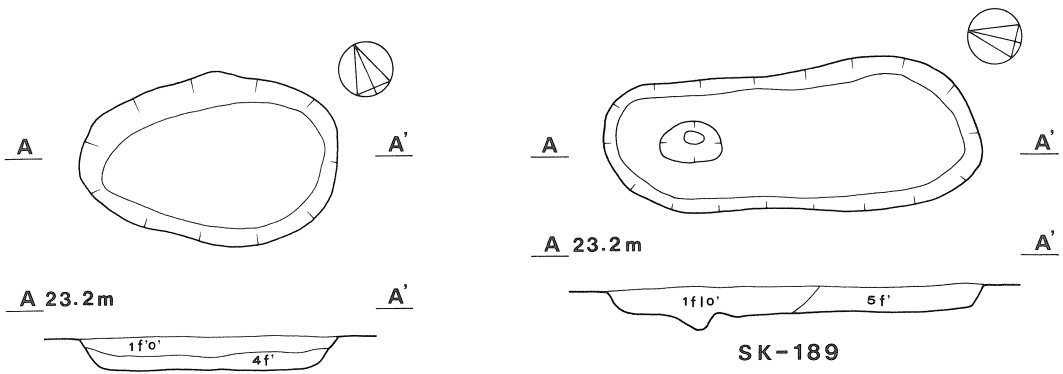
第576图 土壤実測图 (19)



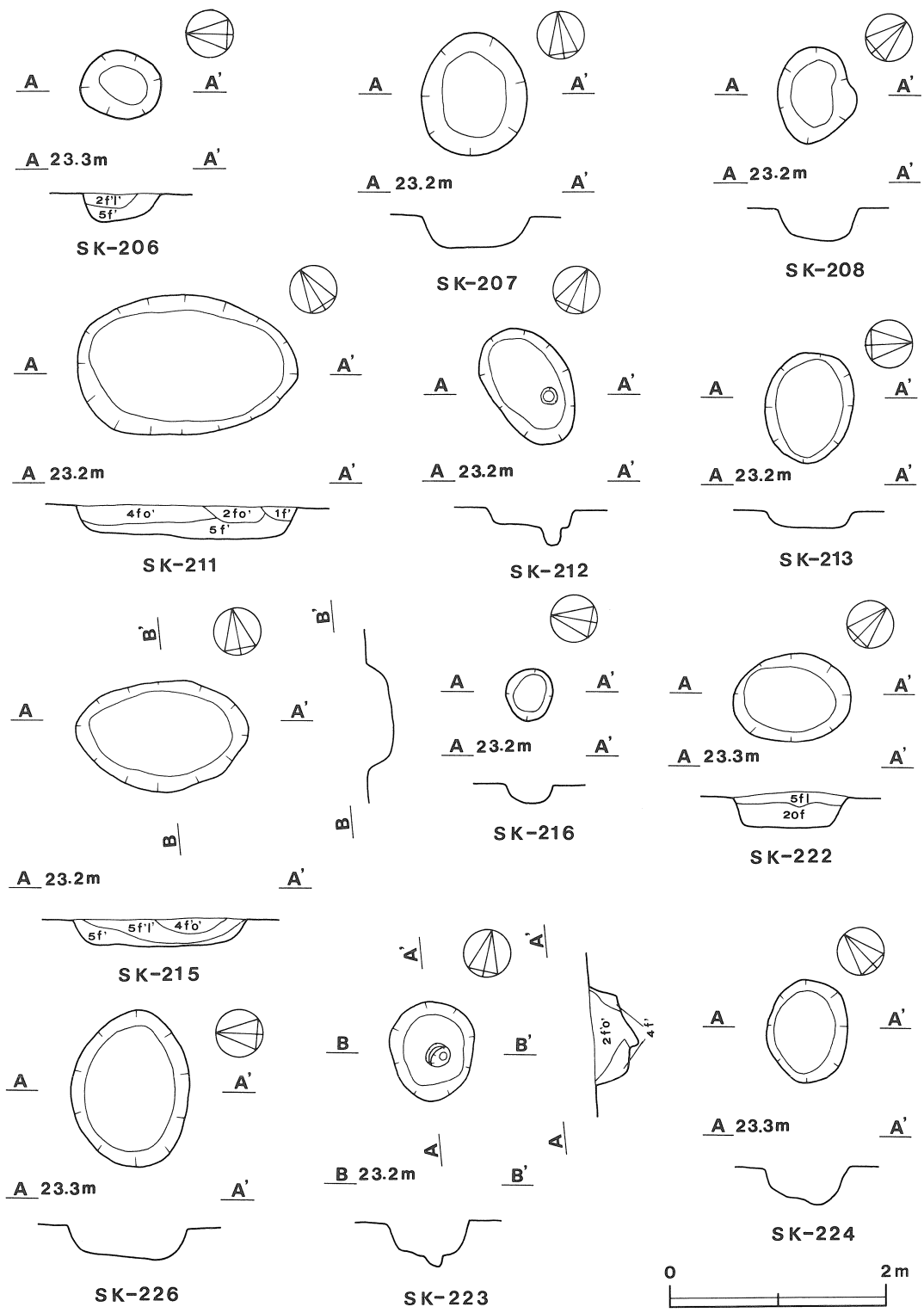
第577図 土壤実測図 (20)



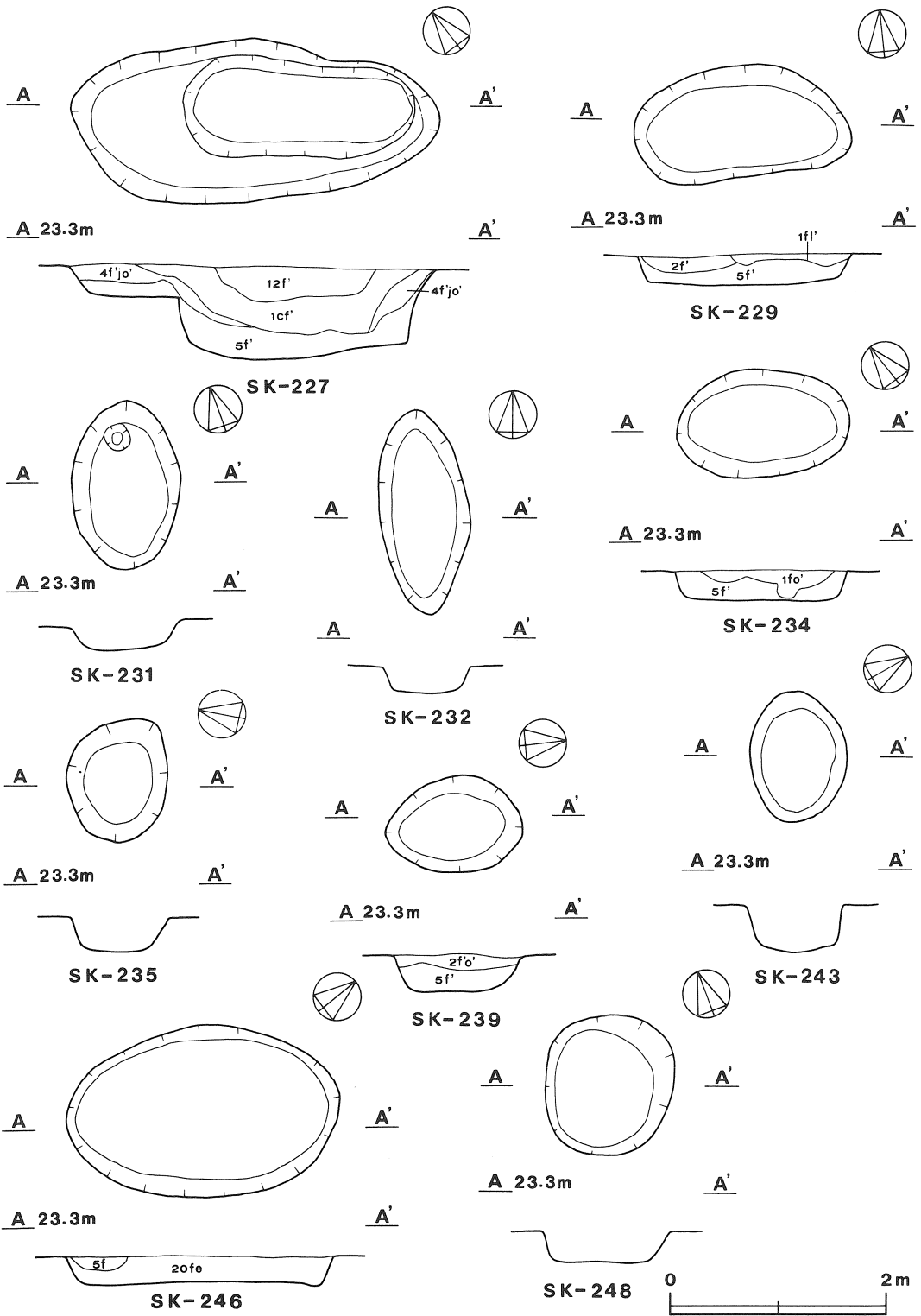
第578图 土壤实测图 (21)



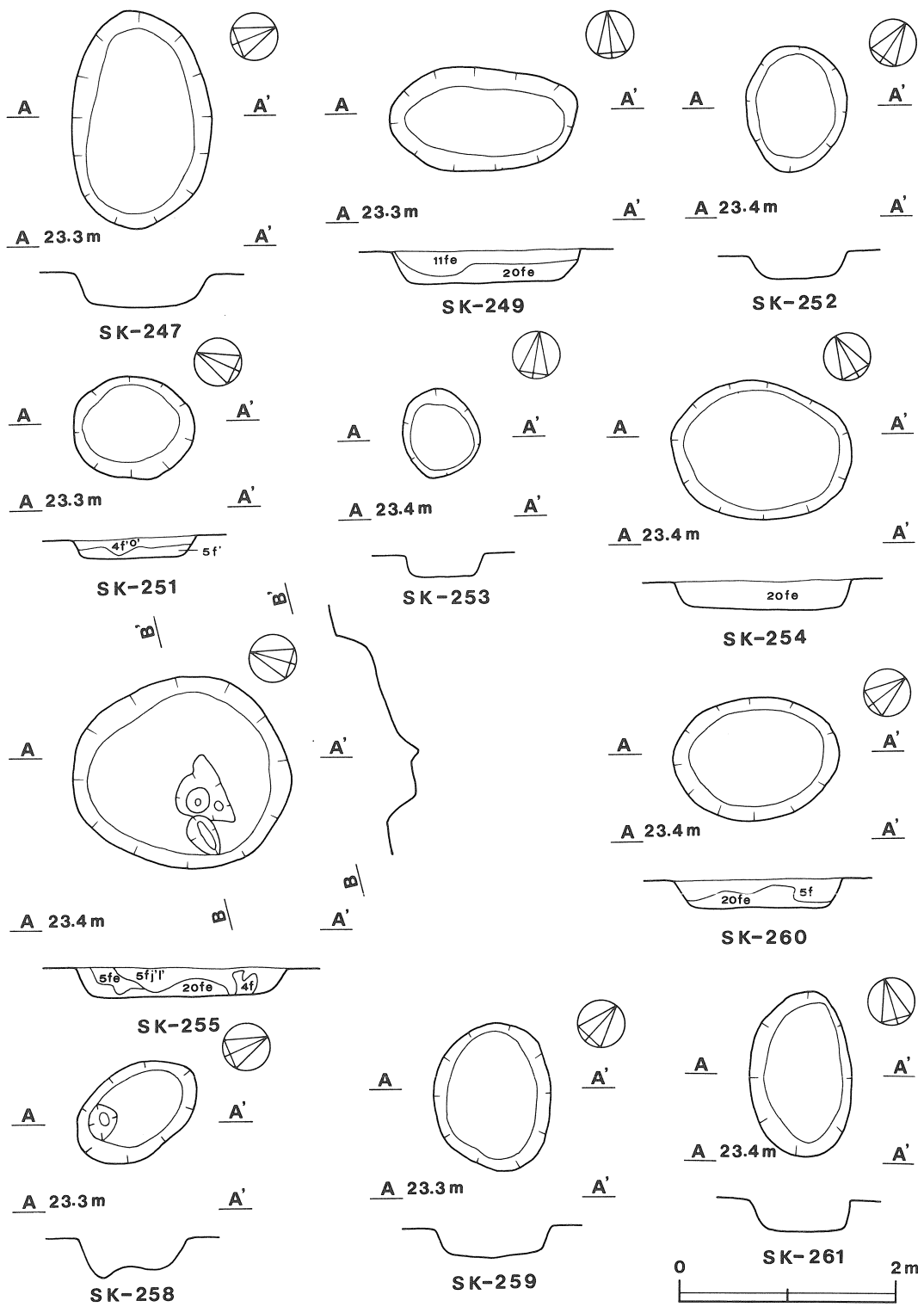
第579図 土壤実測図 (22)



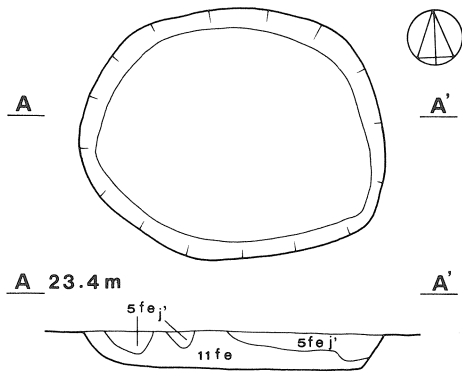
第580图 土壤实测图 (23)



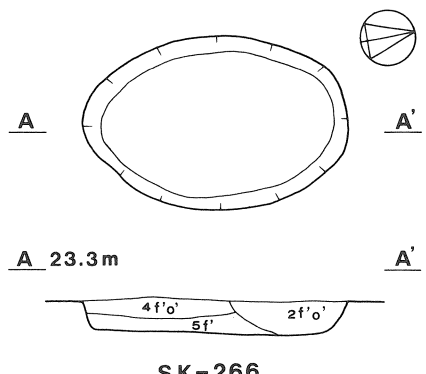
第581図 土壤実測図 (24)



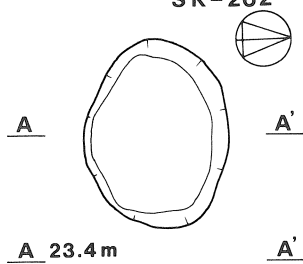
第582図 土壤実測図 (25)



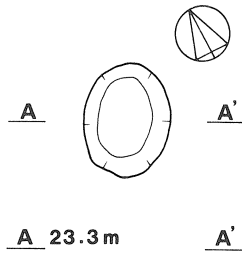
SK-262



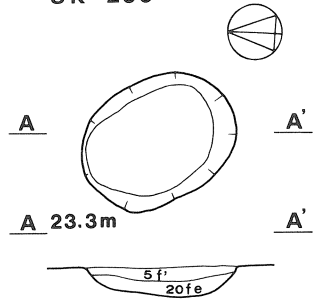
SK-266



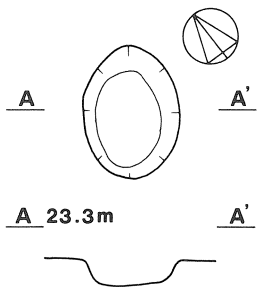
SK-263



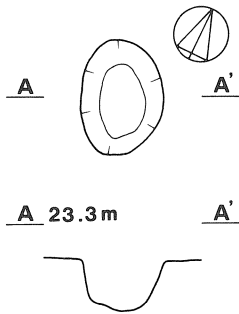
SK-264



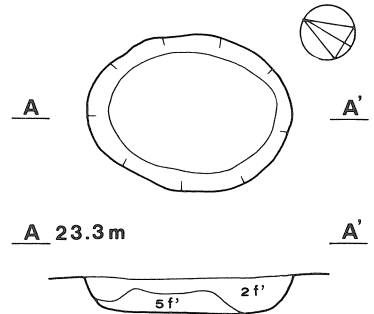
SK-265



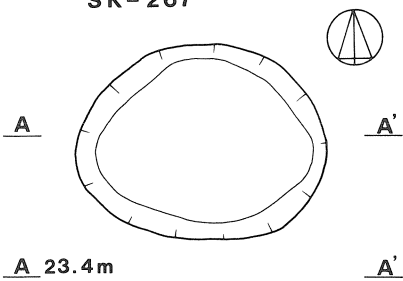
SK-267



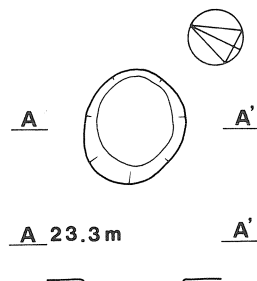
SK-270



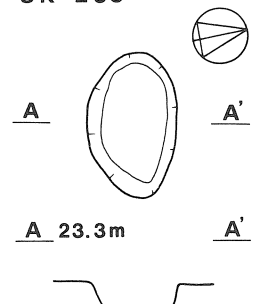
SK-268



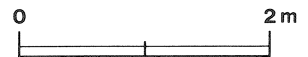
SK-271



SK-272

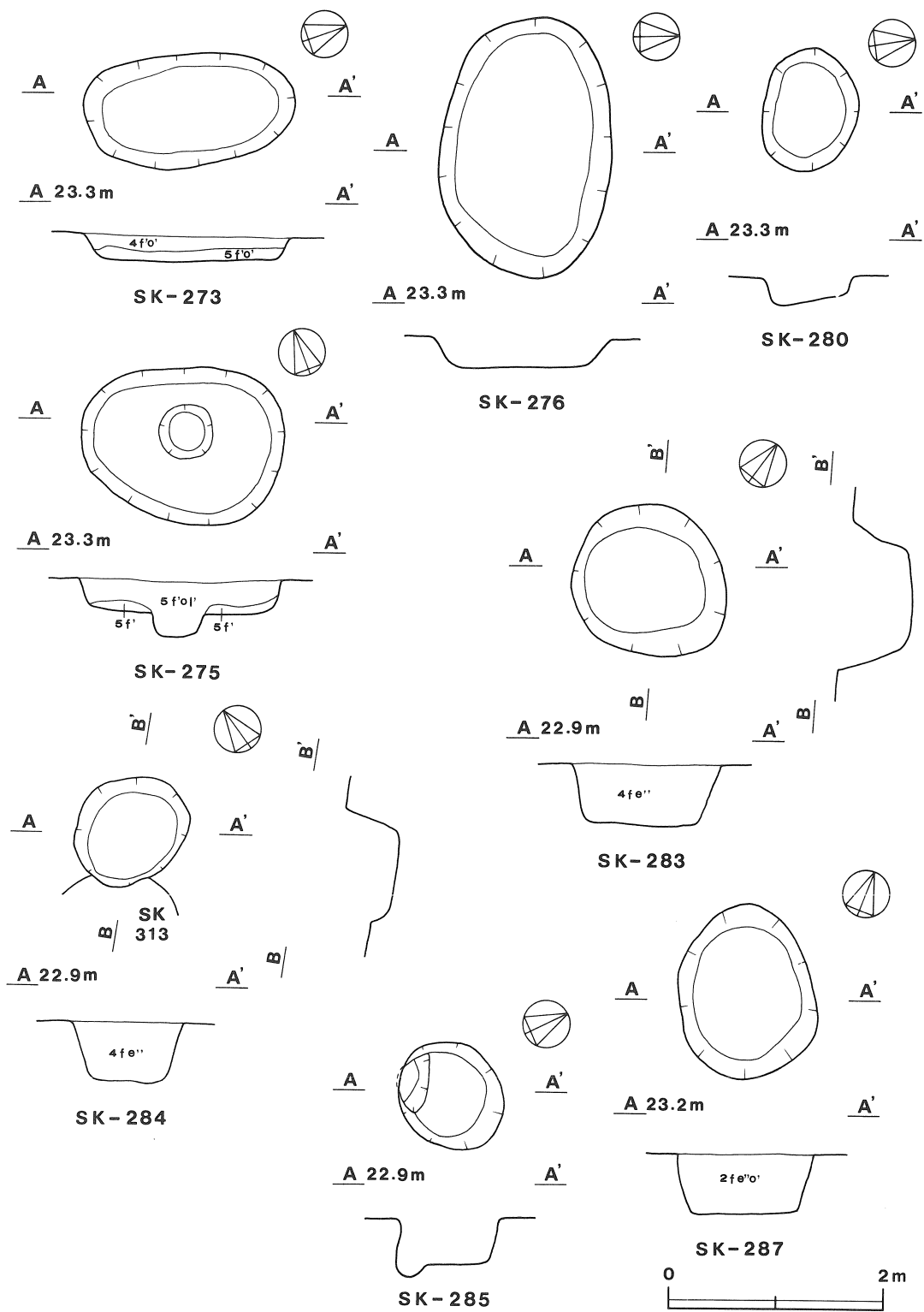


SK-274



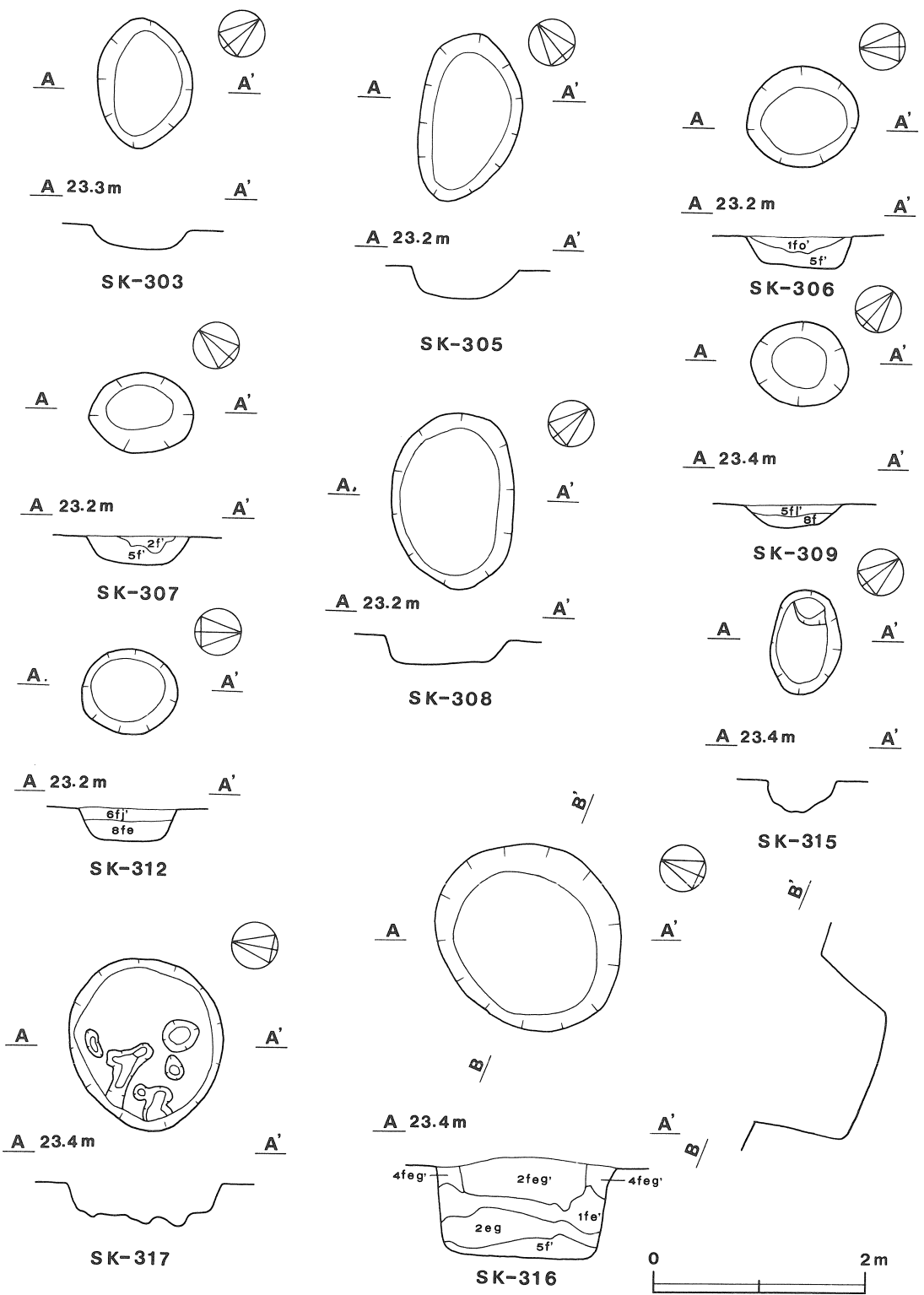
第583図 土壤実測図 (26)



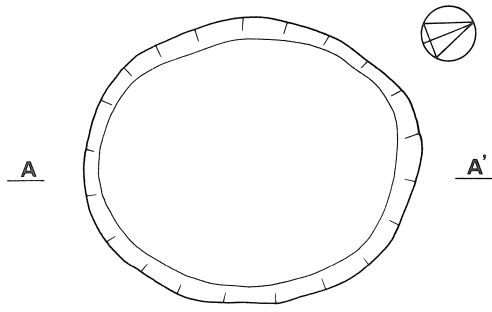


第584図 土壤実測図 (27)

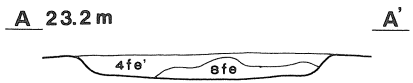
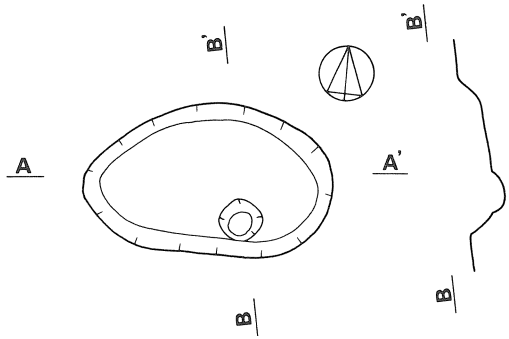




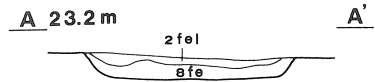
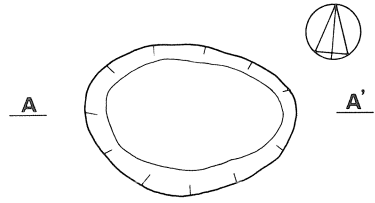
第586图 土壤実測図 (29)



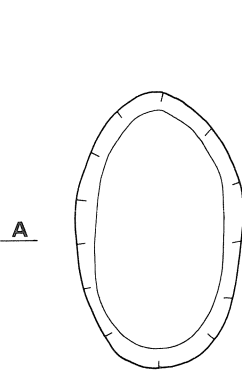
SK-318



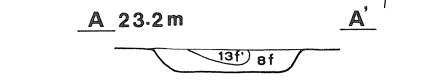
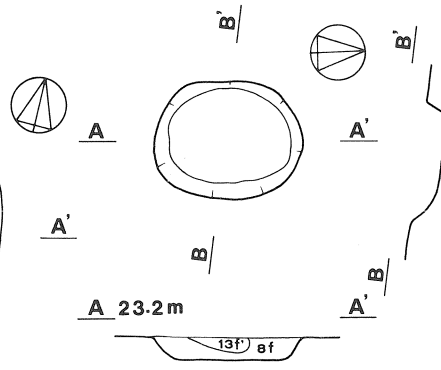
SK-320



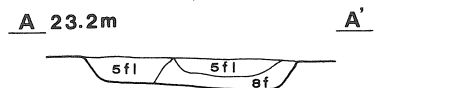
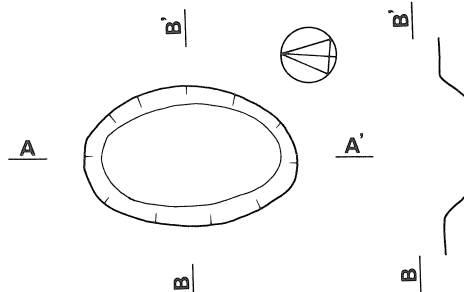
SK-319



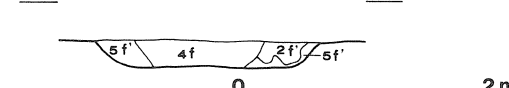
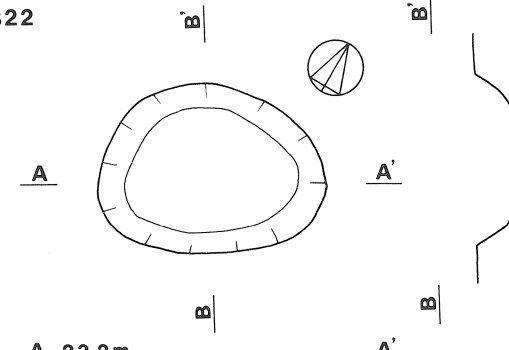
SK-322



SK-321

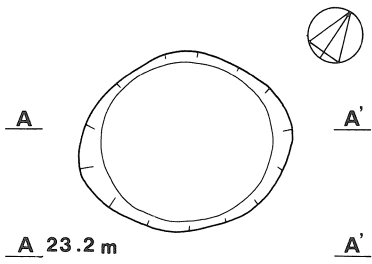


SK-323

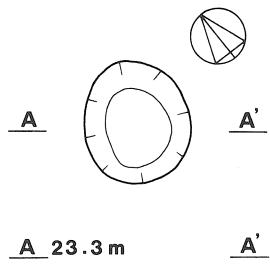


SK-333

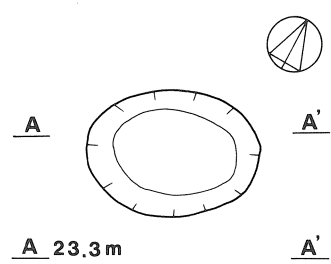
第587図 土壤実測図 (30)



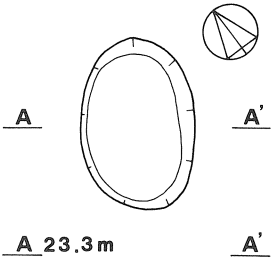
SK-334



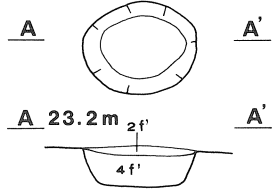
SK-336



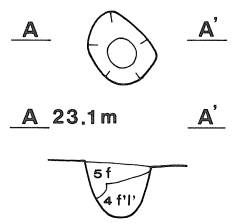
SK-337



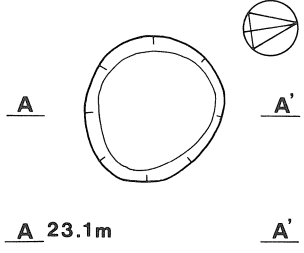
SK-338



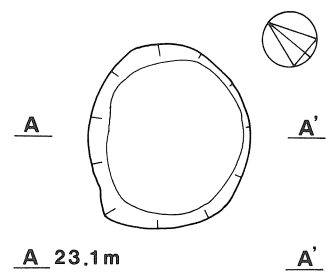
SK-339



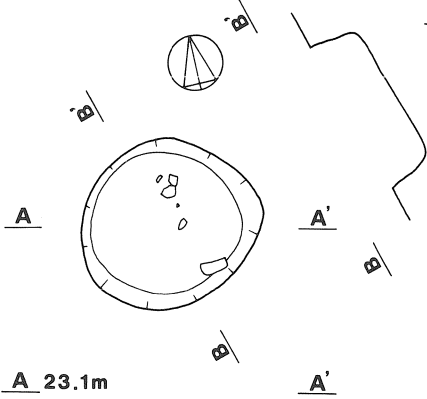
SK-340



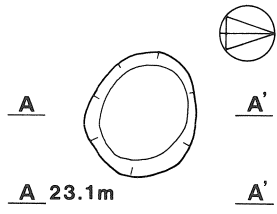
SK-343



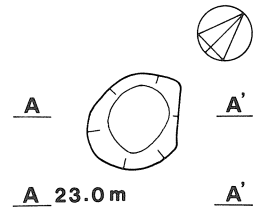
SK-344



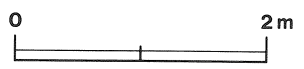
SK-342

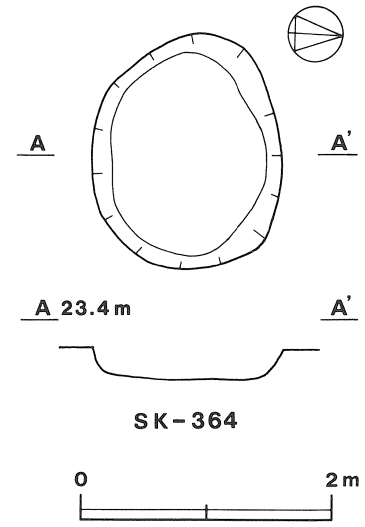
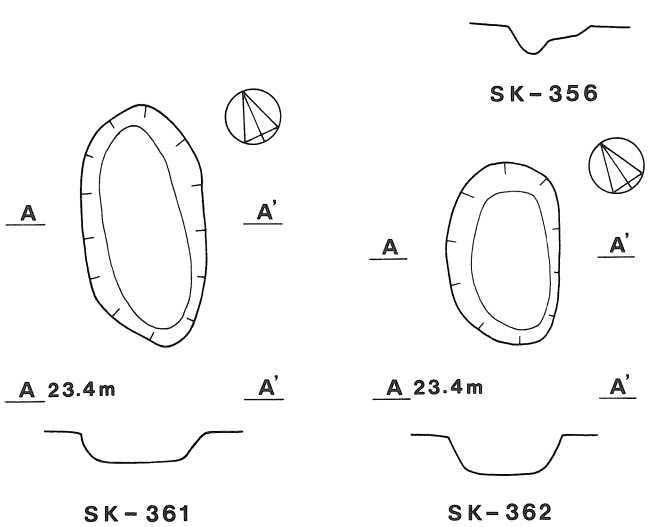
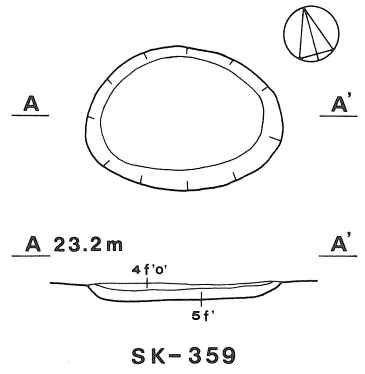
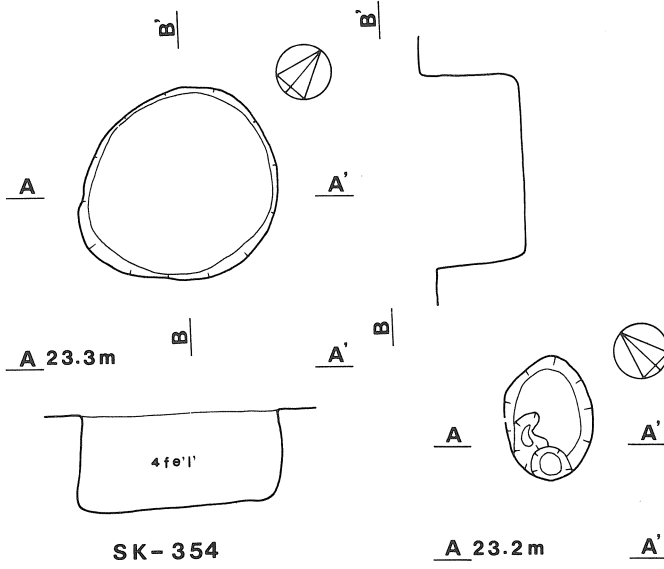
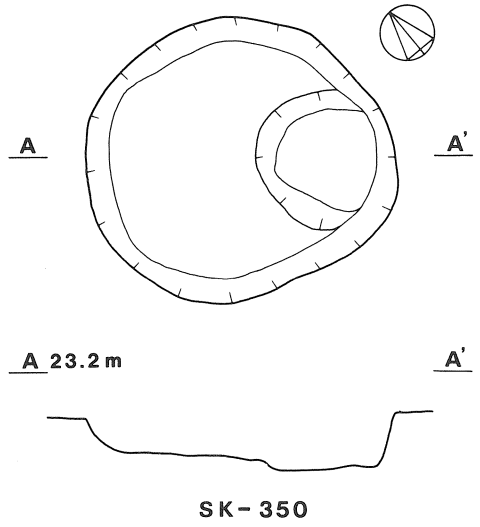
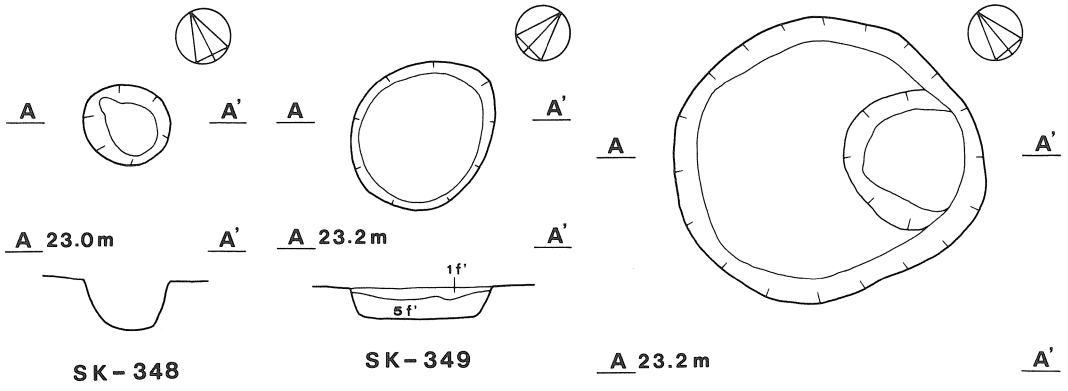


SK-347

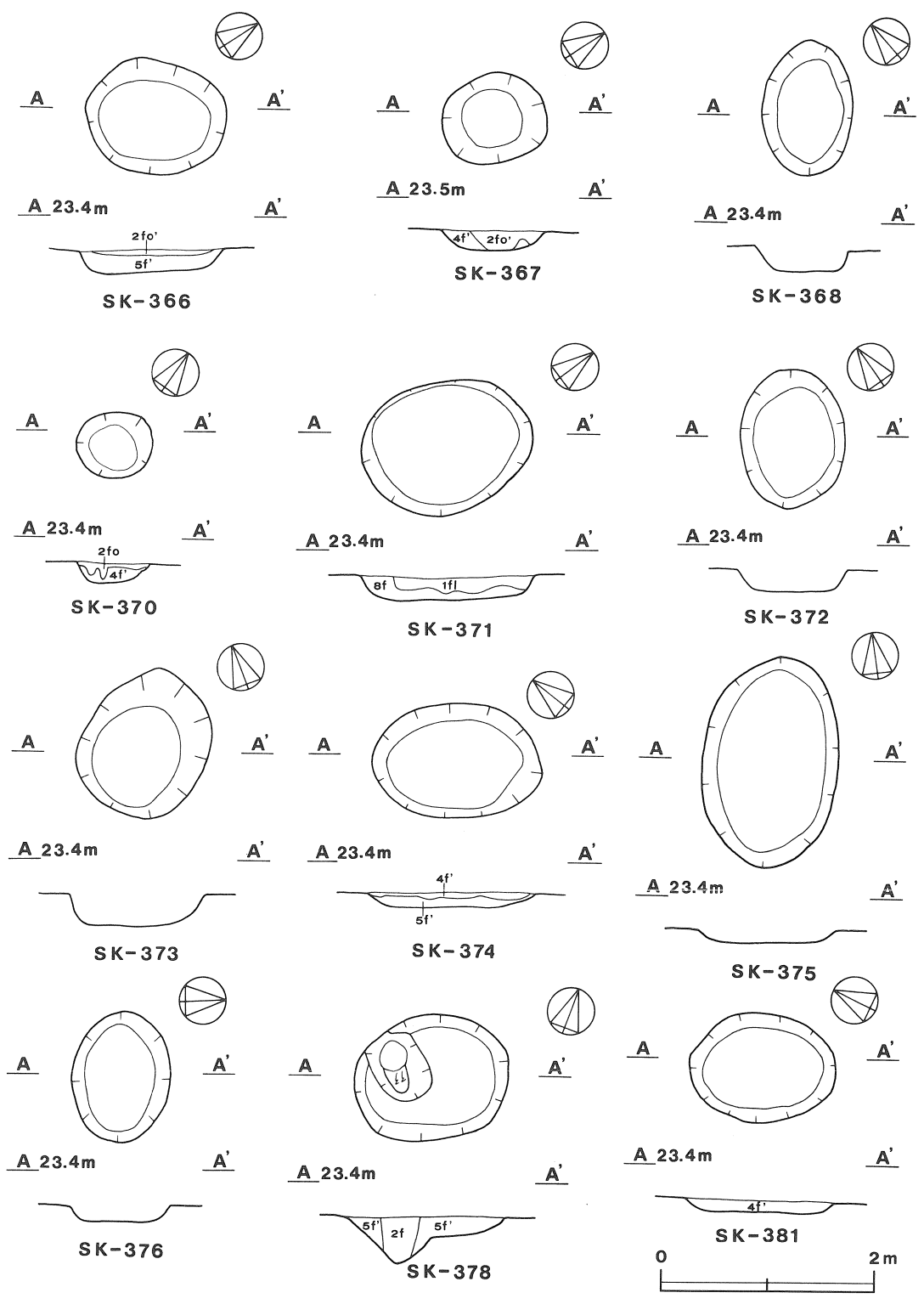


SK-345

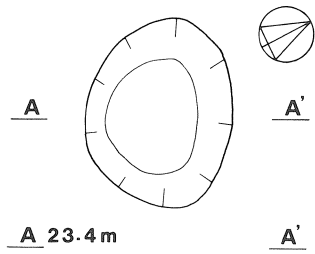




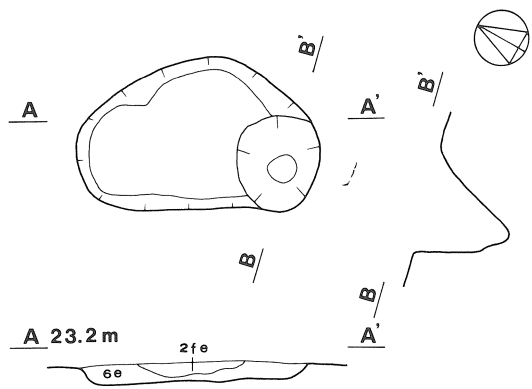
第589图 土壤实测图 (32)



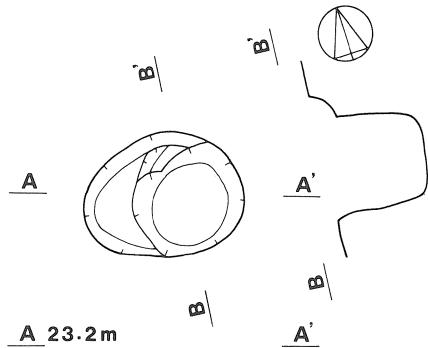
第590图 土壤实测图 (33)



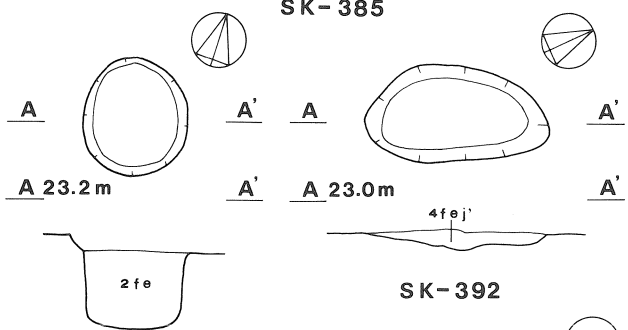
SK-380



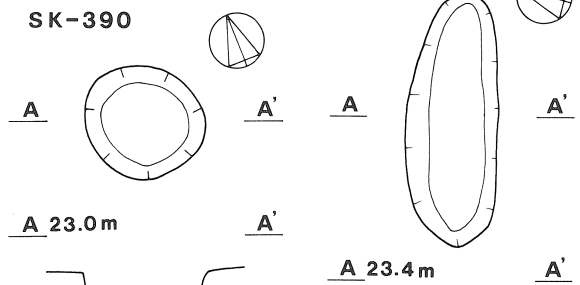
SK-385



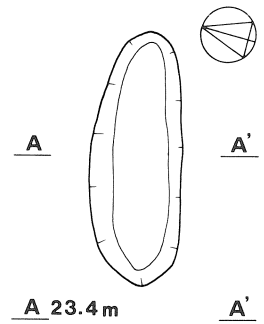
SK-388



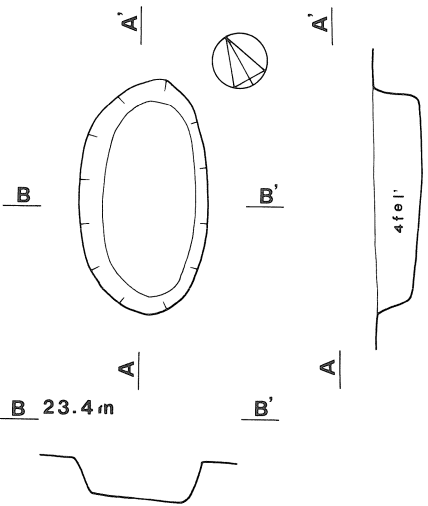
SK-392



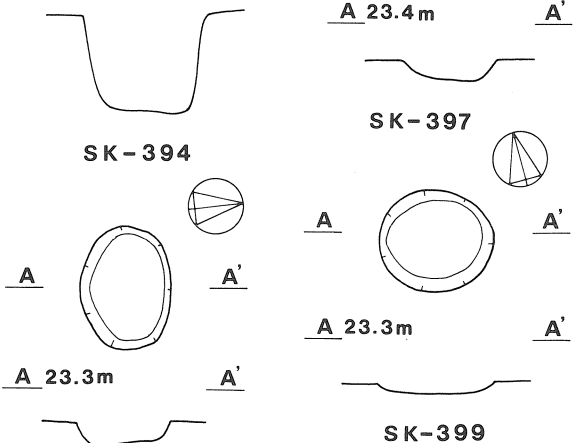
SK-394



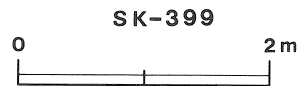
SK-397



SK-393



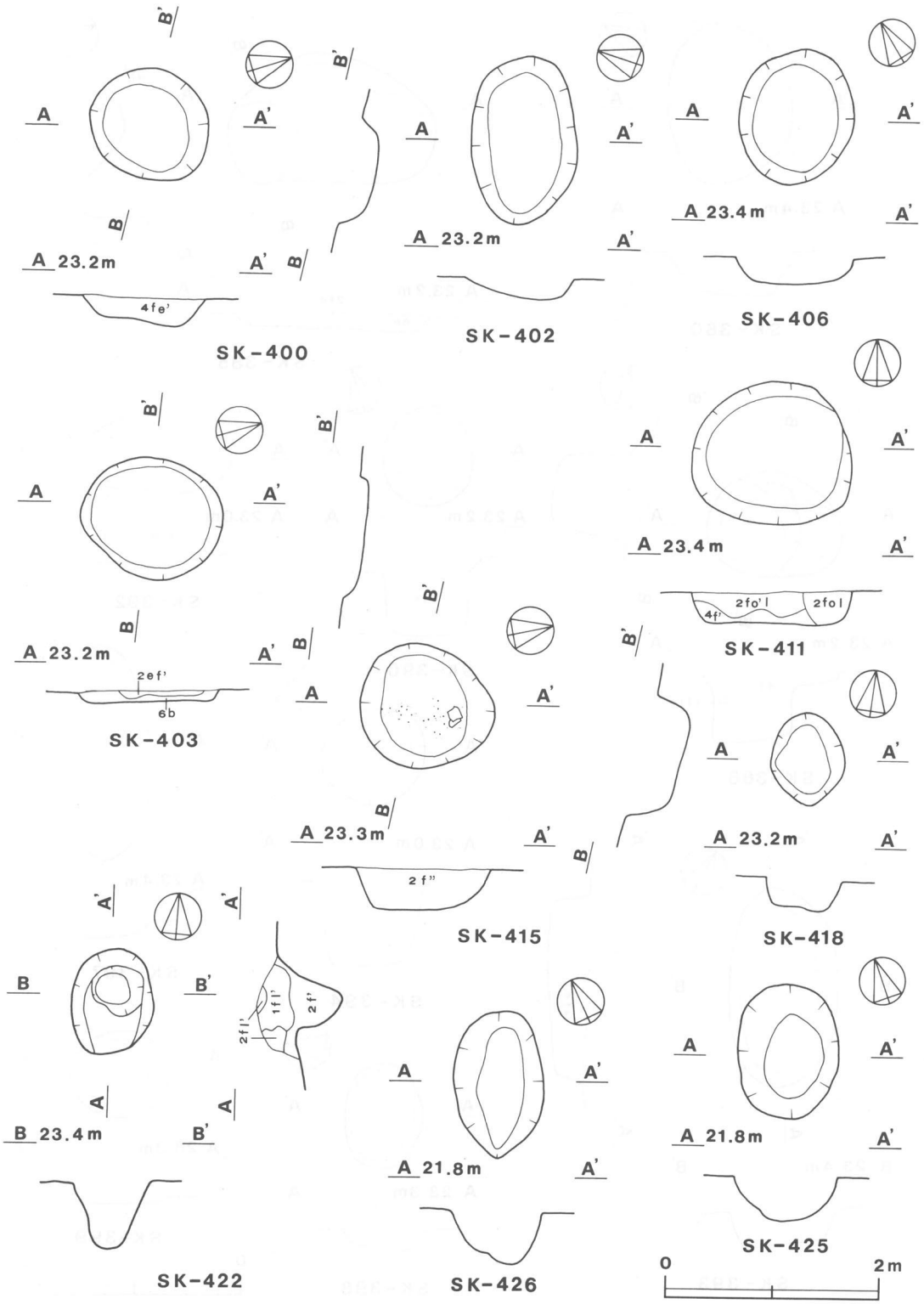
SK-398



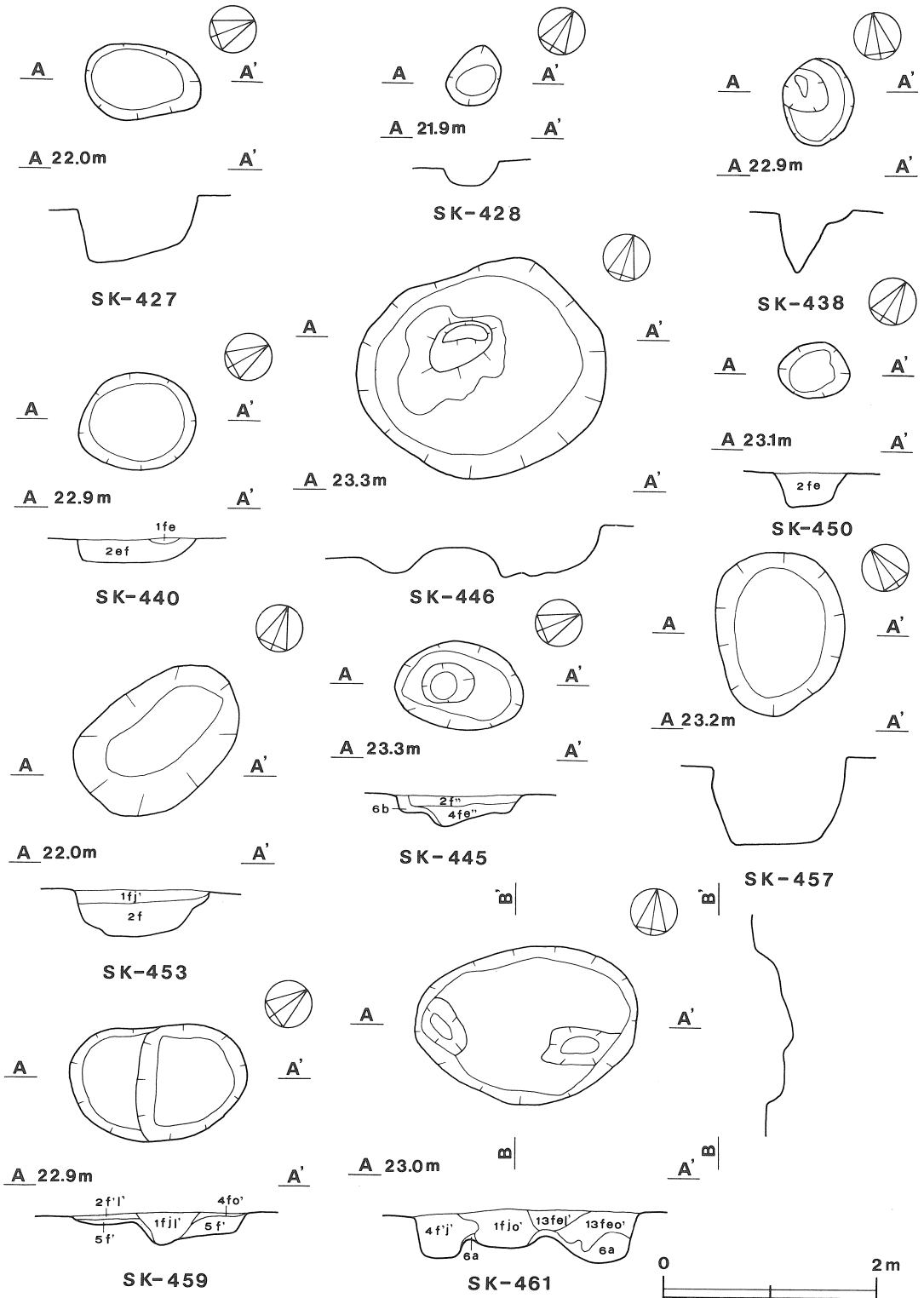
SK-399

第591図 土壤実測図 (34)

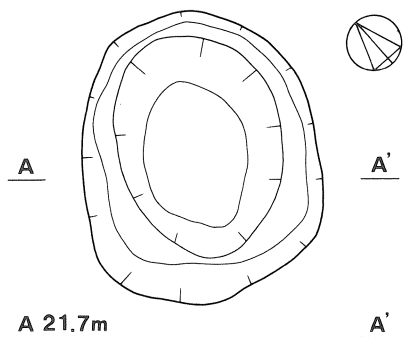




第592図 土壤実測図 (35)

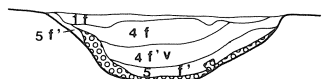


第593図 土壤実測図 (36)

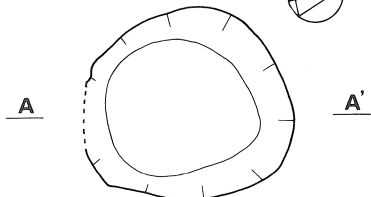


A 21.7m

A'

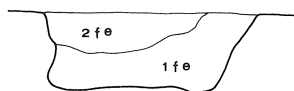


SK-469

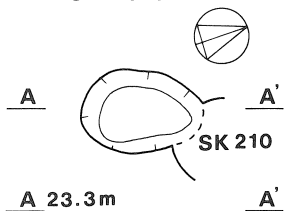


A 23.4m

A'

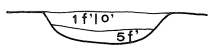


SK-141

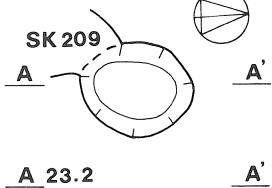


A 23.3m

A'

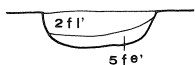


SK-209



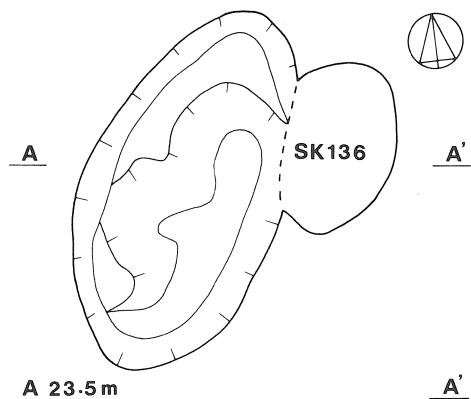
A 23.2

A'



SK-210

第594图 土壤実測图 (37)

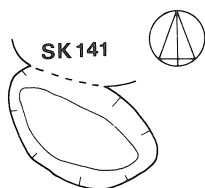


A 23.5m

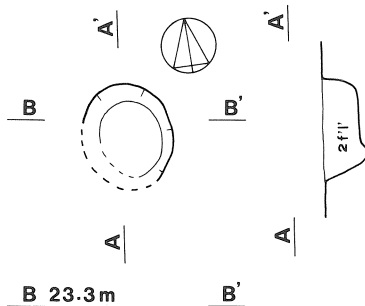
A'



SK-135



SK-142

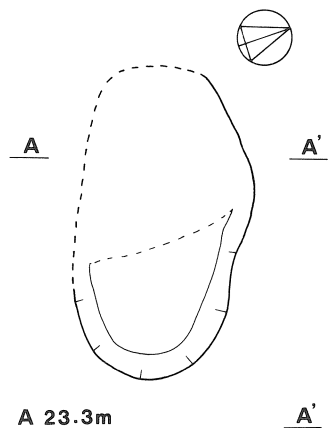


B 23.3m

B'

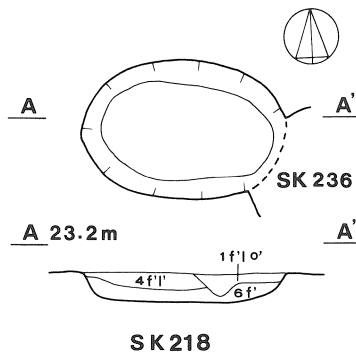
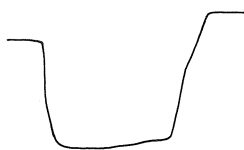


SK-143



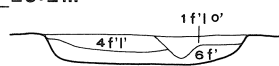
A 23.3m

A'

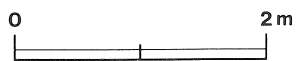


A 23.2m

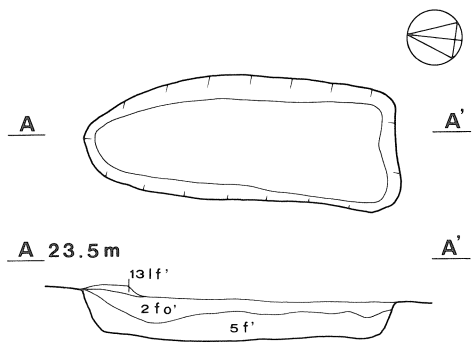
A'



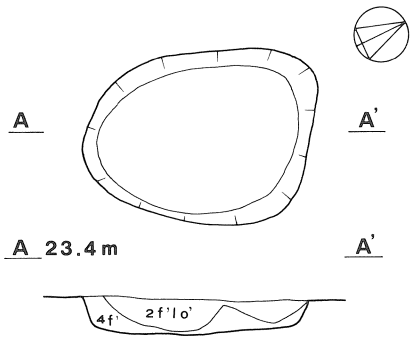
SK-218



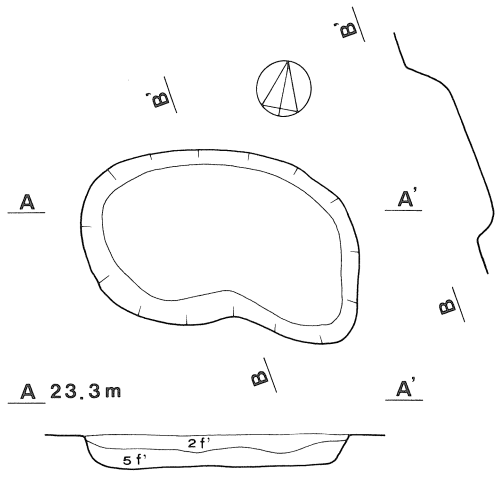




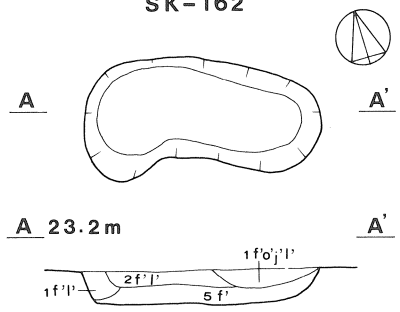
SK-131



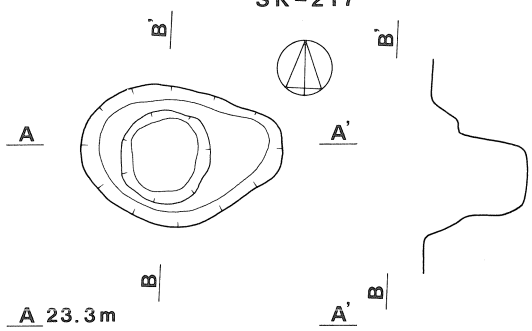
SK-162



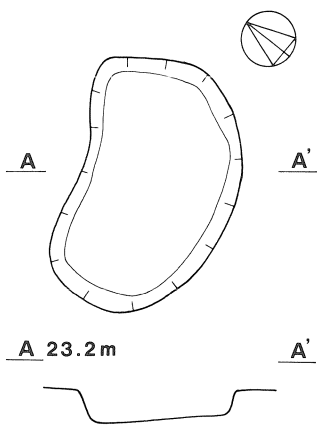
SK-201



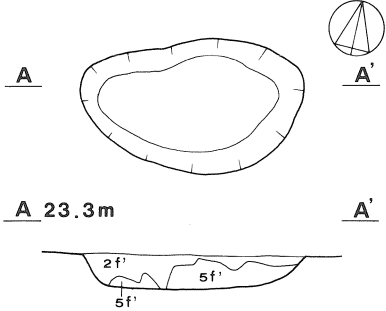
SK-217



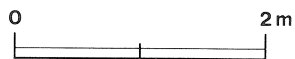
SK-230



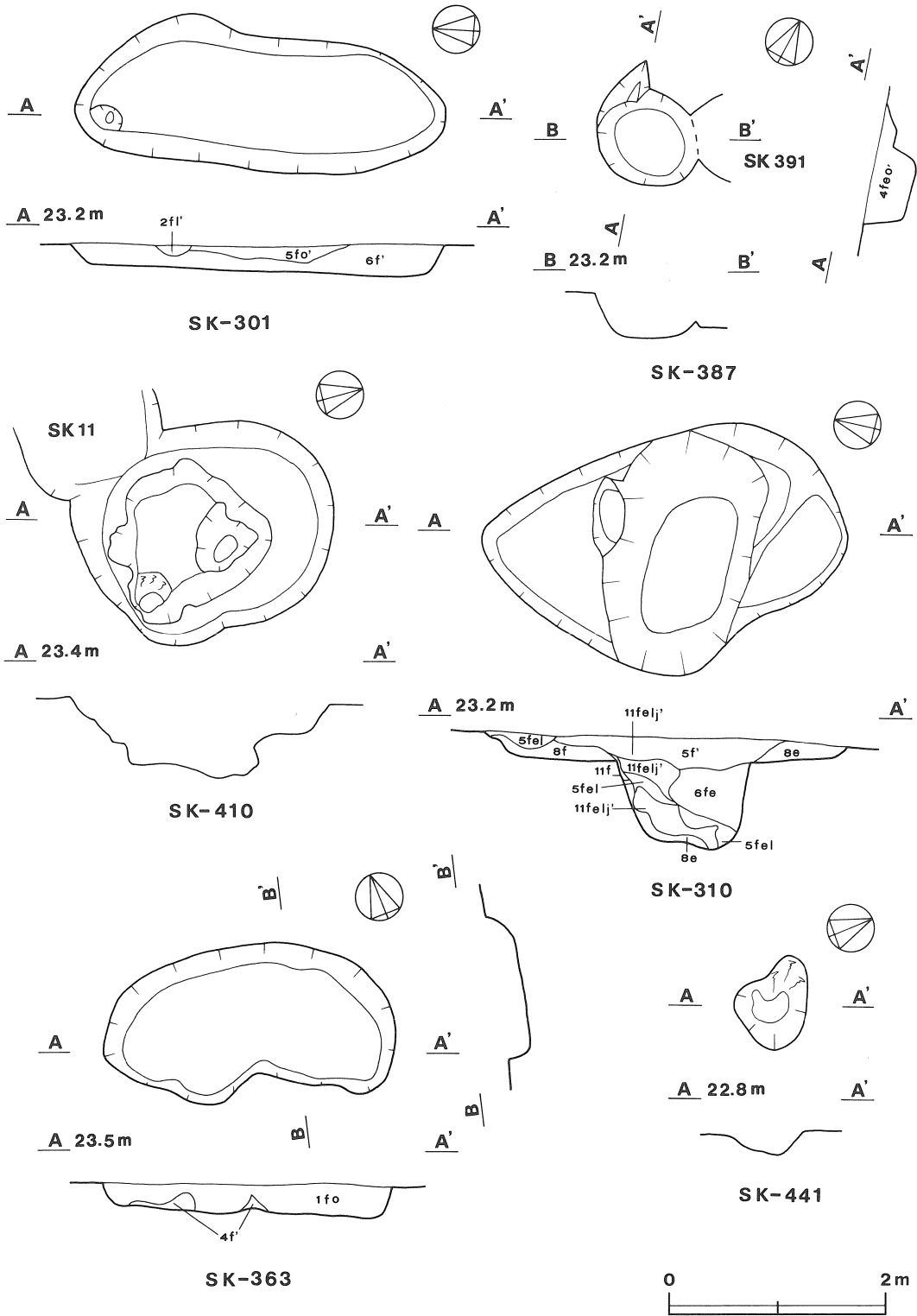
SK-220



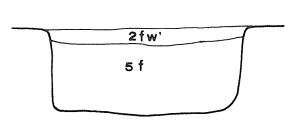
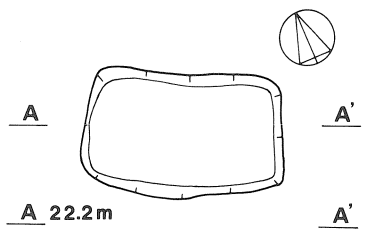
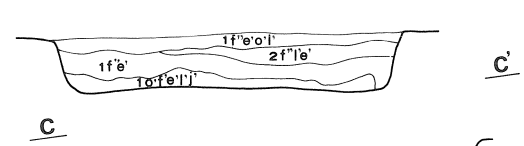
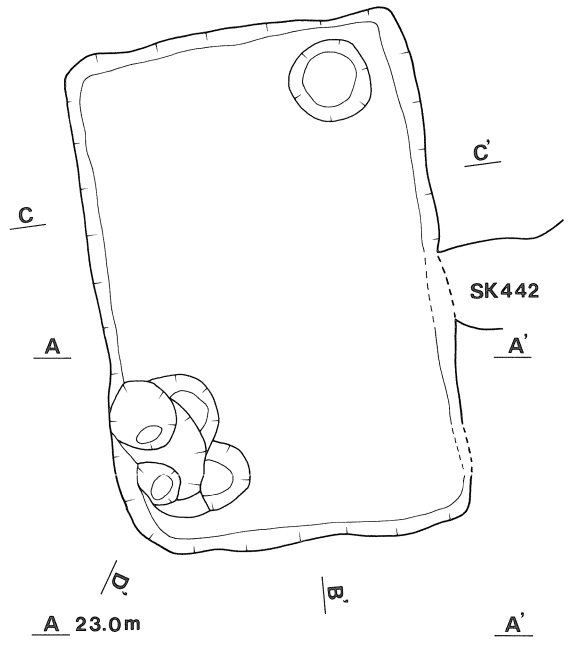
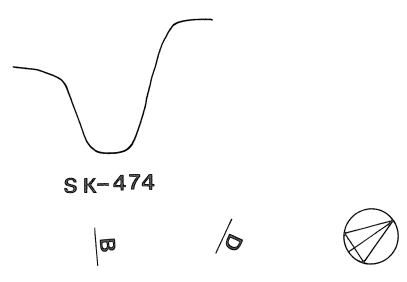
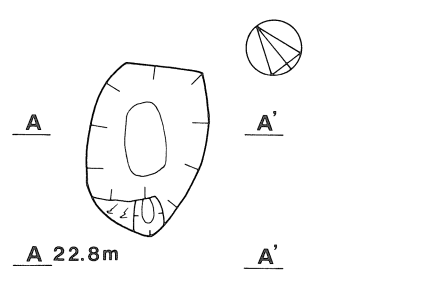
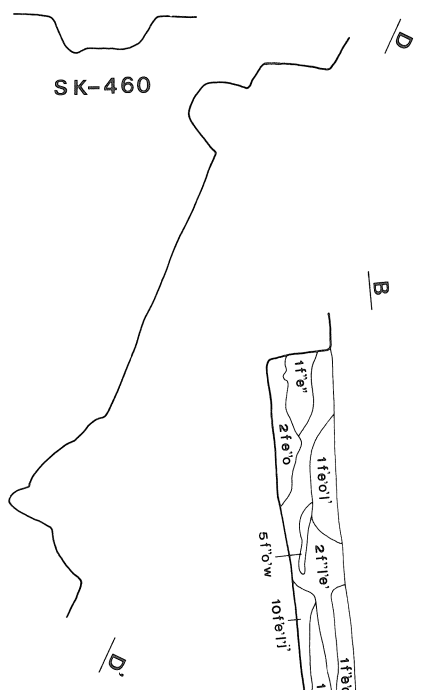
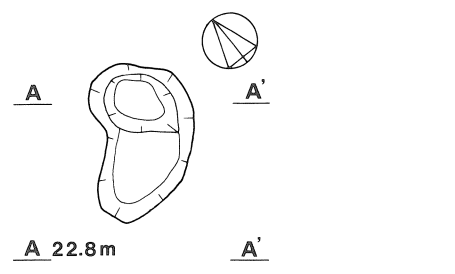
SK-233



第596图 土壤実測图 (39)

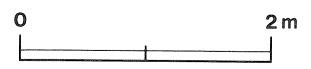


第597図 土壤実測図 (40)

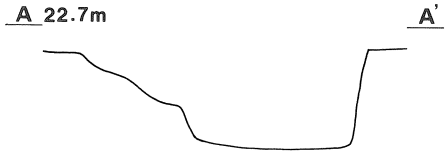
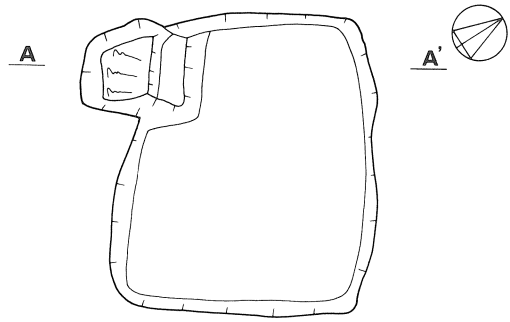


SK-468

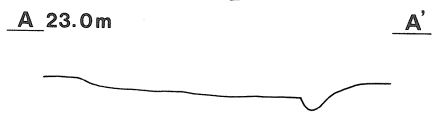
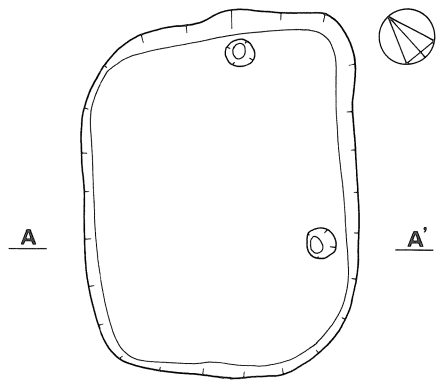
SK-433



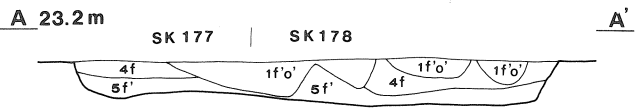
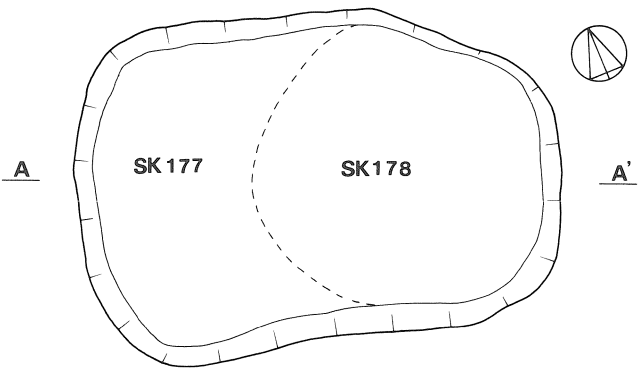
第598図 土壤実測図 (41)



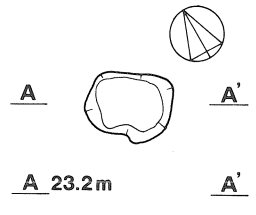
SK-465



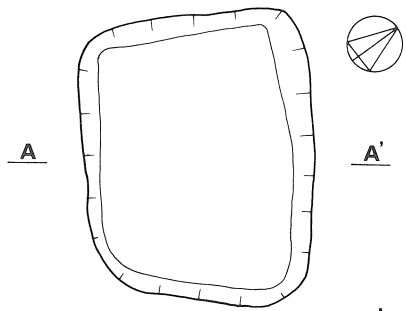
SK-436



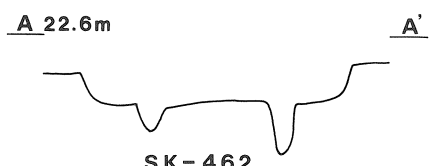
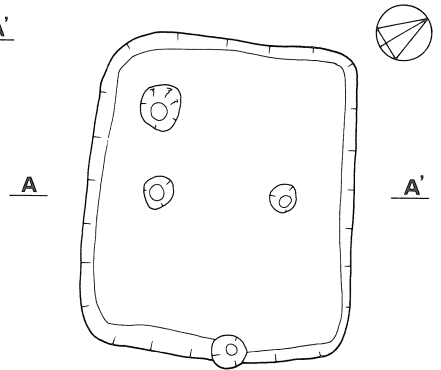
SK-177-178



SK-419



SK-437

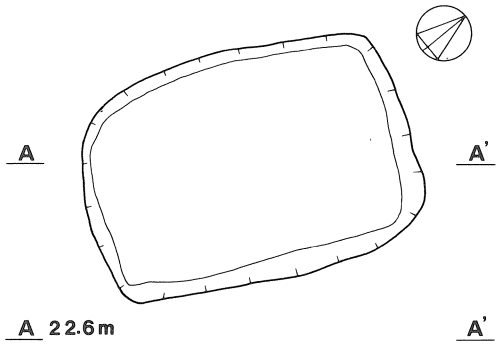


SK-462

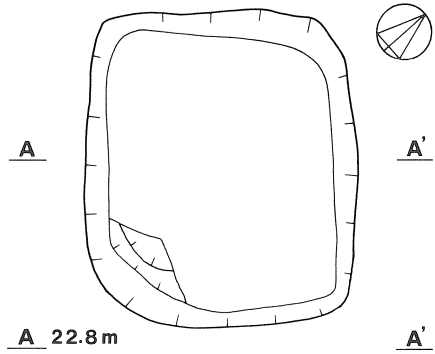


第599図 土壤実測図 (42)

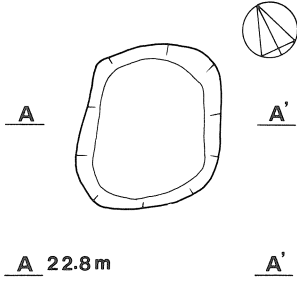




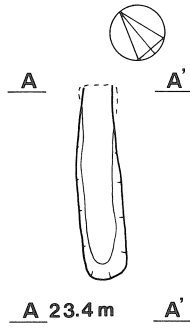
SK-463



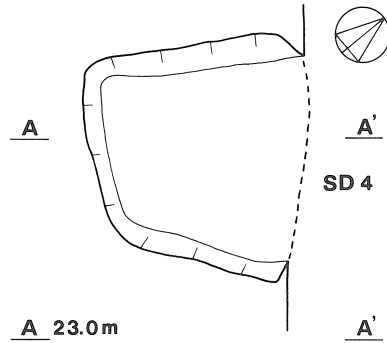
SK-464



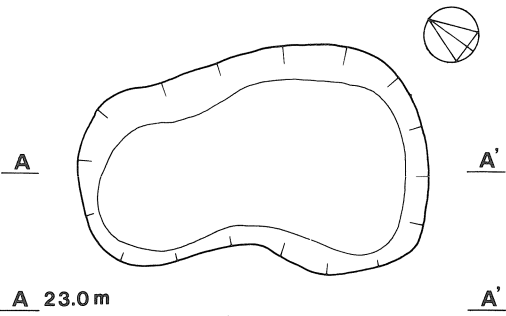
SK-470



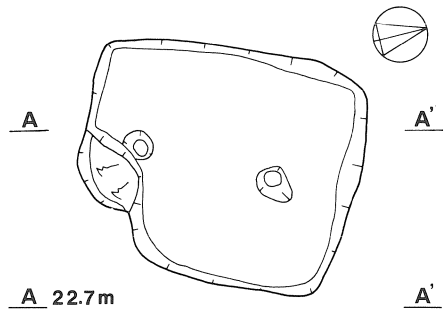
SK-369



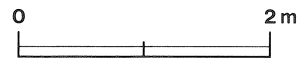
SK-471



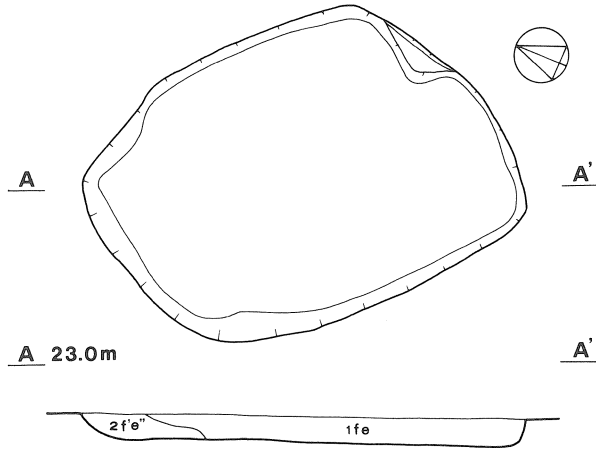
SK-431



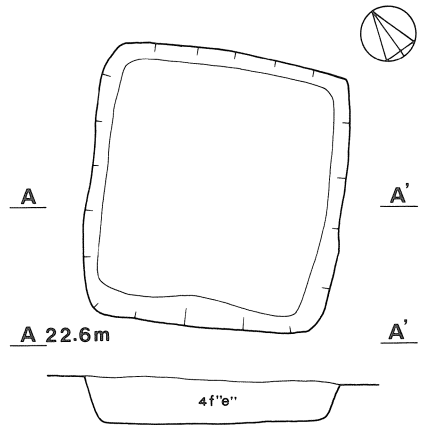
SK-435



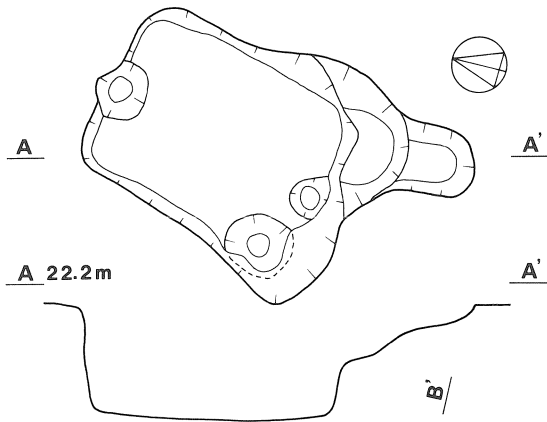
第600図 土壤実測図 (43)



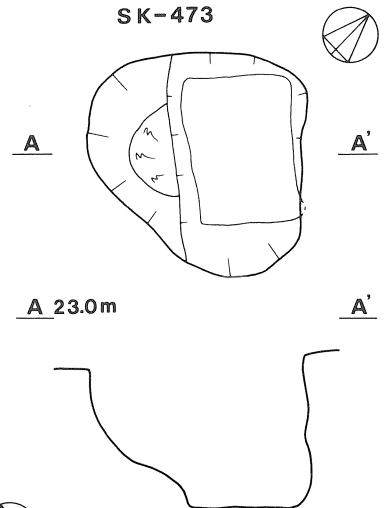
SK-439



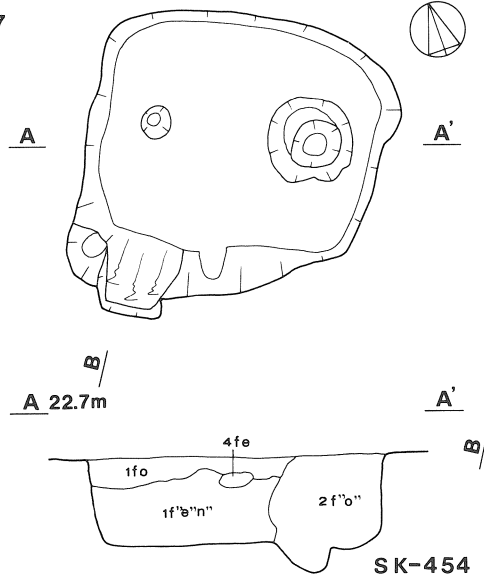
SK-473



SK-467

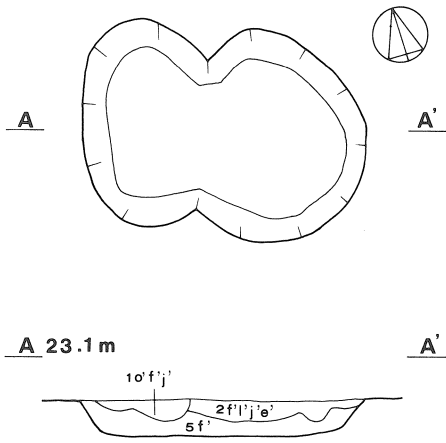


SK-11

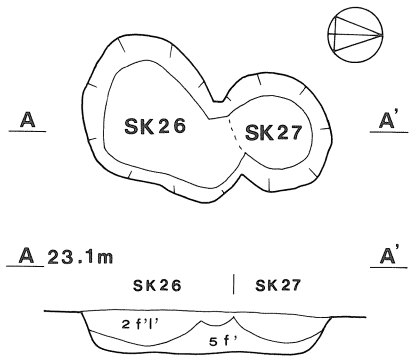


SK-454

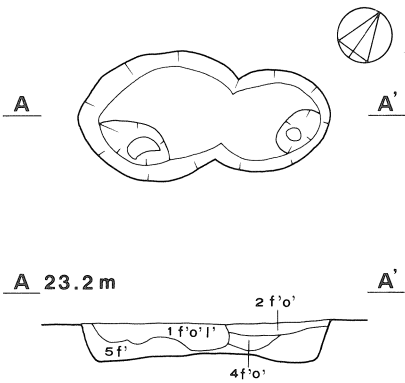
第601図 土壤実測図 (44)



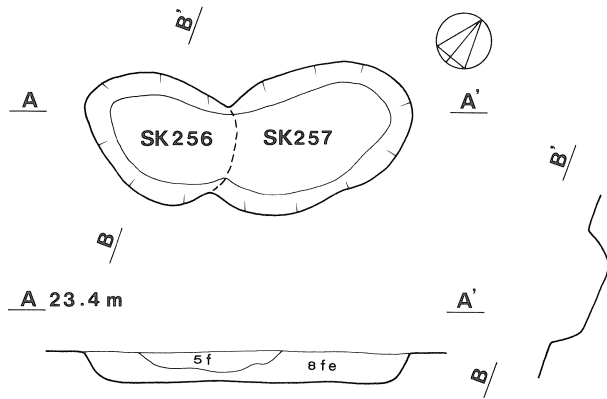
SK-25



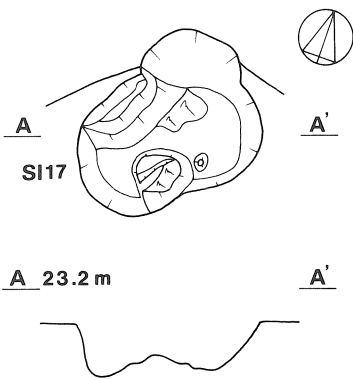
SK-26-27



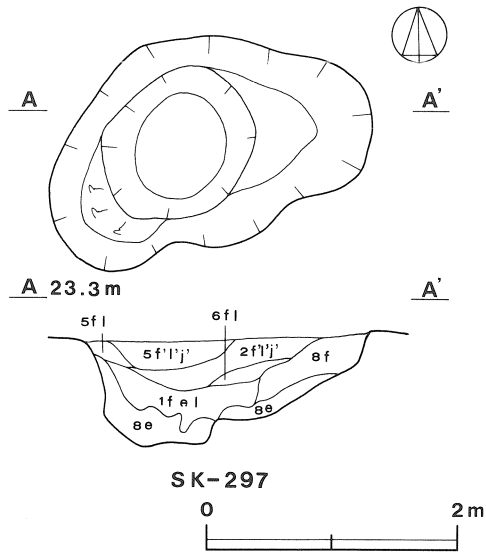
SK-190



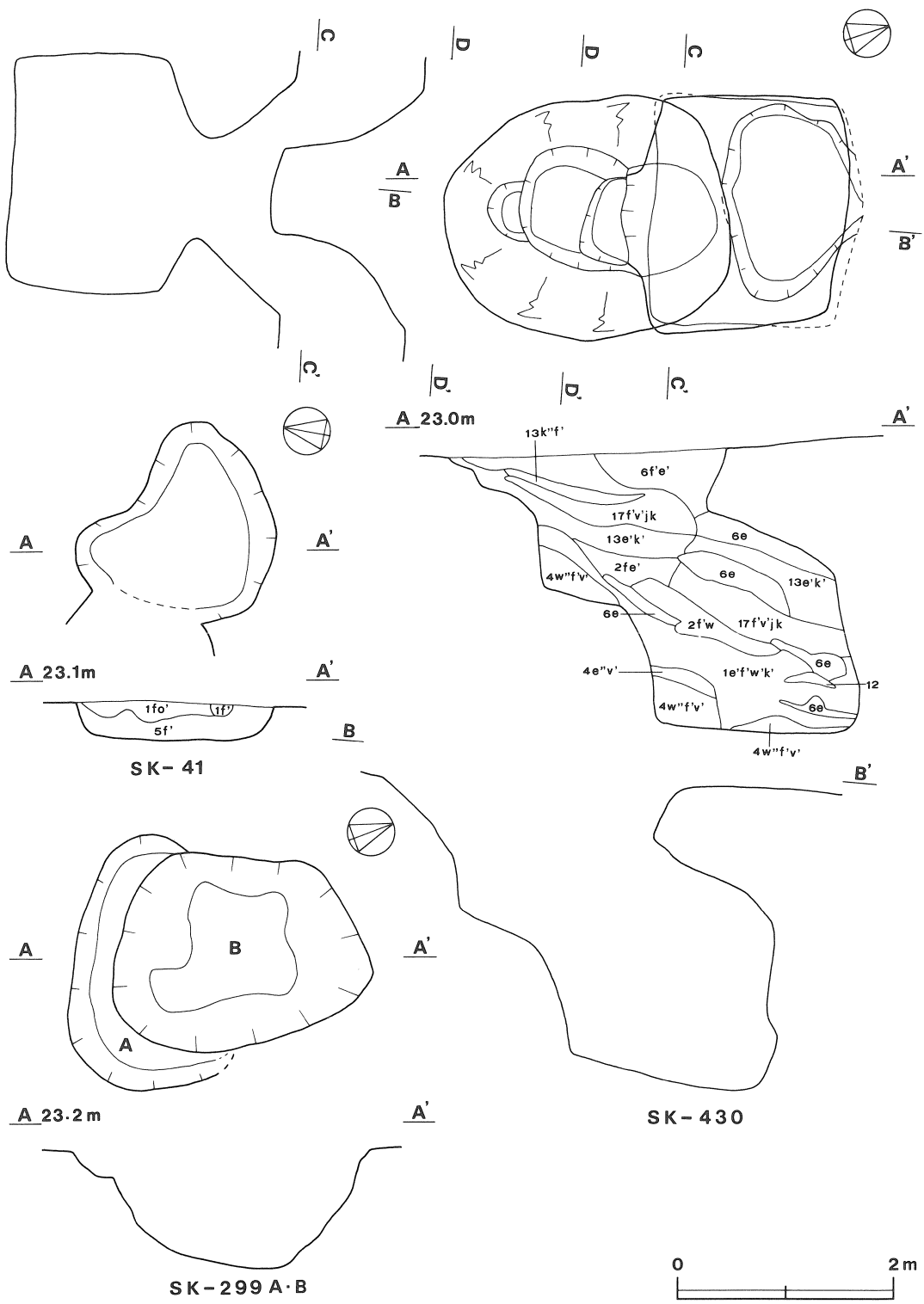
SK-256-257



SK-286

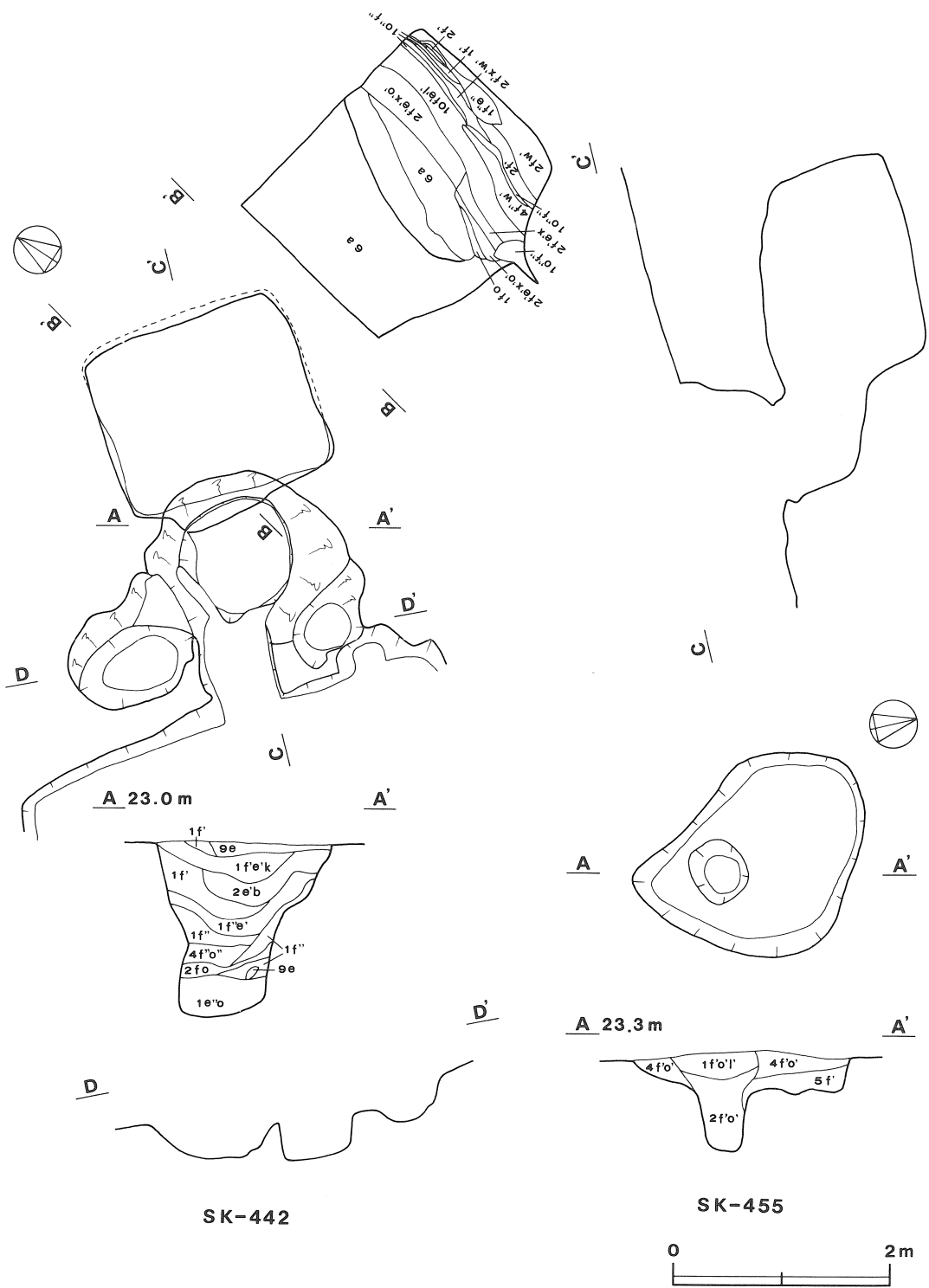


SK-297

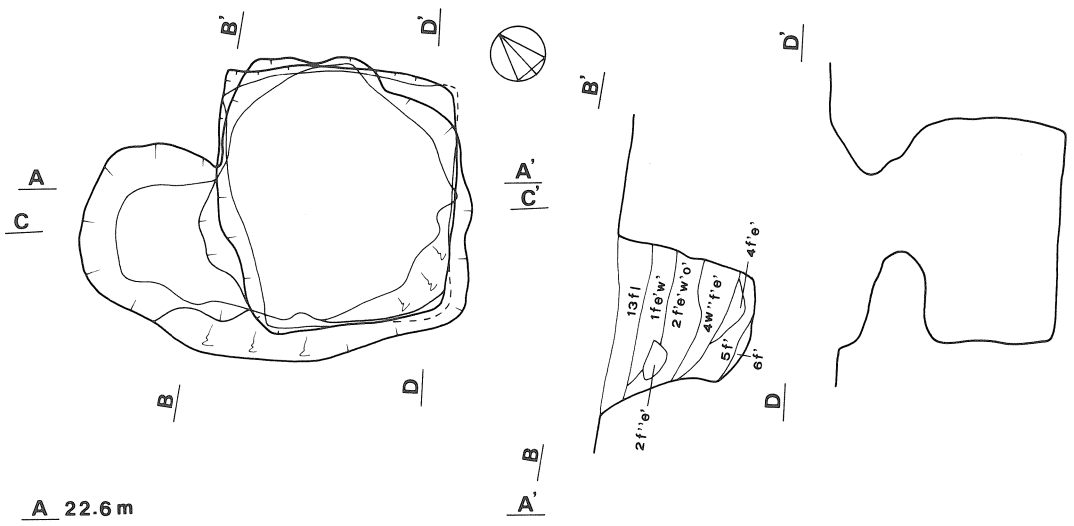


第603図 土壌実測図 (46)

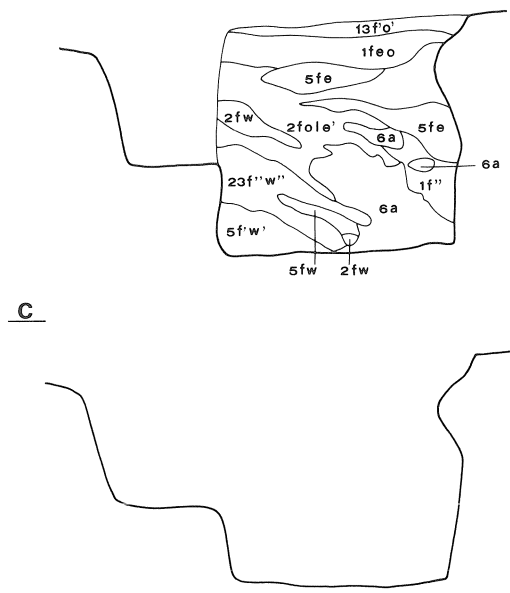




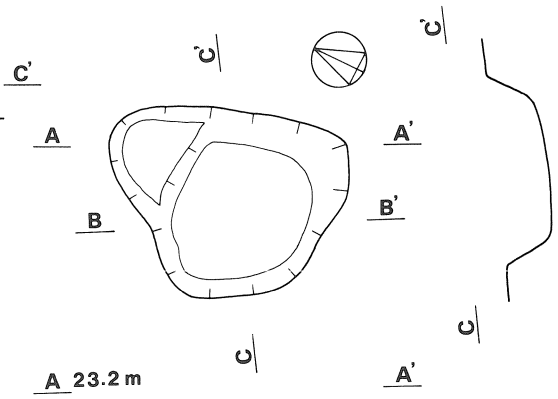
第605图 土壤実測図 (48)



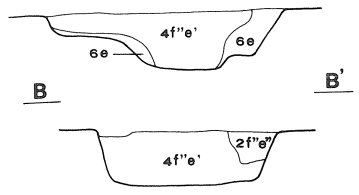
A 22.6m



SK-458



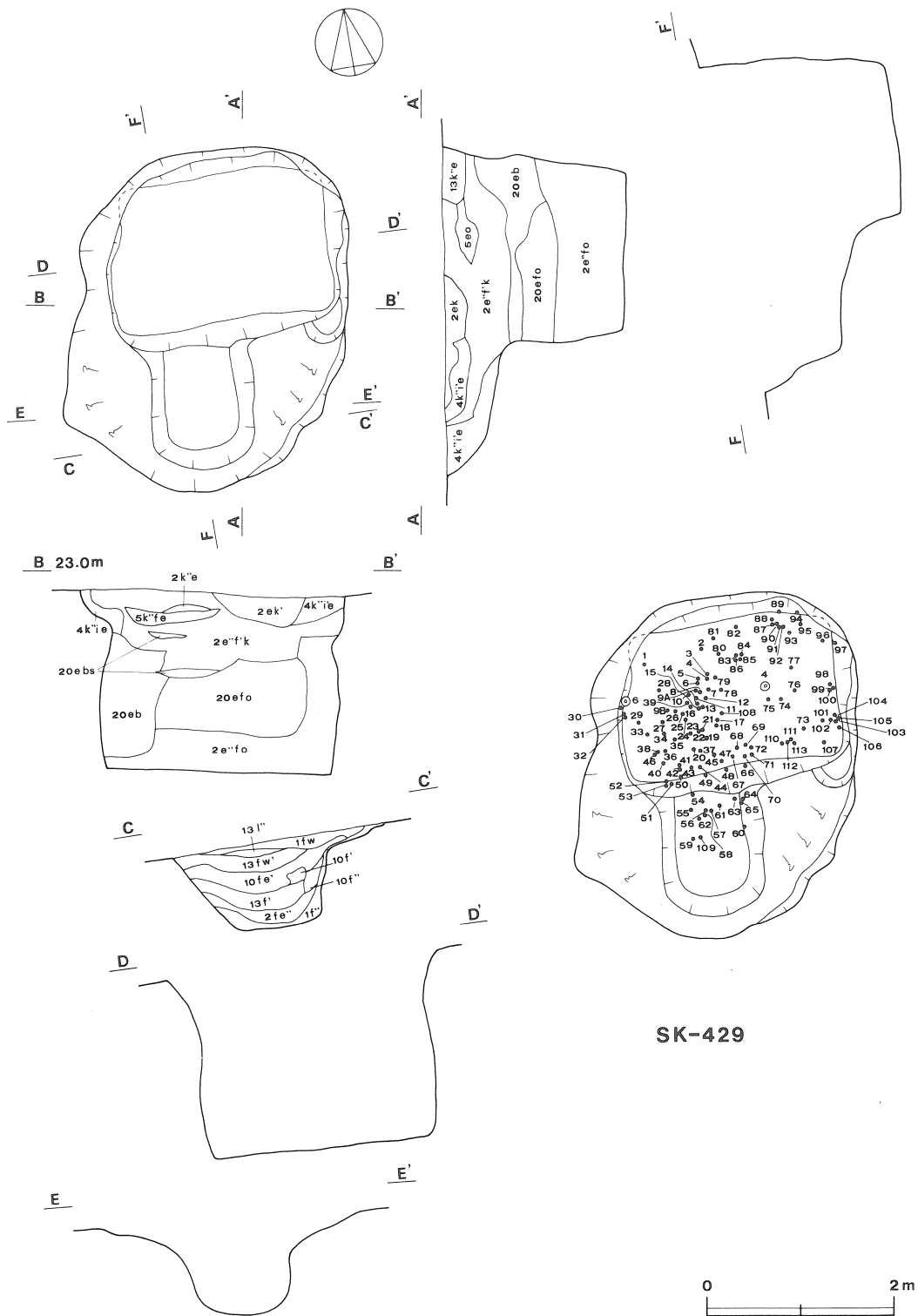
A 23.2m



SK-413

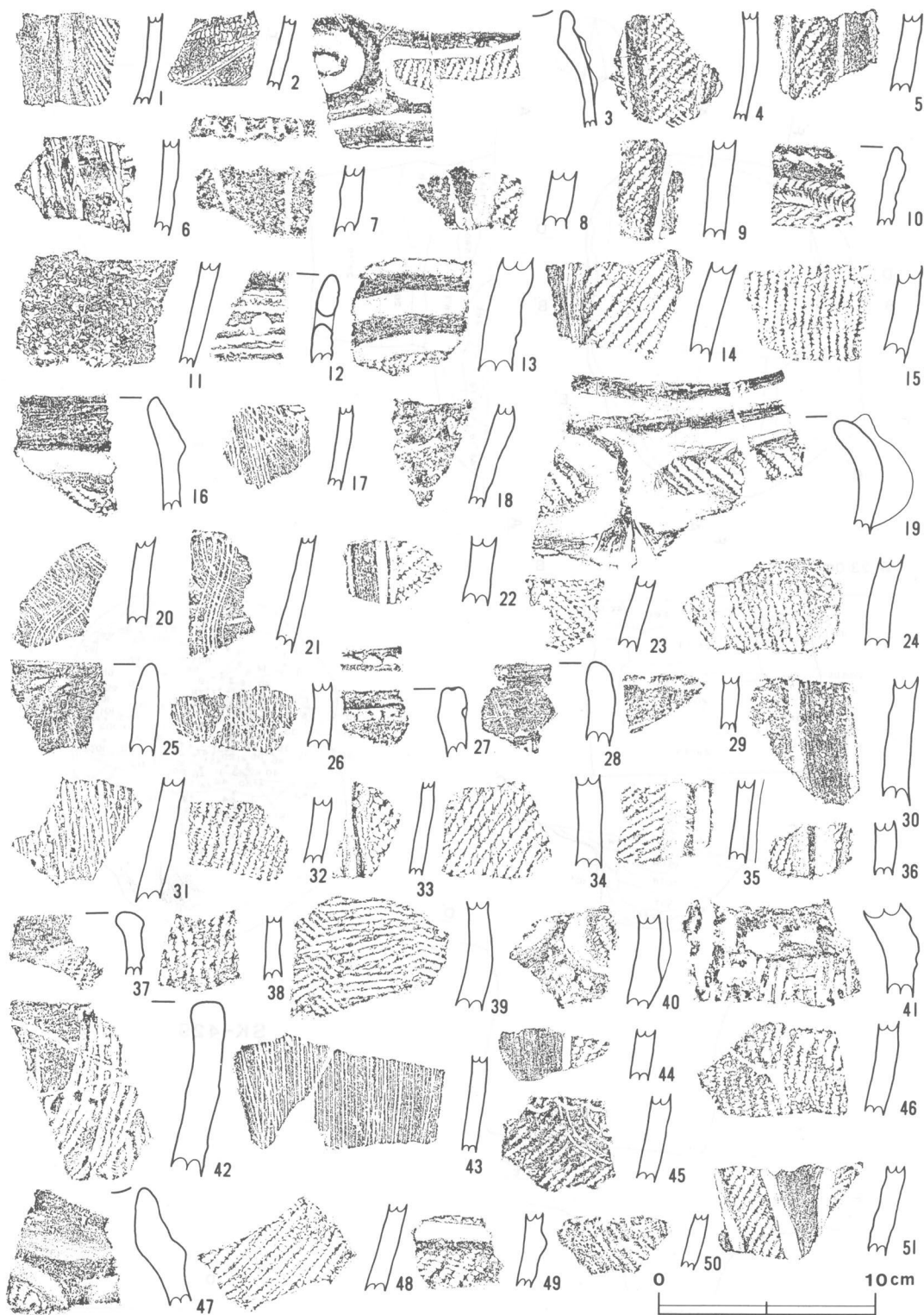


第606图 土壤実測図 (49)

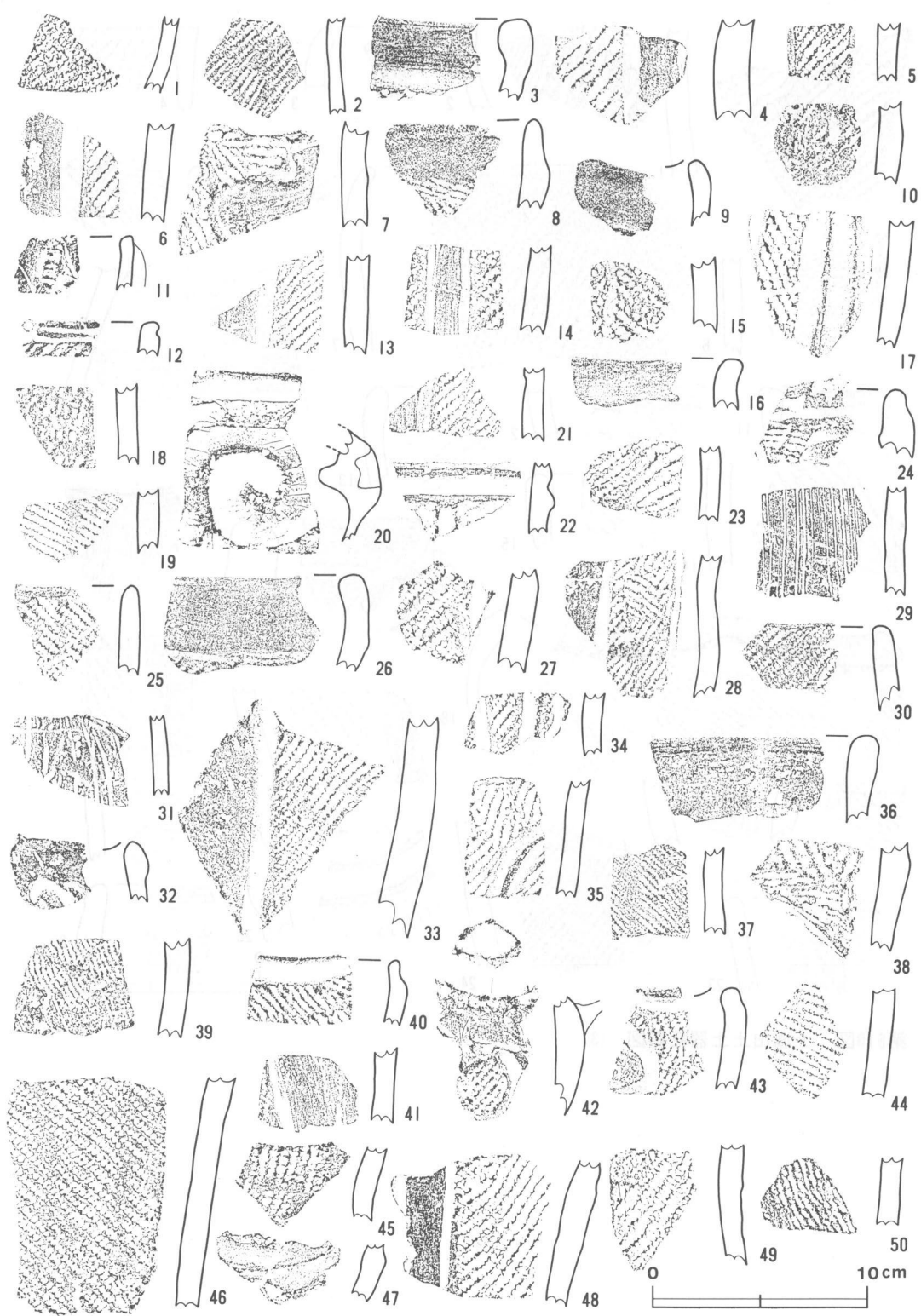


第607図 土壤実測図 (50)

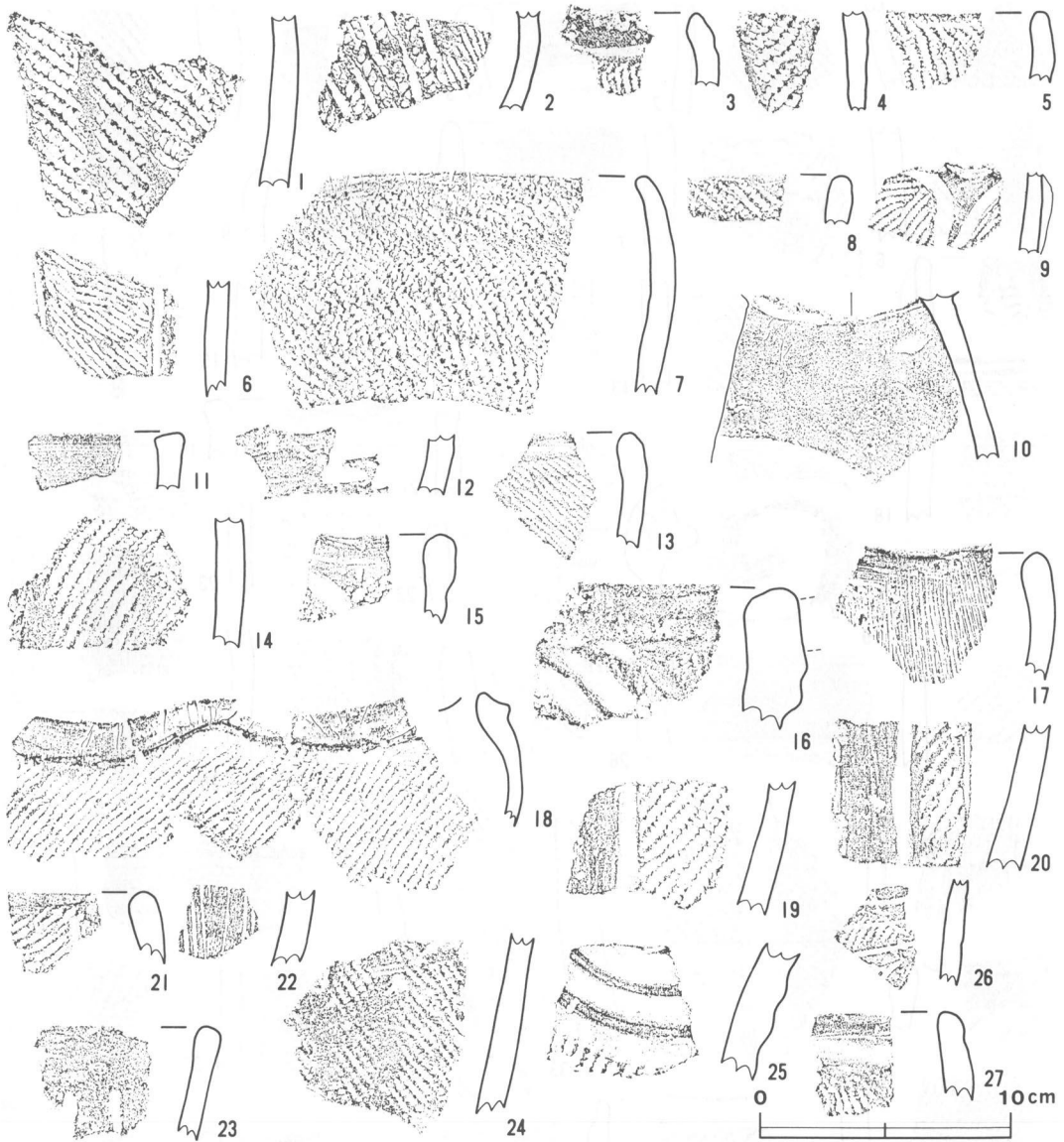




第608图 土壤出土土器拓影图 (1)



第609图 土壤出土土器拓影图 (2)




第610图 土壤出土土器拓影图 (3)

## 第4節 溝と出土土器

### 第1号溝 (第611図)

本跡は、6区の第8号溝に接続し、農道の下を通過して7区のE5e<sub>6</sub>区に確認され、ほぼ直線的に北西方向へC3j<sub>3</sub>区まで延び、さらに、一部農道の下にかかりながらC2h<sub>8</sub>区まで続き、遺跡北西側の調査区外へと至っている。7区における長さは132.1mで、主軸方向はN-58°-Wを指している。6区の第8号溝を合わせた総延長は226.1mである。

溝の幅はどの区でも、上幅が80~160cm・下幅が40~90cmである。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、4~52cmである。断面は、「」形をしている。C2i<sub>0</sub>区でピット1か所が検出されているが、その性格は不明である。底面のレベルは、Aで22.54m・Bで22.5m・Dで22.78m・Gで22.82m・Jで22.98m・Mで22.94m・Pで22.9m・Sで22.9m・Tで22.94mである。

覆土は4層からなり、主に黒褐色土・褐色土に分かれている。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第1号溝出土土器 (第622図1~3)

1は、本溝の覆土中から出土した陶製のおろし金の底部片である。全面に黄灰色の釉がかけられ、内面には施釉前に、ヘラで格子目状文が付されている。底面には糸切り痕がみられる。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成は良好である。底面は1.4cmほどの器壁を有し、厚い。推定底径は7.1cmで、現存高は、1.5cmである。

2は、本溝のSセクションベルトの第1層中から出土した内黒の土師器の底部片で、坏形土器と思われる。底部は糸切りである。内外面ともミガキが加えられ、色調は黒色を呈している。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。推定底径は4.9cmで、現存高は1.0cmである。

3は、本溝の覆土中から出土した坏の体部片で、土師質の土器である。外面にロクロ整形による稜が明瞭に残っている。内面はナデが加えられている。胎土には砂粒を含み、ややざらついている。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。

1~3とも、詳しい時期は不明である。したがって、本溝の時期も不明である。

### 第2号溝 (第612図)

本跡は、E5d<sub>4</sub>区から延びており、ほぼ直線的に北西方向に延び、第1号溝とほぼ平行してC2h<sub>2</sub>区に至り、遺跡北西側の調査区外へと続いている。総延長は123mで、主軸方向はN-59°-Wを指している。

溝の幅は C3j<sub>1</sub>区を除いて、上幅が60～210cm・下幅が20～160cmである。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、4～52cmである。断面は、おおむね「└」形をしている。C3j<sub>1</sub>区では、南側に楕円形状の水たまり的な広がりをもっている。広がり規模は、長径3.8m・深さ約20cmで、底面は北西側から南東側にかけてやや傾斜をしている。底面のレベルは、Aで22.58m・Bで22.74m・Dで22.82m・Gで22.88m・Jで23.06m・Mで22.98m・Pで22.92m・Sで23.04mで、Aの部分で最も低くなっている。

覆土は5層からなり、主に黒褐色土・暗褐色土に分かれている。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

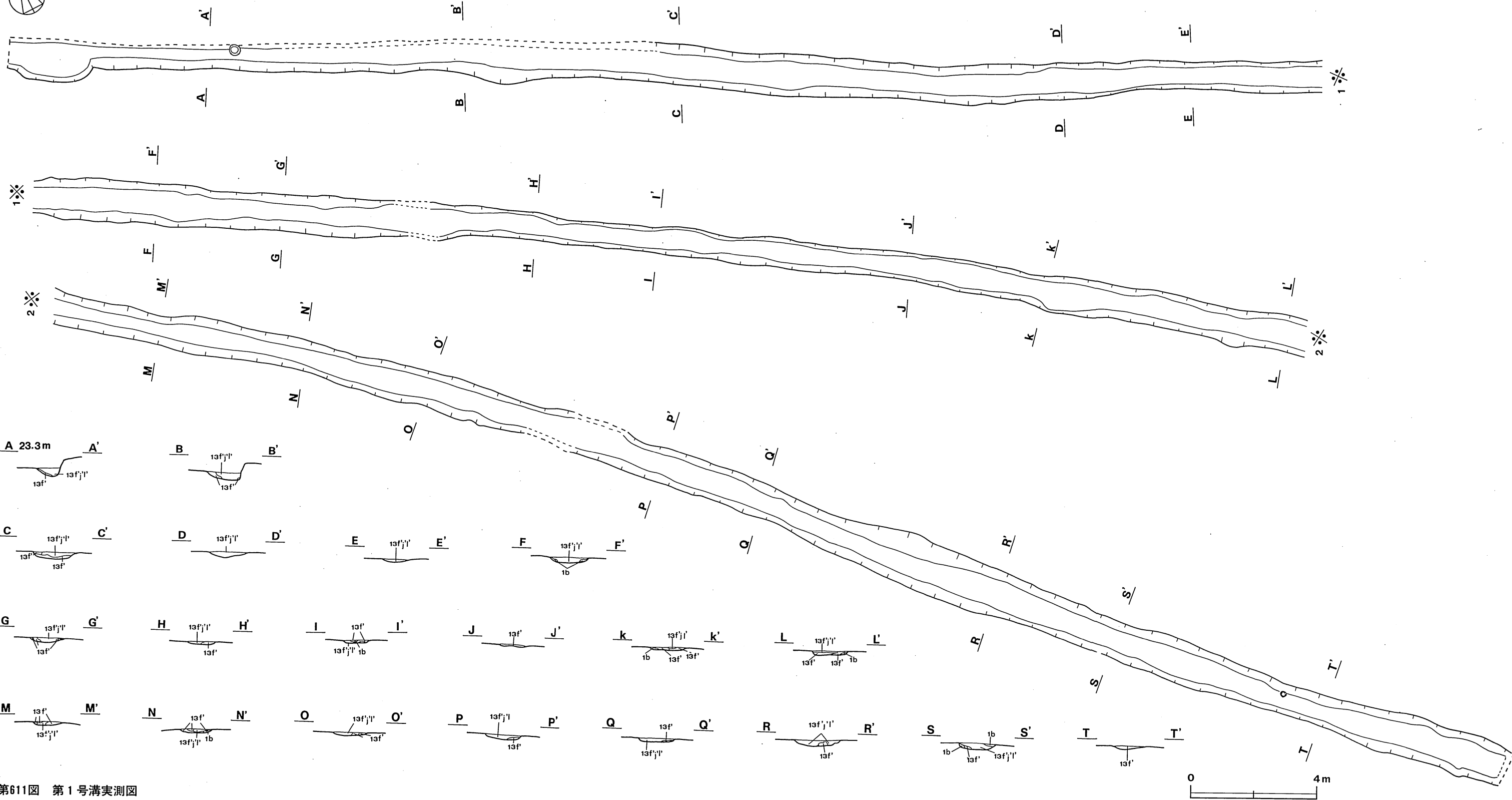
### 第3号溝（第613図）

本跡は、遺跡西側の調査区外から延びており、E2a<sub>3</sub>区で確認され、E4g<sub>2</sub>区まで直線的に延び、さらに、E4h<sub>6</sub>区までやや湾曲して延び、なお、E4i<sub>6</sub>区で直角に南側に曲がり、同じE4i<sub>6</sub>区で第5号溝と合流しE5j<sub>2</sub>区に至っている。その後農道の下を通過して6区へ至り、6区の第4号溝として検出されている。E2a<sub>3</sub>区からE4g<sub>2</sub>区までの直線部分は96mで、主軸方向はN-71°-Wを指している。また、第5号溝と合流するE4i<sub>6</sub>区からE5j<sub>2</sub>区までは23.4mで、主軸方向はN-86°-Wを指している。7区における長さは122.8mで、6区の第4号溝と合わせた総延長は161.4mである。

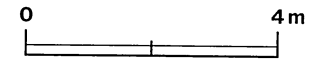
溝の幅はどの区でも、上幅が90～210cm・下幅が40～160cmである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、E2b<sub>7</sub>・E4j<sub>9</sub>区付近では皿状に中央が凹んでいるが、他の区では平坦である。確認面からの深さは、8～36cmと浅いものである。断面は「└」形である。E3e<sub>6</sub>区でピット1か所をもっているが、その性格は不明である。E4g<sub>3</sub>・E4h<sub>3</sub>区で、第2・3号土壌の攪乱を受けている。さらに、E3f<sub>9</sub>・E3g<sub>0</sub>区で、第23・24号住居跡、E4h<sub>4</sub>区で第8号住居跡と重複している。新旧関係は、前記のとおり、どの住居跡よりも本跡が新しいと考えられる。底面のレベルは、Aで22.98m・Bで22.92m・Cで23.04m・Dで22.82m・E22.84m・Fで22.8m・Gで22.76mで、Gの部分で最も低くなっている。

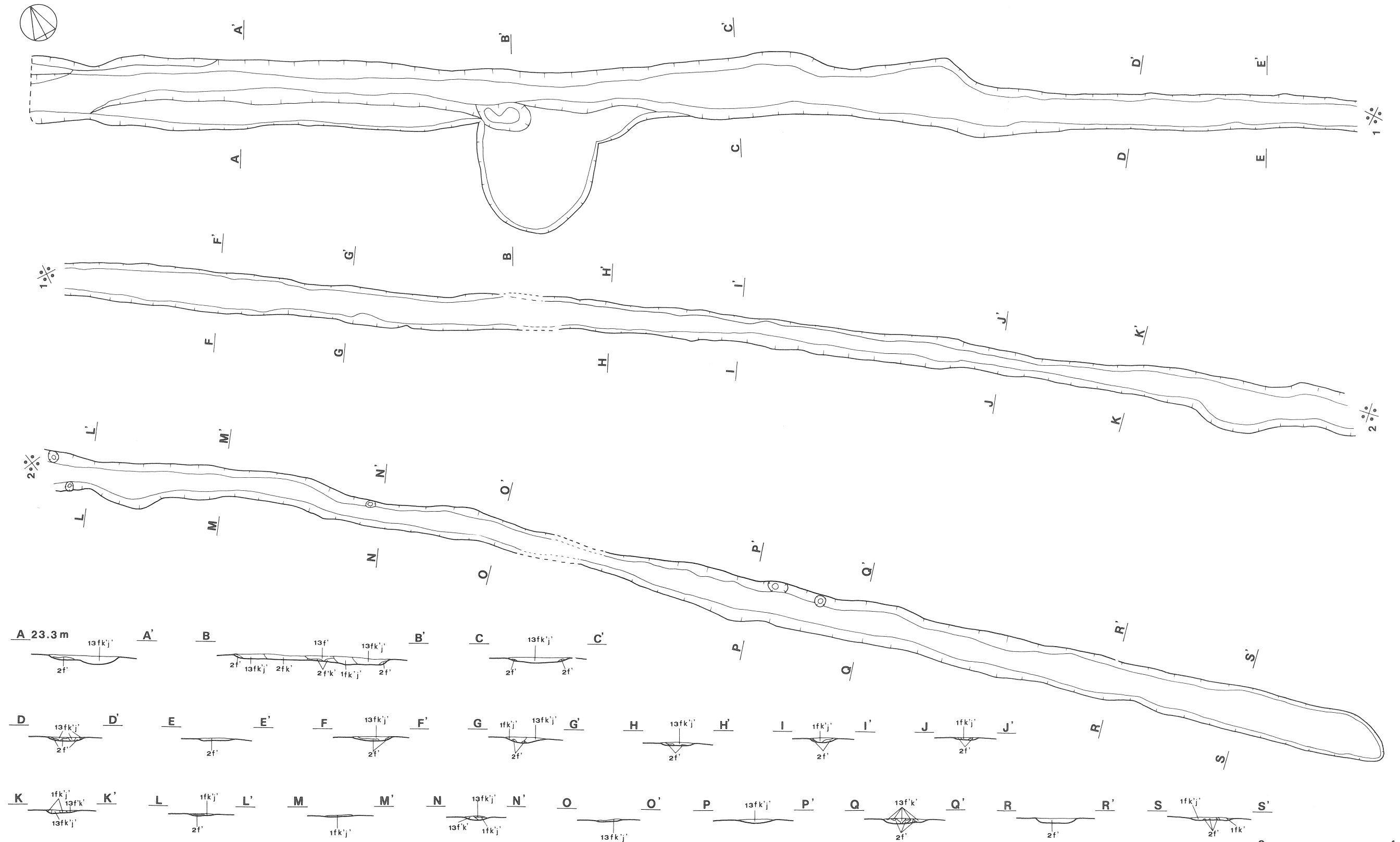
覆土は5層からなり、1～3層が黒褐色土、4・5層が褐色土である。

遺物は、E3g<sub>0</sub>区の覆土の中層からは、高坏の坏部が1点出土している。また、縄文土器片も出土しているが、縄文土器片は覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

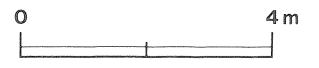


第611图 第1号沟渠测图





第612图 第2号沟实测图







### 第3号溝出土土器（第622図4～5）


4は、本溝の覆土中から出土した土師器の高坏形土器の接合部片である。坏部下端に稜を有し、底面にははめ込み用の柄ほぞが突出している。外面の整形はヘラナデ、ケズリが顕著になされている。器の内外面とも磨滅が激しい。胎土には小石粒、微砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存高は3.6cmである。

5は、本溝に切られている第8号住居跡の覆土中から出土したもので、甕の頸部片である。外面に緑釉がきれいにかかっており、釉の下に横ナデとタタキ目状の圧痕が観察されている。内面の接合部には輪積みの段差が顕著に残っている。内面は横ナデにより調整されている。胎土には小石粒、砂粒を含み、灰色を呈している。焼成は良好で、色調は内面が暗灰色を呈している。

4は、古墳時代の土師器片であるが、5は、詳しい時期は不明である。したがって、本溝の時期は不明である。

### 第4号溝（第614図）

本跡は、E2h<sub>1</sub>区から延びており、F2a<sub>0</sub>区まで直線的に続き、F2a<sub>0</sub>区からF4j<sub>4</sub>区まで大きく緩やかに湾曲しながら南東方向へ延び、農道の下を通過して6区の第1号溝として検出され、さらに、南三島遺跡1・2区の第1号溝として調査されている。また、7区では第4・5・8号溝と、6区では第2・9号溝と合流している。E2h<sub>1</sub>区からF2a<sub>0</sub>区の直線部分は35mで、主軸方向はN-63°-Wを指している。7区における長さは100.1mで、全体の総延長は392.9mである。

溝の幅はどの区でも、上幅が80～220cm・下幅が32～80cmである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっているが、第4・5・8号溝の合流部分は垂直に掘りこまれている。底面もハードロームで硬く、どの区も平坦である。確認面からの深さは、22～86cmである。断面は「」形をしているが、第4・5・8号溝の合流部分では「U」字形をしている。底面のレベルは、Aで22.54m・Bで22.72m・Cで22.48m・Dで22.66m・Eで22.36m・Fで22.08mである。Fの第8号溝との合流部分が最も低くなっている。

覆土は4層からなり、主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は、陶器片がF2a<sub>0</sub>区の覆土の中層から6点出土している。また、縄文土器片も出土しているが、縄文土器片は覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第4号溝出土土器（第622図6～10）

6は、本溝の覆土中から出土した須恵質の甕の胴部片で、外面には格子目状のタタキ目が付されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には小石粒、砂粒を含み、暗灰色を呈している。焼成は良好で、締まっている。

7は、本溝の覆土中から出土した須恵質の甕の胴部片で、外面には花卉状のタタキ目が施され、灰釉がかけられている。内面は横ナデが施されているが、粗雑である。胎土には小石粒、砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、色調は暗灰褐色を呈している。

8～10は、本溝の覆土中から出土した常滑の大甕の口縁部片で、折り返し口縁を呈している。

8は、外面と口縁部内面の一部には藁灰釉<sup>わら</sup>がかけられているが、かせている。口唇部形態は、10に類似するが、口唇部内面の挟りが浅い。外面は横ナデが加えられ、内面は輪積みを指で押さえた後に横ナデが施されている。胎土には小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が暗灰色を呈している。推定口径は23.6cmで、現存高は10.8cmである。

9は、口唇上面と内面上半部には、灰釉が認められる。口唇部は平坦に作られ、内外面とも横ナデにより整形されている。胎土にはやや大粒の長石、石英粒が目立ち、8・10よりも粗い。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈している。推定口径は34.0cmで、現存高は4.0cmである。

10は、外面に灰釉が全面にかけられている。口唇部の折り返しが強く、口唇部内面の挟りがやや深い。内面は横ナデが施されている。胎土に長石、石英粒を含み、灰褐色を呈している。焼成は良好で、色調は外面が黄灰色、内面が暗褐色を呈している。推定口径は28.2cmで、現存高は7.1cmである。

6～7は、詳しい時期は不明である。8～10は、常滑の大甕の口縁部片で、中～近世のものと思われる。したがって、本溝の時期は中～近世と考えられるが、明らかではない。

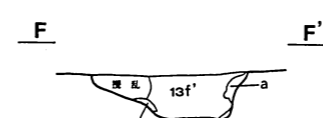
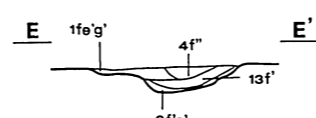
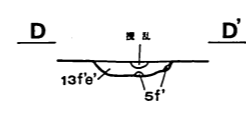
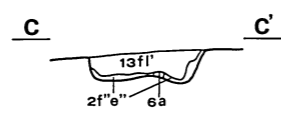
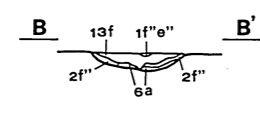
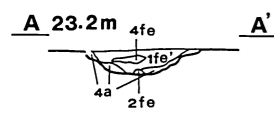
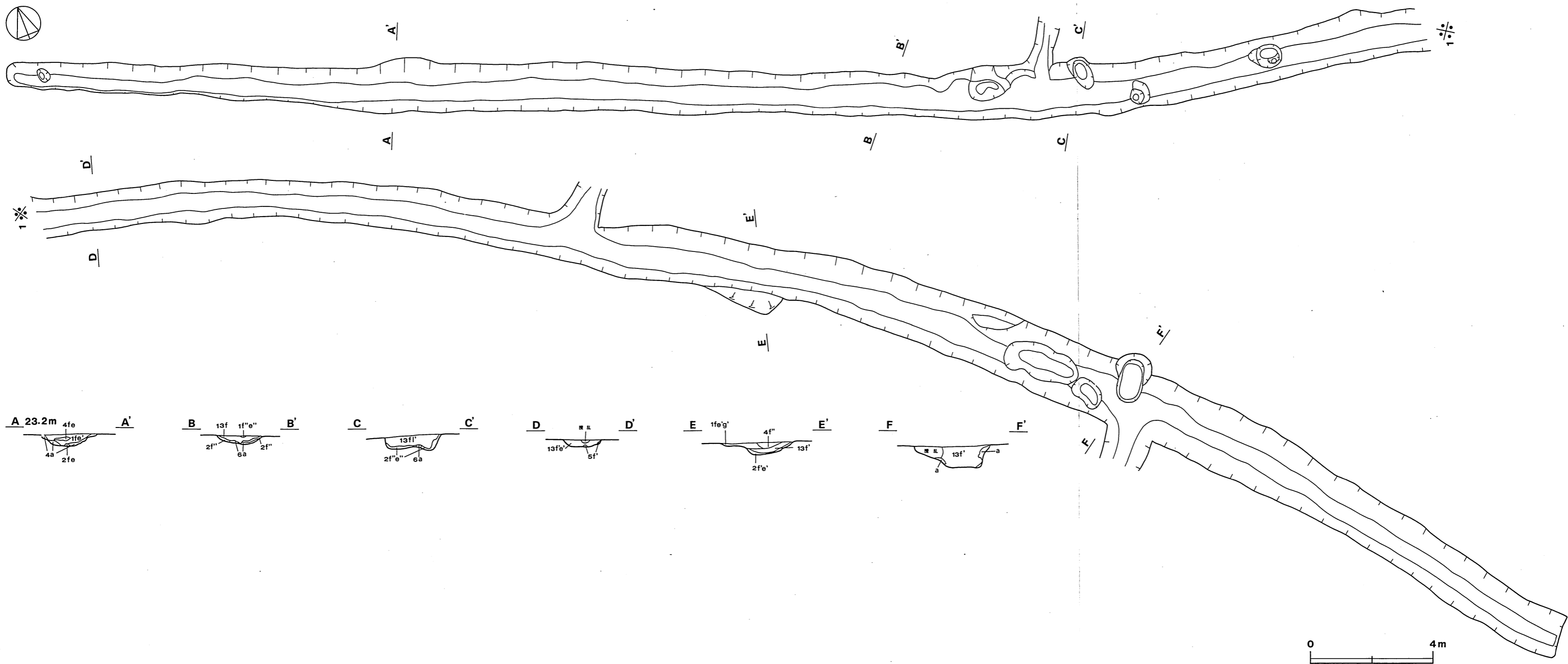
#### 第5号溝（第615図）

本跡は、第4号溝のF3d<sub>8</sub>区から延びており、北東方向へ直線的にE4j<sub>1</sub>区まで続き、さらに、E4j<sub>1</sub>区で北東方向から南方向へ「└」状に曲がり、その後、直線的に延び、E4i<sub>6</sub>区で第3号溝と合流している。F3d<sub>8</sub>区からE4j<sub>1</sub>区までの長さは23.8mで、主軸方向はN-39°-Eを指している。また、E4j<sub>1</sub>区からE4i<sub>1</sub>区までの長さは17.6mで、主軸方向はN-82°-Eを指している。総延長は41.4mである。

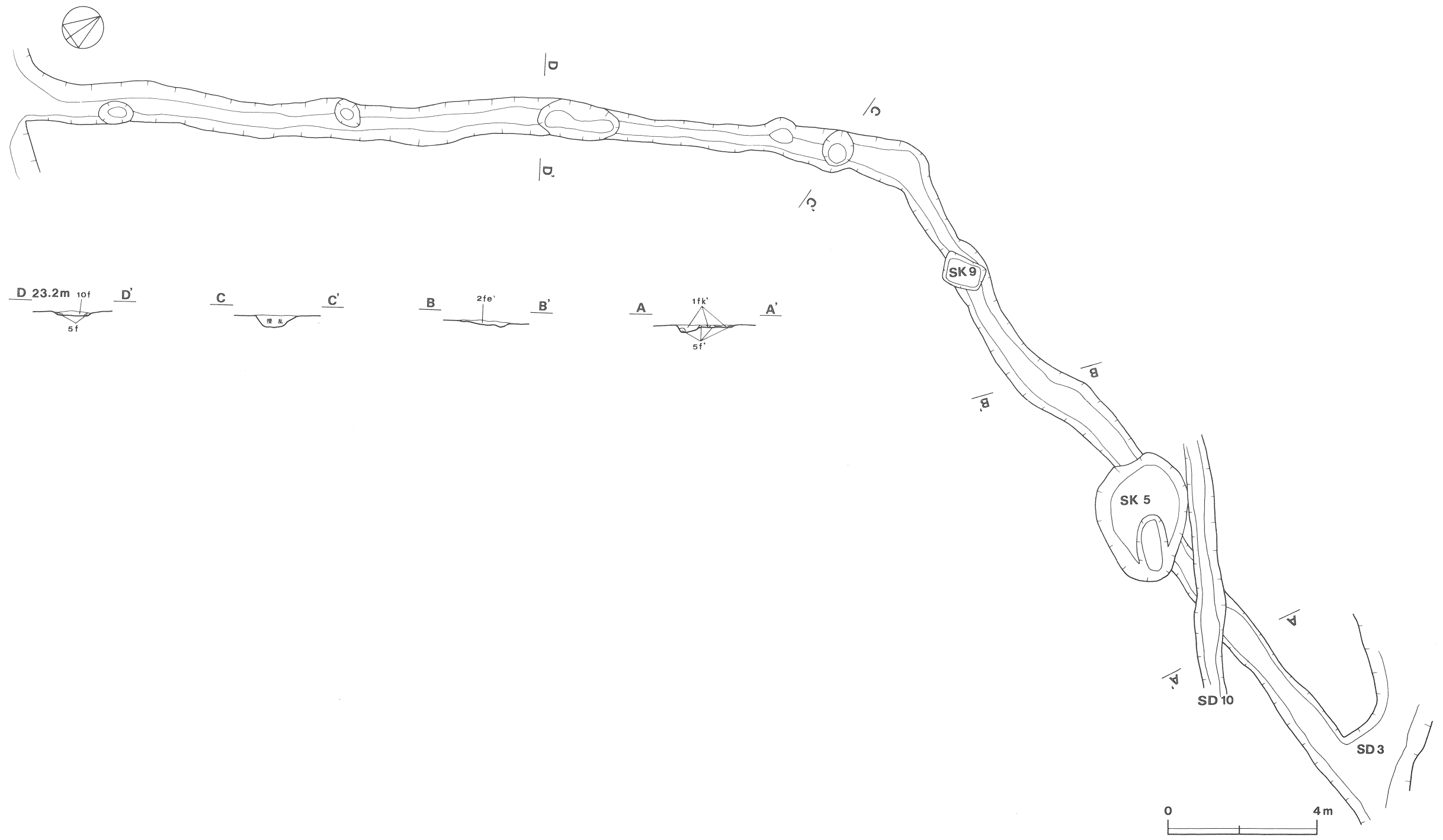
溝の幅はどの区でも、上幅が60～120cmで、下幅が22～80cmある。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はハードロームで硬く、平坦である。確認面からの深さは、2～10cmと浅い。断面は、「└」形をしている。F3c<sub>8</sub>・F3b<sub>9</sub>・F3a<sub>0</sub>・E4i<sub>1</sub>区に1か所ずつピットが掘られている。その性格は不明である。また、E4i<sub>2</sub>・E4i<sub>4</sub>区で第5・9号土層と重複している。底面のレベルは、Aで22.88m・Bで22.84m・Dで22.8mで、Dの部分が最も低くなっており、全体にAからDにかけて徐々に低くなっている。

覆土は2層からなり、主に暗褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



第614图 第4号沟实测图



第615图 第5号沟实测图

## 第6号溝 (第617図)

本跡は、第3号溝のE3d<sub>5</sub>区から延びており、E3g<sub>3</sub>区まで南西方向へ直線的に続き、さらに、やや角度を変えE3j<sub>1</sub>まで湾曲して延び、また、角度を変えF2a<sub>0</sub>区で第4号溝と合流している。E3d<sub>5</sub>区からE3g<sub>3</sub>までの長さは6.1mで、主軸方向はN-32°-Eを指している。総延長は33.7mである。

溝の幅は、E3f<sub>3</sub>区・E3g<sub>3</sub>区・E3h<sub>2</sub>区で幅が広がるが、他の区では、上幅が58~104cm、下幅が48~100cmである。E3f<sub>3</sub>区・E3g<sub>3</sub>区・E3h<sub>2</sub>区では、上幅が140cm・下幅が82cmである。壁はソフトロームで軟らかく、北側でやや急な立ち上がりをしている。他は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はハードロームで硬く、北側では皿状に中央が凹むが、他は平坦である。確認面からの深さは、6~18cmである。断面は、北側で「U」形、他は「┌」形をしている。底面のレベルは、Aで22.84m・Bで22.92m・Cで22.96mで、CからAにかけて徐々に低くなっている。

覆土は4層からなり、1~3層が暗褐色土、4層が褐色土である。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

## 第7号溝 (第616図)

本跡は、F3f<sub>8</sub>区から延びており、南東方向から南西方向へ大きく湾曲して続き、さらに、F3g<sub>7</sub>区からF3i<sub>7</sub>区まで直線的に延び、その後、F3i<sub>7</sub>区から緩やかにカーブしてF3g<sub>7</sub>区へ至っている。F3g<sub>7</sub>区からF3i<sub>7</sub>区までの長さは12.8mで、主軸方向はN-45°-Wを指している。F3g<sub>7</sub>区からF3i<sub>7</sub>区までの長さは5.6mで、主軸方向はN-55°-Eである。総延長は13.4mである。

溝の幅は、上幅が140~252cm・下幅が92~180cmである。壁はハードロームで硬く、東壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁は緩やかに外傾している。底面もハードロームで硬く、西側から東側にかけてやや傾斜している。確認面からの深さは、12~36cmである。断面は、「┌」形をしている。底面のレベルは、Aで22.35m・Bで22.1mである。F3i<sub>9</sub>区で第5号地下式墳と重複しているが、新旧関係は土層から本跡が新しいと考えられる。

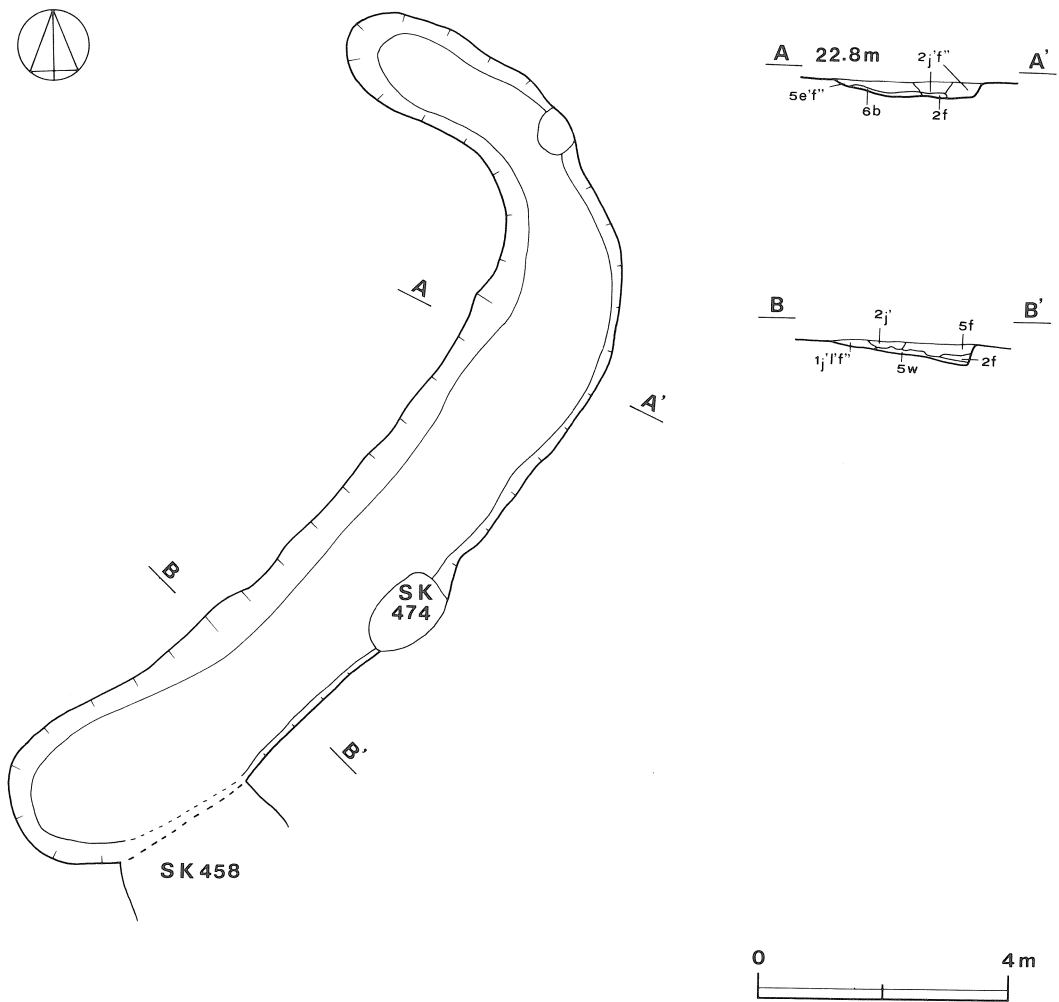
覆土は5層からなり、主に暗褐色土、褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。


## 第8号溝 (第618図)

本跡は、第4号溝のF4g<sub>1</sub>区から延びており、G3a<sub>8</sub>区まで直線的に南西方向へ続き、さらに、G3a<sub>8</sub>区からわずかに角度を変えてG3c<sub>7</sub>区へ至り、遺跡南端の最低のレベル地域に延びている。総延長は28.6mで、主軸方向はN-34°-E前後を指している。

溝の幅は、F4g<sub>1</sub>区からG3h<sub>8</sub>区で上幅が128~180cmであるが、G3b<sub>7</sub>区~G3c<sub>7</sub>区で上幅が80~100cmと狭くなっている。下幅はどの区でも、32~72cmの範囲である。壁はG3b<sub>7</sub>区・G3c<sub>7</sub>区を除いて

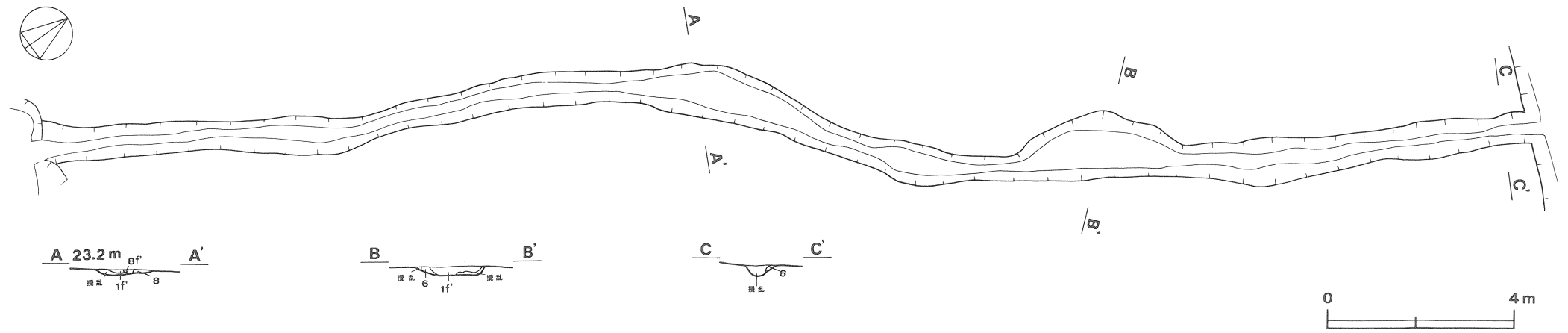


第616図 第7号溝実測図

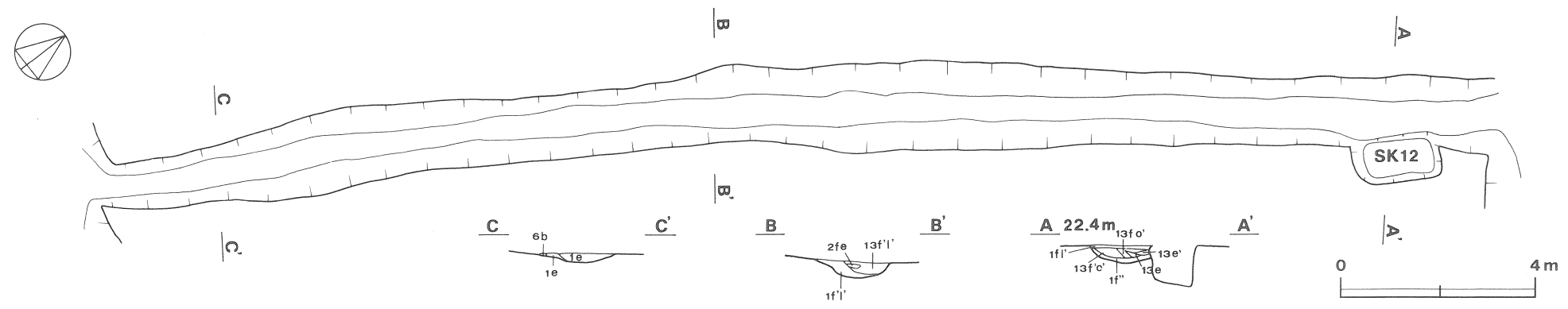
ハードロームで硬く、外傾して立ち上がっている。G3b<sub>7</sub>区・G3c<sub>7</sub>区では緩やかに立ち上がる。底面もハードロームで硬く、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、20～61cmである。断面は、「」字形をしている部分が多くみられる。底面のレベルは、で21.81m・Bで21.5m・Cで21.4mで、AからCにかけて徐々に低くなっている。

覆土は7層からなり、上・下の層が暗褐色土で、中の層が黒褐色土である。

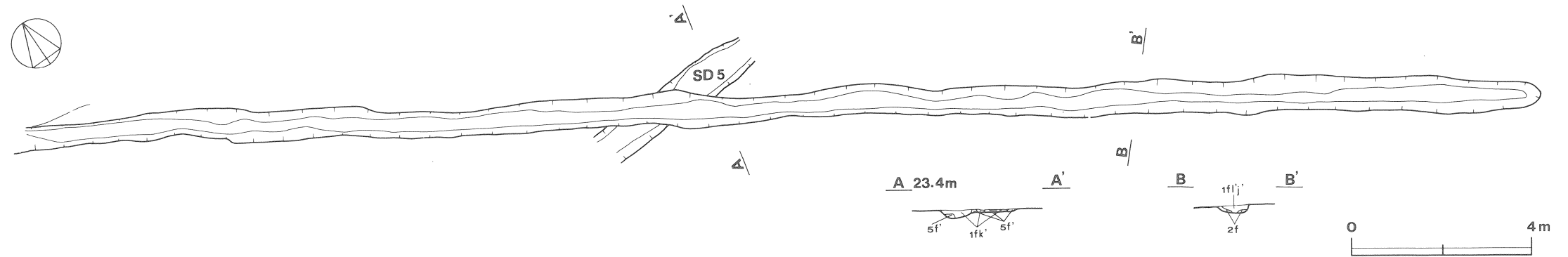
遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



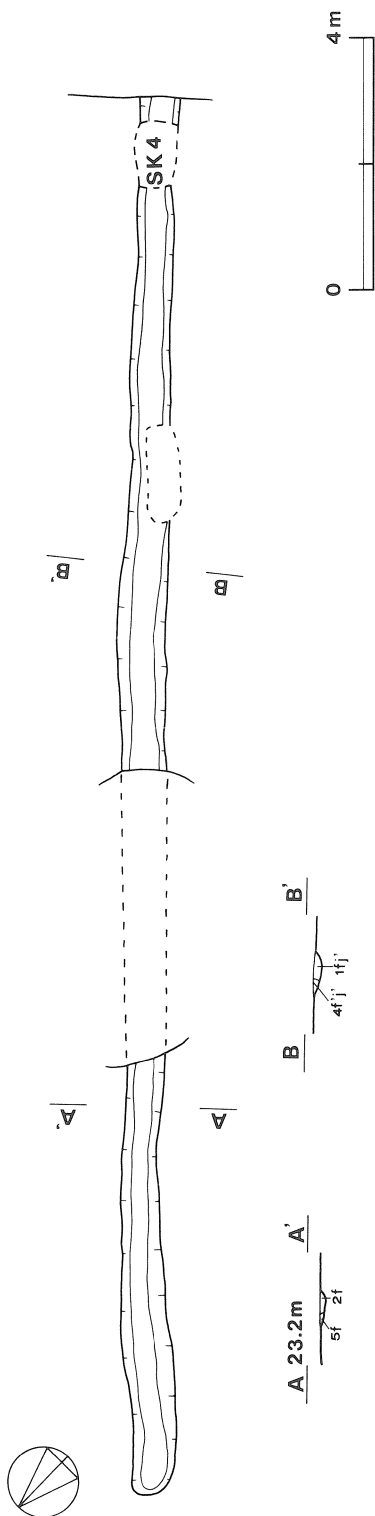
第617图 第6号沟渠测图



第618图 第8号沟渠测图



第619图 第9号沟渠测图



第620図 第10号溝実測図


### 第8号溝出土土器 (第622図14)

14は、本溝のBセクションベルトの覆土中から出土した縄文中期の深鉢形土器の底部片である。底面の近くは横ナデが施されているが、内面は磨滅のため明らかではない。胎土には、やや大粒の長石と石英粒を多量に含み、粗雑である。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。底径は7.7cmで、現存高は2.2cmである。

14は、本溝に伴うものではなく、本溝の時期は不明である。

### 第9号溝 (第619図)

本跡は、E4e<sub>9</sub>区から延びており、直線的に南東方向へE5h<sub>3</sub>区まで続き、さらに、E5i<sub>4</sub>区で農道の下へ入っている。隣接区からは検出されないので、農道の下までの掘り込みと思われる。検出部分の総延長は21mで、主軸方向はN-51°-Wを指している。

溝の幅は、上幅が54~80cm・下幅が24~46cmである。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは、10~13cmと浅いものである。断面は、「」形をしている。E5f<sub>1</sub>区で第29号住居跡と、E5g<sub>2</sub>区で後世の攪乱穴と、E5h<sub>3</sub>区で第4号土壌とそれぞれ重複している。底面のレベルは、Aで22.9m・Bで22.93mである。

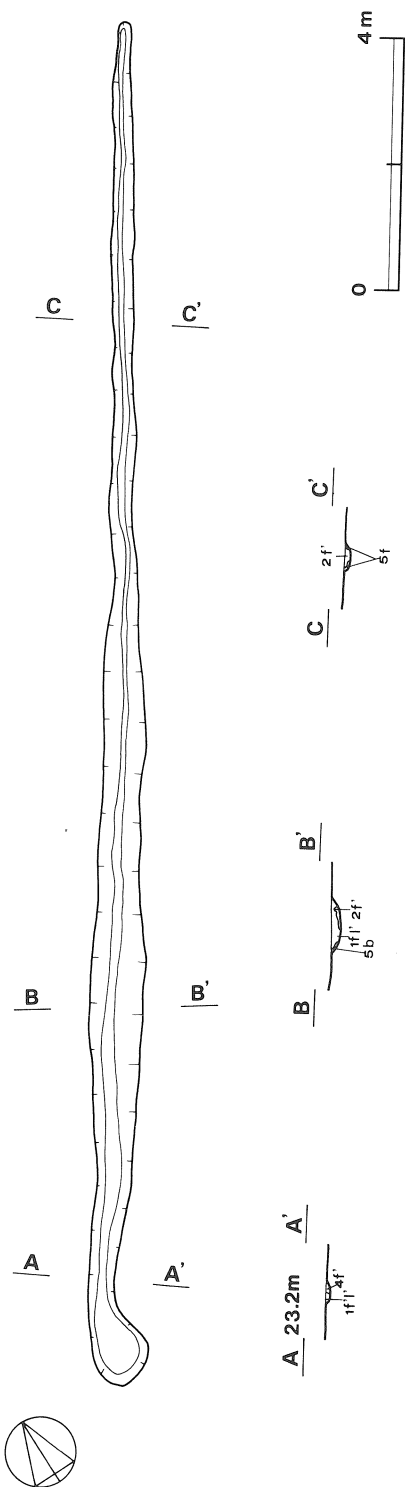
覆土は2層からなり、主に暗褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第9号溝出土土器 (第622図15)

15は、本溝の覆土中から出土した縄文中期の深鉢形土器の底部片であるが、全体に磨滅が著しい。底面の近くは横ナデが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。推定口径は5.0cmで、現






第621図 第11号溝実測図

存高は2.5cmである。

15は、本溝に伴うものではなく、本溝の時期は不明である。

#### 第10号溝（第620図）

本跡は、F4b<sub>9</sub>区から延びており、北西方向へ直線的に続き、さらに、第5号溝を斜めに横切ってE4g<sub>2</sub>区で第3号溝と合流している。総延長は34.3mで、主軸方向はN-58°-Wを指している。


溝の幅はどの区でも、上幅が50~82cm・下幅が14~40cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは、18~31cmである。断面は、形をしている。底面のレベルは、Aで22.87m・Bで22.74m・Cで22.8mで、第5号溝と交差しているBの部分が低くなっている。

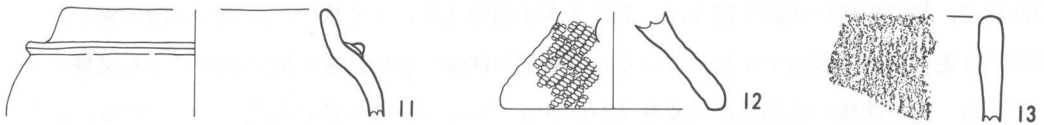
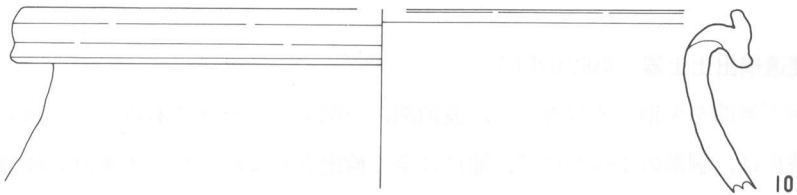
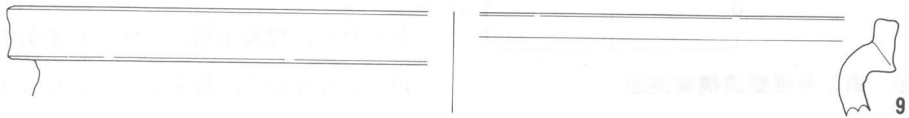
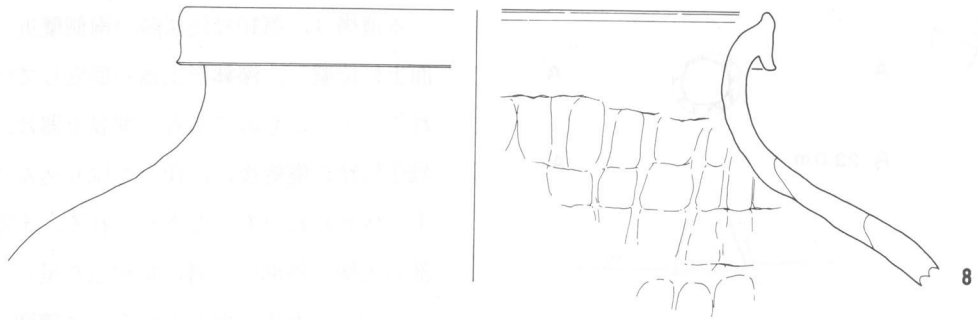
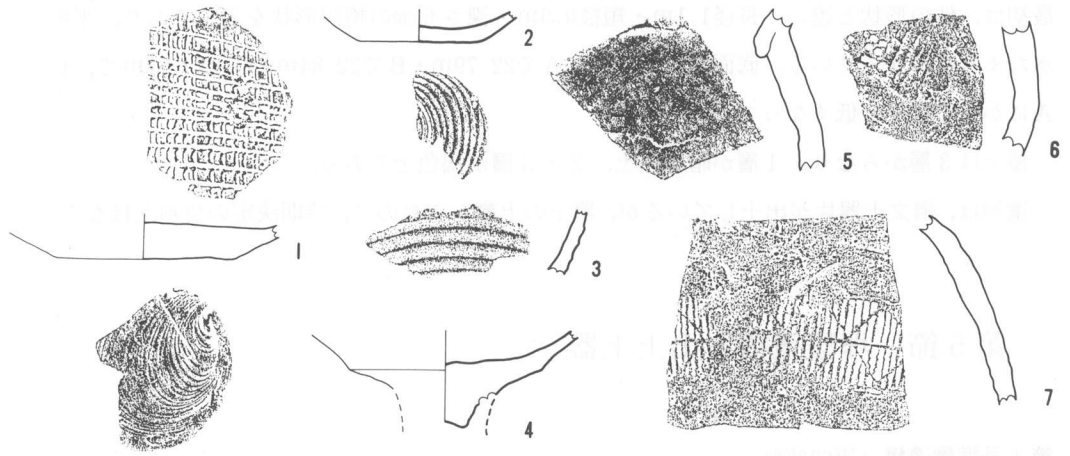
覆土は2層からなり、暗褐色土・褐色土の順に堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

#### 第11号溝（第621図）

本跡は、E4e<sub>9</sub>区から延びており、北東方向へ直線的に続き、第1・2号溝よりも7cm低レベルのところを通り、E5a<sub>1</sub>区へ至っている。総延長は21.7mで、主軸方向はN-34°-Eを指している。

溝の幅はE4a<sub>9</sub>区・E4d<sub>9</sub>区・E4c<sub>0</sub>区で、上幅が42~88cm・下幅が8~28mであるが、他の区で狭くなり、上幅が20~40cm・下幅が6~12cmである。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はハードロームで硬く、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、6~14cmである。断面は、形をしている。また、溝の



第622図 溝・地下式墳・グリッド出土遺物実測図・拓影図

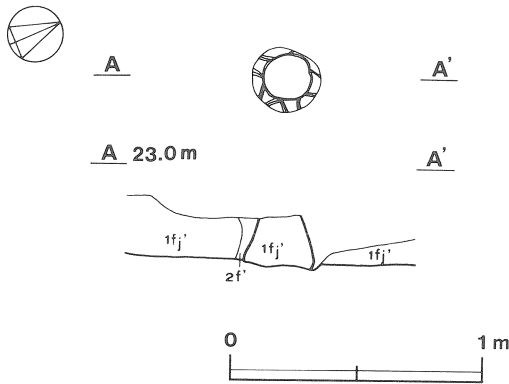
最初は、他の形状と違い、長径1.1m・短径0.9m・深さ6cmの楕円形状を示しており、平坦で、水たまり状になっている。底面のレベルは、Aで22.79m・Bで22.84m・Cで23.87mで、CからAにかけて徐々に低くなっている。

覆土は3層からなり、1層が暗褐色土、2・3層が褐色土である。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

## 第5節 埋甕遺構と出土土器

### 第1号埋甕遺構（第623図）



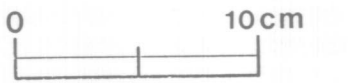
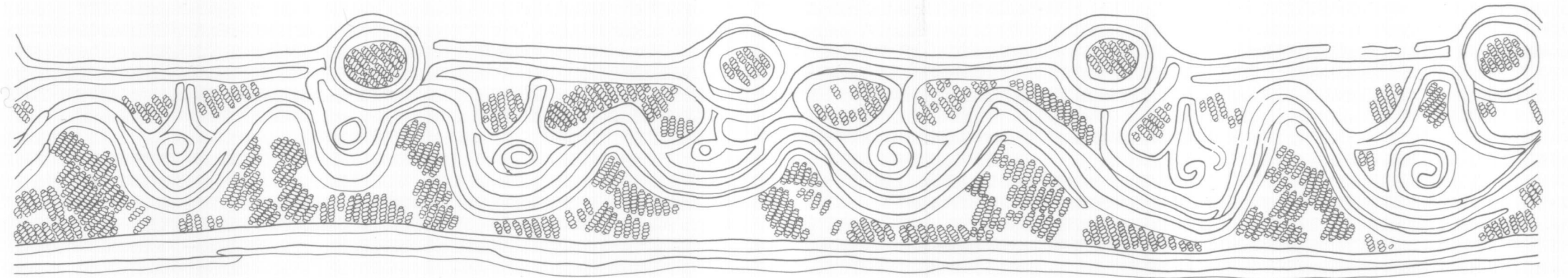
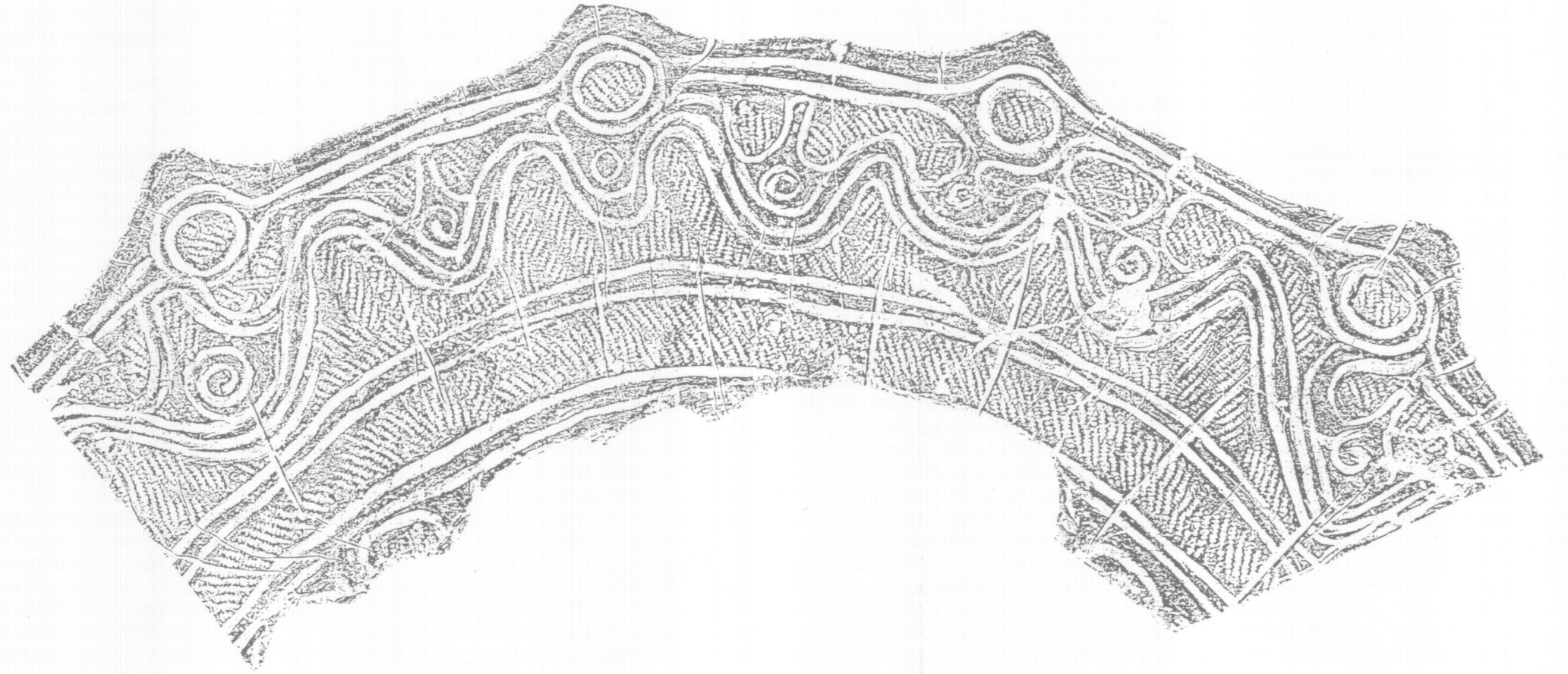
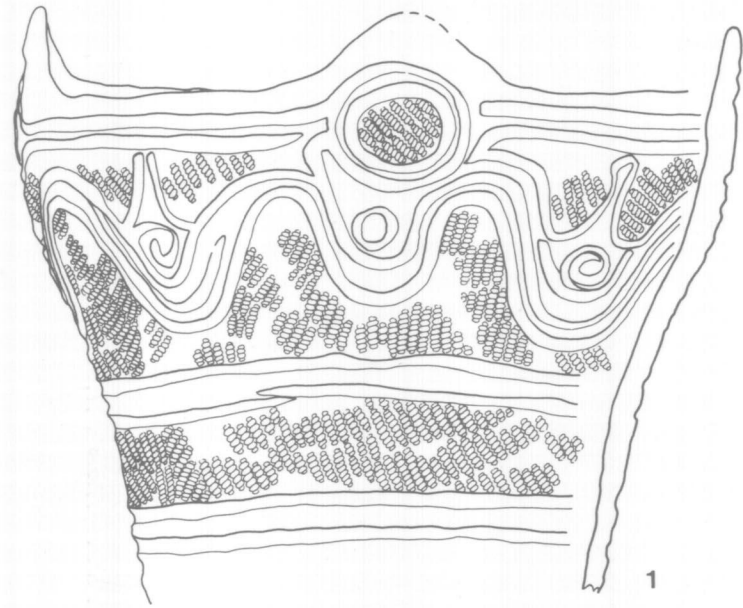
第623図 第1号埋甕遺構実測図

ほど大きい掘り方があったものと推測される。

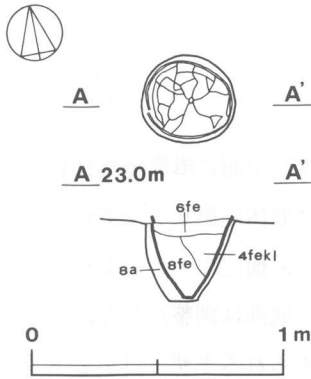
本遺構は、第10号住居跡の南側壁近くの床面上に位置し、深鉢形土器が倒立して伏せられて出土したものである。埋設土器は、第10号住居跡の廃絶後に、覆土を掘り込んで床面上に伏せられたものと考えられる。土器の内部の土層と外部の土層は暗褐色を呈し、ほとんど同じである。掘り方は十分に確認できなかったが、埋設土器の片側にわずかに残る褐色土の存在から、推定で土器よりも4～7cm

### 第1号埋甕遺構出土土器（第624図1）

1は、胴下半部を欠損する以外には、波頂部の一部を欠くだけである。本土器と同一個体と考えられる破片は、胴部の1点だけで、他には全く検出されなかった。4単位の波頂部を有する深鉢形土器で、波頂部下に円文を施し、口縁直下に2条の沈線を巡らしている。その下に2～3本の沈線で、横位の蛇行沈線を描き、以下に2本1組の沈線による横位の区画を2段に施し、胴下半部には逆U字状の区画文を加えている。口縁部の沈線と蛇行沈線の間に沈線による文様を充填している。蛇行沈線の波底部には渦巻文が付されているが、1か所は円文となっている。渦巻文の上部には山形状の沈線を施すことを基本とするが、1か所には楕円文が施されている。波頂部の円文内および口縁部文様帯内には、単節縄文RLが施文されている。口縁部文様帯の下の2段の横位区画内は磨消されている。胴下半部の逆U字状の区画内には、口縁部と同じ縄文が充填されている。器面の一部に磨滅している部分が認められる。口縁直下の内面には緩い稜を有してお



第624图 第1号埋甕遺構出土器実測図・拓影図



A 23.0m

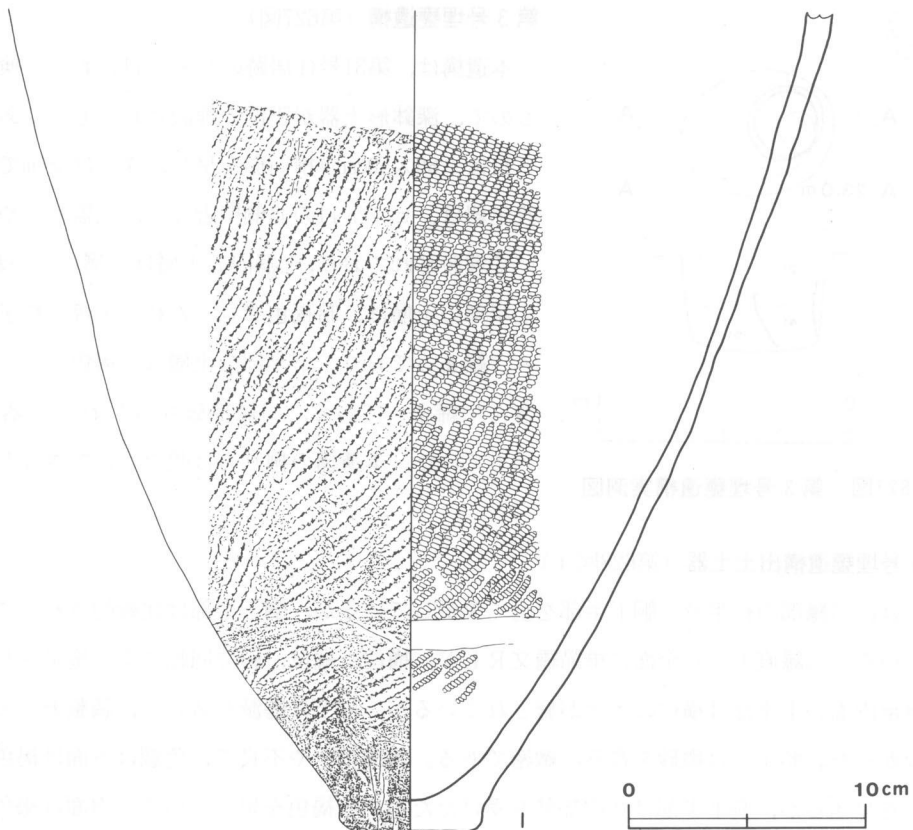
り、上半部は横ナデ、下半部は縦ナデにより丁寧に整形されている。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。口径は28.0cmで、現存高は23.5cmである。加曾利E III式期のものと考えられる。

第2号埋甕遺構 (第625図)

本遺構は、第15号住居跡のピット2において検出されたもので、胴部から底部にかけて完存する深鉢形土器が正位で埋設されている。

第625図 第2号埋甕遺構実測図

たものである。ピット2は37×34cmのほぼ円形の平面形を呈し、深さは33cmである。埋設土器の現存部の最大径は34.8cmであり、ほぼ柱穴の掘り方内にきっちりと埋められていた。上部はわずかに1.6cmほど床上に出ていた。欠損は後世の攪乱によるものかもしれない。土器内部の土層は3層に分かれ、上位はローム粒子・ロームブロックを含んだ締めりのある褐色土層であり、次に褐色を呈するローム粒子・ロームブロックの他に炭化物、炭化粒子を含む締めりの弱い土層が堆積し、下半部から底部にかけては、明褐色を呈するローム粒子・ロー

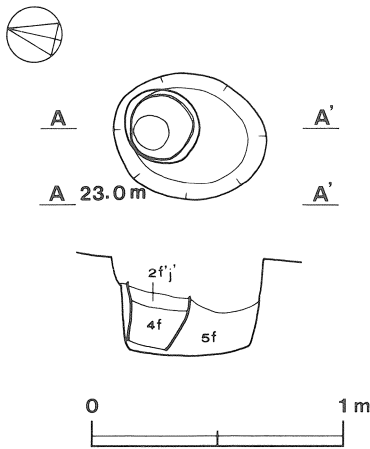


第626図 第2号埋甕遺構出土土器実測図

ムブロックを混入している締まりのない土層が堆積していた。

### 第2号埋甕遺構出土土器（第626図1）

1は、やや小さく不安定な平底から直線的に外傾する深鉢形土器で、全面に単節縄文RLを縦位回転で施文している。本土器は縄文の施文順序が観察でき、次第に原体の撚りがくずれ、無節のごとく見える部分を生じている。また、胴下半部には縄文施文後に、横位のナデにより消されている部分も認められる。底部近くには炭化物が少し付着している。底部は調整が悪く、やや突出気味となっている。残存部上端の断面には輪積み強化のためと考えられるキザミ目が2～3か所付されている。本土器は全体に整形が不良で器厚が不揃いである。約4mmの器壁の上位に、10mm以上の器壁の破片が接合する個所もあり、復元に困難をきたした。内面はヘラ状工具による縦ナデが著しく、残存部上半部には横ナデが重ねられている。胎土には若干の石粒を含むが、微砂を主としており緻密で良好である。色調は外面上半部が暗褐色、下半部が赤褐色、内面が褐色を呈している。底径は4.7cmで、現存高は34.6cmである。加曾利E III式期のものと考えられる。



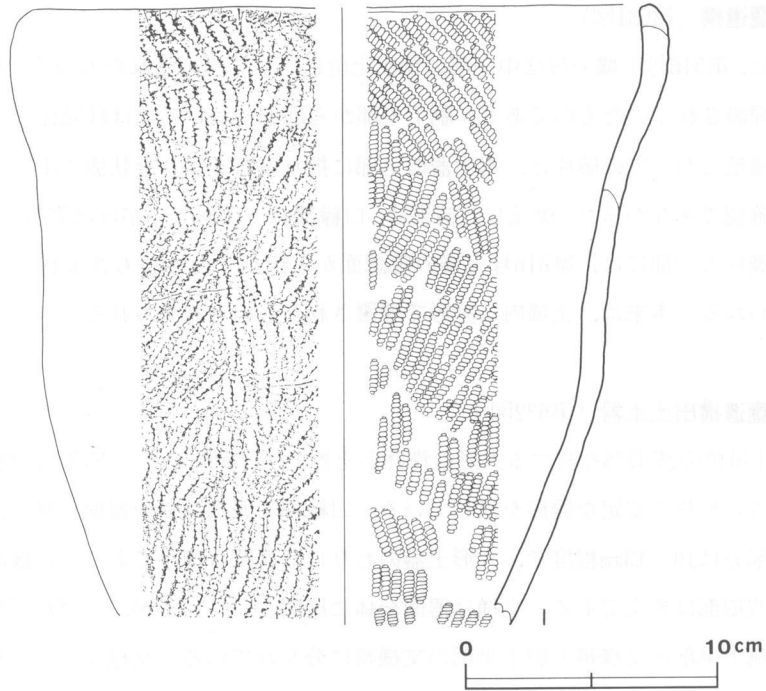
第627図 第3号埋甕遺構実測図

### 第3号埋甕遺構（第627図）

本遺構は、第31号住居跡のピット11において検出されたもので、深鉢形土器が正位で埋設されたものである。ピット11は、60×50cmの楕円形を呈し、深さは38cmである。埋設土器は、ピット11の北側壁近くに、土器がやや南側に傾いて埋設されており、土器内の土層は2層に分かれていた。上半部の土層は、暗褐色でローム粒子・焼土粒子を少量含み、締まっており、下半部の土層は、褐色でローム粒子を含んで締まっている。口縁部破片は折れて土器の内部に入っていた。本遺構の掘り方は明らかにできなかった。

### 第3号埋甕遺構出土土器（第628図1）

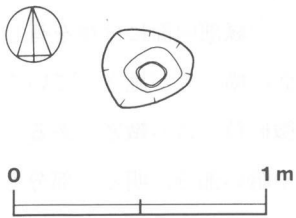
1は、口縁部の約半分と胴下半部を全く欠損しているが、胴下半部は比較的きれいに打ち欠かされている。口縁直下から全面に単節縄文RLが、横位、縦位、斜位回転により施文されている。口縁部内面の上半部は横位のナデが施されているが、以下は磨滅が著しく、調整方向の観察はできなかった。胎土には微砂を含み、緻密である。焼成はやや不良で、色調は外面は褐色および黒褐色を呈するが、胴下半部は2次加熱を受けたためか赤褐色を呈している。内面は褐色を呈している。推定口径は24.6cmで、現存高は24.5cmである。加曾利E III式期のものと考えられる。



第628図 第3号埋甕遺構出土土器実測図

第4号埋甕遺構 (第629図)

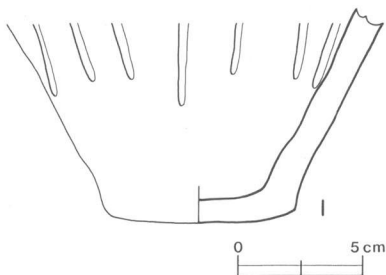
本遺構は、第37号住居跡のピット12において検出されたもので、深鉢形土器の底部が正位の状態  
で出土したものである。ピット12は、33×30cmの不整楕円形を呈し、深さは10cmの浅いものであ  
る。埋設土器の掘り方や土層の堆積状態は観察できなかった。



第629図 第4号埋甕遺構実測図

第4号埋甕遺構出土土器 (第630図1)

1は、底部が完存しており、断面はきれいに打ち欠か  
れている。輪積み部分で剝離したことがキザミ目の存在から  
判断できる。外面には18本の沈線文が垂下しており、9単  
位の磨消懸垂文の下端部と考えられる。外面は縦方向のへ  
ラミガキが顕著であり、底面もナデにより丁寧に調整されて  
いる。内面は剝落が著しく、調整は不明である。胎土には石  
英粒などの小石粒や砂粒を多く含み、焼成は良好である。  
色調は外面が褐色、内面が黒褐色を呈している。底径は  
7.4cmで、現存高は8.0cmである。加曾利E III式期のものと  
考えられる。



第630図 第4号埋甕遺構出土土器実測図

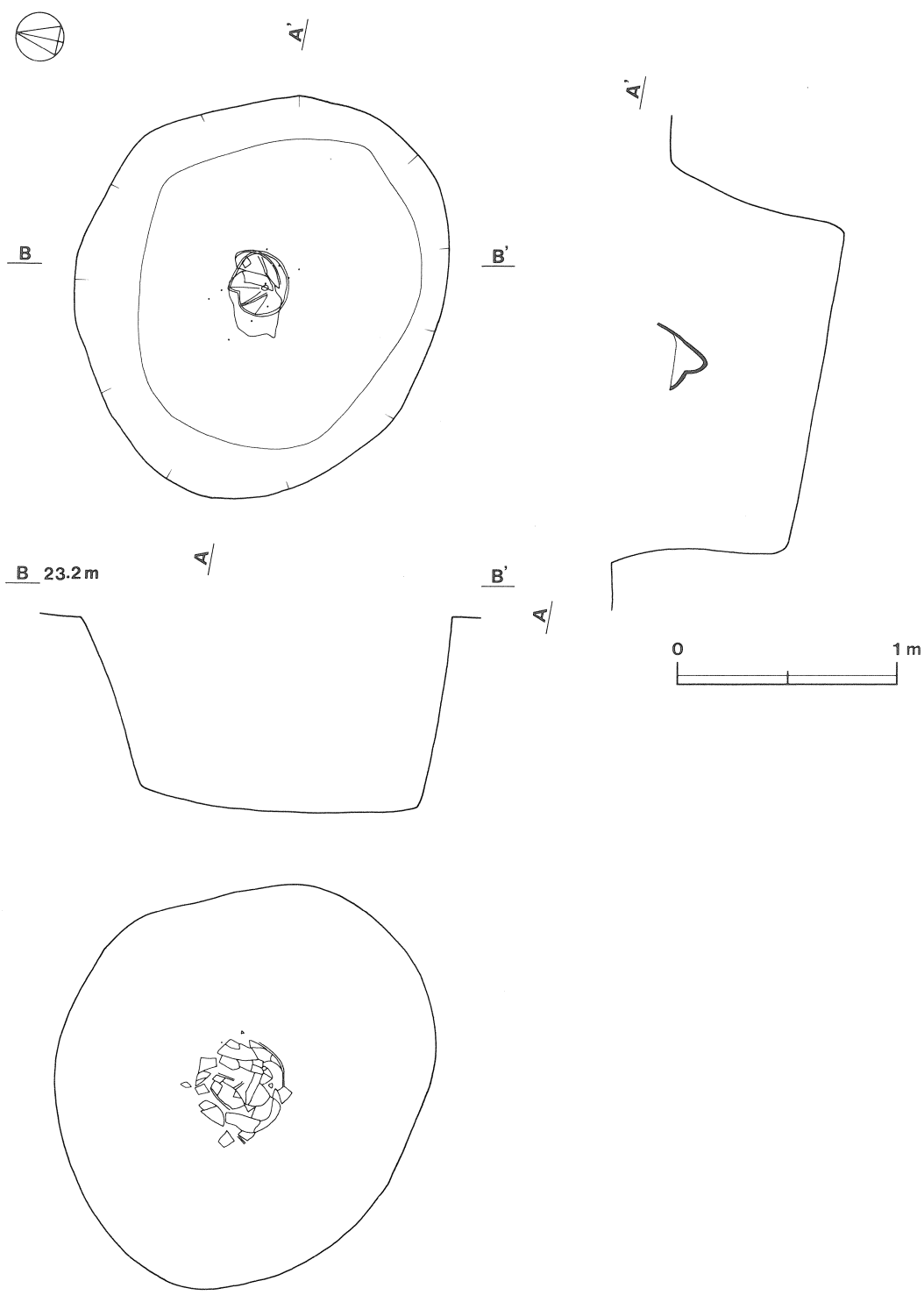
### 第5号埋甕遺構（第631図）

本遺構は、第316号土壌のほぼ中央部の覆土上位において検出されたもので、大形の深鉢形土器が正位で埋設されていたものである。胴下半部から底部にかけてはほぼ完存していたが、胴上半部から口縁部にかけての破片は、本土器の上部に折り重なるような状態で出土した。埋設土器の掘り方は確認できなかった。復元した結果は、口縁部の一部を欠くがほぼ完形に近いものとなり、接合した破片の一部には、第316号土壌の確認面から出土したものも含まれている。残存率は約80%と思われる。本来は、土壌内に完形で埋置されたものと考えられる。

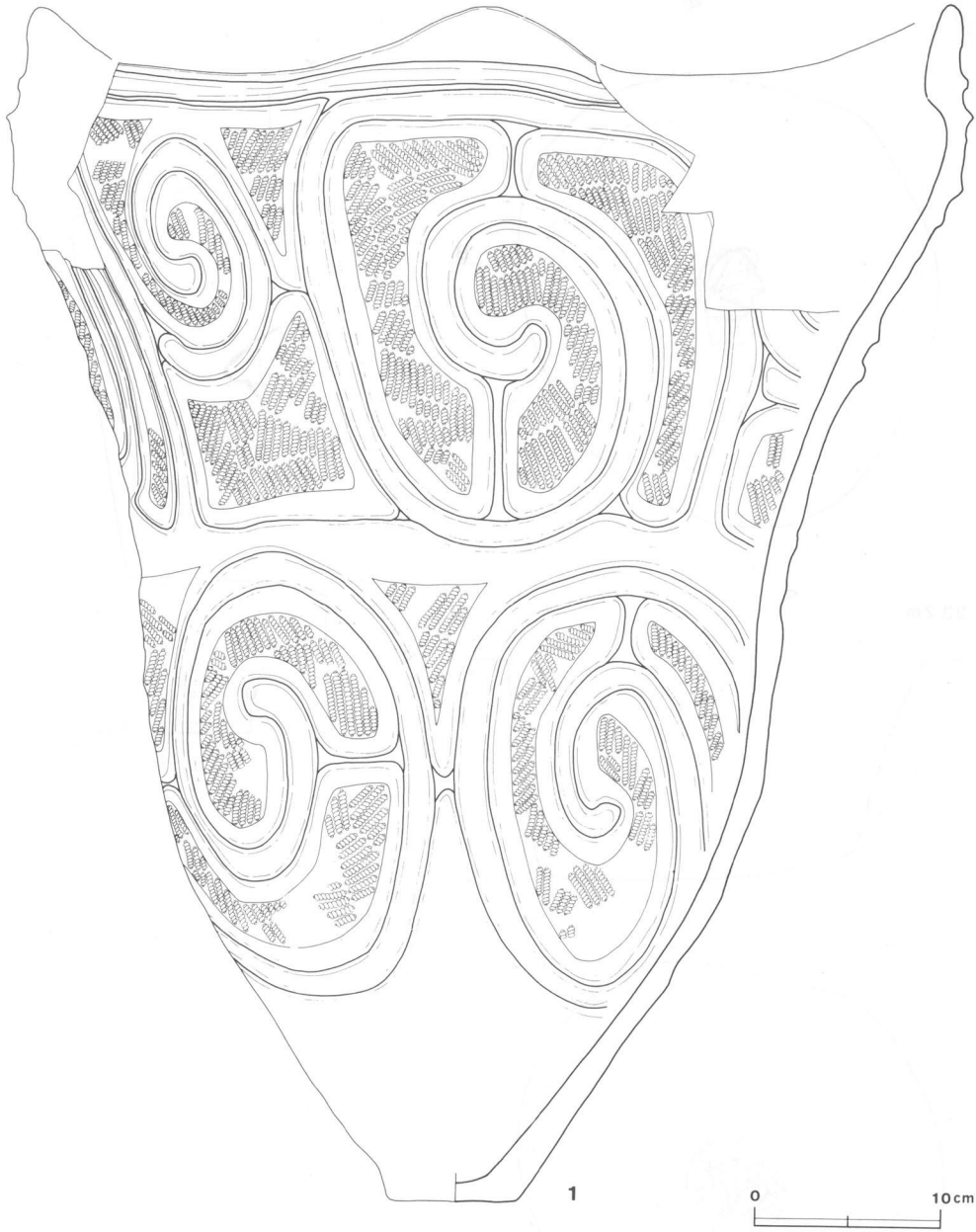
### 第5号埋甕遺構出土土器（第632図1）

1は、4単位の波頂部を有する大形の深鉢形土器で、口縁部が少し内湾し、胴部で緩くくびれ、底部が小さいやや不安定な器形を呈している。口縁部や底部はやや器壁が厚く、20mmほどを測るが、他の部分は10～13mm程度で、大形土器のわりには器壁は薄手である。口縁直下に1条の凹線が巡り、波頂部は無文である。文様は器面全体に展開されているが、くびれ部の幅の狭い無文帯により、胴上半部の文様帯と胴下半部の文様帯に分かれている。文様はナゾリを加えた隆線により曲線的モチーフが描かれている。胴上半部には、大小の渦巻文が1対となって4単位で構成されているが、小渦巻のうちの1か所は、渦巻が省略され、縦長の区画内に縄文が充填されているだけである。意識的な破綻の表現と考えるべきであろう。胴下半部の文様は、大柄な渦巻文が4単位で構成され、4単位のうち1単位は反時計回りで、他の3単位は時計回りに渦が巻いている。上半部の渦も時計回りが基本となっているが、欠損部に反時計回りの渦が施されていた可能性もある。モチーフを描く隆線は2本単位で、モチーフの内外には単節縄文RLが充填されている。胴下半部以下底部までは、縦ナデが加えられ、無文となっている。口縁部内面には稜を有している。外面の上半部の一部と下半部は全体に磨滅が進んでいる。内面は横ナデが施されているが、くびれ部から下位は剥落が著しく、方向は不明である。胎土には微砂粒を含み緻密である。焼成は良好で、色調は全体としては褐色を呈しているが、部分的にやや暗い部分、明るい部分も認められる。胴下半部は明褐色に近い。推定口径は48.5cm、底径7.1cm、現存高は64.0cmである。





第631图 第5号埋甕遺構実測図



第632图 第5号埋甕遺構出土土器実測図

## 第6節 地下式墳と出土土器

### 第1号地下式墳（第429号土壌を変更，第607図）

本墳は，F3c<sub>1</sub>区を中心に確認され，第26号住居跡の南東側5.5mに位置している。

竪坑と主室からなり，全長は3.76mで，主軸方向はN-4°-Eを指している。天井部が崩落しているので，確認面は竪坑と主室が重なり，長径3.76m・短径2.9mの大きな不整楕円形をしている。竪坑の壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，底面は，1.32m×1.12mの長方形で，中央が皿状に凹んでおり，ハードロームでよく踏み固められている。また，底面は入口から主室へなだらかな坂状を呈している。主室の壁は垂直に立ち上がり，確認面の地表から底面まで深さは1.9mである。底面から1.2mの高さでやや内湾してくびれているが，これは天井部が崩落した痕跡を残しているものである。底面は2.52m×2.0mの長方形で，東側がややゆがんでいる。底面は平坦で，青白い粘土層（砂質粘土）まで掘られている。

土層は11層からなり，主室底面と平行に堆積している。どの層も締まりはなくざくざくとした感じである。

遺物は覆土および床面から灯明皿が3点，底面から陶器片が出土している。さらに，古銭131点が底面一帯から出土している。また，縄文土器片が出土しているが，縄文土器片は覆土の上層からなので，時期決定の資料とはならない。

### 第1号地下式墳出土土器（第633図1～6）

1は，本墳の南西側の壁近くの覆土下位から伏せた状態で出土したもので，完形の坏形を呈する灯明皿である。ロクロ整形で，底部は右回りの回転糸切りである。口縁部にタール状の付着物が2か所に認められ，灯芯として使用した油脂が燃えてできたものと考えられる。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は灰褐色を呈している。口径9.2cm，底径3.2cm，器高2.8cmである。

2は，本墳の底面から正位で出土した完形の灯明皿で，出土状態図のNo.4に相当する。ロクロ整形で，底部は右回りの回転糸切りで，底面は若干磨滅している。口縁部にタール状の付着物が3か所に認められ，うち1か所には特に多量に付着している。胎土には多くの小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。口径8.1cm，底径4.1cm，器高は2.3cmである。

3は，本墳の底面から正位で出土した完形の灯明皿で，出土状態図のNo.6に相当する。ロクロ整形で，底部は右回りの回転糸切りである。口縁部はゆがみ，楕円形を呈している。口縁部にタール状の付着物が2か所に多量に付着している。胎土には微砂を含み，焼成は良好で，色調は黒色を

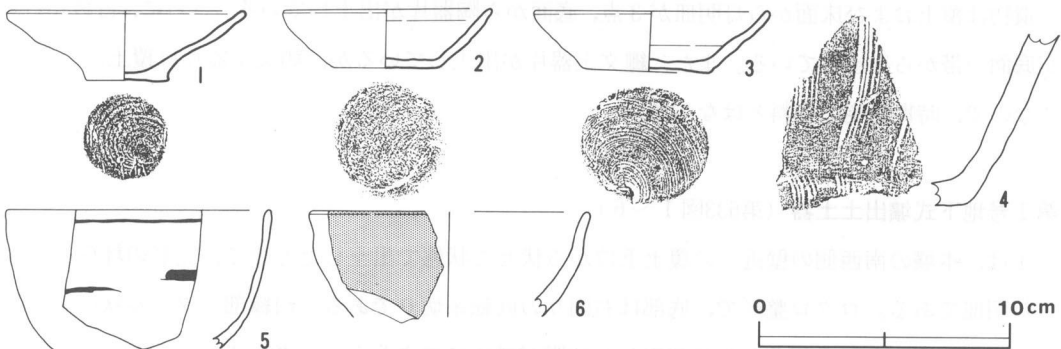
呈している。口縁部の長径は9.2cm、短径は8.9cmで、底径は5.1cm、器高は2.4cmである。

4は、本墳の東西セクションベルトの西側の覆土中から出土したすり鉢の底部片である。内面に5本歯の施文具による調整が施されている。胎土には小石粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、色調は褐色を呈しているが、外面の底面近くには黒色の部分もみられる。

5は、本墳の覆土中から出土した碗形を呈する磁器片である。コパルト釉による文様が付され、染付風のものである。伊万里窯のものかと思われる。推定口径は10.4cmで、現存高は5.5cmである。

6は、本墳の東西セクションベルトの西側の覆土下位から出土した天目茶碗の口縁部から胴部にかけての破片である。黒褐色の釉がかけられ、底部近くは土見のための無施釉部分が残っている。瀬戸窯のもので、5と同様に近世に降るものと推定される。推定口径は11.0cmで、現存高は5.5cmである。

本墳からは98点の土器が出土しており、そのうちの主要なものを1～6に図示した。この他に常滑の甕の破片なども出土しているが、残りの大半は本墳の埋土に混入した縄文土器片であった。また、本墳からは、131点という大量の古銭が出土しており、注目される。その多くは寛永通寶である。石器としては、砥石1点、石鏃1点が出土している。底面から出土した2・3および古銭（寛永通寶）から判断すれば、本墳の時期は江戸時代前期と考えられる。



第633図 第1号地下式墳出土土器実測図

第2号地下式墳（第430号土壙を変更，第603図）

本墳はF3c<sub>3</sub>区を中心に確認され、第1号地下式墳の東側4mに位置している。

竪坑と主室からなり、全長は3.76で、主軸方向はN-24°-Eを指している。竪坑の確認面は、長径2.64m・短径2.2mの楕円形である。主室の中ほどまで開口しているため、竪坑は作られた当時よりも長径規模で70cmほど大きくなっていると考えられる。竪坑の南壁は確認面から底部まで段状に掘りこまれ、他の壁は外彎して立ち上がっている。底面はハードロームでよく踏み固められている。一辺が1.12mの方形で、主室に向って緩やかな坂状をなし、さらに50cm先から急傾斜して主室へ続いている。主室の壁は垂直に立ち上がり、確認面の地表から底面までの深さは2.6m

である。底面から1.4mのところ、天井部の崩落の痕跡が残っている。底面は2.1m×1.8mの長方形で、北西側がややゆがんでいる。中央から北側にかけて長径1.8m・短径1.1m・深さ8cmの楕円形の落ちこみがみられるが、他は平坦である。第1号地下式墳と同様に砂質粘土層まで掘られている。

土層は11層からなり、竪坑から主室にかけて斜めに堆積している。大部分の層は締まりがなく、ざくざくしている。なお、6層(6e)は天井部の崩落土層と考えられる。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、縄文土器片は覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第2号地下式墳出土土器

本墳からは47点の土器片が出土しており、量的に多いのは縄文土器片であるが、いずれも磨滅したものや小片が多く、本墳に伴うものとは考えられない。縄文土器以外には、<sup>しのぎめ</sup>鑄目がわずかに認められる暗灰青色を呈する青磁片と、常滑の甕の胴部片各1点および内耳土器の口縁部片2点、胴部片1点が出土している。石器としては砥石状石器1点、石鏃1点が出土している。縄文土器片や石鏃以外のわずかな出土遺物から判断すれば、本墳の時期は江戸時代前期と考えられる。

### 第3号地下式墳(第432号土墳を変更, 第604図)

本墳は、F3d<sub>6</sub>区を中心に確認され、第2号地下式墳の南東側4.5mに位置している。

竪坑と主室からなり、全長は3.84mで、主軸方向はN-22°-Eを指している。竪坑の確認面は、長径1.74m・短径1.3mの不定形である。壁は南から北にかけて階段状に掘りこまれ、他の壁は、外傾して立ち上がっている。底面はハードルームでよく踏み固められており、1.32m×1.12mの不整長方形で、主室に向かって緩やかな坂状となっている。なお、竪坑の西側には、径70cm・深さ32cmのピットがある。主室の壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面の地表から底面までの深さは1.84mである。底面から1.2mのところ、内傾しているが、これは天井部の崩落の痕跡である。底面は2.3m×2.1mの丸味をおびた不整長方形で、平坦であり、第1・2号地下式墳同様砂質粘土層まで掘られている。

土層は11層からなり、竪坑から主室の中央まで斜めに堆積し、中央から奥まで主室底面と平行な堆積をしている。4～5層を除いては締まりがなく、全体に軟らかい堆積である。なお、10、11層(4f<sup>e</sup>, 6b)は、天井部の崩落土層と考えられる。

遺物は、炭化した木材が1点覆土から出土している。また、縄文土器片が出土しているが、縄文土器片は覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第3号地下式墳出土土器（第622図13）

13は、草創期の撚糸文系土器の口縁部片で、撚糸文が縦位に施文されている。

本墳からは73点の土器片が出土しており、量的には縄文土器片が多く、加曾利E III式期のものがほとんどで他に後期の土器片も含まれている。縄文土器以外には、灰釉を施した陶器片が1点出土したにすぎない。したがって、出土遺物から本墳の時期を推定することはできない。類似する他の地下式墳との比較から、本墳の時期も江戸時代前期と考えられる。

### 第4号地下式墳（第442号土壌を変更、第605図）

本墳は、F3d<sub>5</sub>区を中心に確認され、第2号地下式墳の南東側4.5mに位置している。

竪坑と主室からなり、全長は3.6mで、主軸方向はN-34°-Eを指している。本墳は他の地下式墳と違い、天井部が残っていた。竪坑の確認面は、長径2.6m・短径1.9mの楕円形をし、両脇にピットが掘られている。西側のピットは長径1.18m・短径0.9m・深さ37cmで、東側のピットは長径1.02m・短径0.6m・深さ30cmである。壁は垂直に立ち上がり、その後70cmの高さから外傾している。竪坑の底面は0.9×0.6mの平坦な長方形で、さらに68cm下がって、径1.0mの円形の底面を有している。この円形の底面は、急傾斜となって主室へと続いている。主室の壁は、垂直に立ち上がり、底面から1.15mで天井部に達している。また確認面の地表から天井部までの厚さは、1.21mである。底面は1.92m×1.7mの長方形をしており、平坦で砂質粘土層まで掘られている。

土層は12層からなり、竪坑では各層がレンズ状に自然堆積をしている。主室では、竪坑方向から奥へと斜めに自然堆積している。2層の堆積で主室への入口が埋まり、天井部との間にすきまが生じたまま堆積が終わっていたものと考えられる。また、1層（6a）は、天井部の一部の崩落土で、この層の上に26cmの空間がみられる。どの層も締まっている。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

### 第4号地下式墳出土土器

本墳からは41点の土器片が出土しており、量的には縄文土器片が主体を占め、加曾利E III式期のものが最も多く、前期の土器片も含まれている。縄文土器以外には、内黒の土師器の坏の破片と考えられるものが出土しているにすぎない。石器としては砥石1点、磨石1点が出土している。したがって、出土遺物から本墳の時期を推定することはできないが、類似する他の地下式墳との比較から、本墳の時期は江戸時代前期と考えられる。

### 第5号地下式墳（第458号土壌を変更、第606図）

本墳は、F3j<sub>8</sub>区を中心に確認され、第7号溝の南端と重複して位置している。新旧関係は土層か

ら本墳が古いと考えられる。

堅坑と主室からなり、全長は3.1mである。他の4基と違い、主軸方向はN-55°-Eを指している。天井部が崩落しているため、確認面は堅坑と主室が重なり、長径3.1m・短径2.4mの大きな楕円形をしている。堅坑の壁は外傾して立ち上がり、底面は、一辺約0.8mの不整形で、平坦であり、ハードロームでよく踏み固められている。堅坑と主室は、55cmの段差があり明確に分かれている。主室の壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面の地表から底面までの深さは1.8mである。底面から1.18mの高さで内湾しているが、これは天井部の崩落の痕跡である。底面は2.08m×1.84mの不整形で、西側がやや内側にゆがんでいる。底面は平坦で他の地下式墳と同様砂質粘土層まで掘られている。

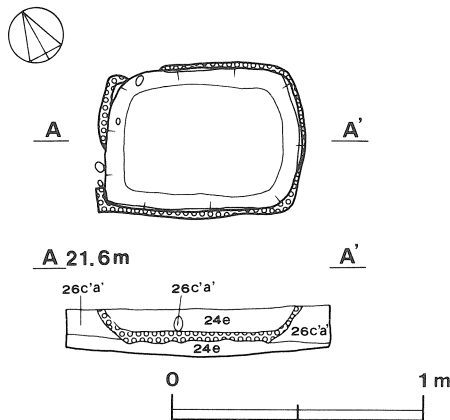
土層は10層からなり、堅坑から主室にかけて斜めに堆積している。6層(6a)は天井部の崩落土層と考えられる。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

#### 第5号地下式墳出土土器

本墳からは13点の土器片が出土しており、すべて縄文土器片で、後期のものが多くを占めている。しかし、これらは磨滅した小片であり、本墳に伴うものとは考えられない。したがって、出土遺物から本墳の時期を推定することはできないが、他の地下式墳との比較から、本墳の時期も江戸時代前期と考えられる。

## 第7節 粘土貼り遺構



第634図 第1号粘土貼り遺構実測図

### 第1号粘土貼り遺構（第634図）

本遺構は、遺跡の南部，F3j<sub>2</sub>区に確認されている。

平面形は長軸1.65m・短軸1.23mの長方形で、主軸方向はN-59°-Wを指している。壁は外側して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは21cmで、壁から底面にかけて全体に粘土で覆われている。粘土の厚さは6～8cmで、ほぼ様な厚さである。な

お、粘土の下は、壁、底面ともソフトロームである。

覆土は2層からなり、黄褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、こぶし大の石（碎石）が覆土の2層から出土している。

### 第2号粘土貼り遺構（第469号土壌を変更，第594図）

本遺構は、遺跡の南部，F3i<sub>3</sub>区を中心に確認され、第1号粘土貼り遺構の北東側2.5mに位置している。

平面形は長径2.35m・短径1.4mの楕円形で、長径方向はN-36°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦であるが、やや2段に掘りこまれており、段差は14cmである。確認面からの深さは45cmで、壁の中ほどから底面にかけて粘土で覆われている。粘土の厚さは3～10cmであるが、4cmの厚さの部分が大部分を占める。第1号粘土貼り遺構ほど厚くは貼っていない。粘土の下は、壁、底面ともソフトロームである。

覆土は4層からなり、主に暗褐色土、褐色土が堆積している。

遺物は、陶器片1点が出土している。



## 第8節 土器以外の人工遺物

### 1. 把手（第635～636図1～6）

この項においては、土器のうち特徴ある把手を有する資料について個別に説明する。

1は、小さな筒状把手をもつ口縁部片である。上面は少し凹んでいる。微隆線による曲線的区画と縄文が施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。

（第30号住居跡出土）

2は、筒状把手の小破片で、上面から内面にかけて太くえぐり込まれている。把手上には、縄文と円形刺突文が付されている。器面は削落が著しい。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈している。（第34号住居跡出土）

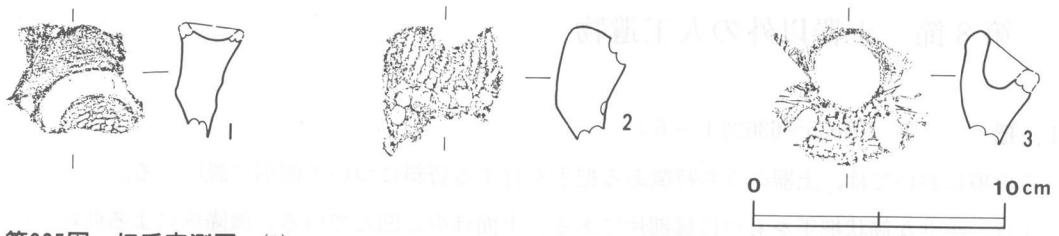
3は、筒状把手の小破片で、上面の凹みはかなり深い。太い沈線と縄文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。（第320号土壌出土）

4・5は、共に口縁部の突起状の把手であり、外面から垂下する太い沈線により、渦巻状のモチーフを構成している。区画内には縄文を施している。4は胴部文様が観察され、沈線による直線的磨消縄文を有するものと思われる。共に胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は4が暗赤褐色、5が極暗赤褐色を呈している。（4は第21号住居跡、5は第24号住居跡出土）

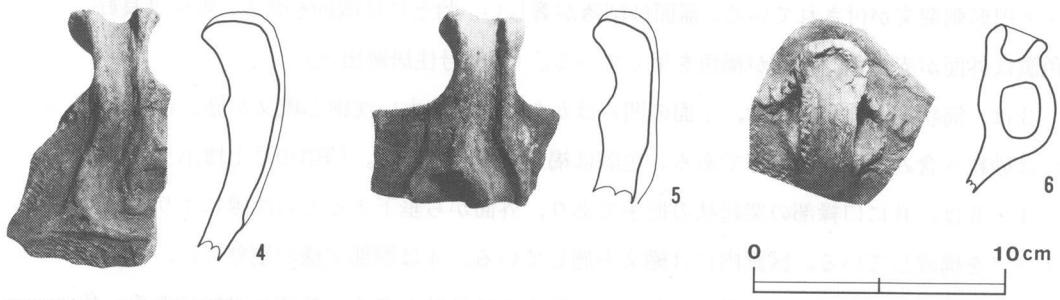
6は、波状を呈する口縁部片に、橋状把手が縦位に付されている。口縁部に無文帯を残し、キザミ目を付した隆線で区画し、胴部に逆U字状の磨消帯を施している。キザミ目は把手の上端部にも加えられている。把手の上面には凹線が施され、把手の左側にだけ縄文が付されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。（第30号住居跡出土）

表11 把手一覧表

挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号	挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号	挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号
第635図 1		SI30	158	第635図 3		SK320	164	第636図 5		SI24	161
2		SI34	163	第636図 4		SI21	160	6		SI30	157



第635图 把手实测图 (1)



第636图 把手实测图 (2)

## 2. 土製品

当遺跡7区から出土した土製品の概要は前記したとおりである。

土器片錘・土製円板・有孔円板については、6区と同様に一覧表で説明をおこない、その他の耳栓・茶匙状土製品・動物形土製品については、個別に解説した。

### (1) 土器片錘 (第637～640図1～172)

土器片錘は303点で、住居跡・土壇・溝の各遺構内およびグリッドから出土している。住居跡出土が175点、土壇出土が51点、溝出土が6点である。他にグリッド出土および表採のものが71点である。これらは、各遺構の覆土中から散在的に出土したもので、一括して出土したものはない。土器片錘の遺存状態をみると、完形のもので120点、欠損しているものが183点出土している。完形の土器片錘を重量別にみると、最も軽いものが5g、最も重いものが129gであり、10～45gの間の重量をもつものが多いことが分る。中でも15～35gの間のもものが最も多数を占めている。

### (2) 土製円板 (第641図1～15)

土製円板は24点であり、住居跡・土壇・溝の各遺構内およびグリッドから出土している。住居跡出土が10点、土壇出土が3点、溝出土が3点、グリッド出土のものが8点である。周縁研磨のものと打ち欠きだけによる整形のもの数を比較すると、周縁研磨の例が13点、打ち欠きだけの例が7点、他の4点は磨滅などにより整形方法が明らかではない。6は方形に整形されている。

### (3) 有孔円板 (第642図1～7)

有孔円板は18点であり、住居跡・土壇およびグリッドから出土している。住居跡出土が12点、土壇出土が3点、グリッド出土が3点である。穿孔状態からみると、1～3・7が穿孔途中のもので、4～6は穿孔されているものである。図示していない他の11点の残欠も穿孔されている。穿孔途中のものは、いずれも裏面に凹みがある。また、穿孔されているものの断面形をみると、裏面からの穿孔が主となり、表面からの穿孔が従となっている様子がうかがえる。この点は6区の有孔円板についても同じ傾向が認められる。なお、4は孔の断面が明らかな段をもっており、注目される。

### (4) 耳栓 (第552図51)

第409号土壇の覆土中から出土した輪鼓状を呈する耳栓の半欠品である。上下両面が凹んでおり、外面は横ナデ、上下面はナデにより整形されている。遺存状態が悪く、磨滅や剝落が認められる。整形も丁寧とはいえず、上面は凹凸している。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定最大径は3.0cm、現存高は2.0cmである。現存重量は10.2gである。

### (5) 動物形土製品 (第552図52)

第409号土壇内のBピットの覆土中から出土したもので、Bピットからの出土遺物はこの1点だけ

で、土器片などの出土はなかった。手びねりで製作されており、凹凸している。湾曲する形状を呈し、両目と口と思われるものが刺突によって施されている。両目にあたる部分とその他の体部の一部にタール状の黒色の物質が付着している。頭上にあたる部分は滑らかに調整されている。この土製品が何を模したものであるのか、はっきりしないが、蛇とか亀とか、コオロギなどの昆虫類とする意見などが出ている。いずれにしても、特異なものと考えられる。胎土は微砂を含み、焼成はやや不良で、色調は褐色を呈している。最大長4.9cm、最大幅2.2cm、最大径2.4cmで、重量は25.7gである。

#### (6) 茶匙状土製品 (第443図103)

第15号住居跡の中央部の覆土中から逆位で出土したもので、先端部の左側の一部と基部に近い左右の側縁を欠損しているが、ほぼ完形の土製品である。長軸・短軸の両断面とも、やや湾曲しており、基部は厚く、先端部が薄くなっている。全体に指による押圧痕が認められるが、表面はナデによってかなり丁寧に調整され、平坦になっている。裏面には指による圧痕が明瞭に残っている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。最大長5.9cm、最大幅4.2cm、最大厚は0.9cmで、重量は17.7gである。本土製品は、類例のない特殊なもので、茶匙状と形容したが、箕にも似ている。

表12 土器片錘一覽表

(1)

挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号
第637図 1	PL83 1	3.0 5.4 1.0 21.7	SI 3	C	3	第637図 32	PL84 30	2.2 2.5 0.8 5.0	SI21	C	73
2	2	3.9 3.2 1.1 13.4	SI 6	C	5	33	31	4.9 (3.8) 0.8 (16.3)	〃	C	74
3	4	3.6 4.3 1.4 17.4	SI10	C	12	34	29	5.0 (3.1) 1.8 (28.7)	〃	C	72
4	5	3.9 7.1 2.6 54.8	〃	C	14	35	33	3.6 3.3 1.3 18.8	〃	C	135
5	3	4.7 5.5 1.4 32.3	〃	C	10	36	36	5.9 (4.7) 1.5 (40.5)	SI22	C	78
6	6	6.7 7.3 2.0 78.3	SI11	C	15	37	37	(3.2) 5.7 1.3 (26.2)	〃	C	79
7	7	5.4 6.0 1.5 28.2	〃	C	19	38	39	(3.6) 5.1 1.1 (22.8)	〃	C	85
8	8	6.3 (5.3) 1.7 (39.8)	SI14	C	33	39	35	(4.6) (6.3) 1.6 (39.5)	〃	□縁部片 C	77
9	12	5.1 5.5 1.2 38.5	SI15	C	42	40	38	4.6 6.1 1.5 45.8	〃	C	82
10	19	5.2 4.0 1.3 44.0	〃	C	132	41	40	4.3 4.2 1.1 13.8	SI23	C	87
11		5.8 4.8 1.5 43.8	〃	C	48	42	41	3.7 (3.2) 1.1 (14.5)	〃	C	88
12	15	4.8 6.1 1.6 48.9	〃	A	50	43	42	3.4 3.2 1.3 16.5	〃	C	89
13	18	5.2 5.8 1.2 42.4	〃	C	130	44	43	4.9 4.0 1.3 32.8	〃	C	90
14	20	5.6 5.6 1.3 31.9	〃	C	133	45	48	4.8 4.3 2.0 34.8	SI24	C	98
15	10	6.8 5.4 1.4 49.5	〃	C	39	46	49	(3.6) 5.9 0.9 (23.4)	〃	C	99
16	13	8.1 10.7 1.3 90.5	〃	C	44	47	46	3.7 3.6 1.6 20.8	〃	C	94
17	11	6.7 6.4 0.9 47.2	〃	C	41	第638図 48	47	6.3 7.1 1.4 58.8	〃 炉	C	96
18	16	6.8 6.9 1.2 51.5	〃	A	52	49	45	5.7 5.8 1.2 45.5	〃	C	93
19	17	5.4 7.3 1.8 59.3	〃	□縁部片 C	129	50	44	4.7 6.8 2.2 77.8	〃	□縁部片 C	92
20	9	4.9 6.7 1.4 46.5	〃	□縁部片 C	38	51		4.0 4.2 1.3 22.3	SI25	□縁部片 C	347
21	14	4.8 6.9 1.2 47.3	〃	C	49	52	53	2.8 2.5 1.2 11.3	SI27	C	113
22	25	5.1 3.7 1.2 25.0	SI19	C	63	53	52	6.4 7.5 1.0 59.1	〃	C	111
23	27	6.2 5.1 0.8 27.8	〃	C	66	54	50	4.9 6.8 2.2 76.0	〃	□縁部片 C	107
24	28	5.8 5.3 1.3 33.8	〃 炉	C	67	55	56	5.5 7.4 1.6 44.0	〃	2次加熱か C	117
25	23	5.6 9.0 2.3 93.0	〃	C	60	56	55	7.2 8.1 1.0 76.3	〃	C	116
26	21	(5.6) (7.2) 1.8 (67.5)	〃	□縁部片 C	58	57	51	3.7 3.8 1.6 17.3	〃	□縁部片 C	109
27	22	5.4 5.7 1.3 37.4	〃	□縁部片 C	59	58	58	4.8 3.9 1.6 27.3	〃	C	122
28	26	5.2 5.4 1.0 36.1	〃	C	64	59	54	5.8 4.3 1.5 26.8	〃	2次加熱か C	114
29	24	(3.6) 5.0 1.4 (30.3)	〃	C	62	60	57	5.6 6.6 1.1 36.2	〃	C	121
30	PL84 34	2.8 2.6 1.1 11.8	SI21	C	136	61	PL85 59	5.4 8.2 1.2 63.5	SI28	C	138
31	32	(3.5) 4.6 0.9 (15.7)	〃	A	75	62	67	6.5 5.9 1.5 47.8	SI30	C	155

(2)

挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号
第638図 63	PL85 64	5.9 6.0 1.3 50.9	SI30	C	146	第639図 94	PL86 85	4.1 4.8 1.1 26.0	SK93	C	191
64	60	6.1 5.5 1.2 48.5	〃	C	139	95	86	6.1 (5.7) 1.1 (36.9)	SK142	C	201
65	66	4.6 5.7 0.9 24.7	〃	C	154	96	87	(7.5) 7.4 1.1 (90.0)	SK143	C	194
66	61	4.7 5.1 1.2 25.5	〃	□縁部片 C	141	97	88	4.6 4.1 1.1 27.8	SK155	C	196
67	68	4.5 11.3 1.7 90.5	〃	C	189	98	89	6.1 5.8 1.5 53.5	〃	C	197
68	63	3.6 4.3 1.0 17.8	〃 炉	A	145	99	90	4.1 (4.0) 1.1 (16.5)	SK199	C	198
69	62	3.5 4.0 0.9 16.0	〃	C	142	100	91	(4.6) (4.6) 1.0 (18.3)	SK230	C	199
70		4.0 3.4 0.7 12.3	〃	C	143	101	92	5.2 4.7 1.2 23.0	SK237	C	200
71	65	7.1 5.8 2.3 37.3	〃	C	153	102	93	3.9 4.8 1.2 33.1	SK310	C	203
72	69	4.5 5.9 1.3 42.5	SI32	C	163	103	94	4.4 4.7 1.5 32.2	SK313	C	204
73	70	(3.4) 5.5 1.3 (26.0)	〃	C	164	104	95	3.4 4.1 1.0 17.2	SK316	A	206
74	72	(3.5) (4.9) 1.6 (27.7)	〃	C	167	105	97	5.1 4.7 1.0 34.9	SK400	C	214
75	73	(4.8) 5.5 1.4 (43.8)	〃	C	168	106	PL87 103	3.8 5.6 1.1 29.9	SK407	A	217
76	71	4.6 4.9 1.7 34.6	〃	C	166	107	104	4.6 4.5 1.6 29.2	〃	C	218
77		6.8 7.0 2.1 71.7	〃	底部片 C	160	108	102	(3.8) 4.1 1.3 (20.6)	〃	C	219
78	76	4.9 4.0 1.8 28.3	SI34	C	171	109	108	3.7 3.2 1.3 15.6	SK409	A	241
79	77	4.1 5.1 1.2 33.6	〃	C	172	110	110	5.7 9.2 2.0 112.5	〃	C	243
80	74	(4.6) 4.8 1.2 (29.1)	〃	C	169	111	107	6.2 4.7 1.1 33.8	〃	C	240
81	75	4.1 3.8 1.0 17.8	〃	C	170	112	115	4.5 5.1 1.2 25.8	〃	C	251
82	78	3.4 4.3 1.5 22.4	〃	C	173	113	113	4.7 4.1 1.3 25.3	〃	C	249
83	80	4.5 4.1 1.3 19.8	SI36	□縁部片 C	175	114	111	2.8 4.6 1.3 22.6	〃	A	246
84	79	7.5 9.6 1.7 98.4	〃	□縁部片 C	174	115	109	6.0 7.9 1.2 78.0	〃	C	242
85	PL86 96	5.0 4.9 1.1 32.9	〃	C	207	116	117	5.1 (3.2) 1.3 (19.3)	〃	C	220
86	PL85 81	4.2 5.8 0.8 28.1	SI37	C	179	117	106	4.2 4.0 1.6 34.4	〃	C	239
87	PL86 101	(3.0) 5.3 1.4 (26.5)	SI36・37	C	187	118	112	4.8 (3.2) 1.5 (21.2)	〃	C	247
88	98	5.9 9.0 1.1 83.8	〃	C	184	119	105	3.7 (5.3) 1.2 (33.2)	〃	□縁部片 C	238
89	100	7.6 6.9 1.5 72.3	〃	C	186	120	116	3.5 4.3 1.4 19.2	〃	C	221
90	PL85 82	6.1 8.3 2.3 85.9	〃	□縁部片 C	181	121	114	(3.1) (2.7) 1.0 (19.1)	〃	C	250
第639図 91	83	7.7 10.2 1.2 126.0	〃	C	183	122	118	8.0 7.4 1.2 63.0	SK415	C	222
92	PL86 99	(5.6) 10.0 0.9 (78.3)	〃	C	185	123	119	(4.3) 4.5 1.4 (26.6)	SK419	C	225
93	84	5.1 4.0 1.3 25.0	SK26	C	190	124	120	5.1 4.8 1.2 35.9	SK423	□縁部片 C	224

(3)

挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号
第639図 125	PL87 121	5.5 6.9 1.2 53.2	SK439	C	234	第640図 156	PL88 143	(5.0) 6.9 1.0 (45.5)	E3d <sub>5</sub>	C	286
126	122	3.7 3.9 1.0 16.0	SK448	C	223	157	137	6.3 6.4 1.1 56.5	E3d <sub>2</sub>	口縁部片 C	278
127	123	4.1 7.3 1.6 42.2	SK455	C	226	158	PL89 160	8.8 9.4 1.8 128.9	E4e <sub>2</sub>	C	313
128	124	8.3 8.6 1.2 74.2	SD3	C	230	159	159	5.2 4.1 1.2 31.2	E4a <sub>7</sub>	A	312
129	125	5.5 6.3 0.9 34.8	SD4	C	233	160	158	5.0 6.3 1.3 40.5	E4c <sub>6</sub>	C	310
130	127	5.1 6.4 0.9 29.3	D2h <sub>7</sub>	C	257	161	PL88 155	5.0 4.4 1.3 26.6	E4a <sub>7</sub>	C	305
131	PL88 126	4.9 4.1 0.9 22.6	D2a <sub>6</sub>	C	256	162	PL89 164	4.1 4.4 1.1 22.5	E4h <sub>1</sub>	C	331
132	128	5.3 (4.4) 1.2 (27.5)	D3g <sub>2</sub>	C	262	163	PL88 154	(4.9) (5.8) 1.3 (33.8)	E4d <sub>1</sub>	C	304
133	133	4.9 5.1 1.3 38.7	D4g <sub>0</sub>	C	273	164	PL89 156	6.6 5.2 1.0 35.5	E4d <sub>6</sub>	C	307
134	131	5.9 5.8 1.3 40.3	D4j <sub>8</sub>	C	270	165	163	3.9 4.4 0.8 18.3	E4d <sub>6</sub>	C	321
135	130	6.7 5.2 1.3 56.9	D4j <sub>9</sub>	C	269	166	162	4.8 4.6 1.3 30.5	E4c <sub>6</sub>	C	319
136	129	6.8 5.4 1.6 70.5	D4j <sub>8</sub>	口縁部片 C	268	167	161	4.8 4.5 1.0 22.3	E4b <sub>9</sub>	C	316
137	134	(3.7) (3.3) 1.0 (13.8)	D4e <sub>1</sub>	C	274	168	157	4.0 5.6 1.2 29.0	E4d <sub>6</sub>	C	308
第640図 138	132	(3.3) 5.1 1.3 (26.6)	D4j <sub>0</sub>	C	272	169	165	(2.8) 4.0 1.1 (12.9)	F4c <sub>7</sub>	口縁部片 C	332
139	136	3.6 4.5 1.0 23.2	D4j <sub>1</sub>	C	276	170	166	5.4 (3.6) 0.7 (17.5)	F5d <sub>1</sub>	C	334
140	135	3.8 (3.6) 1.2 (29.6)	E2d <sub>3</sub>	C	275	171	167	(5.3) 5.3 1.4 (41.4)	表探	C	335
141	153	5.1 3.4 1.2 15.5	E3c <sub>6</sub>	C	299	172	168	6.6 (6.1) 1.2 (51.7)	〃	C	336
142	138	(4.8) (4.6) 1.3 (30.4)	E3g <sub>1</sub>	C	279			(3.0) 6.2 1.3 (25.7)	SI1	口縁部片 C 半欠	1
143	148	3.7 3.7 1.3 17.1	E3a <sub>4</sub>	C	293			5.9 (3.6) 1.4 (19.5)	SI2	半欠 C	2
144	140	6.1 (5.6) 1.9 (42.8)	E3a <sub>4</sub>	C	282			5.4 (2.7) 1.1 (13.3)	SI6	残欠 C	6
145	146	4.5 4.2 1.4 28.6	E3c <sub>7</sub>	C	291			5.7 (5.4) 1.3 (35.3)	〃	半欠 C	7
146	139	4.1 4.5 1.1 23.3	〃	C	280			(3.9) 5.7 2.2 (43.3)	SI10	半欠 C	9
147	144	(5.2) (4.8) 1.1 (27.0)	E3g <sub>0</sub>	C	287			(3.6) 5.4 1.9 (42.3)	〃	半欠 C	11
148	152	(2.9) 5.0 1.2 (12.7)	E3b <sub>3</sub>	C	298			6.9 5.4 1.4 38.5	〃	半欠 C	13
149	142	(3.0) 2.3 1.0 (7.9)	E3c <sub>6</sub>	C	284			(3.4) (3.2) 1.3 (12.6)	SI11	口縁部片 C 残欠	16
150	149	6.9 (4.2) 1.2 (34.8)	E3f <sub>3</sub>	C	294			5.6 (5.4) 1.3 (29.3)	〃	半欠 C	17
151	145	6.4 5.1 1.2 55.0	E3g <sub>8</sub>	C	290			4.6 (3.5) 1.2 (14.8)	〃	半欠 C	18
152	151	7.1 7.1 1.4 63.0	E3c <sub>8</sub>	C	297			(3.9) 6.5 2.0 (37.8)	〃	半欠 C	20
153	147	(5.2) 5.2 1.0 (28.2)	E3g <sub>8</sub>	C	292			(3.5) (3.3) 1.0 (16.3)	〃	A 半欠	21
154	141	3.5 (3.4) 1.4 (14.0)	E3c <sub>7</sub>	C	283			(7.5) (8.0) 2.0 (81.3)	SI14	口縁部片 C 半欠	23
155	150	5.7 8.0 1.5 90.8	E3c <sub>6</sub>	C	296			(5.1) (5.3) 0.8 (32.6)	〃	半欠 C	24

挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号
		(2.9)(4.4) 0.8 (10.8)	SI14	半欠 C	25			(4.4) 4.4 1.0 (16.8)	SI22	半欠 C	84
		(3.6)(3.4) 1.1 (17.8)	〃	残欠 C	26			(3.1) 4.2 1.1 (16.3)	〃	残欠 C	86
		(2.8)(3.7) 1.3 (16.8)	〃	残欠 C	27			(5.5)(3.9) 0.8 (27.5)	〃	半欠 C	345
		3.9 (2.4) 0.9 (11.8)	〃	残欠 C	28			(5.0)(5.0) 1.0 (15.5)	SI23	残欠 C	91
		5.5 6.7 1.8 (50.5)	〃	口縁部片 C一部欠	29			(3.9)(4.4) 1.1 (23.7)	SI24	残欠 C	95
		7.2 (4.5) 1.4 (43.1)	〃	残欠 C	30			(4.3) 5.7 1.3 (24.0)	〃	残欠 C	97
		(5.7)(6.4) 1.2 (55.8)	〃	半欠 C	31			(3.3)(4.3) 1.1 (14.2)	SI25	残欠 C	100
		(6.5)(5.8) 1.2 (53.5)	〃	半欠 C	32			6.2 4.6 1.5 35.5	〃	半欠 C	101
		(3.2)(3.3) 1.3 (14.5)	SI15	口縁部片 C 半欠	34			(4.7)(3.6) 1.5 (22.5)	〃	残欠 C	102
		(4.3)(3.6) 1.3 (19.8)	〃	口縁部片 C 残欠	35			4.8 6.5 1.6 (47.5)	SI27	口縁部片 C 一部欠	346
		(2.9) 4.9 1.3 (13.0)	〃	口縁部片 C 半欠	36			(5.2)(8.4) 1.7 (62.0)	SI25~27	口縁部片 C 半欠	105
		2.5 2.3 1.0 6.5	〃	完形 C	37			6.7 (5.2) 1.0 (41.0)	〃	半欠 C	106
		(4.4)(4.8) 1.2 (28.5)	〃	残欠 C	40			(4.6)(4.6) 1.2 (28.8)	〃	半欠 C	137
		(3.7) 5.1 1.3 (19.5)	〃	半欠 C	43			(2.9)(3.6) 0.9 (8.0)	SI30	残欠 C	140
		5.0 (5.2) 1.2 (33.9)	〃	半欠 C	45			(3.6)(4.8) 1.1 (18.4)	〃	残欠 C	144
		(4.4)(3.8) 0.9 (18.5)	〃	残欠 C	46			(4.7) 4.8 1.1 (28.7)	〃	半欠 C	147
		(4.5)(5.8) 1.1 (31.8)	〃	残欠 C	47			(3.5)(4.2) 1.5 (22.5)	〃	残欠 C	148
		(4.6)(5.6) 1.0 (28.7)	〃	残欠 C	51			8.0 (3.8) 1.2 (47.2)	〃	半欠 C	149
		(4.4)(5.9) 1.1 (52.3)	〃	残欠 C	53			(4.6)(4.8) 0.9 (42.7)	〃	残欠 C	150
		7.2 (5.4) 0.7 (36.7)	〃	半欠 C	54			(3.0)(5.0) 1.5 (21.7)	〃	残欠 C	151
		(5.0)(5.5) 1.4 (37.0)	〃	残欠 C	55			(3.5) 4.9 1.3 (23.3)	〃	半欠 C	152
		(2.8)(5.6) 1.1 (14.4)	〃	残欠 C	56			4.6 (5.6) 1.2 (38.5)	〃	半欠 C	342
		3.9 (4.1) 1.2 (19.0)	〃	半欠 C	131			(4.6) 4.5 1.3 (28.0)	SI31 炉	半欠 C	159
		(2.8)(3.2) 0.9 (8.9)	〃	残欠 C	134			(4.1) 7.4 1.4 (54.3)	〃	半欠 C	108
		(4.4)(4.8) 1.3 (29.8)	SI19	口縁部片 C 残欠	61			(6.4) 6.6 1.2 (48.8)	〃	半欠 C	110
		(4.6)(4.5) 1.0 (20.9)	〃	残欠 C	65			(4.2)(5.0) 1.0 (21.0)	〃	残欠	112
		(3.1)(2.2) 1.3 (11.7)	SI21	口縁部片 C 残欠	71			(4.1)(4.4) 1.0 (19.8)	〃	残欠 C	115
		(4.3)(4.4) 1.6 (24.4)	〃	残欠 C	76			(4.7)(4.5) 1.3 (29.8)	〃	残欠 C	118
		(1.9)(3.8) 1.1 (8.2)	SI22	残欠 C	80			8.5 (5.2) 1.8 (59.6)	〃	残欠 C	119
		(4.1)(3.2) 1.1 (16.8)	〃	残欠 C	81			(4.8) 7.0 1.1 (47.2)	〃	半欠 C	120
		(3.5)(3.6) 1.1 (15.7)	〃	残欠 C	83			4.3 3.9 1.1 (18.7)	〃	一部欠 C	123



挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 横 厚 重	出土位置	備 考	台帳 番号
		(2.0) 4.5 1.2 (10.9)	SI32	残欠 C	161			(4.4) (5.3) 1.3 (28.5)	D2j <sub>9</sub>	半欠 C	259
		(4.6) (3.4) 1.4 (17.0)	〃	残欠 C	162			(5.3) (4.5) 1.3 (33.9)	D2a <sub>6</sub>	半欠 C	260
		(5.6) (5.2) 1.3 (40.1)	〃	残欠 C	165			5.4 (5.1) 1.4 (39.9)	D3c <sub>6</sub>	半欠 C	261
		(2.4) (4.7) 1.2 (14.9)	SI37	半欠 C	176			5.6 (5.5) 1.3 (33.7)	D3c <sub>7</sub>	半欠 C	263
		(6.4) (7.6) 1.5 (63.9)	〃	半欠 C	177			(3.4) (3.8) 0.7 (11.1)	D3i <sub>8</sub>	半欠 C	264
		(3.4) 4.7 1.4 (25.5)	〃	半欠 C	178			(5.2) (5.5) 1.2 (34.8)	D3j <sub>8</sub>	半欠 C	265
		(4.5) 7.6 1.4 (56.3)	SI36・37	半欠 C	182			(2.9) 4.6 1.1 (13.6)	D3c <sub>6</sub>	半欠 C	266
		(3.6) (3.3) 1.4 (19.5)	SK97	半欠 C	192			4.4 (2.9) 1.0 (14.3)	D4j <sub>7</sub>	半欠 C	271
		(5.1) (3.6) 1.0 (24.8)	SK141	半欠 C	193			3.3 (2.9) 0.9 (9.3)	D4g <sub>0</sub>	半欠 C	277
		(3.5) 5.2 1.2 (18.7)	SK143	半欠 C	349			7.4 (9.4) 1.1 (102.2)	E3b <sub>3</sub>	半欠 C	281
		(4.2) (4.1) 1.0 (18.0)	SK155	半欠 C	195			(3.7) 3.4 0.9 (12.9)	E3d <sub>8</sub>	半欠 C	285
		(5.8) 7.3 0.8 (46.8)	SK313	半欠 C	205			6.4 (3.1) 1.1 (27.9)	E3g <sub>0</sub>	半欠 C	288
		5.4 4.6 1.7 (49.0)	SK354	一部欠 C	344			(3.6) (3.6) 1.3 (16.4)	E3c <sub>7</sub>	半欠 C	289
		(6.2) 5.1 1.1 (40.8)	SK357	半欠 C	211			3.8 (2.3) 1.2 (11.6)	E3a <sub>3</sub>	残欠 C	295
		5.0 4.6 1.1 30.0	SK407	完形 C	215			(3.3) 5.2 0.9 (16.5)	E4f <sub>3</sub>	半欠 C	306
		6.1 (4.3) 1.1 (28.3)	〃	半欠 C	216			(4.4) (4.8) 0.8 (15.3)	E4a <sub>7</sub>	半欠 C	309
		7.1 4.8 0.7 (34.8)	〃	一部欠 C	341			3.6 (4.5) 1.5 (18.5)	E4e <sub>4</sub>	口縁部片 C 半欠	311
		(4.6) 4.1 1.1 (19.5)	SK409	半欠 C	236			6.5 (5.5) 1.1 (29.6)	〃	半欠 C	314
		(5.0) (5.1) 1.0 (23.8)	〃	半欠 C	237			3.7 3.1 1.0 11.5	E4d <sub>6</sub>	完形 C	315
		(3.3) (3.3) 1.4 (16.1)	〃	半欠 C	244			(3.6) (5.8) 1.0 (21.5)	E4c <sub>6</sub>	半欠 C	317
		(5.4) 4.0 1.4 (30.3)	〃	半欠 C	245			(5.1) (4.7) 1.3 (27.5)	E4b <sub>0</sub>	半欠 C	318
		7.4 5.0 1.7 (56.8)	〃	一部欠 C	248			4.0 (2.8) 1.0 (14.3)	E4a <sub>7</sub>	半欠 C	320
		2.4 (2.0) 1.4 (6.0)	〃	残欠 C	252			3.3 4.1 0.9 (16.8)	E4b <sub>5</sub>	一部欠 C	322
		(4.0) 4.5 1.0 (14.8)	SD3	半欠 C	228			(3.4) 5.3 0.9 (19.5)	E4i <sub>1</sub>	A 半欠	323
		(3.5) (4.3) 1.2 (19.9)	〃	半欠 C	229			6.1 (5.5) 1.2 (36.9)	E5h <sub>1</sub>	A 半欠	328
		(3.2) (3.4) 1.0 (10.9)	SD4	半欠 C	235			(7.6) (7.4) 0.8 (56.6)	F4h <sub>6</sub>	半欠 C	330
		4.8 4.4 0.7 21.8	〃	完形 C	343			(2.8) (3.9) 0.6 (6.7)	E4g <sub>4</sub>	半欠 C	333
		(3.5) 6.6 1.5 (30.5)	D2i <sub>5</sub>	半欠 C	258						

表13 土製円板一覽表

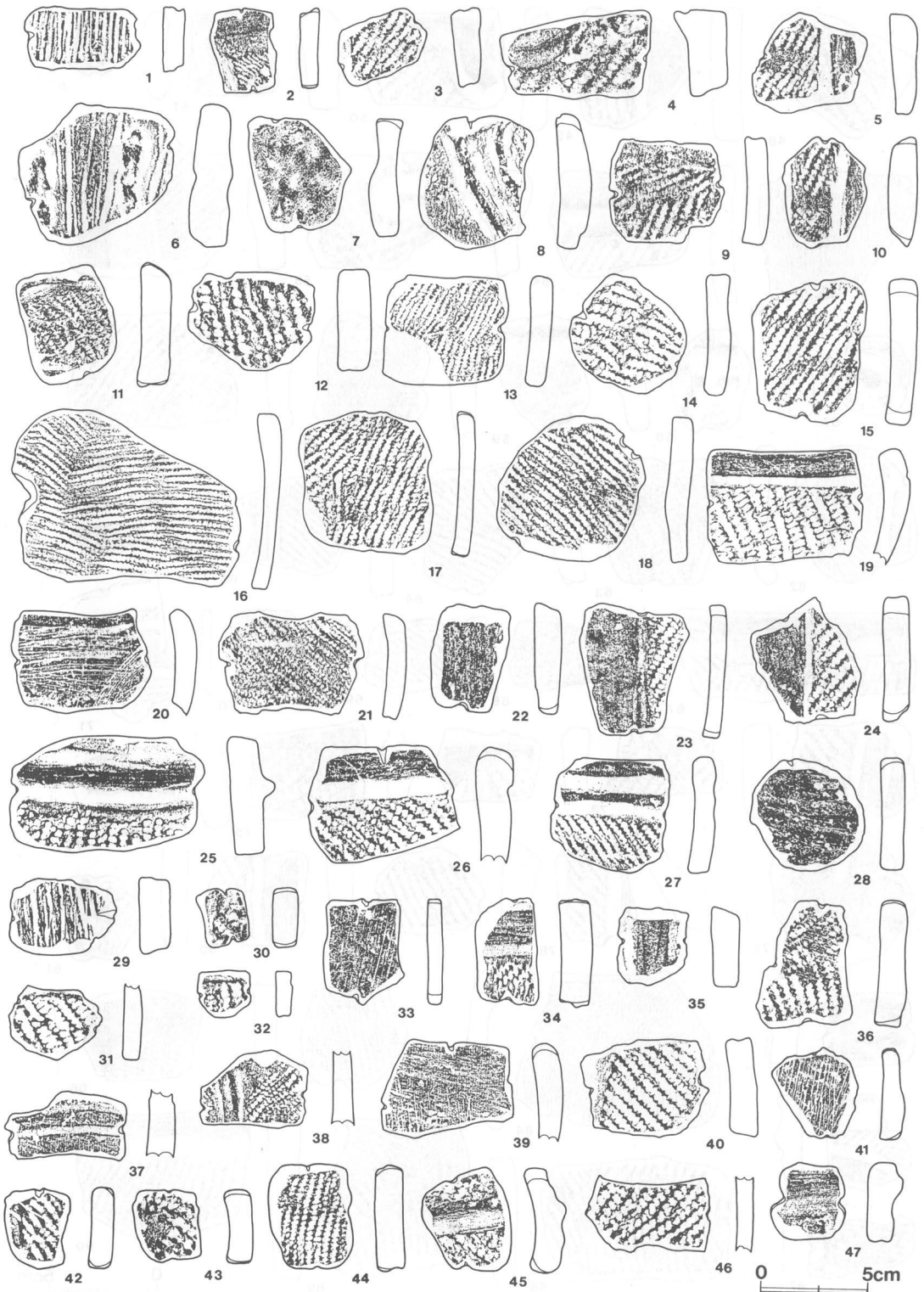
插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備考	台帳 番号
第641图	PL89 169	5.2	5.6	1.4	50.4	SI6	B	8	13	176	(3.6)	(4.8)	1.0	(19.5)	E3b <sub>4</sub>	A	301
		(4.9)	(5.4)	0.8	(26.4)	SI8	A	338	14		5.2	5.0	0.9	29.3	E4a <sub>7</sub>	B	325
		3.1	3.1	0.8	8.4	〃	A	339	15		4.5	4.7	1.1	29.2	E5e <sub>4</sub>	A	329
		6.2	5.4	1.4	45.8	SI19	B	69	(2.4)		(3.9)	1.2	(12.4)	SI19	A 残欠	68	
		4.7	4.8	1.9	48.3	SI27	B	124	(4.4)		(4.0)	0.9	(16.7)	SI27	A 残欠	125	
		(4.3)	(3.4)	1.2	(15.0)	SI30 炉	A	157	(3.5)		(3.5)	1.1	(12.0)	SI30	A 残欠	156	
		(4.0)	(3.7)	1.0	(17.0)	SI37	A	180	(2.6)		4.1	1.1	(11.3)	SK388	A 半欠 C	212	
		4.7	5.1	1.0	18.0	SK237	A	202	(2.2)		(3.1)	1.2	(8.0)	SD3	B 半欠	231	
		3.1	3.3	0.7	13.6	SK346	B	210	(5.6)		(2.6)	0.7	(13.2)	E3b <sub>2</sub>	A 残欠	300	
		(2.9)	(3.1)	0.7	(8.8)	SD2	C	227	(2.3)		(4.7)	1.2	(10.7)	E3a <sub>3</sub>	A 残欠 C	302	
		2.9	3.0	0.8	8.5	SD3	B	232	(4.0)		(4.9)	0.8	(18.8)	E4b <sub>1</sub>	A 残欠	324	
		4.1	4.3	0.9	21.5	D3i <sub>9</sub>	A	267	(3.6)		(4.8)	0.8	(15.5)	E4d <sub>3</sub>	A 残欠 C	326	

表14 有孔円板一覽表

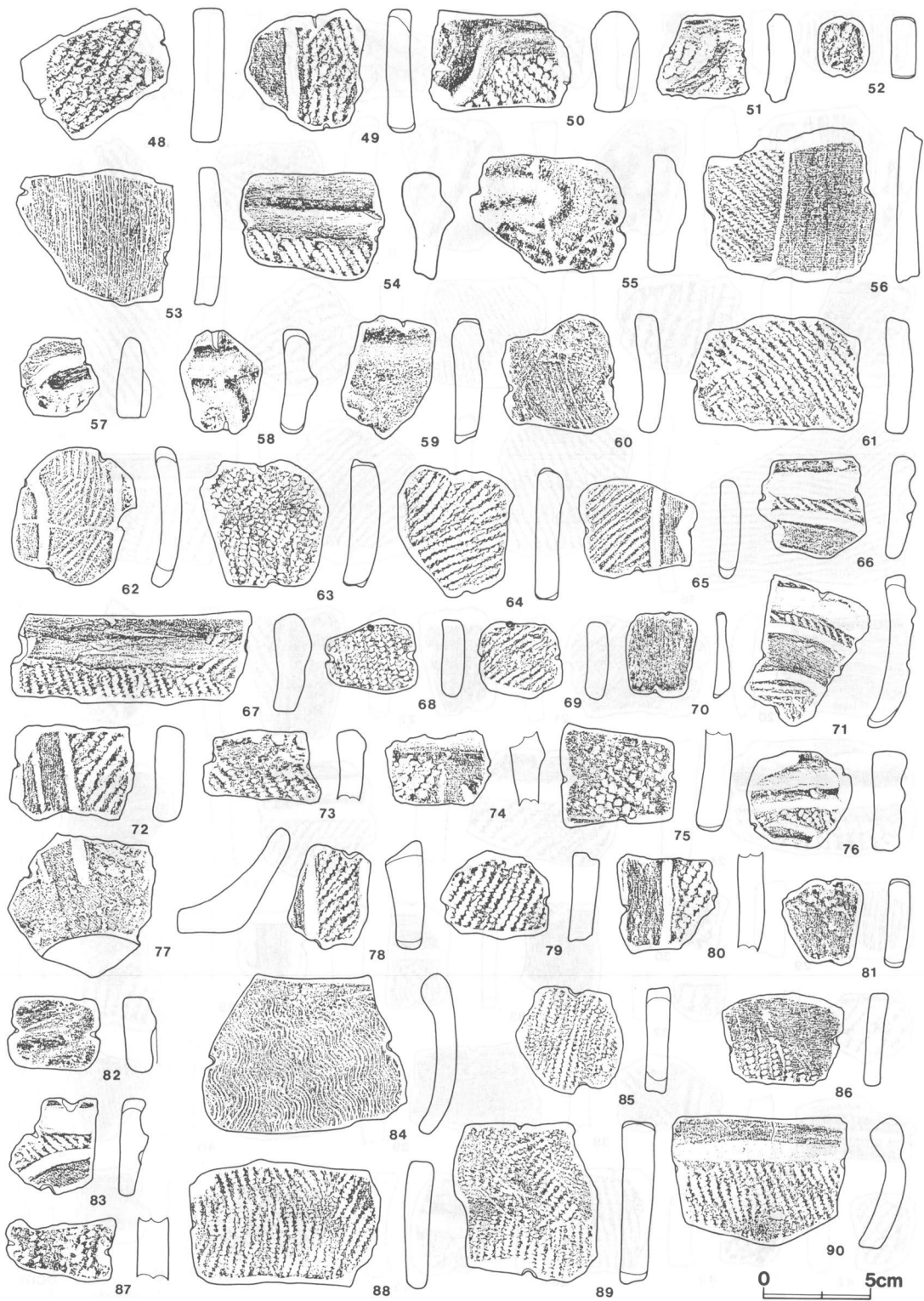
插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備考	台帳 番号
第642图	PL90 177	3.9	4.2	1.3	19.8	SI15	A	57			(2.2)	(3.6)	0.7	(5.3)	SI19	A 残欠	70
		15.6	15.8	1.4	20.8	SI25	A	103			(3.8)	(2.6)	1.3	(15.5)	SI25	A 残欠	104
		2.8	2.7	1.2	8.5	SI27	A	127			(2.5)	(1.5)	1.3	(4.2)	〃	A 残欠	348
		(3.3)	(2.3)	1.0	(7.0)	〃	A	128			(3.7)	(2.6)	1.1	(9.0)	SI27	A 残欠	126
		(4.5)	(3.0)	0.8	(9.5)	SI36・37	A	188			(3.2)	(2.2)	0.9	(5.5)	SI30	A 残欠	158
		(2.9)	4.7	0.9	(10.7)	SK346	A	208			(2.0)	(1.6)	0.9	(2.4)	SK346	A 残欠	209
		4.7	5.1	0.9	26.9	SK393	A	213			(4.6)	(4.1)	1.0	(16.1)	D2i <sub>7</sub>	A 残欠 C	255
(2.4)	(1.3)	0.9	(1.8)	SI3	C 残欠	4			(3.8)	(2.3)	0.7	(6.8)	E3a <sub>1</sub>	C 残欠	303		
(3.5)	(1.7)	1.0	(4.9)	SI8	A 残欠	340			(3.7)	(2.7)	1.3	(12.5)	E4e <sub>3</sub>	C 残欠	327		

表15 土製品一覽表

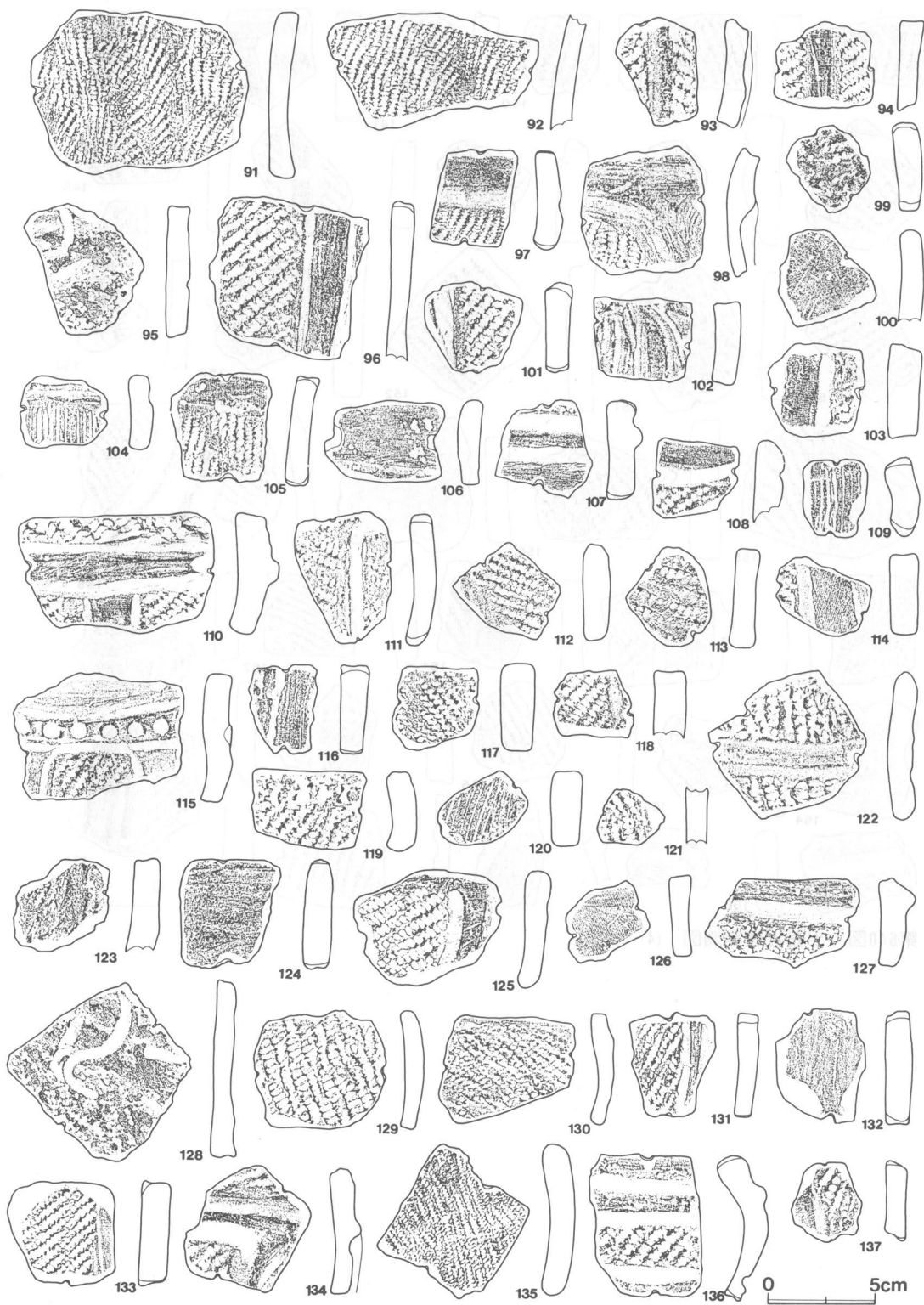
插图 番号	写真 番号	名 称	縦	横	厚	重	出土位置	備 考	台帳 番号
第443图 103	PL90 184	茶匙状土製品	5.9	4.2	0.9	17.7	SI15	完形	22
第552图 51	185	耳栓	(2.0)	3.0		(10.2)	SK409	半欠	254
52	186	動物形土製品	4.9	2.2	2.4	25.7	SK409B	完形	253



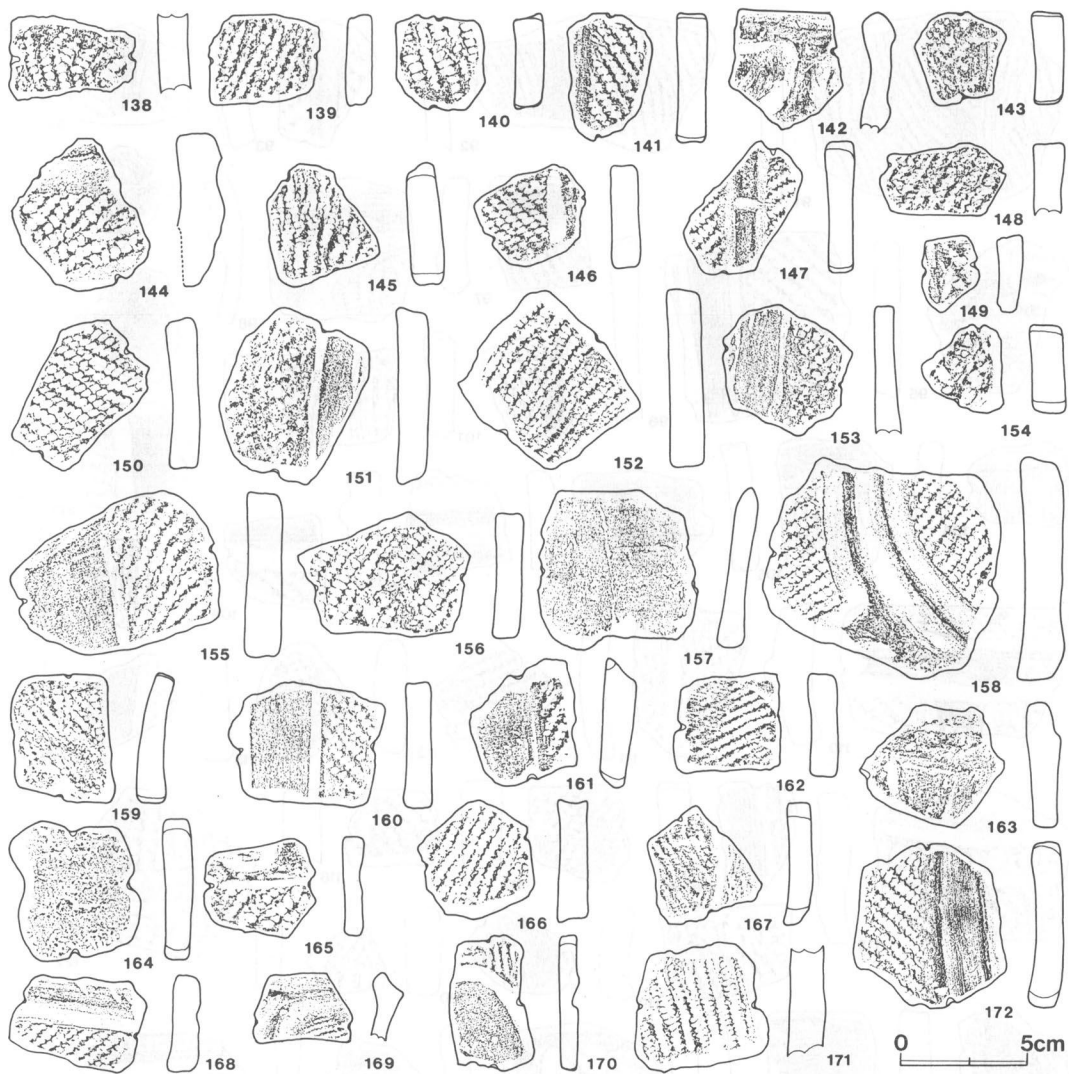
第637图 土器片锤突测图 (1)



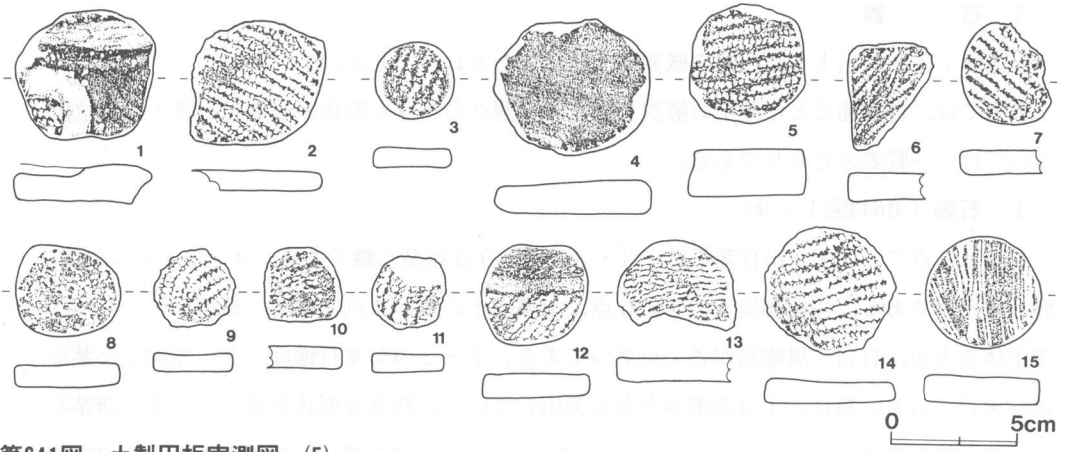
第638图 土器片锤实测图 (2)



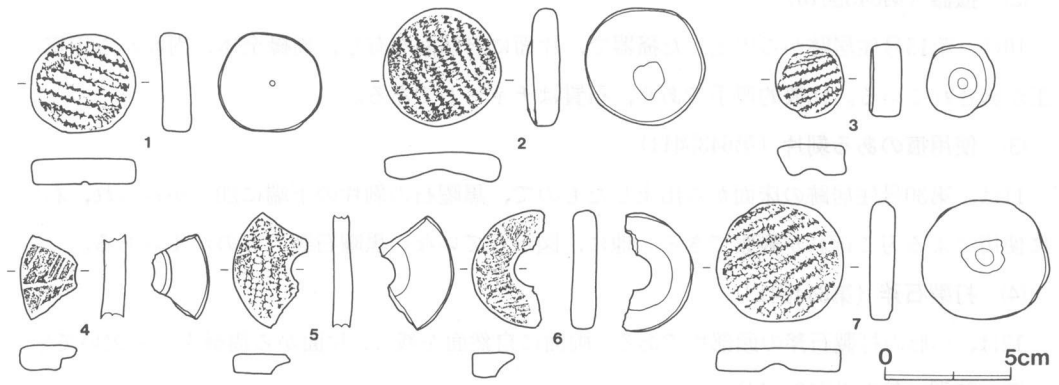
第639图 土器片锤实测图 (3)



第640圖 土器片鏗実測圖 (4)



第641図 土製円板実測図 (5)



第642図 有孔円板実測図 (6)

### 3. 石 器

当遺跡7区から出土した石器の概要は、前記したとおりである。

本項では、各器種ごとに若干の解説を加えた。個々の石器の形状・法量・石質・出土位置等については、一覧表のとおりである。

#### (1) 石鏃 (第643図1～9)

石鏃は9点で、1・2が有茎石鏃、3・5・6・9は無茎石鏃である。4・7・8は欠損品で、形状は不明である。住居跡出土のもの5点、土壌出土のもの4点である。石質はチャートが7点で主体を占め、頁岩・黒曜石が各1点ずつである。1・2の有茎石鏃は、共に先端部と茎部の一点が欠けている。特に、1は基部が左右に突出していて、特異な形状を呈している。無茎石鏃についても決りの浅いもの(6)、深いもの(3・5・9)などの違いが認められる。5の右側縁の上部は、鋸歯縁を呈している。側縁の形状は、直線的なもの(4・5)、内湾気味のもの(9)、外湾気味のもの(3・6)などがある。

#### (2) 搔器 (第643図10)

10は、第15号住居跡から出土した搔器で、片面に自然面を有し、周縁全体に内面から丁寧に加工が施されている。比較的厚手であり、石質はチャートである。

#### (3) 使用痕のある剝片 (第643図11)

11は、第30号住居跡の床面から出土したもので、黒曜石の剝片の下端に加工がみられ、右側縁に使用による刃こぼれが観察できる。他に、図示していない黒曜石製のものが1点ある。

#### (4) 打製石斧 (第644図12)

12は、小形の打製石斧の頭部片である。両面に自然面を残し、片面から周縁をうち欠いている。

#### (5) 礫器 (第644図13・14)

13は、小形の自然礫を用いた片刃の礫器である。14も同様のものであるが、片面は粗い剝離が加えられている。

#### (6) 磨製石斧 (第644図15)

15は、定角式磨製石斧の頭部片である。

#### (7) 磨石 (第644～647図16～42)

磨石の平面形状には各種のものがあり、整った長方形・楕円形を呈して、俗称石けん形と呼ばれているもの(27・29・30・31・36・39など)、円形に近いもの(32・37)が目立っているが、不整形のもの(16・19・28・34など)もある。6区と同様に凹みを有し、凹石と兼用と思われるもの(27・29・30・31・36・37・39)もかなり含まれている。断面形状を見ても、楕円形や隅丸形を呈するものが多いが、中には16のように不整形三角形をなしているものもある。磨った痕跡は側面に顕著に認められるものが多数である。石質は、安山岩7点・流紋岩7点・砂岩9点・凝灰



岩 1 点・石英斑岩 2 点・斑糲岩 1 点である。

(8) 石皿 (第647図43)

43は、石皿の縁辺部の残欠である。第27号住居跡から出土し、安山岩を用いている。第31号住居跡の床面上に据え置かれた状態で出土した石皿は、上面に凹みが3か所認められる。片理が発達した雲母片岩製であるため、いくつかに割れているし、磨り面は観察できない、なお、この石皿の南側に27の磨石が伴って出土した。

(9) 敲石 (第647図44・45)

44・45は共に自然石の下端部に、敲打痕が認められるものである。45は2次加熱を受けている。44は第34号住居跡からの出土である。

(10) 軽石製品 (第647図46・47)

46は、断片であるが孔を有している。47は撥形に近い形状に整えられたもので、下端部は片刃状に作り出され、磨製石斧のような形をなしている。46は浮子の可能性が高いが、47については用途が分らない。

(11) 砥石 (第647図48～56)

砥石は、比較的多く出土している。全体で15点あり、そのうち9点を図示した。砥石は各面を使用したものが多いが、中には特定の面しか使用していないものもある。断面形も方形・長方形をなすもの(49・53～55)が主となるが、他に不整菱形を呈するもの(48)、不整三角形をなすもの(51・56)も含まれている。52は上端部に孔を有しており、提げ砥石としての機能が考えられる。48は第430号土壇、50は第1号地下式壇、53は第4号地下式壇から出土しており、これらの砥石も各々の地下式壇に伴うものと考えられる。また、第3号・7号・8号・10号溝からも、各1点ずつ出土している。第24号住居跡から出土の2点も、重複している第3号溝に伴ったものと考えられる。他にグリッド出土が6点ある。いずれも近世かそれ以降のものと思われる。石質は凝灰岩が7点、頁岩2点、流紋岩2点、砂岩3点、安山岩1点である。

表16 石器一覧表

(1)

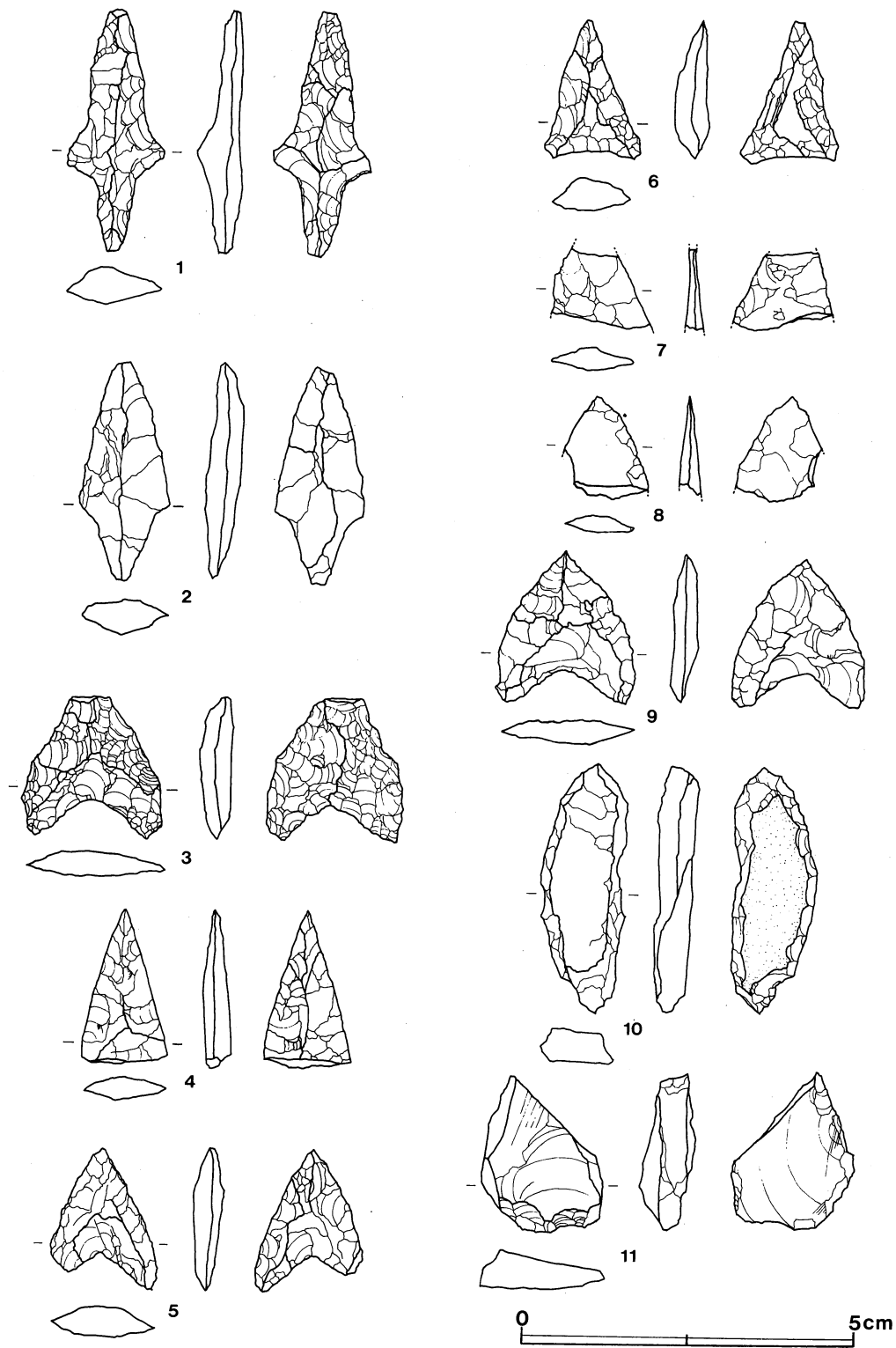
挿 番 号	図 番 号	写 真 番 号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台帳 番号
第647図 1	PL91 1		石 鏃	(3.6)	1.5	0.7	(1.5)	SI5	チャート		1
2	2		〃	(3.2)	1.4	0.6	(1.6)	SI12	頁 岩		2
3	3		〃	(2.1)	2.1	0.5	(1.4)	SI15	黒 曜 石		3
4	4		〃	(2.3)	1.4	0.3	(0.8)	SI23	チャート		4
5	5		〃	2.0	(1.6)	0.4	(0.9)	SI31炉	〃		5
6	6		〃	2.0	1.5	0.5	1.0	SK39	〃		6

(2)

挿 番	図 号	写 真 番 号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台 帳 番 号
第643図	7	PL91 7	〃	(1.1)	1.5	0.4	(0.5)	SK346	チャート		43
	8	8	〃	(1.5)	(1.2)	0.4	(0.5)	〃	〃		44
	9	9	〃	2.2	2.1	0.4	1.6	SK353	〃		51
	10	10	搔器	3.6	1.3	0.5	3.1	SI15	〃		18
	11	11	使用痕のある剥片	2.3	1.8	0.9	2.3	SI30床	黒曜石		27
第644図	12		打製石斧	(4.0)	4.1	1.6	(35.0)	SD8	砂岩		37
	13	13	礫器	6.0	4.4	2.1	71.0	SK143	〃		50
	14	14	〃	9.5	6.3	(3.2)	(214.0)	F4a <sub>7</sub>	粘板岩		57
	15	15	磨製石斧	(4.9)	4.3	2.9	(80.0)	SK136	閃緑岩		41
	16	18	磨石	12.8	7.0	6.4	663.0	SI3	流紋岩		13
	17	19	〃	8.8	(5.7)	3.0	(288.0)	〃	〃		12
	18	16	〃	(6.6)	(6.3)	6.4	(235.0)	SI6	安山岩		14
	19	20	〃	8.8	5.6	5.6	336.0	SI11炉	砂岩		17
	20	PL92 21	〃	8.8	(4.5)	4.2	(142.0)	SI10	流紋岩		15
	21	PL91 17	〃	(7.9)	(5.3)	5.7	(233.0)	SI25	凝灰岩		63
	22	PL92 22	〃	(8.0)	3.5	4.3	(123.0)	SI27	砂岩		23
第645図	23	26	〃	(4.3)	(6.0)	5.7	(165.0)	SI25・27	石英斑岩		22
	24	24	〃	(4.1)	(7.9)	4.9	(210.0)	SI30	砂岩		24
	25	28	〃	(6.0)	(4.2)	4.0	(111.0)	〃	〃		25
	26	25	〃	(7.2)	(4.0)	4.8	(116.0)	SI31	流紋岩		29
	27	27	〃	13.0	7.2	3.7	480.0	〃	〃		28
	28	23	〃	11.6	7.6	8.6	886.0	SI34	砂岩		34
	29	29	〃	(11.4)	10.0	3.3	(642.0)	〃	〃		30
	30	PL93 30	〃	(8.3)	(5.8)	5.6	(379.0)	SI36・37	〃		31
第646図	31	31	〃	(9.2)	8.0	3.1	(320.0)	〃	安山岩		32
	32	35	〃	7.4	7.4	3.6	250.0	SD4	砂岩		47
	33	33	〃	9.4	(3.9)	4.0	(250.0)	SD1	流紋岩		64
	34	36	〃	7.9	4.0	2.9	105.0	〃	〃		46
	35	34	〃	(9.8)	(10.1)	(9.6)	(1250.0)	SK469	斑糲岩		61
	36	32	〃	(5.2)	7.3	5.2	(320.0)	E4e <sub>7</sub>	安山岩		9
	37	37	〃	(6.4)	9.9	4.9	(376.0)	E4j <sub>6</sub>	〃		8

(3)

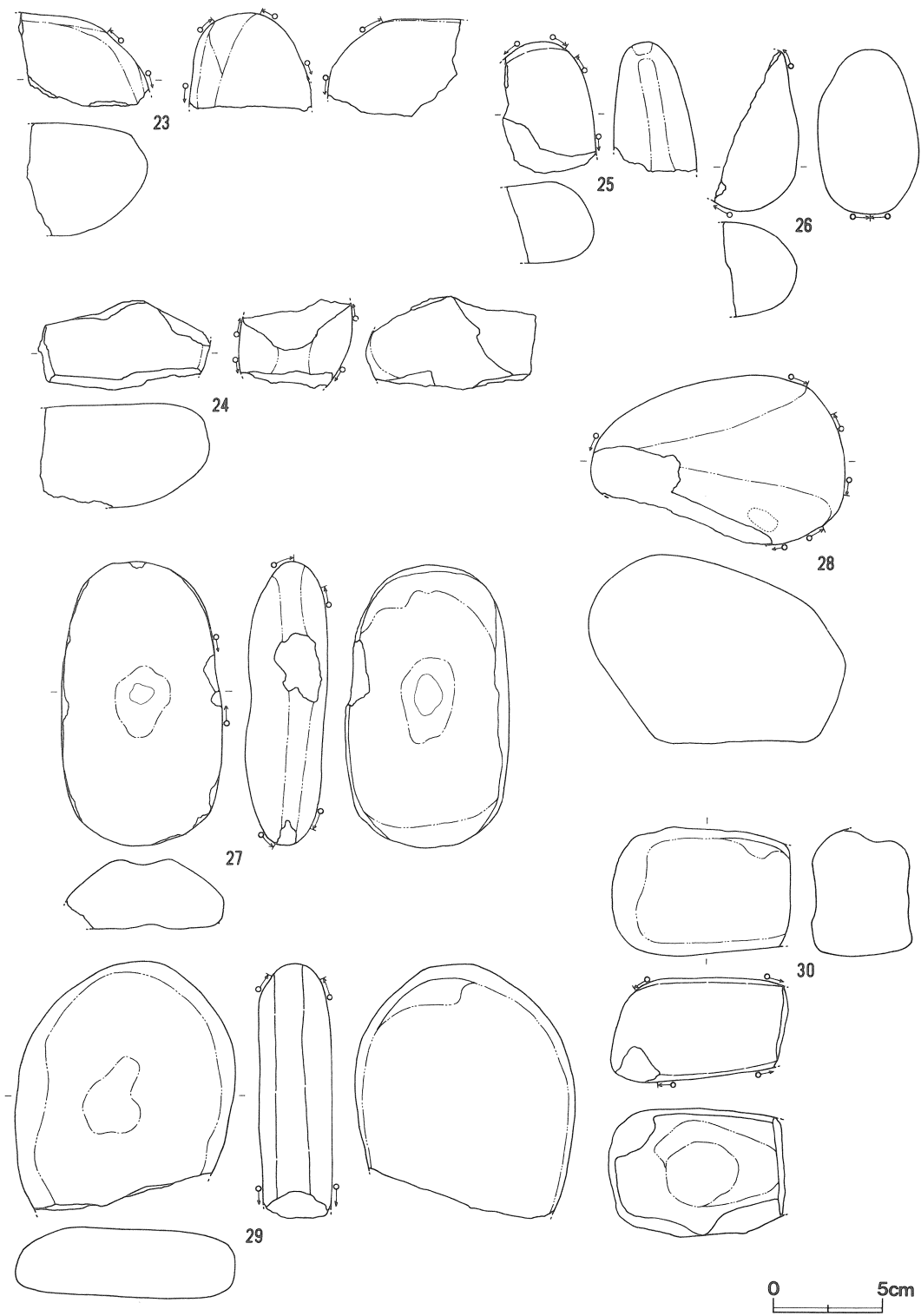
挿 番 号	図 号	写 番 号	真 号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台 帳 番 号
第646	38	PL94	38	磨石	9.7	6.2	1.8	160.0	E4a <sub>1</sub>	砂岩		53
	39		42	〃	12.5	7.7	4.6	626.0	F4a <sub>1</sub>	安山岩		11
第647	40		39	〃	(4.7)	6.7	1.4	(50.0)	F4f <sub>6</sub>	〃		58
	41		40	〃	(5.9)	8.9	5.6	(361.0)	F4g <sub>6</sub>	石英斑岩		59
	42		41	〃	(4.9)	(6.9)	(4.2)	(125.0)	G3e <sub>6</sub>	安山岩		60
	43		43	石皿	(17.8)	(6.0)	7.1	(777.0)	SI27	〃		19
	44		44	敲石	14.1	7.8	5.7	820.0	SI34	流紋岩		33
	45		45	〃	8.8	6.5	5.5	353.0	G3d <sub>6</sub>	アブライト	2次加熱	40
	46		46	軽石製品	4.7	2.8	2.1	3.0	SK283	軽石		42
	47		47	〃	11.3	7.2	2.5	46.0	E3f <sub>7</sub>	〃		54
	48	PL95	48	砥石	(5.2)	6.1	3.1	(105.0)	SY2	凝灰岩		45
	49		49	〃	(4.8)	2.5	1.9	(31.0)	SI24	頁岩		21
	50		50	〃	(9.0)	3.6	2.6	(79.0)	SY2	凝灰岩		7
	51		51	〃	5.1	2.7	1.9	30.0	SD3	流紋岩		35
	52		52	〃	4.4	3.6	(2.6)	(40.1)	SD8	凝灰岩	上端部に穿孔あり	48
	53		54	〃	7.6	5.3	1.7	98.0	SY4	砂岩		62
	54		55	〃	(7.3)	3.8	1.9	(66.0)	G3d <sub>6</sub>	頁岩		39
	55		56	〃	9.5	3.6	2.8	112.0	〃	凝灰岩		38
	56		53	〃	4.7	(8.5)	2.9	(115.0)	E4c <sub>8</sub>	砂岩		10
				使用痕のある剝片	2.6	2.6	0.9	3.6	SI30	黒曜石		26
				石皿	29.6	13.2	7.9	4650	SI31	雲母片岩		16
				砥石	3.6	(2.4)	1.0	(20.0)	SI24	安山岩		20
				〃	(2.3)	1.9	1.8	(19.0)	SD7	凝灰岩		36
				〃	(4.3)	3.0	1.6	(30.0)	SD10	砂岩		49
				〃	3.5	3.0	1.6	20.0	D3i <sub>5</sub>	凝灰岩		52
				〃	3.9	(6.7)	1.8	(60.0)	F3a <sub>5</sub>	流紋岩		55
				〃	(7.0)	3.4	2.0	(70.0)	F3e <sub>9</sub>	凝灰岩		56



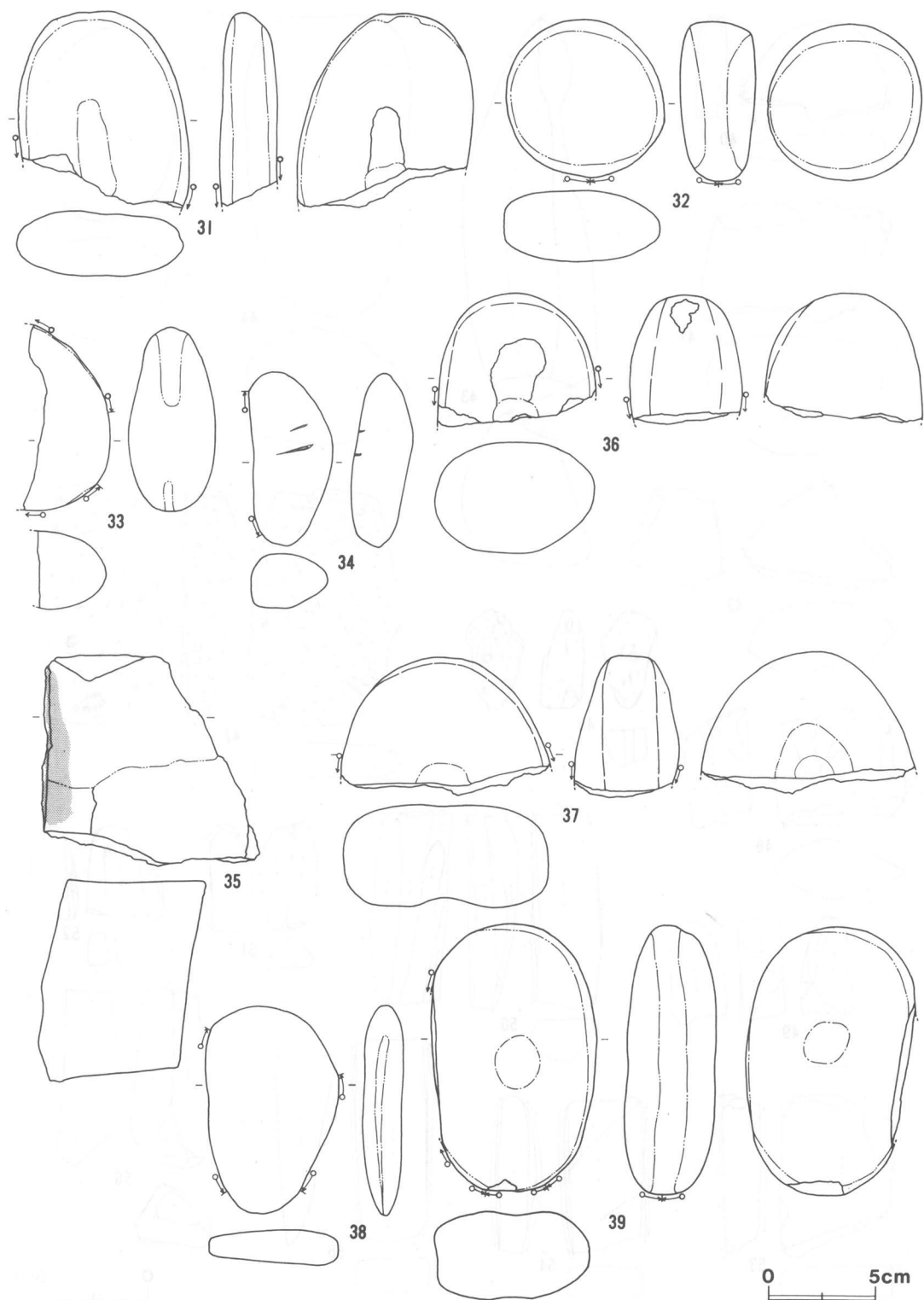
第643图 石器实测图 (1)



第644图 石器实测图 (2)



第645图 石器实测图 (3)



第646图 石器实测图 (4)



第647图 石器实测图 (5)



#### 4. 古 銭

当遺跡7区出土の古銭は134点で、そのうちの131点は第1号地下式墳から出土したものである。銭貨名不詳の1点が第4号地下式墳から出土し、他の2点はグリッドから出土している。36点を図示した。

第1号地下式墳から出土した古銭のうち、銭貨名が判明したものは82点で、大半の63点が寛永通寶であり、いずれも俗に「古寛永」と呼ばれるタイプのものである。他には治平元寶2点、熙寧元寶2点、政和通寶2点、元祐通寶1点、大觀通寶1点、洪武通寶8点、永樂通寶3点が出土している。前5者は北宋銭、後2者は明銭であるが、この中には日本で鑄造されたものも含まれているかもしれない。第1号地下式墳から出土した古銭の中には磨滅の著しいものや、赤サビ、青サビの付着の著しいものが多数含まれている。また、歪みの著しいものや数片に割れたものもある。これらの古銭のうち最も新しい時期を示すものは、寛永通寶であり、江戸時代初期の17世紀中葉にあたる。古銭から判断すれば、第1号地下式墳は、江戸時代初期に構築されたものと考えられる。

第1号地下式墳のように、大量の古銭を出土した遺構の類例は少なく、管見にふれたものでは、<sup>(1)</sup>青森県浜通遺跡の例がある。SK2土塚墓出土の37点(北宋銭・明銭)、SK6土塚墓出土の10点(北宋銭)、SK1土塚墓出土の12点(明銭他)の例などが比較的多量の古銭を出土した例と思われる。今後の類例の増加を待って、第1号地下式墳出土の古銭について意義づけを行いたいと考えている。

註1 大瀬秀男『浜通遺跡 発掘調査報告書』 青森県教育委員会 1984年

表17 古銭一覧表

(1)

挿 番 号	写 真 番 号	銭 貨 名	初 年	初 年	径	重	出 土 位 置	備 考	台 帳 番 号
第648 1	PL96 1	寛永通寶	寛永13年	明暦2年	1636	1656	2.4 3.5 S Y 1 No. 3 Y		1
2	2	治平元寶	北宋	治平元年	1064		2.4 2.5 // 16 Y		2
3	3	寛永通寶	寛永13年	明暦2年	1636	1656	2.4 2.3 // 18 Y		3
4	4	元□通寶					2.4 2.4 // 20 Y	磨滅している	4
5	5	洪武通□					2.3 2.6 // 22 X		5
6	6	寛永通寶	寛永13年	明暦2年	1636	1656	2.3 2.8 // 19 Y		6
7	7	//					2.4 2.9 // 32 Y		7
8	8	//					2.4 2.3 // 39 Y		8
9	9	//					2.4 3.5 // 37 Y		9
10	10	永樂通寶	明	永樂6年	1408		2.5 3.3 // 40 Y		10

(2)

挿図 番号	写真 番号	銭貨名	初 鑄 年	径	重	出土位置	備 考	台帳 番号
第649図 11	PL96 11	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	3.2	S Y 1 No47 Y		11
12	12	〃	〃	2.4	2.9	〃 48 Y		12
13	13	〃	〃	2.3	2.6	〃 67 Y		13
14	14	〃	〃	2.4	2.5	〃 72 Y		14
15	15	〃	〃	2.4	3.0	〃 73 Y		15
16	16	元祐通寶	北宋 元祐元年 1086	2.4	2.4	〃 27 Y	磨滅している	16
17	17	景□元寶		2.4	2.4	〃 54 Y	青サビあり	17
18	18	永樂通寶	明 永樂6年 1408	2.4	2.4	〃 70 Y		18
19	19	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	2.4	〃 82 Y		19
20	20	〃	〃	2.4	3.0	〃 84 Y		20
第650図 21	21	〃	〃	2.3	2.3	〃 91 Y		21
22	22	□□元寶		2.3	2.3	〃 93 Y		22
23	23	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	3.1	〃 95 Y		23
24	24	政和通寶	北宋 政和元年 1111	2.3	2.4	〃 97 X		24
25	25	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.2	2.3	〃 98 X		25
26	26	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	3.0	〃 99 X		26
27	27	〃	〃	2.4	2.4	〃 102 Y		27
28	28	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.3	2.1	〃 103 Y		28
29	29	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	4.4	〃 104 Y		29
30	30	〃	〃	2.4	2.9	〃 105 Y		30
第651図 31	PL97 31	政和通寶	北宋 政和元年 1111	2.3	2.9	〃 X		31
32	32	治平元寶	北宋 治平元年 1064	2.3	2.2	〃 X	磨滅著しい	32
33	33	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.3	3.0	〃 X		33
34	34	大觀通寶	北宋 大觀元年 1107	2.4	2.5	〃 X	磨滅著しい	34
35	35	熙寧元寶	北宋 熙寧元年 1068	2.4	2.9	〃 X	一部欠損	35
36	36	永樂通寶	明 永樂6年 1408	2.4	1.9	〃 No89 Y		36
	37	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	2.5	〃 110 Y		37
	38	〃	〃	2.4	2.5	〃 94 X		38
	39	〃	〃	2.4	3.0	〃 101 Y		39
	40	〃	〃	2.3	2.5	〃 113 Y		40
	41	〃	〃	2.4	3.4	〃 53 Y		41

(3)

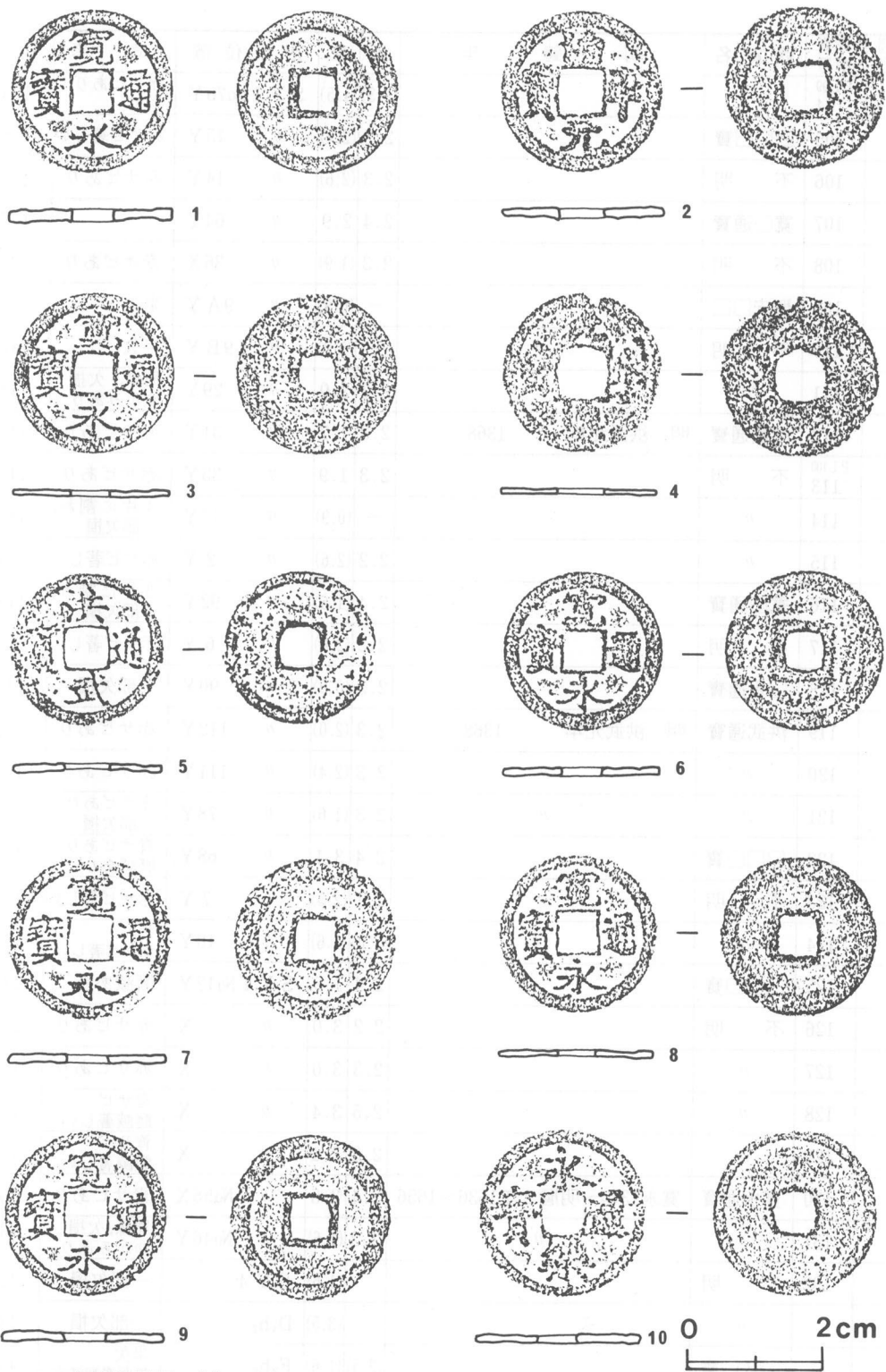
挿図 番号	写真 番号	銭貨名	初 鑄 年	径	重	出土位置	備 考	台帳 番号
	PL97 42	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.3	2.3	S Y 1 No24 Y		42
	43	〃	〃	2.4	2.9	〃 11 Y		43
	44	〃	〃	2.4	3.0	〃 69 Y		44
	45	〃	〃	2.3	2.5	〃 34 Y		45
	46	〃	〃	2.4	3.5	〃 62 Y		46
	47	〃	〃	2.4	3.0	〃 80 Y		47
	48	〃	〃	2.4	2.9	〃 87 Y		48
	49	〃	〃	2.4	2.4	〃 79 Y		49
	50	〃	〃	2.4	2.5	〃 42 Y		50
	51	〃	〃	2.4	3.1	〃 50 X		51
	52	〃	〃	2.4	2.9	〃 57 X		52
	53	〃	〃	2.3	2.9	〃 4 Y		53
	54	〃	〃	2.4	3.0	〃 30 Y		54
	55	〃	〃	2.3	2.5	〃 52 X		55
	56	〃	〃	2.4	2.5	〃 76 Y		56
	PL98 57	〃	〃	2.4	3.1	〃 44 Y		57
	58	〃	〃	2.4	3.6	〃 96 Y		58
	59	〃	〃	2.3	3.1	〃 21 X		59
	60	〃	〃	2.4	3.0	〃 28 Y		60
	61	〃	〃	2.3	2.9	〃 58 X		61
	62	〃	〃	2.4	3.5	〃 59 Y		62
	63	〃	〃	2.4	3.1	〃 63 X		63
	64	〃	〃	2.4	2.1	〃 77 Y		64
	65	〃	〃	2.3	2.4	〃 43 Y		65
	66	〃	〃	2.4	2.4	〃 49 Y		66
	67	〃	〃	2.4	3.5	〃 61 X		67
	68	〃	〃	2.4	3.0	〃 X		68
	69	〃	〃	2.4	2.9	〃 No55 Y		69
	70	〃	〃	2.4	2.5	〃 83 Y		70
	71	〃	〃	2.4	2.9	〃 74 Y		71
	72	〃	〃	2.4	2.4	〃 13 Y	一部欠損	72

(4)

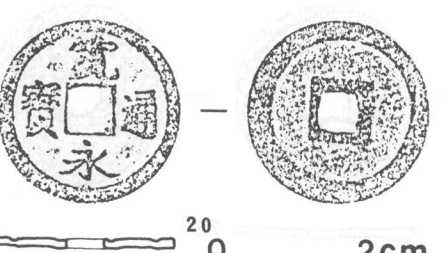
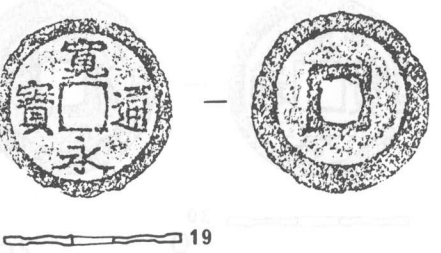
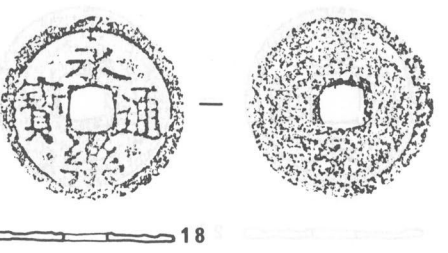
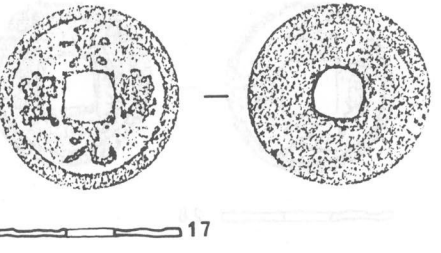
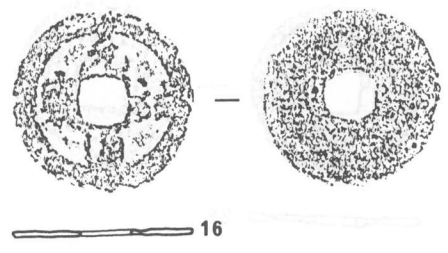
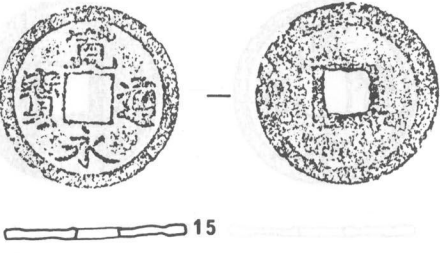
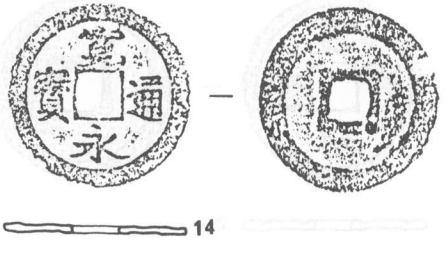
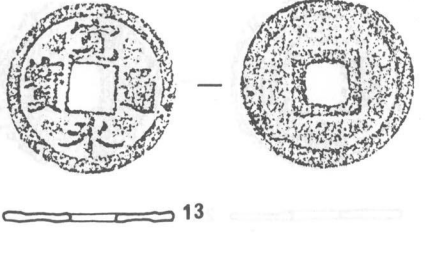
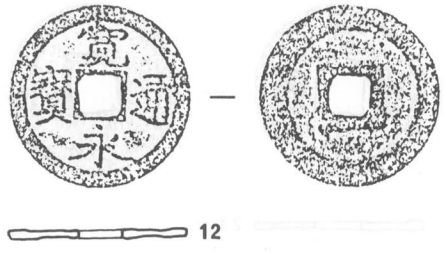
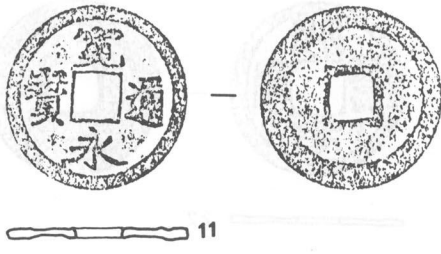
挿図 番号	写真 番号	銭貨名	初 鑄 年	径	重	出土位置	備 考	台帳 番号
	PL98 73	不 明		2.4	2.4	S Y 1 No23 X		73
	74	熙寧元寶	北宋 熙寧元年 1068	2.4	2.0	〃 8 Y	青サビ・磨滅あり	74
	75	永〇通寶		2.1	1.5	〃 100 X		75
	76	〇〇元寶		2.3	2.3	〃 107 Y	磨滅著しい	76
	77	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	2.6	〃 108 X		77
	78	〃	〃	2.4	2.6	〃 X	青サビあり	78
	79	〃	〃	2.4	2.9	〃 No45 Y		79
	80	政〇通寶		2.3	2.3	〃 33 Y	磨滅している	80
	81	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.3	3.6	〃 65 Y	青サビあり	81
	82	〃	〃	2.4	2.4	〃 71 Y		82
	PL99 83	不 明			(1.6)	〃 X	3片に割れている	83
	84	〃		2.3	2.7	〃 X		84
	85	〃		2.3	1.5	〃 X	赤サビあり 2片に割れる	85
	86	〃		2.4	3.1	〃 X	青サビあり	86
	87	寛〇〇寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	2.9	〃 X		87
	88	寛永通寶	〃	2.3	2.4	〃 X		88
	89	〇〇〇寶		2.3	2.4	〃 No60 Y		89
	90	不 明		2.4	(4.0)	〃 38 Y	赤サビあり	90
	91	〃		2.4	2.4	〃 51 X	青サビあり	91
	92	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.3	2.9	〃 88 Y		92
	93	不 明		2.0	(1.5)	〃 106 Y	赤サビ著しい	93
	94	不 明		2.2	1.4	〃 109 Y	磨滅著しい	94
	95	〃		2.2	(2.6)	〃 86 Y	赤サビあり	95
	96	〃		2.1	2.1	〃 85 Y	赤サビあり	96
	97	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.2	2.0	〃 41 Y	磨滅著しい	97
	98	不 明		2.4	2.0	〃 81 Y		98
	99	〃		2.3	2.0	〃 66 Y		99
	100	〃		2.1	0.9	〃 5 Y	赤サビあり	100
	101	〇〇〇寶		2.3	3.0	〃 25 Y	磨滅している	101
	102	不 明		2.3	(1.4)	〃 26 Y	一部欠損	102
	103	〃		2.4	2.5	〃 1 Y	青サビ著しい	103

(5)

挿図 番号	写真 番号	銭貨名	初 鑄 年	径	重	出土位置	備 考	台帳 番号
	PL99 104	〃		(2.3)	(1.5)	S Y 1 No.75 Y	赤サビあり 半欠	104
	105	□□□寶		2.3	(2.4)	〃 15 Y	赤サビ著しい	105
	106	不 明		2.3	(2.6)	〃 14 Y	赤サビあり	106
	107	寛□通寶		2.4	2.9	〃 64 Y		107
	108	不 明		2.3	(1.9)	〃 36 X	青サビあり	108
	109	聖宋□□		—	(0.9)	〃 9A Y	半欠	109
	110	不 明		—	(1.0)	〃 9B Y	半欠	110
	111	〃		2.2	2.0	〃 29 Y	周縁、欠損 ゆがみあり	111
	112	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.3	1.7	〃 31 Y	赤サビあり	112
	PL100 113	不 明		2.3	1.9	〃 35 Y	赤サビあり	113
	114	〃		—	(0.9)	〃 17 Y	4 片に割れ、 一部欠損	114
	115	〃		2.2	(2.6)	〃 2 Y	赤サビ著しい	115
	116	寛□通寶		2.4	(1.6)	〃 92 Y	3 片に割れ、 一部欠損	116
	117	不 明		2.2	(2.9)	〃 6 Y	赤サビ著しい	117
	118	□永通寶		2.3	(0.9)	〃 90 Y	一部欠損	118
	119	洪武通寶	明 洪武元年 1368	2.3	(2.0)	〃 112 Y	赤サビあり	119
	120	〃	〃	2.3	(2.4)	〃 111 Y	赤サビあり	120
	121	〃	〃	2.3	(1.6)	〃 78 Y	赤サビあり 一部欠損	121
	122	□□□寶		2.4	3.1	〃 68 Y	青サビあり 磨滅あり	122
	123	不 明		2.1	(2.5)	〃 7 Y	赤サビ著しい	123
	124	〃		(2.0)	(1.6)	〃 10 Y	半欠 赤サビ著しい	124
	125	□□□寶		2.4	1.9	S Y 1 No.12 Y	磨滅あり	125
	126	不 明		2.2	3.0	〃 X	赤サビあり	126
	127	〃		2.3	3.0	〃 X	赤サビあり	127
	128	〃		2.5	3.4	〃 X	青サビ 磨滅著しい	128
	129	〃		2.3	2.1	〃 X	青サビ 磨滅著しい	129
	130	寛永通寶	寛永13年～明暦2年1636～1656	2.4	2.5	〃 No.56 X	青サビあり	130
	131	〃	〃	2.2	(1.6)	〃 No.46 Y	周縁、欠損 ゆがみあり	131
	132	不 明			(1.6)	S Y 4	一部欠損	132
		〃			(3.5)	D <sub>4</sub> h <sub>2</sub>	一部欠損	133
		□久□寶		(2.5)	(1.6)	F <sub>2</sub> h <sub>5</sub>	半欠 裏面青海波文	134

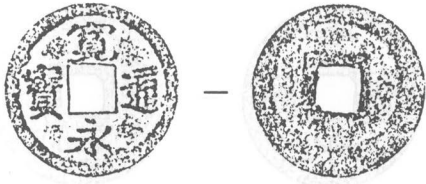


第648圖 古錢拓影圖 (1)

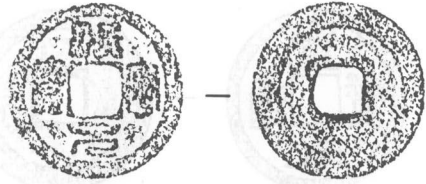


第649圖 古錢拓影圖 (2)

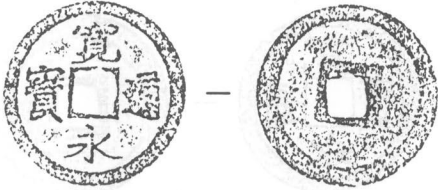
0 2cm



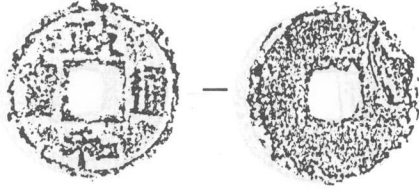
21



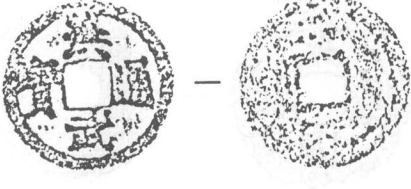
22



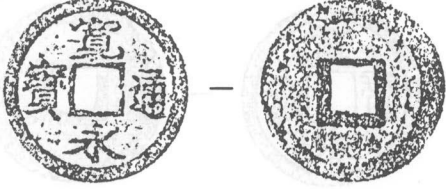
23



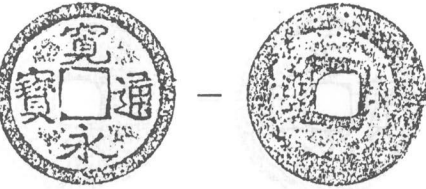
24



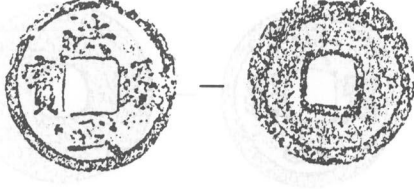
25



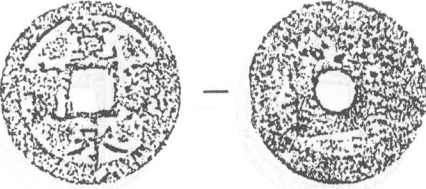
26



27



28



29

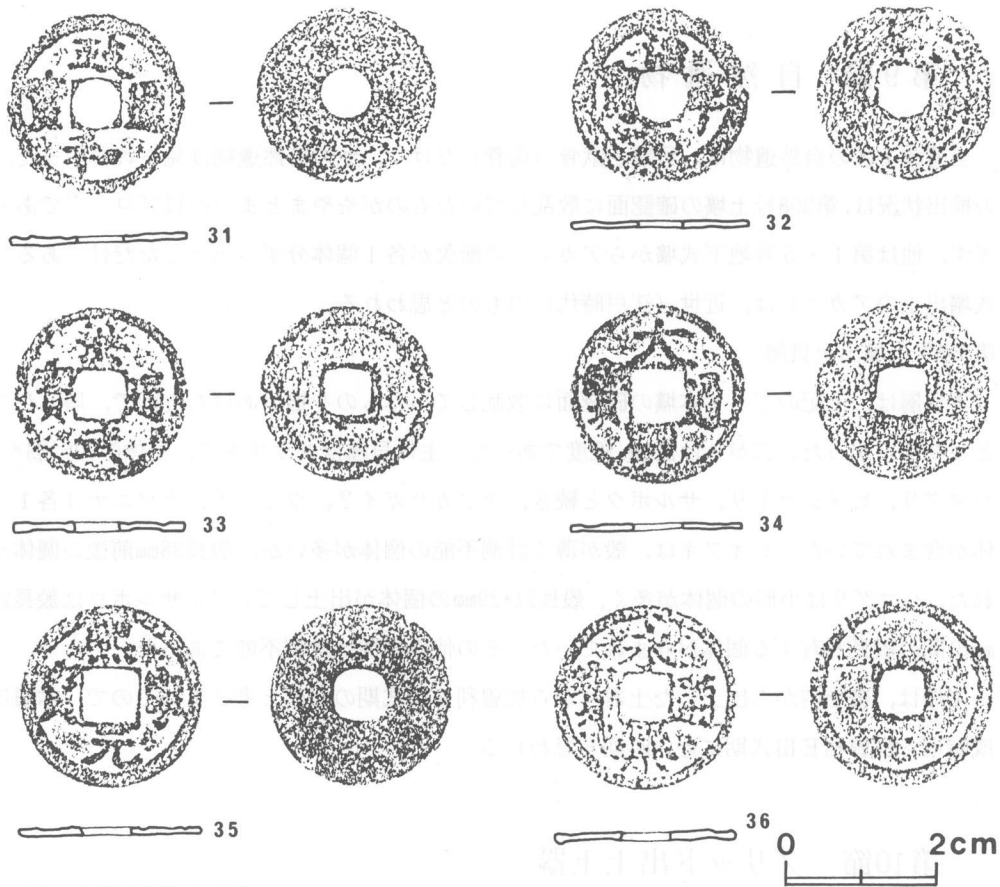


30



第650圖 古錢拓影圖 (3)





第651図 古銭拓影図 (4)

## 第9節 自然遺物

当遺跡7区の自然遺物は、貝類と獣骨（馬骨）だけで、他の自然遺物は見られなかった。貝類の検出状況は、第358号土壌の確認面に散乱していたものがややまとまった貝ブロックであるにすぎず、他は第1・5号地下式墳からアカニシの断欠が各1個体分ずつ出土しただけである。地下式墳出土のアカニシは、近世（江戸時代）のものと思われる。

### 第358号土壌出土貝層

本貝層は、上記のごとく本墳の確認面に散乱していたものを拾いあげたもので、層としてのまとまりはなかった。広がりには径1m程度であった。主体貝種はシオフキで、全体の70%弱を占め、ハマグリ、ヒメシラトリ、サルボウと続き、マツカサガイ？、ウミニナ、カワニナは各1～2個体が含まれていた。シオフキは、殻が薄く計測不能の個体が多いが、殻長38mm前後の個体がみられた。ハマグリは小形の個体が多く、殻長21・29mmの個体が出土している。サルボウは殻長28～45mmの間の殻長を有する個体が含まれていた。その他の貝種は計測不能であった。

本墳は、覆土内から出土した土器片から加曾利EⅢ式期のものと考えられるので、本貝層の形成時期も加曾利EⅢ式期に近い時期と思われる。

## 第10節 グリッド出土土器

本節では、多量に出土した土器の中から、ごく一部を取り上げた。

### 1. 有孔罎付土器（第622図11）

11は、口縁部無文帯下に1条の罎（隆線）を巡らし、罎に孔が斜めに穿たれている。壺形を呈するものと思われ、器面に赤彩痕が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は10.2cmで、現存高は4.3cmである。（D3c<sub>6</sub>グリッド表土出土）

### 2. 台付土器（第622図12）

12は、台付土器の台部片で、台部はかなり開いており、破片の上部に孔が認められるが、小片のために形や全体の個数および配列は不明である。外面には単節縄文RLが縦位回転できれいに施文されている。内面は縦ナデ調整で、脚端部の内面は横ナデが加えられている。底面は平坦でやや磨滅が認められる。胎土には石英粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は8.6cmで、現存高は3.9cmである。

11・12とも、縄文中期後半のものである。

# 第5章 まとめ

## 第1節 遺構

南三島遺跡6・7区から検出された遺構は次の表のとおりである。

時代	遺構名	数
縄文時代	竪穴住居跡	121軒
	土壇(時期不明を含む)	890基
	埋甕遺構	11基
	炉穴	5基
江戸時代	地下式墳	5基
明治時代以降	溝	25条
時期不明	粘土貼り遺構	2基

### 1 竪穴住居跡について

竪穴住居跡は121軒で、調査区の全域から検出されている。そのうち約3割は重複しており、覆土の堆積状態などからでも新旧関係が明らかでないものが多い。また6区の南部には著しく重複している住居跡群が検出されている。

時期を把握できたものは94軒で、全体の78%にあたる。縄文時代中期後葉から縄文時代後期初頭の住居跡で、1・2区同様、ほぼ継続して集落が営まれたと考えられる。

時期の判明した78%の住居跡で、集落の分析を行い、時期区分を次のようにした。

I期……………加曾利EⅢ式の土器が出土した住居跡

II期……………加曾利EⅢ式からEⅣ式に移行する時期の土器が出土した住居跡

III期……………加曾利EⅣ式の土器が出土した住居跡

IV期……………称名寺式の土器が出土した住居跡

住居跡の平面形と規模についてみると、I期は楕円形の住居跡が多く、円形の23軒に対し、52軒と2倍以上の割合で検出されている。規模は全体的に平均しており、表18のとおりである。住居跡がやや集中しているのは、長径4.1m～6.0mの規模と、長径6.6m～9.0mの規模であり、最大規模のものは長径8.6mである。II期の住居跡は数が少なく、12軒であるが、規模別の分布はI期と同様にそれほど集中した傾向はみられない。やや多いのが、長径5.1m～6.0mの規模である。最大規模のものは長径7.6mである。また、長径が4.5m以下の円形の住居跡は1軒もないのが特

表18

住居跡分類集計表

時期	6・7区別 形状 炉の有無 長径	6 区					7 区					合計
		楕円形		円形		小計	楕円形		円形		小計	
		炉	なし	炉	なし		炉	なし	炉	なし		
加曾利EⅢ式期	～4.0	2		1	2	5		1	1		2	7
	4.1～4.5	2	1	1	1	5		2	3		5	10
	4.6～5.0	2	7		1	10	2	1		1	4	14
	5.1～5.5	3	2	1	1	7	1	4	1	1	7	14
	5.6～6.0	2		3		5	1	2	2		5	10
	6.1～6.5	1	1			2	3		1		4	6
	6.6～	5	3	2		10	2	2			4	14
	小計	17	14	8	5	44	9	12	8	2	31	75
加曾利EⅢ～IV式期	～4.0	1				1						1
	4.1～4.5											
	4.6～5.0		1			1						1
	5.1～5.5	1	2			3						3
	5.6～6.0	2		1		3		1			1	4
	6.1～6.5				1	1						1
	6.6～	1		1		2						2
	小計	5	3	2	1	11		1			1	12
加曾利EⅣ式期	～4.0											
	4.1～4.5											
	4.6～5.0											
	5.1～5.5											
	5.6～6.0		1		1	2						2
	6.1～6.5			1		1						1
	6.6～											
	小計		1	1	1	3						3
称名寺式期	～4.0							1			1	1
	4.1～4.5											
	4.6～5.0											
	5.1～5.5											
	5.6～6.0											
	6.1～6.5	1				1						1
	6.6～		1			1						1
	小計	1	1			2		1			1	3
時期不明	3	10	2	8	23	1	1	2		4	27	
合計	26	29	13	15	83	10	15	10	2	37	120	

(6区第75号住居跡は含まれない)

微的である。Ⅲ期の住居跡はさらに少なくなり、全体で3軒である。少数の住居跡の分析では性格は把握しえないが、長径5.6m～6.0mの住居跡が2軒、6.1m～6.5mの住居跡が1軒である。平面形は、円形が2軒と楕円形が1軒である。Ⅳ期も3軒であり、長径4.0m以下のもの1軒、6.1m～6.5mが1軒、6.6m以上のものが1軒であり、小形の住居跡と大形の住居跡に分かれる。全体的にみると、Ⅰ期の住居跡は小さなものから大きなものまで平均的に分布しており、Ⅱ期になると、比較的小さな住居跡が少なくなり、5.1m～6.0mの規模のものが多くなる。Ⅲ期、Ⅳ期と進むに従い、大形化の傾向がみられる。

炉についてみると、炉を伴う住居跡は51軒で、54%の割合にあたる。しかし、Ⅰ～Ⅳ期に細分してみると、Ⅰ期は75軒のうち、42軒の住居跡が炉をもち、半数以上の56%を占めている。Ⅱ期は12軒のうち7軒で58%を占める。Ⅲ期では3軒のなかで1軒だけ炉をもち、33%である。しかし、隣接の1・2区で、加曾利EⅣ式期の住居跡で、炉をもつ住居跡の割合は、68%を示しているのをみると、炉をもつ割合が少ない。6・7区の集落は、1・2区の集落の縁辺部と考えるのが妥当である。Ⅳ期も同様に3軒のうち1軒で、33%である。称名寺式期は1・2区でも炉をもつ住居跡の割合が少ないので、南三島遺跡のひとつの特徴と考えられる。

Ⅰ期の住居跡は、6区で44軒、7区で31軒の計75軒検出されている。この75軒の住居跡は平面的にみると、第652図に示されるように、2～10軒の住居跡群が1単位のブロックをつくり、6・7区で8～10個のブロックを形成していたものと考えられる。また、ブロック内には、長径6.6m以上の大形の住居跡が1～2軒、確実に含まれているので、この大形住居跡をブロックの中心とした可能性も考えられる。さらに、同じブロック内で、同時期の住居跡が重複しているので、住居跡の建て替えが行なわれたか、あるいは同じ加曾利EⅢ式期の中でも、時期が少しずつれて構築されたものと考えられる。

Ⅱ期の住居跡は、Ⅰ期に比べると数は少なく、6区に11軒、7区に1軒の計12軒検出されている。検出範囲も限られており、7区の北端部と、6区の南端部にかたまっている。特徴的なことは、6区の11軒が北端部に4軒、南端部に7軒ずつかたまっている。南端部の7軒は重複して検出されているので、4～5軒で1つのブロックを作る集落を構成していたものと考えられる。7区から検出した1軒は遺跡の北部に寄っていることから、7区以北に構成された集落の1軒ではないかと考えられる。

Ⅲ期の住居跡は、数はさらに少なくなり、6区で3軒検出しただけである。従って、この時期の集落は2区を中心として営まれ、6区で検出した3軒はその集落の北端の一部と考えられる。2区の検出状況をみると、2～8軒の住居跡が1単位となって、10～12ブロックを形成していたと考えられている。ちなみに、2区に検出された加曾利EⅣ期の住居跡で6区に近いものは、第45・48・52・72・89号住居跡である。大形の第89号住居跡を中心に7軒の住居跡が単位となって

1ブロックを形成していると考えられる。

表19 住居跡一覧表（6区） (1)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉		覆土(層)	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位置	種類			
1	E4j <sub>6</sub>		不整円形	径5.3	8~12	平坦	—	—	—	4	不明	SK5
2	E4i <sub>6</sub>		〃	4.8×4.6	10~14	〃	1	—	—	2	〃	SK2, 3, 4
3	E5h <sub>7</sub>	N-5°-E	楕円形	4.9×3.9	10~12	〃	2	—	—	3	〃	
4	E5h <sub>7</sub>	N-3°-W	(楕円形)	(5.7)×(4.7)	10	〃	1	—	—	3	〃	SK6
5	E5i <sub>7</sub>	N-29°-E	( 〃 )	(5.0)×(4.0)	4~12	〃	4	—	—	4	加曾利EIV	SK7
6	F5b <sub>7</sub>		不整円形	4.0×3.7	13~17	〃	8	—	—	8	不明	
7	F5c <sub>2</sub>		〃	4.0×3.9	10~13	〃	2	—	—	5	〃	
8	F5f <sub>4</sub>	N-6°-W	楕円形	4.4×3.9	14~17	〃	3	—	—	5	〃	
9	F5f <sub>5</sub>	N-38°-E	〃	4.3×3.7	12~20	〃	5	—	—	7	〃	SK39・40
10	F5e <sub>8</sub>		円形	4.2×4.0	11~20	〃	5	—	—	7	〃	
11	F5e <sub>0</sub>		〃	径5.1	5~11	〃	14	中央	土器片 囲い	6	加曾利EIII	
12	F5h <sub>8</sub>		不整円形	径3.8	7~11	〃	8	—	—	5	〃	
13	F5h <sub>4</sub>		〃	4.0×3.8	12~20	〃	5	—	—	4	加曾利 EIII~IV	
14	F5i <sub>3</sub>	N-73°-W	(楕円形)	5.4×(4.8)	8~13	〃	6	—	—	3	加曾利EIII	
15	F6c <sub>3</sub>	N-75°-E	( 〃 )	4.8×4.0	28~32	〃	5	—	—	10	加曾利 EIII~IV	SK169
16	F4h <sub>0</sub>	N-6°-E	( 〃 )	5.2×4.5	8~17	〃	9	—	—	3	加曾利EIII	
17	F5j <sub>3</sub>	N-84°-W	( 〃 )	5.2×(3.9)	12~14	〃	6	—	—	5	不明	
18	F4i <sub>7</sub>	N-20°-W	( 〃 )	4.1×3.6	14~23	〃	5	—	—	2	加曾利EIII	
19	F4i <sub>8</sub>		不整円形	3.7×3.3	10~12	〃	5	—	—	3	不明	SK122, 123 SD-9
20	G4a <sub>9</sub>		円形	5.0×4.6	12~17	〃	6	—	—	3	〃	SK119
21	F5c <sub>4</sub>	N-34°-E	楕円形	4.6×4.1	18~29	〃	8	—	—	7	加曾利EIII	
22	F5j <sub>4</sub>	N-68°-E	〃	4.2×3.6	8~14	〃	6	—	—	4	不明	SK76, 118
23	F5b <sub>9</sub>	N-35°-E	(楕円形)	5.2×(4.2)	10~15	〃	8	—	—	3	〃	SK6L, SD47
24	F5c <sub>0</sub>		不整円形	径4.2	12~16	〃	10	—	—	7	加曾利EIII	SK61, 120
25	F6i <sub>2</sub>	N-43°-E	楕円形	4.4×3.9	6~12	〃	8	中央	地床	4	〃	
26	G6f <sub>6</sub>	N-66°-E	〃	4.2×2.1	16~20	〃	11	〃	〃	6	〃	
27	G6h <sub>5</sub>	N-32°-E	(楕円形)	3.8×(3.4)	6~12	〃	5	〃	〃	8	〃	
28	G5c <sub>1</sub>	N-90°-E	〃	5.3×4.8	15~19	〃	8	—	—	4	加曾利 EIII~IV	
29	G4d <sub>0</sub>		円形	径3.9	13~16	〃	7	—	—	5	不明	
30	G4e <sub>0</sub>		円形	径4.6	18~30	〃	6	—	—	5	加曾利EIII	
31	G5f <sub>4</sub>		〃	径3.6	12~16	〃	6	—	—	4	〃	
32	G5h <sub>3</sub>	N-12°-W	楕円形	4.5×4.0	14~30	〃	7	—	—	5	〃	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		床面	ピット数	炉		覆土(層)	時 期	備 考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位置	種類			
33	G6i <sub>4</sub>	N-34°-E	〃	3.7×3.3	8~11	平坦	4	中 央 北東寄り	地 床	5	加曾利E III	
34	H5b <sub>7</sub>	N-86°-W	〃	4.7×4.25	10~16	〃	7	—	—	7	〃 〃	S K 198
35	H5c <sub>8</sub>	N-2°-W	〃	4.2×3.6	14~20	〃	9	—	—	8	不 明	S K 189
36	H5b <sub>6</sub>	N-7°-E	〃	4.6×4.1	13~15	〃	10	—	—	4	加曾利E III	S K 197
37	H5e <sub>8</sub>		(円 形)	径(3.8)	12	〃	6	中 央	地 床	5	〃 〃	S K 201, S D-3
38	H5e <sub>9</sub>	N-38°-E	(楕円形)	3.8×(3.3)	16~22	〃	9	〃	〃	5	加曾利 E III~IV	S D-2
39	H6c <sub>1</sub>	N-26°-E	楕 円 形	6.8×3.7	21~33	〃	6	—	—	5	加曾利E III	
40	H6d <sub>1</sub>	N-62°-W	(楕円形)	(4,7)×4.1	22~45	〃	5	—	—	6	〃 〃	
41	G4f <sub>2</sub>		不整形円形	径5.5	10~19	〃	〃	中 央	地 床	9	〃 〃	
42	F4g <sub>9</sub>	N-40°-E	不 整 楕円形	(5.7)×5.1	31~34	〃	14	〃	〃	9	〃 〃	
43	G4h <sub>3</sub>	N-5°-W	楕 円 形	5.0×4.0	24~32	〃	5	—	—	7	不 明	
44	G4h <sub>6</sub>	N-1°-E	不 整 楕円形	5.1×(4.4)	26~41	〃	7	—	—	6	〃	
45	G5i <sub>1</sub>	N-32°-E	〃	5.5×4.6	24~30	〃	17	中 央	地 床	5	加曾利E III	
46	H5f <sub>7</sub>	N-48°-E	〃	5.8×5.2	15~19	〃	8	〃	〃	3	加曾利 E III~IV	
47	G4c <sub>5</sub>	N-4°-E	不整方形	5.4×4.7	28~36	〃	12	〃	〃	6	〃 〃	S K 212
48	H4j <sub>9</sub>		円 形	径4.2	47~53	〃	7	〃	〃	8	加曾利E III	
49	H4j <sub>2</sub>	N-44°-W	楕 円 形	4.6×4.15	16~24	〃	9	中 央 北寄り	〃	5	〃 〃	S K 312
50	H4h <sub>6</sub>		(円 形)	径(6.0)	26~72	凹凸	16	A南寄り B北寄り	A. B 地 床	7	〃 〃	S K 223, 226
51	H5b <sub>2</sub>	N-82°-E	楕 円 形	5.4×4.6	14~21	平坦	12	A中央 B,C南寄り	A. C地床 B土壁埋設	4	〃 〃	
52	H4c <sub>4</sub>	N-28°-W	〃	4.8×4.2	10~12	〃	9	中 央	地 床	3	〃 〃	
53	H4b <sub>0</sub>	N-51°-E	〃	6.8×6.1	14~31	凹凸	15	—	—	3	〃 〃	S K 310, 338, 339
54	H4g <sub>6</sub>	N-63°-W	(楕円形)	5.9×(5.0)	7~15	平坦	19	中 央 南寄り	地 床	3	〃 〃	
55	I4e <sub>9</sub>		円 形	—	24~30	〃	10	中 央	〃	5	不 明	
56	H4i <sub>0</sub>	N-31°-E	(楕円形)	(5.8)×(5.0)	16~20	〃	5	〃	〃	4	加曾利 E III~IV	
57	H4j <sub>9</sub>	N-57°-W	( 〃 )	5.7×(4.8)	21~26	〃	5	—	—	6	加曾利E IV	
58	I4a <sub>0</sub>	N-30°-E	( 〃 )	7.0×(5.6)	15~20	〃	5	中 央	地 床	4	〃 E III	
59	I4b <sub>9</sub>	N-14°-E	(楕円形)	(8.6)×(6.4)	19	〃	5	—	—	5	加曾利E III	
60	H5h <sub>1</sub>		円 形	径7.6	5~8	〃	8	中 央	地 床	—	加曾利 E III~IV	
61	I4c <sub>7</sub>	N-14°-W	(楕円形)	(6.2)×5.45	11~15	〃	7	—	—	*	不 明	
62	H5h <sub>1</sub>	N-22°-E	( 〃 )	(6.2)×(5.5)	14	〃	6	中 央	地床	—	加曾利E III	
63	H5i <sub>2</sub>		(円 形)	径(7.8)	20	〃	8	〃	〃	—	〃 〃	
64	H5i <sub>1</sub>	N-19°-W	(楕円形)	8.6×(5.2)	7~13	〃	7	〃	〃	—	〃 〃	
65	H5i <sub>1</sub>	N-32°-W	( 〃 )	8.2×6.8	16~22	〃	5	〃	〃	—	〃 〃	S K 373, 374, 375 376, 381, 382, 383
66	H4i <sub>0</sub>	N-60°-W	( 〃 )	(6.2)×(5.0)	18~22	〃	5	—	—	—	〃 〃	

(3)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		床面	ピット数	炉		覆土(層)	時 期	備 考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位 置	種 類			
67	H5i <sub>2</sub>	N-38°-E	( )	(4.9)×(4.3)	—	平坦	4	中央 西寄り	地床	—	〃 〃	
68	I4b <sub>9</sub>	N-41°-E	(楕円形)	(6.0)×(6.0)	20	〃	13	中央	地床	—	加曾利 E III~IV	
69	I4c <sub>9</sub>		円形	径5.8	14~ 22	〃	6	—	—	—	〃 〃	S K 402, 410
70	H4j <sub>8</sub>	N-30°-W	楕円形	7.6×6.4	18	〃	10	—	—	—	称名寺	S K 338, 389, 390 391
71	I4b <sub>8</sub>	N-49°-E	(楕円形)	(7.2)×(5.9)	15	〃	12	—	—	9	加曾利 E III	S K 392, 394
72	I4b <sub>7</sub>	N-19°-E	( )	(5.3)×(4.75)	—	〃	5	中央	地床	—	〃	
73	I4b <sub>7</sub>		(円形)	(5.5)×(5.3)	16	〃	7	〃	〃	4	加曾利 E III~E IV	S K 395
74	I4e <sub>9</sub>		( )	(6.7)×(6.4)	23~ 44	〃	10	〃	土器埋設	—	加曾利 E III	
75	I4e <sub>0</sub>	—	—	—	—	〃	2	?	地床	—	不明	
76	H5i <sub>2</sub>	N-60°-W	(楕円形)	(7.3)×(6.3)	10~ 12	〃	8	中央	〃	6	〃	
77	H5i <sub>2</sub> i <sub>3</sub>		(円形)	径(5.6)	7~ 12	〃	11	〃	〃	3	加曾利 E IV	
78	H5i <sub>2</sub> j <sub>2</sub>		円形	径5.7	2~ 13	〃	7	〃	〃	—	不明	
79	H5j <sub>2</sub>	N-28°-E	(楕円形)	(5.8)×5.0	12~ 32	凹凸	8	〃	〃	11	〃	
80	I4f <sub>6</sub> f <sub>7</sub>		円形	径5.1	12~ 24	平坦	7	—	—	3	加曾利 E IV	
81	I4b <sub>4</sub>		(円形)	(5.6)×(5.2)	10	〃	7	—	—	4	加曾利 E III	
82	H4i <sub>3</sub>	N-22°-W	楕円形	6.3×5.5	4~ 11	〃	8	中央	地床	—	称名寺	
83	欠番											
84	I4b <sub>5</sub>		(円形)	径(5.6)	10~ 25	平坦	8	中央	地床	4	加曾利 E III	
85	I4b <sub>4</sub>	N-36°-W	楕円形	7.3×5.2	8~ 20	〃	6	〃	〃	3	〃	

表20

住居跡一覧表(7区)

(1)

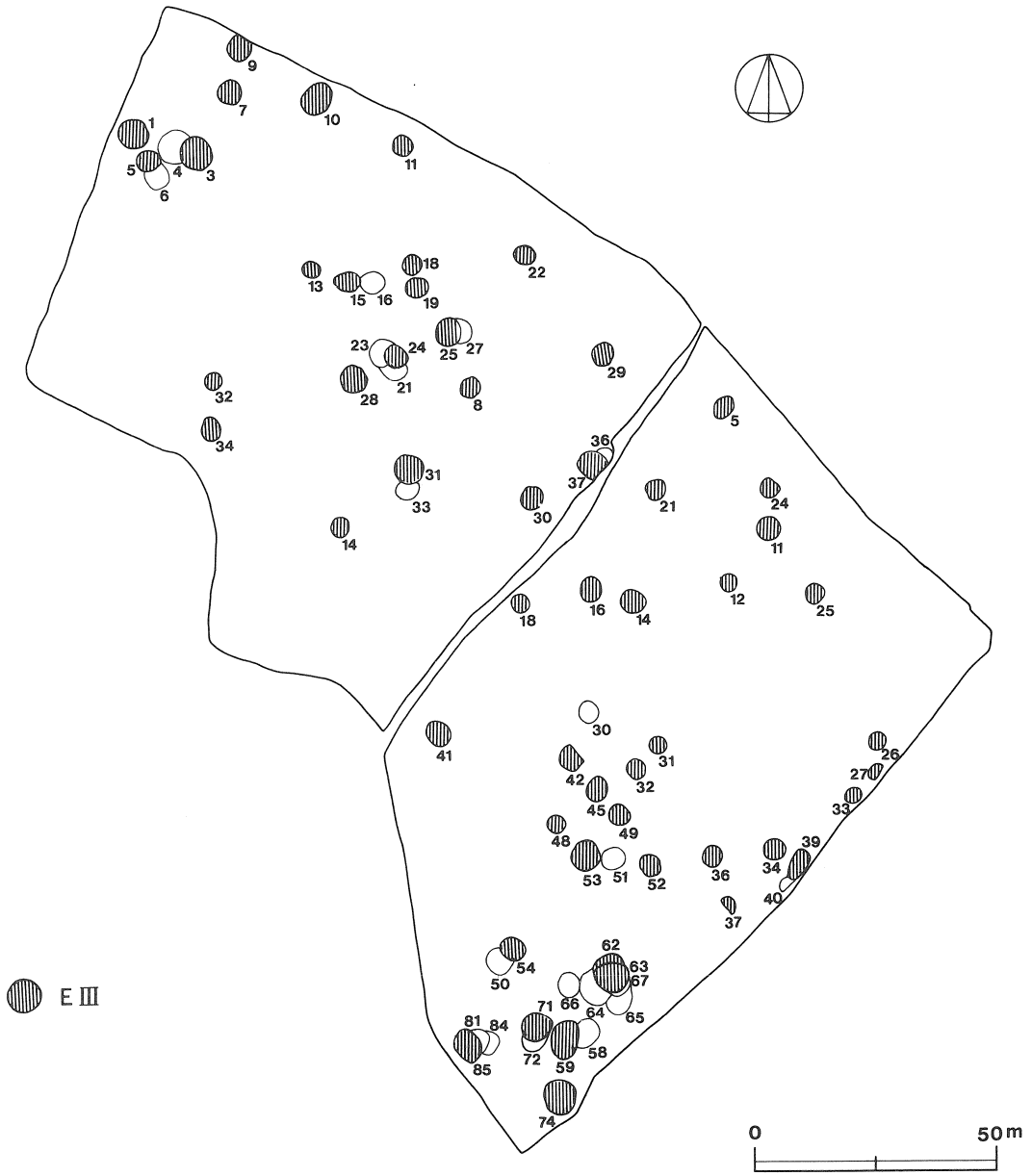
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		床面	ピット数	炉		覆土(層)	時 期	備 考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位 置	種 類			
1	D2d <sub>6</sub>	N-61°-W	楕円形	7.0×6.2	24~ 39	平坦	13	—	—	3	加曾利 E III	
2	D2c <sub>8</sub>	N-3°-W	〃	5.8×3.7	22~ 30	〃	6	—	—	3	加曾利 E III~IV	
3	D2f <sub>0</sub>	N-45°-W	〃	7.1×6.35	26~ 33	〃	8	中央	地床	5	加曾利 E III	S K 283~285, 313
4	D2e <sub>8</sub>	N-40°-E	〃	7.4×6.55	28~ 36	〃	9	—	—	3	〃 〃	
5	D2f <sub>7</sub>	N-83°-W	〃	5.1×4.3	24~ 26	〃	3	—	—	6	〃 〃	
6	D2g <sub>7</sub> g <sub>8</sub>	N-30°-W	〃	5.5×5.0	21~ 27	〃	3	—	—	6	〃 〃	
7	D3b <sub>1</sub>		円形	径5.2	15~ 26	〃	9	—	—	3	〃 〃	
8	E4h <sub>4</sub>		〃	4.3×4.0	16~ 27	〃	4	中央	地床	3	〃 〃	S K 1
9	C3j <sub>2</sub>	N-18°-W	(楕円形)	(5.9)×5.2	22	〃	8	—	—	3	〃 〃	
10	D3c <sub>6</sub>	N-48°-E	楕円形	7.0×5.8	23~ 26	〃	12	中央	地床	4	〃 〃	
11	D3e <sub>0</sub>		円形	4.5×4.3	20~ 26	〃	15	〃	〃	7	〃 〃	
12	D3g <sub>1</sub>	N-56°-W	楕円形	4.7×4.2	17~ 25	〃	5	—	—	3	不明	



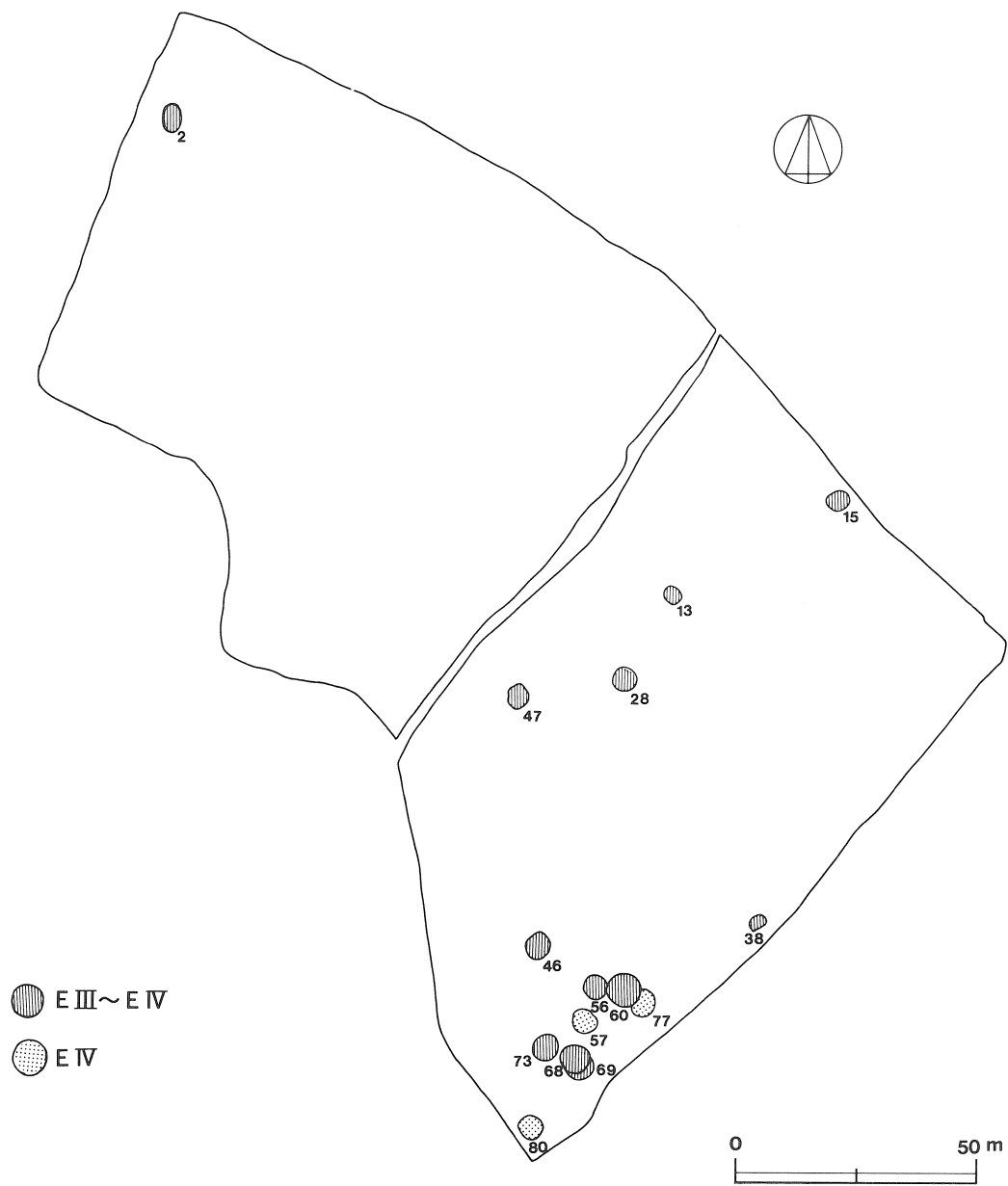
(2)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		床面	ビット数	炉		覆土(層)	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位置	種類			
13	E3b <sub>6</sub>	N-88°-E	〃	3.9×3.5	25	平坦	5	—	—	2	加曾利E III	S K 287
14	C3e <sub>7</sub>	N-38°-E	円形	4.3×3.9	6~14	凹凸	11	中央	地床	2	〃	
15	E3b <sub>8</sub>	N-89°-E	楕円形	5.7×4.1	20~32	平坦	12	中央 東寄り	〃	5	〃	S K 289
16	E3b <sub>9</sub>	N-86°-E	〃	5.7×4.8	16~32	〃	8	—	—	4	〃	
17	D3i <sub>9</sub>		円形	4.5×4.3	12~15	〃	5	—	—	4	不明	S K 286
18	E4a <sub>1</sub>	N-0°	楕円形	4.35×3.85	18~21	〃	4	—	—	5	加曾利E III	
19	E4b <sub>1</sub>	N-72°-E	〃	5.0×4.3	18~22	〃	7	中央	地床	6	〃	
20	D3i <sub>4</sub>	N-39°-W	〃	6.8×6.0	14~28	〃	8	—	—	4	不明	
21	E3g <sub>0</sub>	N-86°-W	〃	5.5×4.6	12~18	〃	3	中央	地床	5	加曾利E III	S K 355, 356 SD-3
22	E4a <sub>7</sub>	N-74°-W	〃	4.5×3.9	22~27	〃	5	—	—	2	〃	
23	E3f <sub>9</sub>	N-2°-W	〃	6.2×4.6	15	〃	3	中央	地床	5	〃	S K 354, 355 SD-3
24	E3f <sub>0</sub>	N-28°-W	〃	5.5×4.7	13~17	〃	4	—	—	5	〃	SD-3
25	E4e <sub>3</sub>		円形	6.0×5.9	20~26	〃	5	中央	地床	5	〃	
26	F3a <sub>1</sub>		(円形)	径(4.6)	—	〃	7	〃	〃	—	不明	
27	E4e <sub>3</sub>		円形	径5.4	19~26	〃	4	〃	〃	5	加曾利E III	
28	E3g <sub>8</sub>		〃	5.8×5.4	4~8	〃	8	〃	〃	3	〃	S K 418, 419
29	E5f <sub>1</sub>	N-3°-E	楕円形	4.9×4.3	13~20	〃	7	—	—	5	〃	SD-9
30	F4c <sub>7</sub>		円形	径4.8	19~27	平坦	8	中央	地床	6	加曾利E III	
31	F4b <sub>1</sub>		不整形円形	6.2×6.1	10	〃	11	〃	〃	2	〃	
32	E3g <sub>1</sub>		円形	径3.7	9~13	〃	6	〃	〃	6	〃	S K 393
33	F4c <sub>1</sub>	N-81°-E	(楕円形)	5.2×(4.0)	—	〃	3	—	—	2	〃	S K 392, 394
34	F2j <sub>0</sub>	N-5°-W	楕円形	4.9×4.0	3~5	〃	6	中央	地床	2	〃	S K 423, SD-6
35	F4h <sub>5</sub>	N-19°-E	〃	3.8×3.4	12~17	〃	1	—	—	1	称名寺	
36	F5a <sub>1</sub> b <sub>1</sub>		(円形)	径(4.7)	22	〃	3	—	—	4	加曾利E III	S K 457
37	F4b <sub>0</sub>	N-49°-W	(楕円形)	(6.2)×5.2	12~21	〃	13	中央	地床	6	〃	S K 421

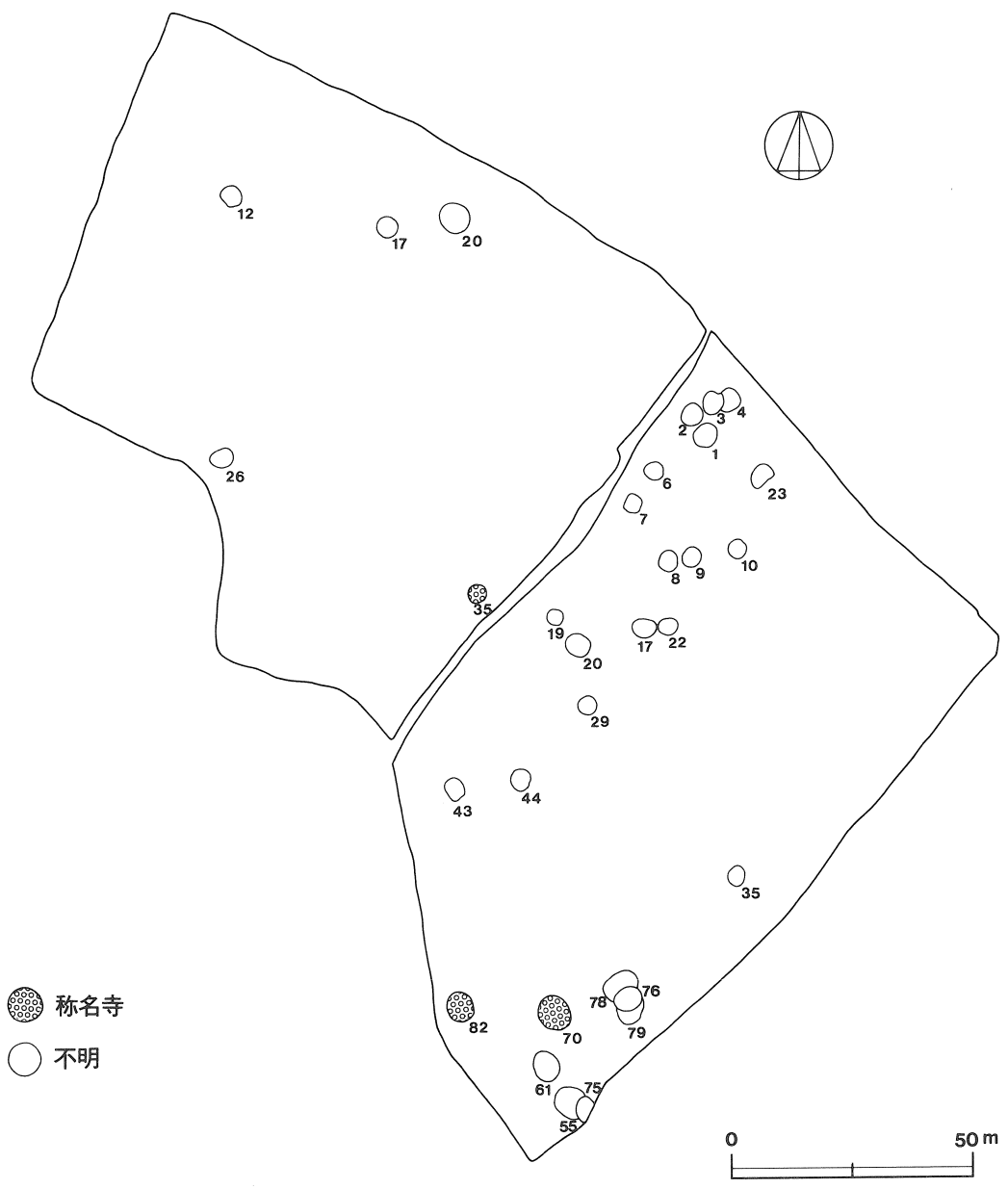
IV期の住居跡もIII期と同じように少なく、6区に2軒、7区に1軒の計3軒である。6区の2軒は、住居跡どおしの距離が13.5m離れて検出されている。また、2区でも称名寺式期の住居跡が3軒検出され、うち2軒(第102・151号住居跡)は約13m離れており、残りの1軒(第60号住居跡)は、前記の2軒からは55mも離れて位置している。このように、2区の2軒、6区の2軒(第70・82号住居跡)と、この時期の集落形態は、約13mぐらいの距離をおいて、2軒1単位ほどで構成されていたものと考えられる。



第652図 加曾利E III期住居跡分布図



第653図 加曾利E III~E IV・E IV期住居跡分布図



第654図 称名寺期等住居跡分布図

## 2 土壌について

当遺跡の6・7区から検出された土壌は6区で423基、7区で474基の計897基を数えるが、これらの土壌のうち、調査中に2基に分かれたり、炉穴、地下式墳、粘土貼り遺構に分類したものや、欠番などが出たため、最終的に土壌として整理した数は6区で422基、7区で468基の計890基である。890基の土壌は様々な形態を示しており、住居跡内、溝内に位置するものや、土壌どおしで重複しているものもある。また、後世の攪乱穴と考えられる土壌が56基含まれている。なお、時期が縄文時代中期後葉と判断されるものは147基で、約6基に1基の割合である。形態などから一律に分類することは問題があるが、攪乱穴を除く834基の土壌について、前記の形態分類に従って概略を述べることにする。なお、形態分類については、前記のとおり次のように分類してある。

○形態は次の要領で分類した。

分類 平面形と断面形でA～Fに、規模でI～IIIに、深さで1～3に、ピットの有無でa、bに分類した。

### (1)平面形と断面形

- A 平面形が円形、楕円形で、壁は外傾、ゆるやかに立ち上がるもの。
- B 平面形が円形、楕円形で、壁が垂直に立ち上がるもの。
- C 平面形が円形、楕円形で、壁がフラスコ状に立ち上がるもの。
- D 平面形が方形、長方形のもの。 E 平面形が不定形のもの。 F 攪乱穴。

### (2)規模

- I 長径が1 m未満
- II 長径が1 m以上2 m未満
- III 長径が2 m以上

### (3)深さ

- 1 深さが50cm未満
- 2 深さが50cm以上1 m未満
- 3 深さが1 m以上

### (4)ピットの有無

- a 底面にピットを持つもの
- b 底面にピットを持たないもの

A類 A類は平面形が円形や楕円形で、壁が外傾あるいはゆるやかに立ち上がる土壌である。数は573基で、全体の69%を占める。なかでもA II1b(平面形が円形や楕円形で、長径が1 m以上2 m未満、深さは50cm以下でピットをもたない土壌)はA類の中での49%で半数に近い。6・7区ともほぼ調査区の全域から検出されている。しかし、分布状況には明確な規則性はみられない。遺物は覆土から少量出土しているものが多い。時期が判明するものの多くはこのA類である。

B類 B類は平面形が円形や楕円形で、壁が垂直に立ち上がる土壌である。数は181基で、全体の22%を占めている。また、深さが1m以上もある円筒形の土壌がこの181基のうち約8%を占めている。A類と同じく時期が判明しているものもある。

円筒形状以外の土壌の性格は把握できなかったが、円筒形状土壌の特質として、覆土が自然堆積にちかい状態にあること、覆土の下層にローム粒子・ロームブロックが多く含まれていること、覆土中の遺物がB類の他の土壌よりも多く出土していることである。円筒形状土壌の性格は、墓壙説・貯蔵壙説・作業場説などがあるが、南三島遺跡6・7区については決定的な資料は残されていない。墓壙については、人骨の出土が有力な裏づけ資料と考えられるが、ハードローム層は人骨の保存に適していないため、遺存することはあまりない。しかし、墓壙掘削後すぐに埋め戻されるので、1～2層の単純な土層堆積をするのが普通である。6区の第281号土壌（2層）、第354号土壌（2層）、7区の第354号土壌（1層）が該当すると思われる。貯蔵壙については、炭化物などの出土、あるいは食料に関連ある遺物がわずかでも出土することが有力な手がかりと考えられるが、それらの出土はなかった。ただ、食物の加工に使用されたと考えられている石皿を出土した6区の第144号土壌が該当すると思われる。作業場としては、作業ができるほどの規模の大きい6区の第194号土壌（長径2.05m・短径1.92m）、第156号土壌（径1.8m）などが考えられる。しかし、残りの円筒形土壌や3つの説にあてはめた6基の土壌についても、決定的な資料に欠けるため詳細は不明である。また、遺物量が多いのは、覆土中の出土から考えて、土壌使用後に、使用済みの土器片を捨てたものと思われる。

C類 C類は平面形が円形や楕円形で、壁がフラスコ状に立ち上がる土壌である。数は6区で4基、7区で3基の計7基が検出されている。全体の0.8%と非常に少ない。7基とも壁がフラスコ状に立ち上がる、いわゆる袋状土壌である。7基の中で、時期決定の遺物が出土し、時期が判明しているものは4基である。

袋状土壌の性格としては、墓壙・貯蔵壙・粘土採掘壙などがあるが、いずれも決定的資料に欠ける。墓壙・貯蔵壙は前記の円筒形状土壌と同じ理由から考えにくく、粘土採掘壙としては、土壌の底面が粘土層まで及んでないため、やはり不適當である。現段階では、7基の性格は不明である。

D類 D類は平面形が方形や長方形の土壌である。数は37基で、全体の4%を占めている。壁は垂直に立ち上がり、底面が平坦なものが大部分である。また、底面にピットをもっているものが多い。覆土は黒褐色土系が多いので、時期は縄文時代でなく、近世以降の可能性もある。さらに、7区に検出されたD類の土壌は、大形で、規模が2m以上のものが大部分で、遺跡南部にまとまって検出されているため、地下式壙に関連あることも

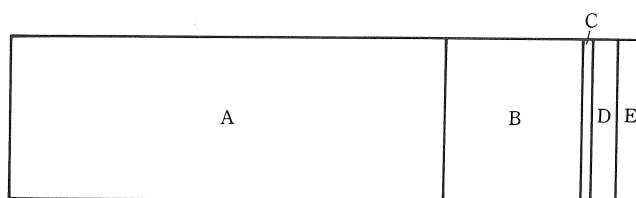
考えられる。

E類 E類は平面形が不定形の土壌である。数は36基で、全体の4%を占めている。壁は外傾して立ち上がり、深さは浅いものが多い。底面は平坦なもの、凹凸のあるものとの半々である。時期、用途については資料が乏しく不明である。

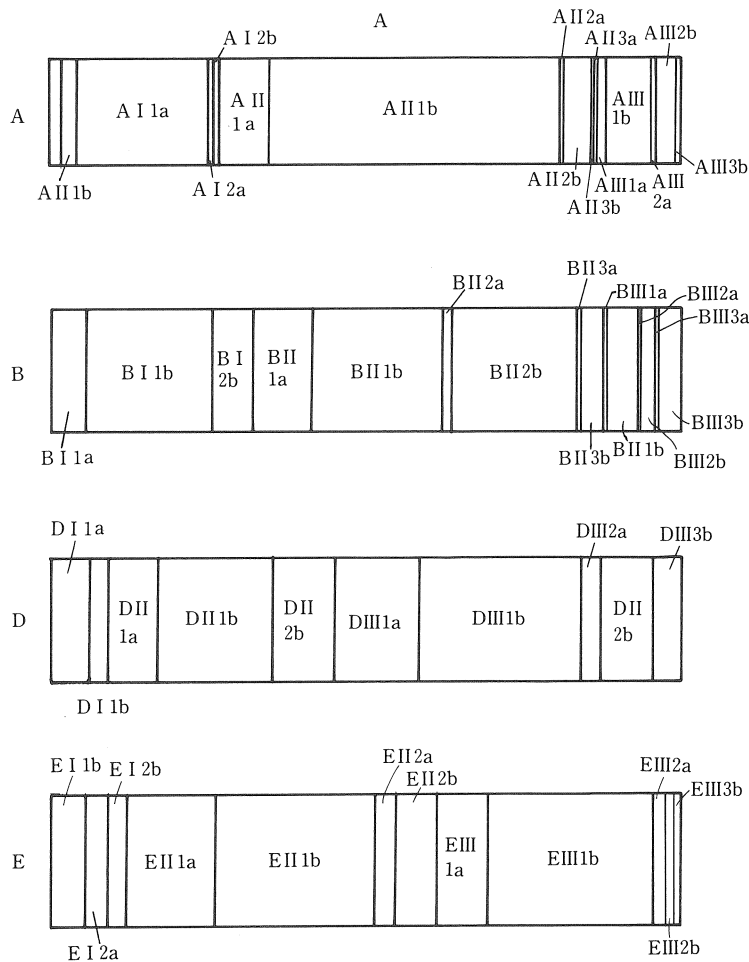
F類は後世の攪乱穴と考えられるもので、6区で20基、7区で36基の計56基検出されている。56基とも壁は垂直で、底面は平坦である。また、深さも50cm前後のものが多い。覆土はロームブロックなどを含む黒褐色土で、締まりはない。さらに、覆土に匂いが残っていたり、覆土中にビニールの切れ端などが見つかる場合が多い。用途は後世の芋穴、ごみ穴として使用されたものと思われる。

表 21 土壌形態別集計表

		A		B		C		D		E		計	F	
		a	b	a	b	a	b	a	b	a	b			
I	1	16	124	9	38		1	2	1		2	193	56	
	2		6		11					1	1	19		
	3													
	小計	16	130	9	49		1	2	1	1	3	212		
II	1	37	281	14	40	1		3	7	5	9	397		
	2	5	30	2	38		2		4	1	2	84		
	3	1	1	1	8		3					14		
	小計	43	312	17	86	1	5	3	11	6	11	495		
III	1	11	50	3	9			5	10	3	9	100		
	2	2	7	1	4			1	3	1	1	20		
	3		2	1	2				1		1	7		
	小計	13	59	5	15			6	14	4	11	127		
合 計		72	501	31	150	1	6	11	26	11	25	834		



土壌形態分類



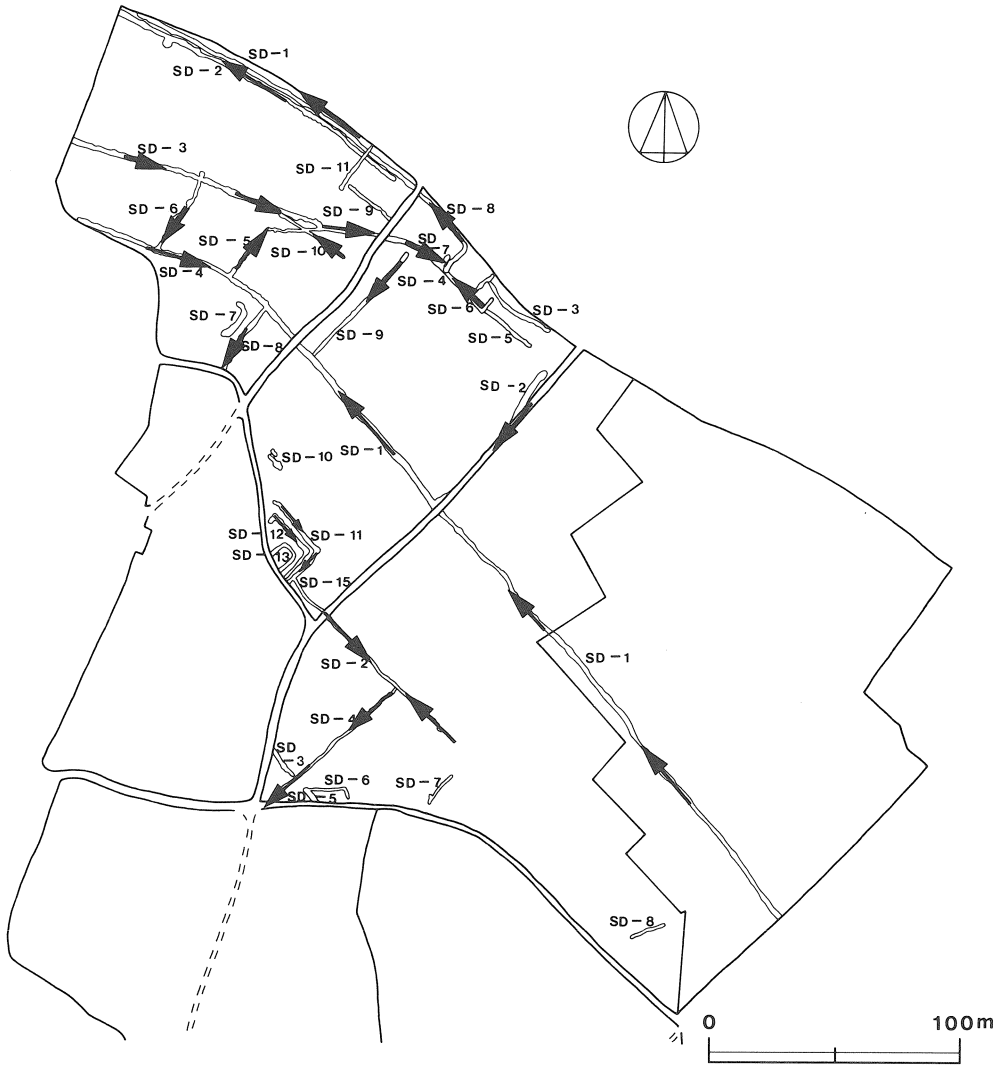
土壤形態別分類

### 3 溝について

当遺跡6・7区から検出された溝は25条である。調査区の全域にわたって検出されているが、6区の第1号溝が7区の第4号溝と、6区の第4号溝が7区の第3号溝と、6区の第8号溝が7区の第1号溝とそれぞれつながっており、同時期に掘りこまれたものと考えられる。

25条のうち、東西方向に走るものが6区の第1・3～5・10・15号溝、7区の第1～4・9・10号溝の計12条、南北方向に走るものが6区の第2・7・9号溝、7区の第6・8・11号溝の計6条である。また、方向が途中から変わるものは7条で、6区の第6・8・11～13号溝、7区の第5・7号溝である。長さは最長のものが6区の第1号溝（7区の第4号溝）で392.9mである。





第655図 南三島遺跡1・2・6・7区内溝方向図

他に、100m前後の溝は3条、60m前後のものが2条、30m前後のものが8条、20m前後のものが6条、10m以下のものが2条である。上幅も6区の第1号溝が最大幅で160～220mである。最小幅は7区の第11号溝で20～40cmである。深さは6区の第2号溝の104cmの部分が最も深く、7区の第2号溝の4cmの部分が最も浅い。

出土遺物は陶器片が7区の第4号溝から、高坏の坏部（和泉式）が7区の第3号溝から、馬骨（遺存状態などから明治以降のものと思われる）が6区の第1号溝・7区の第3号溝から出土している。

大部分の溝は各所で連結しているように、他の溝と合流している。6区の第1号溝（7区の第4号溝）に、6区の第2・9号溝、7区の第5・6・8号溝が合流している。7区の第3号溝（6区の第4号溝）には、7区の第5・6・10号溝、6区の第7・8号溝が合流している。6区の第3号溝に、6区の第5・6号溝が、6区の第11号溝に6区の第15号溝が合流している。

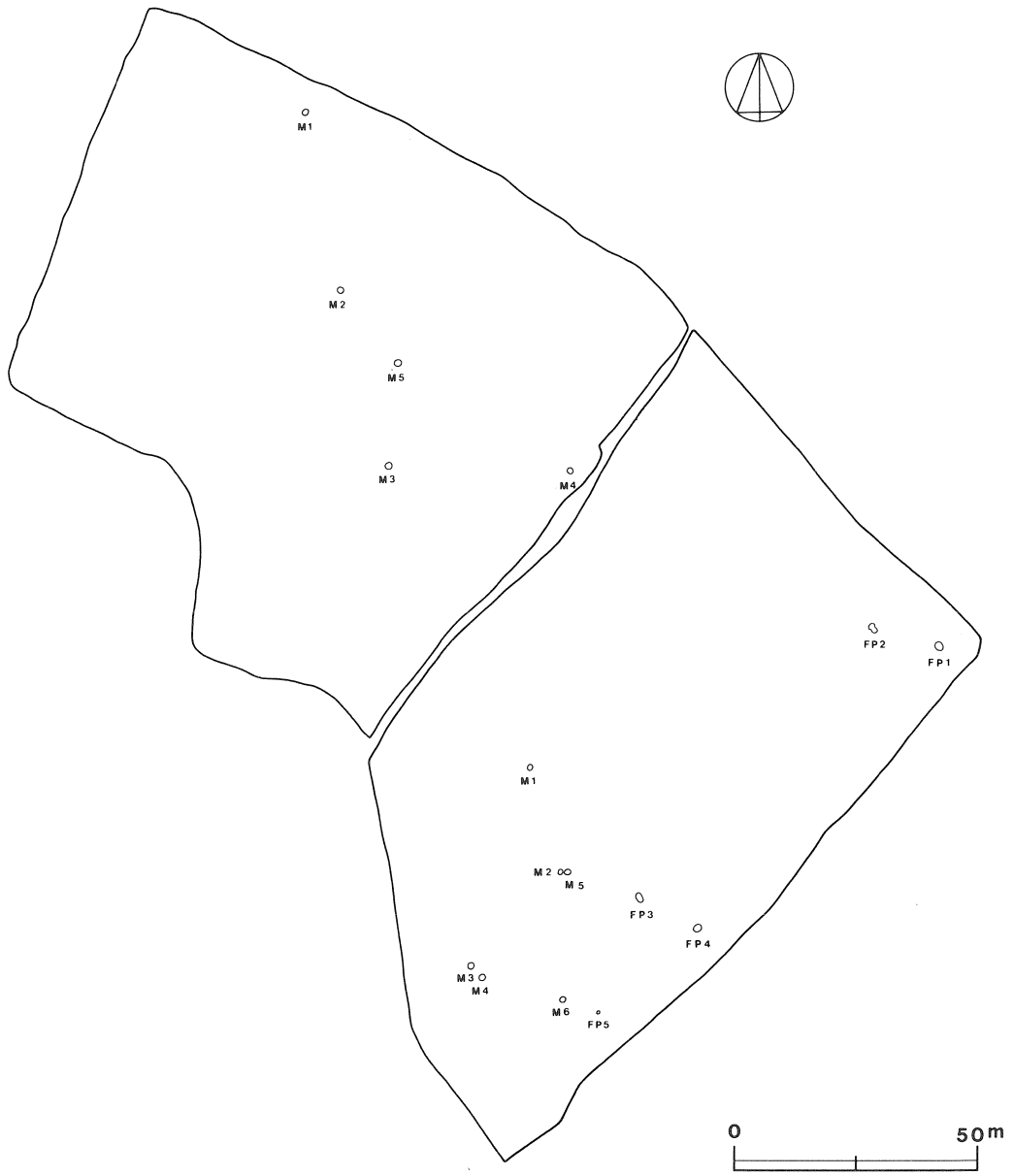
各溝の高低差を見ると方向性がつけられ、第655図の矢印のようにとらえることができる。それによると6区の第1・2・4・7～9号溝、7区の第1・3～6・8・10・11号溝はすべて結ぶことができ、用水溝・排水溝として使用されたものとして考えられる。また、前年度調査の2区の第1号溝ともつながり、遺跡の東部や西部から水を運び、遺跡の中の最低のレベルをもつ7区の第8号溝を通じて遺跡の外へ排出している。同様に、6区の第11号溝と第15号溝が結ばれ、2区の第2・4・5号溝を通じて遺跡の南部に排水している。また、余分な水を7区の第1号溝を通じて遺跡の北西部へ送り出すかたちをとっているように、レベルから考えられる。（第655図参照）

溝の構築時期は馬骨の出土状況や、7区を中心にして花畑（グラジオラス栽培）、苗木畑として使用していたという古老の話から、20～30年前の可能性が強い。出土遺物の中の陶器片・高坏は覆土の中ほどからの出土なので、溝埋没途中での流れこみの遺物と考えられる。

#### 4 埋甕遺構について

当遺跡6・7区から検出された埋甕遺構は6区から6基、7区から5基の計11基である。6区の南部と7区の中央に分布している。11基のうち9基は住居跡内から検出されたもので、6区の第53号住居跡内に2基、第54号住居跡内に2基、第66号住居跡内に1基、7区の第10号住居跡内に1基、第15号住居跡内に1基、第31号住居跡内のピット内に1基、第37号住居跡内に1基である。残りの2基のうち1基は7区の第316土壌内に、1基は単独で検出されている。

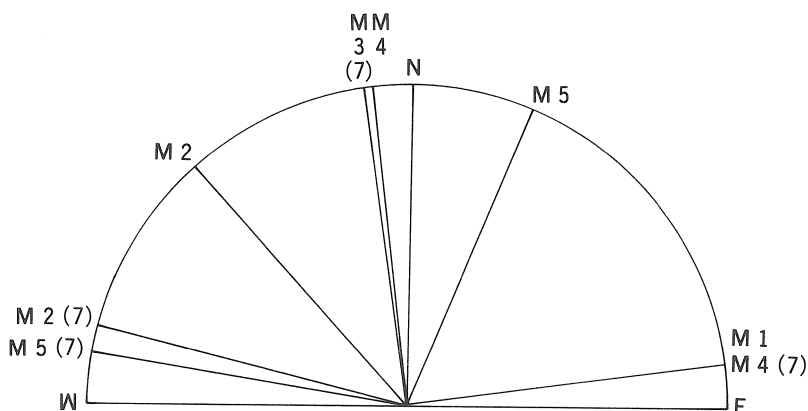
使用されている埋設土器は深鉢の一部が欠けたものがほとんどである。すなわち、胴部と底部で口縁部が欠けたものや、口縁部と胴部で底部が欠けたものなどである。また、底部だけのものも1基検出されている。完形品の土器を使用したものは、7区の第316号土壌内にある第5号埋甕遺



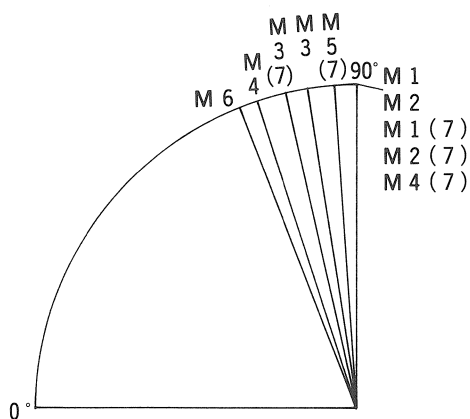
第656图 埋甕遺構・炉穴分布图

構だけである。さらに、7区の第10号住居跡内から検出された第1号埋甕遺構は土器を伏せた形で埋設している。使用されている土器は縄文時代中期後葉の加曽利E III式期のものである。また、埋甕遺構が検出された住居跡も加曽利E III式の時期のものが6軒、加曽利E IV式の時期のものが1軒である。また、住居跡外から検出された埋甕遺構も近くの住居跡と関連あるものと考えれば、加曽利E III式の時期の住居跡が近くにあるので、当遺跡の11基のうち、9基は加曽利E III式期のもの、1基は加曽利E IV式期のもの、1基は加曽利B式期のものと考えられる。

7区の第3・5号埋甕遺構を除く9基は、埋設土器を収納できるだけのぴったりしたスペースの掘り方をし、その覆土は住居跡などの覆土と大きな違いはなかった。さらに、住居跡内に所在する埋甕の位置は、その住居跡の南側か西側に埋設されているのが特徴である。掘り方の長径方向は第657図からみて、各方向に散らばり、掘り方などの規則性はみいだせないが、埋設土器の置



第657図 埋甕遺構の掘り方の長径方向



第658図 埋設土器の傾斜角度

き方は、すべて底面と垂直、あるいは垂直に近い置き方である。(第658図)

7区の第10号住居跡内にある第1号埋甕遺構は、逆に埋設された埋甕である。第31号住居跡内にある第3号埋甕遺構は、掘り方がなく、ピット(P<sub>11</sub>)内に埋設されており、この2基は特異な埋甕遺構である。

## 5 炉穴について

当遺跡から検出された炉穴は5基である。位置は6区の北西部に2基、6区の東部に2基、6区の南部に1基である。

規模は第1～4号炉穴までは長径が1m以上、2m未満のものである。第5号炉穴は当初第83号住居跡の炉跡として調査したが、出土遺物が他の炉穴と同じ縄文時代早期の時期のものであることから、第5号炉穴とした。長径が1m未満で小規模のものである。底面までの深さは12～35cmである。第5号炉穴は遺構確認面から焼土がみうけられたので、比較的浅いものであるが、本来はもっと深く、重複している住居跡構築の際に上面を削られたものと考えられる。

炉跡の部分は、長径規模が27～80cmで、焼土の厚さは6～11cmである。5基とも炉部は1個だけ築かれている。

6区において検出された炉穴は、数は少なく、検出された位置も2区に近いので、2区を中心とした炉穴群の縁辺部と考えられる。(第656図)

## 6 地下式墳について

当遺跡から検出された地下式墳は5基である。5基とも7区の南部、F3大調査区内に検出されている。5基とも主室と竪坑から作られているが、第1～3・5号地下式墳の主室の天井部は崩落していた。第4号地下式墳だけが天井部を残していた。

主室は5基とも長辺が1.92～2.52m、短辺が1.7～2.1mの長方形をしており直方体に掘られている。底面から1.2～1.5mで天井部に達するが、前述のように天井部が崩落して、遺構確認面からの深い竪坑状になっているものが多い。また、底面はハードルーム層を掘りぬいて、その下の地層である砂質粘土層まで掘り込まれている。竪坑の確認面の平面形は、楕円形、不定形をしており、底面は、一辺0.8～1.32mの方形をしているものが多い。第5号地下式墳を除いて、竪坑の底面は主室へ坂状に傾斜をし、主室への入り口の要素を示している。第5号地下式墳の竪坑の底面は平坦で、主室より50cm以上高い段状をなしており、主室より一段高くなっている。また、第3・4号地下式墳は、竪坑の脇にピットが掘られている。

第1～4号地下式墳は第4号溝の南側に位置し、主軸方向もN-4°～22°-Eを示しているが、第5号地下式墳だけはN-55°-Wと西方向を指している。また、他の4基からは少し離れて位置している。

土層は10層以上堆積しており、暗褐色土が主であるが、種々の層が堆積している。天井部が崩落している第1号地下式墳は、各層が主室の底面と平行して堆積しているが、他の4基の地下式墳の主室、および5基の竪坑の土層堆積は竪坑から主室へ斜め下に落ちこんだような堆積のし

かたをしている。

遺物は第1号地下式墳から131点の古銭、灯明皿、陶器片が出土している。第2号地下式墳からは古銭1点が出土している。第3号地下式墳からは炭化した木材が出土している。また、5基とも多量の縄文土器片が出土しているが、これらの縄文土器片は地下式墳に関連するものではなく、埋没途中で流れこんだものと思われる。

古銭のうち約半数は寛永通寶であるため、第1・4号地下式墳の時期は、江戸時代前期と考えられる。また、第2・3号地下式墳も、位置・規模・主軸方向などから考えて、第1・4号地下式墳とほぼ同じ時期のものと思われる。しかし、主軸方向が他の4基と違う第5号地下式墳の時期は不明である。性格・使用目的は5基とも明確ではないが、出土遺物の古銭や灯明皿などから、墓墳と判断している。

## 7 粘土貼り遺構について

当遺跡から検出された粘土貼り遺構は2基で、2基とも7区の南部に位置している。形状・規模は、第1号粘土貼り遺構が長方形で、長軸が1.6m・深さ21mである。第2号粘土貼り遺構は楕円形で、長径2.3m・深さ54mである。粘土の厚さは第1号粘土貼り遺構が6～8cm、第2号粘土貼り遺構が4cm前後で、壁の一部や底面を覆っている。

出土遺物は少なく、第1号粘土貼り遺構から碎石1個、第2号粘土貼り遺構から陶器片1点と縄文土器片が少量出土している。時期は中世以降と判断できるが、詳細は不明である。また、性格、使用目的も把握することはできなかった。

## 第2節 遺物

### 1 土器について

当遺跡6・7区は、10万㎡におよぶ南三島遺跡の一部であり、調査の都合上6区と7区に分けて発掘調査をすすめてきたため、遺構、遺物についての報告は、各区ごとに行なってきた。しかし、本来は同一遺跡であるので、土器・土製品などの考察は、6・7区を分けずに記載することにした。

当遺跡出土の縄文土器は、草創期から晩期にわたっている。最古の資料は撚糸文系土器群に属するもので、稻荷台式土器に比定できる。次は、貝殻条痕文系土器群に属するもので、そのほとんどが野島式土器であり、炉穴などの遺構を伴っている。野島式土器については後記する。前期では、前半の黒浜式土器が若干みられ、続いて浮島式土器・興津式土器が少量出土している。前期末葉の十三菩提式土器もわずかに認められる（当遺跡2区出土資料中に良好なものが出土して

いる)。中期に入っては、阿玉台式土器の古い段階に相当するものが少量出土している。6区の第149号土壇出土例が代表的なもので、貝ブロックを伴っている。中期中葉の加曾利EⅠ・Ⅱ式期の土器はほとんどなく、後半の加曾利EⅢ・Ⅳ式期に至って、当遺跡の一つの最盛期をむかえる。住居跡・土壇等の遺構が多く、大量の土器が出土している。加曾利EⅢ・Ⅳ式土器については後記する。後期では、称名寺式・堀之内式・加曾利B式・安行Ⅰ・Ⅱ式土器と継続しているが、量的には少なく、極わずかに検出されているにすぎない。称名寺式期の住居跡と考えられるものが6・7区あわせて3軒検出されたこと、6区の第1号埋甕遺構の時期が加曾利B式期であることなどが注意されるだけである。晩期の土器片は極少量で、数片出土したにすぎない。縄文後期の遺構は、隣接する当遺跡の3区・5区などから検出されることが予測される。

当遺跡の主体となる時期は、縄文早期の野島式期、中期の加曾利EⅢ・Ⅳ式期であるが、土器は草創期から晩期のもので認められた。当遺跡の性格を理解する上では、たとえ小さな土器片でも貴重な資料である。

#### (1) 野島式土器について

当遺跡の2区および今回報告する6区から、野島式土器を伴う炉穴が検出されている。ここでは、野島式土器について茨城県内出土の資料を中心にまとめてみる。

野島式土器は、広義の茅山式土器に含まれるもので、茅山式土器を4段階に細分した岡本勇氏らの細分案<sup>(1)</sup>に従えば、その最も古い段階に位置づけられるものである。野島式土器の研究史<sup>(2)</sup>については、金子直行氏などがふれられているので省略し、茨城県内の出土例<sup>(3)</sup>について記述する。

県内の代表的な遺跡としては鹿島町伏見遺跡<sup>(4)</sup>があり、他に北茨城市細原遺跡<sup>(5)</sup>、日立市兵馬山遺跡<sup>(6)</sup>、勝田市高野寺畑遺跡<sup>(7)</sup>、大洗町祝町Ⅲ遺跡<sup>(8)</sup>、潮来町挾間貝塚などでもわずかに出土している。この中で器形をうかがえる個体を有しているのは、伏見遺跡だけである。これに対して当遺跡の2区および6区から出土した野島式土器には、数個体の器形をうかがえる資料が含まれており、県内でもトップクラスに位置づけられる資料と思われる。

野島式土器は、神奈川県横須賀市野島貝塚出土の土器を標式として設定されたもので、平縁、波状縁を呈し、尖底を基本とする深鉢形土器を主として<sup>(9)</sup>いる。胴部の屈曲はほとんどないものが多いが、後半に至ると屈曲をなすものもみられるようになり、小さな平底を呈する例も含まれてくる。器壁は薄手のものが多く、繊維の混入は全体的にみられるが、量は少ないものが多い。

文様は、細・微隆起線によって直線的・平行線的・幾何学的区画を行ない、区画内には同様の微隆起線や太・細沈線文を充填するものが目立っている。中には曲線的区画を施す例も認められる。その他、太・細沈線によって区画を行ない、区画内に太・細沈線文を充填する例もあるが、微隆起線による資料にくらべて沈線による区画の資料は少ない傾向がうかがえる。口唇部にはキザミ

目を付す例が多く認められる。野島式土器の後半に至ると、区画の細・微隆起線の上にキザミ目や押捺を加える例が増加してくる。また、沈線も細沈線だけではなく、太い凹線状の沈線もみられるようになり、太めの隆起線や刺突文が多用される例が増加する。以上の文様を有する土器群は、いわゆる精製土器で、この他に条痕文・擦痕文だけを施す粗製土器も多く、それらの土器の口唇部にはキザミ目や押捺を有するものと有しないものの両者がみられる。

当遺跡 2 区の炉穴から出土した土器の様相を観察してみると、以下のように分けられる。各炉穴の番号および土器番号は、2 区の報報書掲載によるものである。

第 1 号炉穴	第265図 1～4
第 4 号炉穴	第239図 1
第 7 号炉穴	第265図 5～8
第 8 号炉穴	第265図 9～12
第11号炉穴	第265図13～15
第17号炉穴	第239図 2, 3 第265図16・17
第22号炉穴	第265図18～21
第23号炉穴	第266図 1
第32号炉穴	第266図 2
第33号炉穴	第266図 3～5
第34号炉穴	第239図 4, 第266図 6～8
第35 a 号炉穴	第266図 9
第35 b 号炉穴	第267図 1・2
第35 c 号炉穴	第267図 3
第38号炉穴	第267図 4～7
第41号炉穴	第267図 8・9
第51号炉穴	第267図10～12, 第268図 1・2
第55号炉穴	第239図 5
第56号炉穴	第268図 3・4
第58号炉穴	第239図 6, 第268図 5・6

以点、報告されている炉穴出土土器についてみてみると、第 1 号炉穴から出土した土器は、縦位の貝殻条痕文が主となっているが、第265図 1 の胴部片は、上端部に横位の隆線が付されており、この隆線が口縁部文様帯の下限を区画する可能性が高いものと観察される。第 4 号炉穴から出土した土器は、波状縁を呈する深鉢形土器で、口唇部にキザミ目を有している。口縁部文様帯が微隆起線で直線のおよび弧状に区画され、区画内に細沈線を充填している。第 7 号炉穴から出土



した土器は、貝殻条痕文を主としているが、第265図5の土器片の右端には微隆起線文らしいものが認められる。第8号炉穴から出土した土器も、貝殻条痕文が主であるが、第265図9の土器片には細い沈線文が施されている。第11号炉穴から出土した土器は、いずれも微隆起線による幾何学的・曲線的区画内に区画と同様の微隆起線が充填されている。第17号炉穴から出土した土器は、いずれも貝殻条痕文だけが施文されているもので、第239図2の直線的に開く尖底の深鉢形土器が古く、同図3の口頸部で緩くくびれ、口唇部が小波状を呈し、小さな平底を有する土器が新しいという重複関係が認められたと報告されているが、非常に貴重な調査所見というべきで、粗製土器における新旧を知る上で有力な手がかりとなるものである。第22・23号炉穴から出土した土器は、共に表裏面に貝殻条痕文が施されたもので、口唇部にキザミ目等は付されていない。第32号炉穴から出土した土器は1点で、細隆起線と微隆起線による施文が加えられており、細隆起線上には斜位のキザミ目が付されている。第33号炉穴から出土した土器は、貝殻条痕文が施されており、口唇部に斜位のキザミ目が加えられている。第34号炉穴から出土した土器は、細隆起線・微隆起線と沈線による施文が組み合わされたものである。第266図6～8は、細隆起線上には斜位のキザミ目が付され、微隆起線の一部には縦位の細かなキザミ目がつけられている。同一個体かと考えられるが確かではない。他に尖底部片が1点出土している。第35a号炉穴から出土した土器は、小さな山形の突起を有する深鉢形土器で、表裏面に貝殻条痕文が施文され、口唇部外端にキザミ目を付している。第35b・35c号炉穴からの出土土器は、微隆起線による幾何学的区画を施しているもので、区画内に細沈線を充填している。35b号炉穴からの出土土器は、2点で同一個体と思われる、山形の波状口縁を呈している。口縁部内面には斜位の沈線が施文されている。第35c号炉穴から出土した土器は胴部片である。第38・41・51号炉穴から出土した土器は、貝殻条痕文だけが施文されている。第41号炉穴から出土した第267図9、第51号炉穴から出土した同図10には、口唇部にキザミ目が加えられている。第51号炉穴から出土した第268図2は、条痕文を磨り消している。第55号炉穴から出土した土器は、小さな平底をなす底部片1点だけである。第56号炉穴から出土した土器は、貝殻条痕文だけが付されている。第58号炉穴から出土した土器は2種に分かれ、一方は貝殻条痕文だけを表裏面に施し、直線的に開く土器で、他方は太い隆起線と凹線による区画内に細沈線が充填されており、隆起線上には押圧が加えられ、凹線に沿って刺突文が施されている。

以上、各炉穴ごとに野島式土器の様相を記してきたが、ここで主要な文様要素ごとに分類してみると次のようになる。

- 1群 微隆起線による区画内に細沈線文を充填しているもの（第4・32・34・35b・c号炉穴）
- 2群 微隆起線による区画内に微隆起線文を充填しているもの（第11号炉穴）
- 3群 太隆起線と凹線による区画内に細沈線文を充填しているもの（第58号炉穴）

4 群 貝殻条痕文による施文が主となるもの

(第1・7・8・17・22・23・33  
34・35a・38・41・51・56・58  
号炉穴)

上記4群のうち1～3群のいわゆる精製土器については、野島貝塚の純貝層中における伴存状況<sup>(9)</sup>からみて著しい時間差を有するものとは考えられないが、微妙な時間差の存在する可能性は残されているものと思う。4群に含まれる第17号炉穴から出土した第239図2と3の新旧関係については、前記のとおりであり、これに対応する1～3群の土器における新旧関係も存在するものと思われる。

このような観点で、当遺跡6区の炉穴から出土した土器をみると次のように考えられる。

第1号炉穴 第377図1～5

第2号炉穴 第378図1～12

第3号炉穴 第379図1～5

第4号炉穴 第349図13

第5号炉穴 第380図1～3

第1号炉穴から出土した土器は4群に属し、口唇部にキザミ目を有している。第2号炉穴から出土した土器は4群土器を主とするが、第377図2・3のようにやや太めの沈線文を施している土器片も混在している。第3号炉穴から出土した土器は、微隆起線による区画内に細沈線文を施している1群が主体を占めている。また、第379図5はごく薄手の平底を呈する底部で、注目すべきものである。第4・5号炉穴から出土した土器は、4群に属する胴部片である。

6区から出土した土器で注意すべきものは、第2号炉穴から出土したやや太めの沈線による施文を有する土器片であるが、このタイプも野島貝塚の純貝層中の資料の内に類例が求められる。第3号炉穴から出土した土器に見られる微隆起線による区画内に施された細沈線間に刺突を付す技法は珍しいものである。これは後続する鵜ヶ島台式土器の口縁部文様帯の区画内に充填文様として刺突文が付されることへの布石とも考えられる。

この他に、当遺跡6区からは野島式土器が、他の時期の遺構内に混在したり、グリッドなどからも出土しているが、出土状況などから検討することができないので、本稿での検討対象からは除外した。

最後に、当遺跡2区および6区出土の野島式土器を最近の研究動向の中で位置づけてみたい。

野島式土器の編年については、金子<sup>(1)</sup>直行氏、瀬川<sup>(10)</sup>裕市郎氏、関野<sup>(11)</sup>哲夫氏の考え方が提示されている。金子氏は3段階細分説、瀬川氏は10段階に細分する案を提唱している。関野氏は後続する鵜ヶ島台式土器の検討に主題をおいているために、野島式土器の新しい段階についての見解を示すにとどまり、野島式土器全般については触れていない。

本稿では金子氏の案に従い、若干の検討を行なうことにしたい。

当遺跡2区、6区出土の野島式土器で、文様帯が構成されていてほぼ器形をうかがえる資料は、2区報告書の第239図1と6区の第3号炉穴出土の第379図1である。いずれも微隆起線による区画内に細沈線が充填されている1群のもので、基本的モチーフは、金子氏による文様構成模式図のHに類似するが、弧状区画や曲線的区画も加わっている。これらと2区の第58号炉穴から出土した土器を含めた1・3群土器は、文様構成などから考えて金子氏のいう第II段階におくよりも第III段階への過渡期ないしは第III段階へ降した方が適当ではないかと考えられる。また、2区の第11号炉穴から出土した土器は、微隆起線だけで文様を構成している2群に相当するもので、第II段階に属すると考えられ、野島式土器の確立期と表現されている段階に相当しよう。

なお、茨城県内の野島式土器で、金子氏のいう第I段階に対比されそうな資料は、日立市遠下遺跡<sup>(12)</sup>、古河市くぐや台遺跡<sup>(13)</sup>でわずかに認められるが、今後の検討が必要と思われる。この他の上記した県内の野島式土器を出土した遺跡の大半は、第II段階から第III段階に属するものと考えられる。

今後県内では、水海道市奥山下根遺跡、同市奥山C遺跡、同市西原遺跡などから野島式土器、鶴ヶ島台式土器等の良好な資料が出土しているので、その報告を待つて再度検討する機会をもちたいと考えている。

註1 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」『横須賀市立博物館研究報告（人文科学）』第6号 1962年

註2 金子直行「野島式土器について——金平遺跡出土土器を中心として——」『土曜考古』第6号 1982年

註3 小野真一『常陸伏見』伏見遺跡調査会 1980年

註4 瓦吹 堅『細原遺跡』北茨城市史編さん委員会 1982年

註5 阿久津久「兵馬山遺跡の土器」『領域研究』創刊号 1978年

註6 住谷光男「高野寺畑遺跡」『勝田市史 考古資料編』1979年

註7 藤本彌城「祝町III遺跡」『那珂川下流の石器時代研究 II』1980年

註8 西村正衛「茨城県潮来町狭間貝塚（第一次調査）」『学術研究』22号 1973年

註9 赤星直忠「神奈川縣野島貝塚」『考古学集刊』第1冊 1948年

註10 a 瀬川裕市郎「条痕文土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 1982年

10 b 瀬川裕市郎「野島式土器に関する2～3の覚え書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』7 1983年

註11 関野哲夫「鶴ヶ島台式土器細分への覚え書」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年

註12 石岡憲雄『日立市遠下遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会 1975年

註13 坂本 彰「古河市の遺跡（3）くぐや台遺跡」『若木考古』第89号 1968年

(2) 加曽利EⅢ・Ⅳ式土器について

当遺跡で最も多量に出土したのが、加曽利EⅢ・Ⅳ式土器である。本報告においては、6区・7区の各遺構ごとに出土土器を解説してきたが、ここでは、縄文時代中期後半から終末にかけての時期に相当するこれらの出土土器を分類し、検討を行ってみたい。

当遺跡出土の土器を深鉢形土器を中心に次のように分類した。

**第Ⅰ類** キャリパー形を呈する加曽利E式系統の土器群で、口縁部文様帯と胴部文様帯の2つの文様帯を有するもの。平縁と波状縁を呈するものの両者がみられる。

**a種** 口縁部文様帯を隆線と沈線によって、渦巻文と楕円文を主に区画し、胴部文様帯には直線的な磨消帯を垂下させるもの。

**b種** 口縁部文様帯を太めの沈線によって、円文と楕円文を主に区画し、胴部文様帯には直線的な磨消帯を垂下させるもの。

**第Ⅱ類** 胴部が緩くくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、底部が小さな平底をなすもので、口縁部から胴部にかけて両側にナゾリを加えた隆線によって大柄な渦巻文を主とした曲線的な文様を描いているもの。平縁と波状縁を呈するものの両者が見られる。

**a種** 両側にナゾリを加えた隆線による文様が器面全体に描かれているもの。

**b種** 両側にナゾリを加えた隆線による文様が器面全体に描かれているが、くびれ部に無文帯を有しているもの。

**第Ⅲ類** 胴部がくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、沈線によるU字状、V字状、逆U字状、逆V字状、およびそれらを連結した文様が施され、区画内を磨消しているもの。

**a種** 口縁部文様帯が沈線によって簡単に表現されているもので、刺突文を付加するものや、刺突文が沈線文の代りに付されているものもある。胴部文様帯が上下に分かれていないもの。

**b種** 口縁部文様帯が沈線によって簡単に表現されているもので、刺突文を付加するものや、刺突文が沈線文の代りに付されているものもある。胴部文様帯が上下に分かれているもの。

**c種** 口縁部文様帯が省略され、沈線による文様が器面に展開されているもの。胴部文様帯が上下に分かれていないもの。

**第Ⅳ類** 胴部がくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、微隆線によるH字状、U字状、逆U字状およびそれらを連結した文様が施され、区画内を磨消しているもの。

**a種** 口縁部文様帯が微隆線で区画され、胴部は曲線的な文様が微隆線で展開されているもの。

- b種 口縁部文様帯が微隆線で区画され、胴部は曲線的な文様が沈線で展開されているもの。
- 第V類 口縁部無文帯を有し、以下に縄文ないしは条線文が器面全体に施されているもの。
- a種 口縁部無文帯を1条の沈線（凹線）で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- b種 口縁部無文帯を1条の隆線で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- c種 口縁部無文帯を沈線および隆線で区画しないで、以下に縄文が施されているもの。
- d種 口縁部無文帯を1条の刺突文列で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- e種 口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- f種 口縁部無文帯を1条の沈線（凹線）で区画し、以下に条線文が施されているもの。
- g種 口縁部無文帯を1条の隆線で区画し、以下に条線文が施されているもの。
- h種 口縁部無文帯を沈線（凹線）で区画しないで、以下に条線文が施されているもの。
- i種 縄文と条線文が同一個体中に併用されているもの。この種は、第VI類にも共通する。
- 第VI類 口縁直下から縄文ないしは条線文が器面全体に施されているもの。
- a種 口縁直下から縄文が器面全体に施されているもの。
- b種 口縁直下から条線文が器面全体に施されているもの。
- 第VII類 隆線ないしは微隆線だけによる曲線文が施されているもの。壺形土器・注口付土器・浅鉢形土器など特殊な器形を呈しているものが多い。
- 第VIII類 無文を主とする特殊な器形を呈しているもの。器台形土器・有孔罅付土器などを含む。
- 第IX類 その他上記に含まれないものを一括する。

以上のように当遺跡6・7区から出土した土器を分類してみたが、これでは大まかすぎて細部の変化に関してはとらえきれていないと思われる。しかし、本報告ではこの分類に従って、主に実測できた土器を中心に若干のコメントを付すにとどめる。いずれ、南三島遺跡の他の3・4・5区の調査成果が公表されるのを待って、再検討の機会を得たいと思う。

第I類は、キャリパー形を呈する深鉢形土器で、加曽利E式土器の主流をなすものと考えられる。a種は、口縁部文様帯が隆線とこれに沿う沈線によって構成され、渦巻文や楕円文、長方形区画文を主としているが、渦巻文はくずれ、退化の傾向が明瞭に認められ、円文に近づいている。b種は、口縁部文様帯がための沈線だけによって描かれているもので、円文と楕円文により構成されているが、一部には渦巻文の名残りが認められるものも含まれている。基本的にはa種からb種へと移行するものと考えられるが、時間的には一部併行するものと思われる。胴部の直線的磨消帯は、比較的幅の狭い例もみられるが、幅の広い例が多くなり、磨消帯に1本の沈線を付加する例もまま認められるようになる。

第Ⅰ類 a 種の代表的例としては、6 区の第147図1，第195図1，7 区の第475図1 などがあり、b 種の代表的例としては、第464図1，第553図54などがあげられる。

第Ⅱ類は、第Ⅰ類とは全く異なる文様と器形を有するもので、胴部で緩くくびれ、口縁部に向って内湾しながら開いている。第Ⅱ類の大きな特色は、両側にナゾリを加えた隆線による大柄な渦巻文などの曲線的な文様と磨消縄文手法を一切用いていない点にあると思われる。文様区画間には縄文を充填施文しているが、磨消手法は使用されていない。

隆線の手法について観察してみると、次のような違いがみられる。まず、一例は両側にナゾリを加えた1本の隆線でモチーフを描き、隆線も太くしっかりとしたものが目立つものである。他の例は、2本組の隆線で主にモチーフを描くもので、2本の隆線間にもナゾリが加えられ、隆線も細く、断面形が尖り気味の例が目立っているものである。この違いが直ちに時期差に結びつくものとはいえないが、傾向として前者から後者へ移行したものと考えられる。1本組と2本組の隆線の両者を併用している例もかなりみられる。第Ⅱ類は、加曾利EⅢ式期に属するものと考えられるが、他の例とした2本組の隆線でモチーフを描く一群は、次の加曾利EⅣ式期に盛行する微隆線による施文手法と密接な関連を有するものと思われる。

なお、第Ⅰ類と第Ⅱ類が時間的に密接な関係をもっていることは、両類の手法が同一個体中に施文されている事例が存在することから証明される。例えば、千葉県芝山町小池麻生遺跡<sup>(1)</sup>の014号住居跡の炉体土器として利用されていた土器は、4単位の波状口縁を呈する深鉢形土器で、口縁部文様帯は、第Ⅱ類と類似する両側にナゾリを加えた隆線で渦巻文と窓枠状文を描き、胴部文様帯は、第Ⅰ類に属する幅の広い磨消帯を垂下させている。茨城県明野町倉持遺跡から出土した土器<sup>(2)</sup>の一例は、平縁のキャリパー形を呈する深鉢形土器で、口縁部文様帯は、第Ⅰ類の隆線と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成され、頸部に無文帯を有し、胴部には第Ⅱ類に属する大柄な渦巻文を主とするモチーフが描かれている。第Ⅰ類 a 種と第Ⅱ類 b 種の混血タイプといっても良いものと思われる。

第Ⅱ類 b 種とした胴部に無文帯を有する例は数少ないが、胴部文様帯が上下2つに分かれる段階を明瞭に示すものとして注目される。第Ⅱ類 a 種は、明らかな無文帯を持たないが、文様モチーフの点で上下に差異がみられる場合が多い。渦巻文と縦長区画文というような組みあわせである。無文帯を明確に意識する b 種の方が新しい傾向を示すことは確かと考えられる。この点は、第Ⅲ類 a・b 種においても共通する事項である。

第Ⅱ類 a 種の代表的例としては、6 区の第93図7，第116図2，7 区の第423図1，第468図3 があり、Ⅱ類 b 種の例としては、第468図1，第632図1などがあげられる。

第Ⅲ類は、口縁部文様帯が簡略化され、1条の沈線か刺突文列などによって表現され、胴部文様帯が沈線で構成されているものである。胴部文様帯が、上下に分かれていないもの（a 種）と

分かれるもの（b種）とに大別し、口縁部文様帯の有無により、有するもの（a・b種）、有しないもの（c種）に区分した。a種は、I類b種の退化したものが多いと判断され、直線的磨消帯の上端が連結して逆U字状のモチーフを構成するものと考えられる。b種は、胴部文様帯が上下に分かれるものであるが、これは器形のくびれが強い個体が多い点が特徴となっている。時間的にはa種が古く、b種が新しい傾向が考えられるが、確実なものとはいえない。c種は、類例が少ない。南三島遺跡2区の報告書の第279図20、第336図12などに類例が認められる程度である。c種の時間的位置づけはむずかしいが、施文されているモチーフなどから判断すれば、a種に近いものかと考えられる。今後は広く類例を捜し、更に検討を重ねたいと考えている。

第III類ではa種・c種が少なく、b種に分類される例が当遺跡では目立っている。第III類b種に分類した中でも新旧差の存在は推定できるが、細部についてはここでは省略する。なお、第III類b種の大半は加曾利EⅢ式期と考えられるが、一部には加曾利EⅣ式期に属するものも含まれているものと思われる。モチーフの差異や施文沈線の太さ・細さ・鋭さ・鈍さなどが細分の基準になるものと思われる。

第III類と第II類の関連を示す資料としては、南三島遺跡2区の報告書の第241図3の第26号住居跡からの出土土器があげられる。胴部がほぼ直立気味で緩くくびれ、口縁部が内湾しながら開く深鉢形土器で、上半部には第II類の大柄な渦巻文と縦長区画文を伴うモチーフを描き、下半部には第III類の沈線による逆U字状文と蕨手文が施されている。両類の密接な関連を示すものとして貴重な例である。同様な例は当遺跡7区の第409号土壇から出土した土器にも認められる。

第III類a種の代表的例としては、第118図8があり、b種の代表的例としては、第92図3、第247図2、第497図1などがあげられる。c種の類例としては第118図8がある。

第IV類は、微隆線による施文を主とするもので、a種は、微隆線による曲線的区画内に縄文が充填されている。b種は、微隆線と細い沈線による施文が組みあうもので、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に細い沈線による曲線的モチーフを描き、区画内を磨り消し、地文として縄文が施されている例が目立っている。

a種には、幅の狭い口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、器面全体に大柄な曲線的モチーフを構成する例が圧倒的に多いが、中にはくびれ部にわずかに無文帯を残し、文様帯が上下に分かれる例も存在する。南三島遺跡2区の報告書の第245図1の第93号住居跡出土土器は、この例の1つであり、第II類b種の系統を引くものと考えられる。a種の中のこのタイプは、あるいは通常のa種よりも古いものかも知れない。a種自体の施文モチーフにも各種のパラエティがあり、時間差が予想される。また、各遺構ごとの出土状況を見ると、いわゆる称名寺式土器とされている太沈線による幾何学的区画文を有する土器群を伴出するものと、しないものに大別でき、これによる新旧の時間差も考慮される。

なお、第IV類b種の存在は、微隆線による施文を主とする一群（第IV類a種）と、細沈線による施文を主とする一群（第III類b種の一部）が同時併存の存在であることを証明していると考えられる。しかし、具体的な第IV類土器の細分については、今後の研究に委ねたいと思う。

第IV類a種の代表的例としては、第128図1、第128図2、第290図1などがあり、b種の例としては、第129図4、第251図1などがあげられる。

第V類は、口縁部無文帯をもち、以下器面全体に縄文や条線文が施されている。器形には各種のものがみられ、深鉢形以外にも鉢形などが存在している。

a種・f種は、口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に縄文・条線文が施文されている。この一群は、加曾利EⅢ式期に所属するものと思われるが、a種の中には加曾利EⅣ式期まで降るものも含まれていると思われる。e種とした1条の微隆線で口縁部無文帯を区画する一群は、そのほとんどが加曾利EⅣ式期に所属するものと考えられる。b・c・d・g・h・i種などの細分は困難である。b・g種の隆線で区画される例は非常に少なく、稀なものである。c・h種は、口縁部無文帯を区画しないものであり、時期的に新しいもの（加曾利EⅣ式期）のものが多くのように思われるが、確かではない。i種は、a～h種と分類基準が異なるが、特異なものとして注目しておきたい。他遺跡にも類例は認められ、その存在は、微隆線と細沈線の組み合わせと同様に、縄文と条線文の組み合わせによる両者の同時併存を示すものと考えられる。

第V類a種の例は、第469図5、b種の例は第497図3、c種の例は、第497図2、d種の例は、第480図2、e種の例は、第129図5、f種の例は、第95図12、g種の例は、第132図56、h種の例は、第95図13、i種の例は、第137図1などがあげられる。

第VI類は、口縁部無文帯をもたずに、口縁直下から縄文ないしは条線文が施されている。第V類と同様に深鉢形土器以外に鉢形土器も存在している。a種・b種ともに加曾利EⅢ・Ⅳ式を個別の資料で分類することはむずかしい。今後の研究課題としたい。

第VI類a種の例としては、第105図3、b種の例としては、第120図16があげられる。

第VII類は、隆線ないしは微隆線だけによって施文が行われているもので、施文されている隆線の太さや文様の差異および器形の違いなどから加曾利EⅢ式期とEⅣ式期に区分される。その大半は壺形か瓢<sup>ひさご</sup>形を呈する特殊な器形の個体で、特定の器種と施文手法との間に一定の約束事が存在していたものと思われる。しかし、南三島遺跡2区の報告書の第245図2は、第99号住居跡から出土したもので、注口部が付いている壺形に近い形態を呈し、施文は微隆線だけで加えられている。また、同遺跡の第255図4は、第1018号土壇から出土した浅鉢形土器で、底部を欠損しているが、加曾利EⅣ式期のものとしては珍しい例といえる。しかも、施文は微隆線だけによって行われており注目される。これら2点は、第VII類としては例外的な器形とすべきであろう。

第VII類の資料は、南三島遺跡2区に好例が多いので、ここで加曾利EⅢ式段階の壺形土器とE



IV式段階の壺形土器の例をあげれば、前者は、第251図4、第256図9で、後者は、第247図4、第243図8などである。伴出土器との関係および器形・文様の微妙な違いを加味すれば、それぞれ古・新に細別されよう。

第VII類の例としては、第95図14、第247図4などがあげられる。

第VIII類に属する有孔鏝付土器、器台形土器については後記したのでここでは省略する。

第IX類には、各種雑多なものが含まれているが、その中のいくつか注目すべき土器について若干検討してみたい。

まず第一に取り上げたいのは、7区の第10号住居跡の床面上に伏せられた状態で出土した深鉢形土器で、第1号埋設土器と呼称されたものである。出土状態の特異さを除いても、この土器にはいくつかの問題点が残る。まず、本土器と同様の文様モチーフをもつ破片が全くと言って良い程出土していないことである。同一個体の胴下半部片と思われる小片が1点あっただけで、接合はできなかった。このことは、本土器が当遺跡を含む近隣地域で製作されたものではなく、かなり離れた場所で製作されたことを思わせる。それが何らかの目的のために当遺跡へ搬入されたものと推測される。しかし、胎土等の肉眼観察ではこの想定を裏づけることはできない。器形は、4単位の波頂部を有する深鉢形土器で、沈線により施文がなされている。展開文様模式図に示したように、波頂部下に円文を描き、胴上半部に2本ないし3本単位の沈線によって波状文を施し、波底部に渦巻文、円文を加え、その下に2条の横位の磨消帯を巡らしている。胴下半部は欠損部が多いが、逆U字状文が施され、その内部に縄文が充填されていたものと推測できる。このモチーフは、いわゆる連弧文系土器群を思い起こさせるが、きわめて類似しているとはいえない。しかし、ほぼ本土器と同時期の土器群で、類似するものを求めれば、連弧文系土器群ということになる。この矛盾は、いかにして起こるかと言えば、本土器のもつ個性によるところが大きいと言わなければならない。いわゆる連弧文系土器群と加曾利E式系土器群の要素が混合されたものと考えられる。波頂部下の円文や胴下半部の逆U字状の区画文などは後者の系統であろうし、波状文や「几」字状のモチーフは前者の要素の変形と考えられる。いずれにしても、時期的には加曾利EⅢ式期に属するものと考えられ、今後の検討を要するものと思われる。

次は、7区の第23号住居跡と第409号土壌から出土した土器が接合した第553図53の小形深鉢形土器である。4単位の波状縁を呈し、口縁部文様帯は、隆線で円形と楕円形に区画し、胴部には隆線が垂下し、縦長の区画文が構成され、内部に縄文が充填されている。本土器の特色は、垂下する隆線に加えられた瘤状の突起である。この手法は、類例の少ないもので、完形の例としては、勝田市館出遺跡から出土した例を知るだけである。胴部の垂下する隆線に付された突起は1本につき1個であり、当遺跡出土例の2個とは異なっている。他遺跡にも出土例はあるかもしれないが、今後調査を進めてみたい。口縁部文様帯と胴部文様帯からなる文様構成および器形は、

加曾利E式系統のものであり、隆線を主とする施文手法と突起に特色がみられる。加曾利EⅢ式期における在地的な土器として評価すべきものと思われる。

次は、7区の第31号住居跡から出土した第488図2の土器である。器面全体に縄文が施され、4単位の波状縁を呈する深鉢形土器で、太い隆線が施文の特徴となっている。頸部に太い隆線を巡らし、そこから同様の隆線が垂下し、胴部文様帯を4分割している。隆線の両側には太い沈線が沿っており、隆線上にはキザミ目加えられている。この土器は類例の少ないもので注目されるが、他型式との関連が薄く、今後の検討を要するものである。

その他で、異質な要素を有する土器は、第370図1の6区の第3号埋設土器で他とは異なる横位に展開する曲線的磨消帯をもつ例であるが、欠損部や摩滅が著しく、文様構成は明らかではない。直感的には東北南部的な匂いが感じられる土器であるが、その系統の究明などは今後に残された課題であろう。

なお、上記以外にも触れ得なかった各種の土器がある。今後、多くの方々のご教示を得て更に検討を深めたいと考えている。

最後に、当遺跡出土の加曾利EⅢ・Ⅳ式土器についてまとめてみると次のようになる。

第Ⅰ～Ⅲ類のほとんどは、加曾利EⅢ式土器と考えられ、第Ⅰ類は第Ⅲ類よりも前出のもの、すなわち古いものと位置づけできる。第Ⅰ類a種とb種の相違は、大きくみれば口縁部文様帯における隆線と沈線の差に帰一させることができよう。a種からb種への移行が基本的に考えられる。第Ⅲ類のa・b種も基本的には新旧の差を示すものと考えられ、第Ⅰ類と第Ⅲ類の両類の変化を総合すると、加曾利EⅢ式土器の4段階（第Ⅰ類a種→同b種→第Ⅲ類a種→同b種）の変遷が予想される。しかし、第Ⅰ類a・b種と第Ⅲ類a・b種は、各遺構出土例をみると共存している例もあり、細別を強行すべき理由もない。したがって、ここでは加曾利EⅢ式土器は、旧・新の2段階の細分に止めておきたい。第Ⅱ類にも旧・新の差、時間的変遷は考えられるが、確実な共伴関係による変化は把握し得ていない。文様の施文手法の差異やモチーフの違いなどによる傾向性はうかがえる。今後の課題としたい。

第Ⅳ類は、加曾利EⅣ式土器と位置づけられる。この類の変遷についても、これからの研究に期待したい。

第Ⅴ～Ⅸ類については上記したとおりである。

加曾利EⅢ・Ⅳ式土器を含む加曾利E式土器全体については、山内清男氏の型式設定<sup>(4)</sup>以来、数多くの研究が積み重ねられてきているが、小稿の性格からここでは茨城県内の縄文中期土器全体の編年研究<sup>(5)</sup>をおこなった文献を紹介して筆をとどめたい。

註1 奥田正彦「小池麻生遺跡」『主要地方道成田松尾線Ⅰ』千葉県文化財センター 1983年

註2 田口崇『倉持遺跡——第2年次調査——』明野町教育委員会 1984年

註3 鴨志田篤二「館出遺跡」 『勝田市史 考古資料編』 勝田市史編さん委員会 1979年

註4 a 山内清男「下総上本郷貝塚」 『人類学雑誌』 第43巻第10号 1928年

b 山内清男「加曾利E式」 『日本先史土器図譜』 第IX輯 先史考古学会  
1940年（1967年合冊再刊）

註5 瓦吹堅・鴨志田篤二「茨城県縄文中期10段階区分図（説明）」 『北関東を中心とする縄文中期の諸問題〈資料〉』 日本考古学協会 1981年

### (3) 有孔鏝付土器について

当遺跡からは3点の有孔鏝<sup>つば</sup>付土器が出土している。いずれも破片であるが、鏝部に孔をもつタイプであり、伴出土器等から加曾利E III式期のものと考えられる。6区の第55号住居跡出土のP287（第148図6）は推定最大径約41cm、7区の第27号住居跡のP10（第468図4）は推定最大径47.5cmであり大形の個体と推定される。有孔鏝付土器で、現在最大の容量を有する個体は山梨県小淵沢町中原遺跡出土のもので、推定46.5<sup>(1)</sup>lといわれている。この土器は樽形を呈し、胴部最大径を下半部にもち、器高59cmの大形土器で、当遺跡出土の2列とは器形も異なるために単純な比較はなし得ないが、かなり大形の個体である。一方、7区のD3c<sub>6</sub>グリッド出土のP176（第662図11）は、小形で口径10.2cmである。鏝部に孔が穿たれている。D3c<sub>6</sub>グリッドは第10号住居跡に近接する位置にあり、第10号住居跡に伴うものかもしれない。

これらの土器のうち6区のP287と7区のP176は無文であるが、P10は2本組の太めの沈線文によって大柄な渦巻状モチーフが描かれている。なお、他に7区の第14号住居跡からの出土土器第437図1は有孔鏝付土器のミニチュアかと考えられるもので注目したい。

茨城県内出土の有孔鏝付土器は、鹿島町木滝遺跡出土の完形品（第659図5）の外に、竜ヶ崎市赤松遺跡第103号土壌出土例（第659図3）、同遺跡第176号土壌出土例（第659図4）がある。共に鏝部に孔をもつタイプで、両者ともに沈線による施文を有している。第103号土壌出土例は伴出土器が図示されておらず、第176号土壌出土例は伴出土器が破片だけのために時期が明確ではないが、加曾利E I式期の新しい段階と考えられる。他には小破片ながら谷和原村筒戸A・B遺跡第106号土壌出土例<sup>(4)</sup>があり、鏝部に孔をもつものである。伴出土器は深鉢形土器の胴下半部片で、加曾利E II～III式期と考えられる。

なお、谷和原村大谷津A遺跡からは3点の注目すべき有孔鏝付土器が出土している。<sup>(5)</sup>第42号住居跡出土の有孔鏝付土器は、ほぼ直立する口縁部片で器壁を貫通する孔を鏝部の直上に穿っている。伴出の土器は阿玉台式土器の後半から末葉にかけての時期のものと推定され、県内では最古の例と考えられる。また、第60号住居跡出土の有孔鏝付土器は、小把手と隆線によるモチーフを有するもので、鏝部に孔を有している。伴出土器は強く内湾する深鉢形土器の口縁部片で、沈線

による曲線的磨消帯を描き、区画外には縄文が充填されている。加曾利E III式期の終末ないしはE IV式期の古い段階と考えられる。いずれにしても本県においては最新の有孔鏝付土器と考えられる。もう1点の例は後者に類似する小破片で、鏝部に孔を有している。更にこの他にこの大谷津A遺跡からは有脚の底部片が2点出土している。有脚の底部は有孔鏝付土器に付属する例<sup>(6)</sup>もあり、注意したい遺物である。

その他は記述だけであるが、鹿島町田野辺貝塚<sup>(7)</sup>・同町塩釜遺跡<sup>(2)</sup>に報告例がみられる。

以上の他に有孔ではないが、鏝付土器(第659図6)が前記の筒戸A・B遺跡第418号土壙から出土している。本例は伴出土器から加曾利E III式期のものと考えられ、有孔鏝付土器の変遷において終末期の1つの様相を示す資料として重要なものである。

有孔鏝付土器については、藤森栄一氏<sup>(8)</sup>の注目以来、武藤雄六氏<sup>(9)</sup>、江坂輝弥氏<sup>(10)</sup>、渡辺誠氏<sup>(11)</sup>、山内清男氏<sup>(12)</sup>、中村五郎氏<sup>(13)</sup>らが論及し、定義・時期的変遷・分布・用途・社会的背景などについて諸見解が述べられているが、現段階では長沢宏昌氏<sup>(14)</sup>の研究が最もまとまっていると思われる。

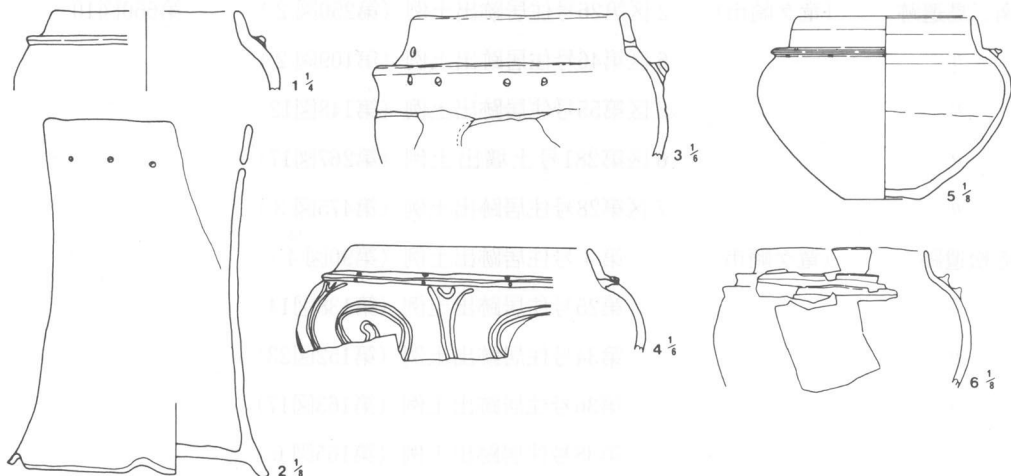
まず、分布に関して述べると、1980年現在では茨城県は分布の空白地域であったが、1984年の段階では鹿島町木滝遺跡に出土例がみられた。その後、上記の各遺跡出土例が報告されたが、この中で注目すべきものは、大谷津A遺跡42号住居跡出土の資料である。長沢氏が阿玉台式土器圏内においては有孔鏝付土器の分布は見られないとした地域の出土であったからである。しかし、谷和原村は茨城県の南西端近くに位置し、阿玉台式土器圏に属しながらも勝坂式土器との交流が著しかった地域と考えられ、本有孔鏝付土器や有脚の底部片の出土も勝坂式文化に伴うものと考えた方が妥当かと思われる。本来の阿玉台式土器の型式組成には含まれていなかった器種とするのが至当と思われる。

次に時期的変遷については、長沢氏案が現状では最も適切なものと考えられる。本県ではようやく時期的変遷に関して考察できる資料が出はじめたにすぎない。

用途については、酒造具説・太鼓説・澱粉質食糧の保存容器説・種子壺説・煮沸用具説が唱えられ、酒造具説が有力な現況<sup>(15)</sup>であるが、酒造具説にも弱点がある。酒造りには、有孔鏝付土器にとって無くてはならぬ鏝も孔も、ほとんど役に立っていないという点である。これは酒造実験の結果から判明したことで、鏝や孔がなくとも、通常の土器(壺形・鉢形)でも酒造りは可能である。これでは何故に有孔で鏝付である必要があるのか説明がつかないということになる。用途の確定についてはまだまだ検討の余地がありそうである。

なお、最後に蛇足ながら桜村下広岡遺跡第12号土壙出土の土器<sup>(16)</sup>(第659図2)について紹介しておきたい。本土器は推定口径21.9cm、器高38.9cmの筒状を呈する特異な土器で、無文で有脚状の底部を有し、口縁部に16個の孔が器壁を貫通して穿たれている。もし鏝が存在すれば有孔鏝付土器といえる形状を呈している。

- 註1 長沢宏昌『縄文時代の酒造具 有孔罎付土器展』 山梨県立考古博物館 1984年
- 註2 田口崇 「(伝) 木滝横穴古墳(横穴) 出土土器」 『文化財だより』第7号 鹿島町文化財愛護協会 1979年
- 註3 川井正一『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4——赤松遺跡——』茨城県教育財団 1980年
- 註4 佐藤正好『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A遺跡 筒戸B遺跡——遺構・遺物編(上)——』茨城県教育財団 1984年
- 註5 鈴木美治『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡(上)(下)』茨城県教育財団 1985年
- 註6 長野県上田市無量寺遺跡出土例・福島県二本松市原瀬上原遺跡出土例・山梨県塩山市安道寺遺跡出土例・同県勝沼町积迦堂遺跡群三口神平地区出土例に類例がある。
- 註7 海老原幸『鹿島町史』第一巻 鹿島町 1972年
- 註8 藤森栄一他「中期縄文土器の貯蔵形態について」『考古学手帖』20 1963年
- 註9 武藤雄六「有孔罎付土器の再検討 一八ヶ岳南麓地方の基礎資料一」『信濃』第22巻第7号 1970年
- 註10 江坂輝弥「新しい生産方式への発展」『日本文化の起源』講談社 1967年
- 註11 a 渡辺誠「罎付有孔土器に関する文献解題的意義」『あるかいあ』5 1964年  
 b 渡辺誠「勝坂式土器と亀ヶ岡式土器の様式構造——東北地方の罎付有孔土器を介して一」『信濃』第17巻第2号 1965年
- 註12 山内清男「縄文土器総論」『日本原始美術』1 講談社 1964年
- 註13 中村五郎「土製太鼓覚書」『物質文化』23 1974年



第659図 茨城県内出土有孔罎付土器

註14 長沢宏昌「有孔鏝付土器の研究」『長野県考古学会誌』35 1980年

註15 長沢宏昌「有孔鏝付土器とその用途実験」『甲斐路』52 1984年

註16 小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 茨城県教育財団 1981年

#### (4) 器台形土器について

縄文時代中期に特徴的にみられる一器種として器台形土器・台形土器・器台などと呼称されている土器が存在する。当遺跡においても破片を含めて4点の器台形土器が出土している。中でも6区の第46号住居跡出土の土器は、脚部全面に縄文が施文されている特異なものである。

器台形土器について正面から取り組んで論じたものとしては、室伏徹氏と上川名昭氏の<sup>(1)</sup>論放がある。他は報告書、あるいは概説書などで簡単に触れているものがみられる程度である。

そこで、本稿では室伏氏の説に従って、茨城県内を中心に若干の資料集成を行い、時期的変遷などについて記述してみたい。

器台形土器の名称について室伏氏は、弥生時代の以後の器台との混同を避けるために台形土器と呼んでいるが、器台形土器と称すれば、一応区別がつけられるものと考え、本稿では器台形土器と呼称した。

形態分類および各部の名称についても室伏氏は、A型（無脚のもの）・B型（有鏝<sup>ゆうがく</sup>のもの）・C型（無鏝のもの）に分類している。A型は、山梨県坂井遺跡・桂野遺跡などで見られるだけで出土例も少なく、室伏氏のいわれるようにB型の形態変化のひとつとして位置づけられる可能性が高い。茨城においてはA型の分布はなく、B型・C型の分布がみられる。

茨城県内出土の器台形土器は、次のとおりである。当遺跡6・7区出土例以外の図・番号は報告書所収の番号である。右端の図・番号は、挿図（第660図）の番号である。

1	南三島遺跡	（竜ヶ崎市）	2区第26号住居跡出土例（第250図 <sup>(2)</sup> 2）	第660図10
2	〃		6区第46号住居跡出土例（第109図2）	
3	〃		6区第55号住居跡出土例（第148図12）	
4	〃		6区第281号土壙出土例（第267図17）	
5	〃		7区第28号住居跡出土例（第475図3）	
6	赤松遺跡	（竜ヶ崎市）	第4号住居跡出土例（第90図 <sup>(3)</sup> 4）	
7	〃		第25号住居跡出土例（第138図14）	
8	〃		第34号住居跡出土例（第152図23）	
9	〃		第36号住居跡出土例（第163図17）	
10	〃		第38号住居跡出土例（第165図6）	
11	〃		第179A号土壙出土例（第190図5）	

12	〃	第206号土壙出土例 (第192図12)	
13	下広岡遺跡 (桜村)	第39号住居跡出土例 (第132図31) <sup>(4)</sup>	第660図 2
14	〃	第113号土壙出土例 (第141図97)	第660図 5
15	〃	第424号土壙出土例 (第155図182)	第660図 4
16	〃	D3b <sub>4</sub> グリッド出土例 (第161図225)	第660図 1
17	大谷津B遺跡 (谷和原村)	第36号住居跡出土例 (第138図1) <sup>(5)</sup>	第660図 9
18	筒戸A・B遺跡 (谷和原村)	第13号住居跡出土例 (第172図1) <sup>(6)</sup>	第660図 8
19	〃	第42号住居跡出土例 (第188図26)	
20	〃	第418号土壙出土例 (第205図14)	
21	〃	グリッド出土例 (第206図3・4)	
22	砂川遺跡 (水戸市)	第18号住居跡出土例 (第15図1) <sup>(7)</sup>	第660図 7
23	塙東遺跡 (水戸市)	I cピット内出土例 (図版X—1) <sup>(8)</sup>	第660図 3
24	君ヶ台遺跡 (勝田市)	(第71図7) <sup>(9)</sup>	第660図 6

茨城県内の器台形土器の出土例は、以上の8遺跡24例である。この中には小破片も含まれており、ほぼ器形をうかがえるのは、1・2・13～18・22・23・24の11点で半数以下にすぎない。1は、脚部がやや内湾し無文で8個の孔を有し、受け面は平坦に作出されている。伴出土器からみて加曾利EⅢ式期のもと思われる。2は、前記のように脚部全面に大粒の単節縄文が施されているもので、受け面は平坦である。受け面直下に1条の凹線が巡る特色がみられる。伴出土器からみて、加曾利EⅣ式期の古い段階のものかと考えられる。4は断片であるが、2条の太めの沈線が脚部の上端から垂下している点に特徴がみられる。6～12の赤松遺跡出土資料はいずれも破片であるが、伴出土器からみて加曾利EⅠ式期の新しい段階からEⅡ式期にかけての時期のものと思われる。13は有鏢のもので、孔は2個1対のようであるが単位数は不明である。無文で、受け面は平坦と考えられる。伴出土器には阿玉式土器・勝坂式土器・加曾利EⅠ式土器などが混在していて詳しい時期は不明である。14は脚部全面に縄文が施文されているもので、楕円形の孔が4個認められる。受け面は平坦である。伴出土器は図示されていないが加曾利E式期のもと考えられる。15は無文で、脚部に楕円形の孔が4個穿たれている。受け面の端部および脚端部が若干そりかえる特色が認められる。2次加熱を受けている。16は無文の有鏢のもので、脚端部が反っている。脚部に2個1対の孔が認められるが単位数は不明である。15・16ともに伴出土器からの時期比定はできない。17は、無文のもので脚部は直線的に外方へ開いている。孔は8個あり、受け面は凹レンズ状にわずかに凹んでいる。伴出土器からみると、加曾利EⅢ～Ⅳ式期にかけてのものと思われる。18は、17に類似する形状を呈しているが、脚端部が内湾する点で少し異なっている。全体の孔の数や配列は不明である。伴出土器は図示されていないが、同一個体の破片が

出土した第63号住居跡からの出土土器からみると加曾利E III式期のものと考えられる。22は、無文で脚部はほぼ直立気味に開くもので、受け面がわずかに凹んでいる。孔は5個である。伴出土器からみて加曾利E III～IV式期にかけてのものと推定される。23は、有鏝のもので、無文で現存部（約3分の1）には孔の存在が確認できない。受け面は平坦で、炭化物の付着が認められている。脚部には赤彩痕が残されている。伴出土器は、大木8a式の新しい段階か8b式期のものと思われ、本器台もこの時期のものと考えられる。24は、出土状況が不明のため時期不明であるが、後記するC II形の完形品である。孔は6か所以上と思われる。

次に、県内出土の主な器台形土器についての形態および諸特徴についてまとめてみる。

まず、全体の形態を見ると、B型に属するものが13・16・23の3例で、C型の例が1・2・14・15・17・18・22・24である。詳しく分類すると13はB III型、23はB II型と考えられるが、16は短脚で室伏氏のB型の分類には含まれないものである。C型については坂井遺跡の出土例が3点と少ないために細分類をしていないが、脚部の形状の差異に視点をおいて分類すれば、脚部が底面に向かうに従って狭くなる閉脚型、脚部が底面に向かうに従って広がる開脚型、およびほぼ直立する型（室伏氏のいう太鼓胴の脚部をもつものを含む）に大別できる。それぞれをC I、C II、C III型とすれば、1・2・14・15・17・18・24はC II型、22はC III型とすることができる。C II型の中にも17・18のように受け面近くはほぼ直立し、以下直線的に開くものと、15のように外湾気味に開くもの、2のように直線的に開くもの、1・14のように内湾気味に開くものがあり、細別できる可能性がある。

脚部の施文については、無文のものが圧倒的多数を占めるが、有文のものも存在する。施文のあり方は外面に施すもの、内外面に施すもの、内面に施すものの3種が考えられるが、内外面に施文された資料はごく少ないものと思われる。<sup>(10)</sup>外面に施す文様には沈線による施文だけによるものが多いが、刺突文・爪形文・三叉文<sup>さんさ</sup>など特徴的な文様を施すものも認められる。内面に施文する器台形土器の類例も増加しつつある。南三島遺跡6区第46号住居跡の縄文施文の器台形土器<sup>(11)</sup>2の類例については、県内では14の下広岡遺跡出土例、県外では岩手県盛岡市繫遺跡出土例・宮城県白石市菅生田遺跡出土例<sup>(12)</sup>・長野県塩尻市平出遺跡ト号住居跡出土例<sup>(13)</sup>があげられる。このうち、後2者は無孔の例で、その他は有孔のものである。菅生田遺跡の例は後期前葉まで降ると考えられている資料である。

孔の数および配置形式については、室伏氏が1孔単位で4・5・6・7孔のもの、2孔単位で2対（4）、3対（6）、4対（8）のものに分類されているが、今回県内の出土資料を調べてみた結果、1孔単位で8孔のものと考えられる例が認められた。南三島遺跡2区出土例および大谷津B遺跡出土例である。

その他の注意すべき点としては、埴東遺跡出土例において観察されている受け面における炭化



物の付着と脚部に赤彩痕が存したことである。前者については、関連する資料として神奈川県相模原市橋本遺跡2区の第1号住居跡出土の2点の器台形土器の受け面上に炭化した網代の繊維が付着していた事例が報告されており、器台形土器の用途解明に役立つものとして注目すべきものである。<sup>(14)</sup> 赤彩痕については、報告例を知らないが、今後の調査・報告において留意する必要があるろう。

次に用途については、一般的な「土器をのせるための土器」としての用途と八幡一郎氏が提起された「土器を作るための土器」としての用途の2説などがある。<sup>(15)</sup> 室伏氏は八幡氏の考えを発展させ、回転台とする着想から土器施文における文様帯の縦位方向への分割に役立つ「ある種の分度器のような役割」を果す器具として器台形土器の用途を考えようと試みた。この考え方は、室伏氏の指摘するように、土器の文様単位数と器台形土器の孔の配置型式との対比が数多くおこなわれなければ立証の困難な事柄であるが、十分に検討すべき価値のある意見と考えられる。あらためて室伏氏の見解に注目した次第である。但し、無孔の器台形土器については問題が残る。

最後に、器台形土器の変遷について考えてみると、初現期については中期前半と考えられる。現在公表されている資料の中では、東京都八王子市神谷原遺跡SB11号住居跡出土の例、<sup>(16)</sup> 町田市武蔵岡遺跡3F-10号住居跡出土の土器などが初現期のものと考えられる。<sup>(17)</sup> 前者は無文、後者は有文であるが、共にC型で脚部が底部に向って狭くなる閉脚型（筆者分類のCⅠ型）に属する。このタイプが古かるべきことについては室伏氏も記しておられる。CⅠ型が現状ではほぼ初現期の形態と考えられるが、今後の資料の増加によっては変更がなされるかもしれない。<sup>(18)</sup> その他のCⅡ・Ⅲ型の各種やBⅠ～Ⅲ型の変遷過程については、検討不十分なために省略する。

一方、終末期ないし下限の問題については、前記の宮城県菅生田遺跡の例、および千葉県成田市桜谷津遺跡1号住居跡出土の例から、<sup>(19)</sup> 後期前葉まで降るものと考えられる。前者は縄文施文、後者は無文で共に無孔である。桜谷津遺跡例は堀之内Ⅰ式期の住居跡の床面直下の出土である。器台形土器は終末には無孔のもののみになってしまうのか、あるいは最後まで有孔の例が存在するのかは明らかではない。なお、両者ともにわずかに鏢状の形態を残す開脚型である。

以上、冗長に器台形土器について記してきたが、不十分なものである。同学諸兄のご批判、ご教示をたまわれれば幸いである。

註1 a 室伏徹「台形土器について——坂井遺跡出土例を中心として——」『丘陵』1-2号 1976年

b 上川名昭「器台形土器」『中期縄文文化論』奈良明新社 1978年

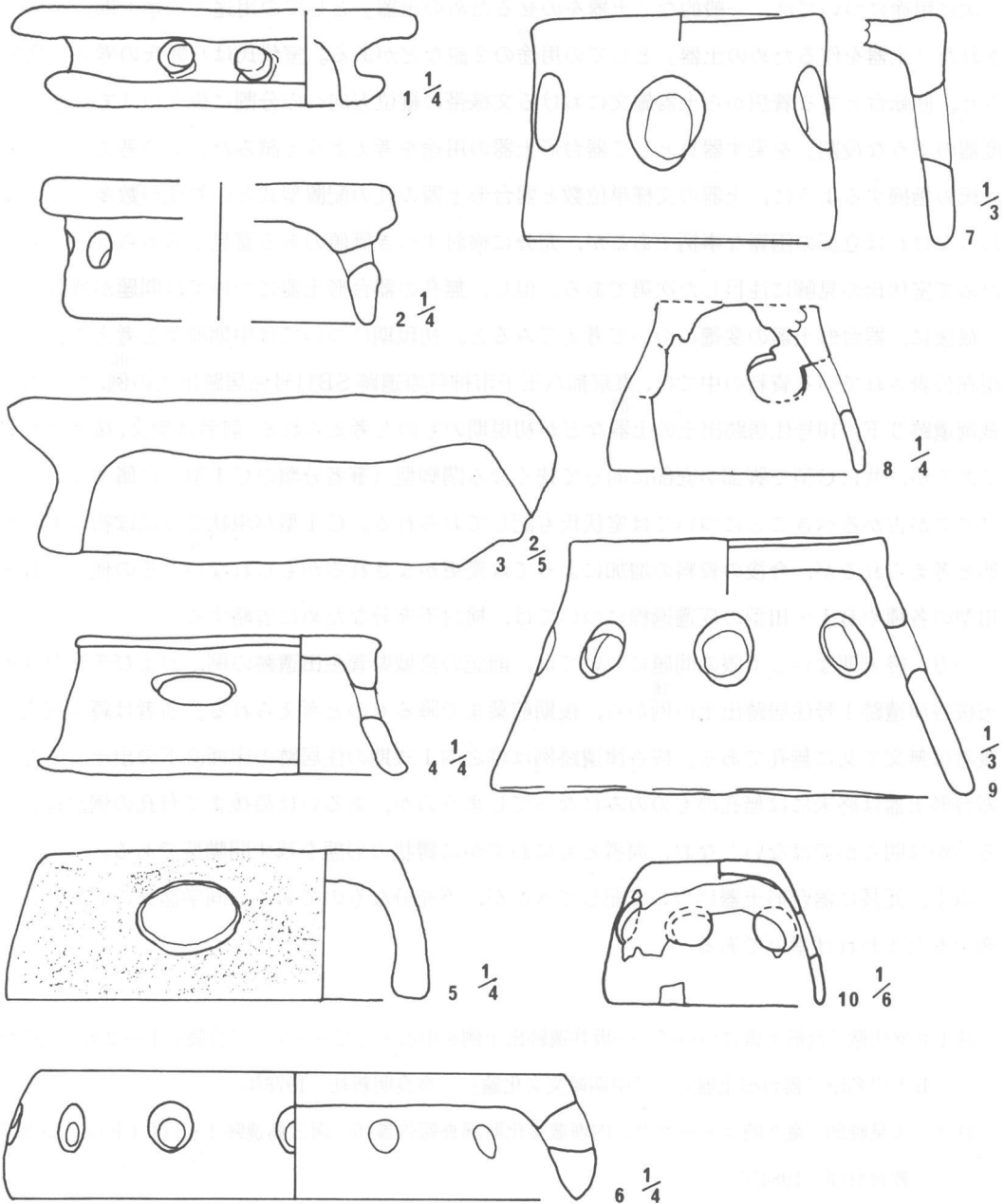
註2 人見暁朗『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡1・2区(下)』茨城県教育財団 1984年

註3 川井正一『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 赤松遺跡』茨城県教育財団 1980年

註4 小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 茨城県教育財団 1981年

註5 中村幸雄『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 大谷津B遺跡』 茨城県教育財団 1983年

註6 佐藤正好『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A遺跡 筒戸B遺跡——遺構・遺物編(上)——』 茨城県教育財団 1984年



第660図 茨城県内出土器台形土器

- 註7 渡辺俊夫『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 砂川遺跡』 茨城県教育財団 1982年
- 註8 中村光一他『埜東遺跡』 茨城高等学校史学部 1978年
- 註9 川崎純徳「君ヶ台貝塚」 『勝田市史 考古資料編』 1979年
- 註10 福島県袋原遺跡例などが代表的なものと思われる。
- 註11 草間俊一他『岩手県盛岡市繫遺跡』 盛岡市公民館 1960年
- 註12 丹羽茂他「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告VII』 宮城県教育委員会 1982年
- 註13 永峯光一他『平出』 朝日新聞社 1955年
- 註14 土井永好他『橋本遺跡——昭和55年度調査概要——』 相模原市橋本遺跡調査会 1981年
- 註15 八幡一郎「縄文土器・土偶」 『陶器全集』29 平凡社 1965年
- 註16 中西充他『神谷原II』 八王子市櫛田遺跡調査会 1982年
- 註17 折原洋一他『東京都町田市武蔵岡遺跡——1979年度調査——』 武蔵岡遺跡調査会 1980年
- 註18 最近、山梨県勝沼町宮の上遺跡で、中期初頭の器台形土器の出土があった由情報を得ているが、未報告のためにこれ以上はふれないでおく。
- 註19 田川良『桜谷津』 桜谷津遺跡発掘調査団 1977年

#### (5) 台付土器について

当遺跡からは台部を有する土器が6区で18点、7区で4点出土している。当遺跡から出土した例はいずれも台部だけかまたはその接合部の破片で、器形をうかがえるようなものは出土していない。

台付土器は、縄文時代前期にも散発的な出土例がみられるが、本格的に盛行するのは中期からと考えられる。中期も初頭から前半に属する出土例は少なく、中葉以後、後半にかけて盛行するものである。関東・中部・北陸・東北地方など広い分布域を示しているが、未だ縄文中期の台付土器については本格的に研究された例は少ない。藤森栄一氏が『井戸尻』の報告書中で、「新道期に確立し、井戸尻期で最も発達した」とし、用途は「特殊な供献具」であろうとした以外には、山崎和巳氏の形態分類と若干の集成をあげうるだけである。<sup>(2)</sup>この中で山崎氏は、台付土器を2形式に分類した。胴中部付近で膨らみ、そこに最大径があり球状を呈する(A形式)、口縁部付近に最大径を有し、胴部は膨らみをみずにやや直線的に窄まる(B形式)の2形式で、A形式を8例、B形式を4例集成している。A形式は長野県4例・東京都3例・埼玉県1例で、B形式はいずれも長野県の例となっている。12例の時期を調べて、山崎氏は台付土器は、新道式期から曾利V式期まで存続すると指摘している。

筆者も、手元の若干の文献によって台付土器の集成を行ってみたところ、西は九州熊本県黒橋

貝塚出土例<sup>(3)</sup>・三重県東庄内B遺跡出土例<sup>(3)</sup>・岐阜県門端遺跡出土例<sup>(4)</sup>などがあり、東は東北青森県三内遺跡出土例<sup>(3)</sup>をはじめ、宮城・福島などにも分布が認められ、汎日本的な分布を示していることが判明した。その中で、東北の中期終末の例は波状縁を呈する台付鉢形を呈すること、その他の地方および中期の前半～後半にかけての資料はほぼ平縁の台付鉢形を呈するものが多いことも知り得た。また、形態（形式）にも各種のものが存在することも分かり、山崎氏のA・B形式だけでは律し切れないことは確かである。しかし、筆者には全国的に分布する本種土器について集成し、検討する資料がないので、主として関東・中部地方を中心に若干気づいた点を指摘しておきたい。

まず、形態についてみると、カップ形・トロフィー形と称される例もあるように、A・B形式以外に、A形式に近いが、口縁部が最大径となり胴部が球状を呈さないもの（三重県東庄内B遺跡例他）、台部が高く、直線的に外方へ開き浅鉢状をなすもの（新潟県森上遺跡例<sup>(5)</sup>）、台部が低く、内湾しながら開き碗状を呈するもの（新潟県清水上遺跡例他）など各種あり、今後明確な形態分類がなされることが期待される。口縁は平縁の例が目立つが、把手や突起を飾る例も多い。台部にも低いものや高いもの、有孔のものと無孔のもの、台部が直立気味のものと外方へ開くものなどの違いがみられ、形態分類の上で有効な視点と考えられる。また、台部は無文のものが多いが、縄文・捺糸文が施された例もみられる。

分布については、関東・中部・北陸・東北南部地方を中心に分布するが、その中でも特に、中部地方の長野県・山梨県および北陸の富山県・新潟県などに比較的多く出土している。群馬県では今後報告例が増加するようである。

時期については、前期の例や中期初頭の例は少なく、中期前半の例として、新道遺跡1号住居跡例<sup>(6)</sup>・西上遺跡例<sup>(7)</sup>他に東京都恋ヶ窪遺跡出土例<sup>(2)</sup>・千葉県和名ヶ谷通源寺遺跡出土例<sup>(8)</sup>などがみられやや増加してくる。中葉に入ると漸増し、中葉後半の加曾利E I～III式期、曾利I～III式期、上山田式～古府式期に盛行するようである。しかし、全体の中での出土量はきわめて少なく特殊な土器であることは否定できない。終末期の様相については明らかではないが、徐々に減少しつつも後期まで存続し、後期中葉以降に発達する台付鉢形土器へと続くものと考えられる。しかし、この間をつなぐ資料は乏しく今は可能性を考えるだけにしておく。

関東地方における台付土器については破片の出土例は多いが、完形の個体はまれである。当遺跡とほぼ同時期の加曾利E III式期の例は非常に少ない。

最後に、関東地方出土のほぼ完形の台付土器出土遺跡地名表を掲げる。

- 1 坂東山遺跡<sup>(9)</sup>（埼玉県入間市）
- 2 通源寺遺跡（千葉県松戸市）

- 3 西上遺跡（東京都昭島市）
- 4 三鷹五中遺跡（東京都三鷹市）
- 5 恋ヶ窪遺跡（東京都国分寺市）
- 6 浅香内 9 H 遺跡<sup>(10)</sup>（栃木県黒羽町）
- 7 弁天池遺跡<sup>(11)</sup>（栃木県芳賀町）
- 8 橋本遺跡<sup>(12)</sup>（神奈川県相模原市）
- 9 南三島遺跡 1・2 区<sup>(13)</sup>（茨城県竜ヶ崎市）

註 1 埼玉県鷲巣貝塚・千葉県幸田貝塚出土例は関山式期、長野県荒神山遺跡出土例は十三菩提式期のものである。『縄文土器大成』 1 による。

註 2 山崎和巳「台付土器について」 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』 国分寺市教育委員会 1982年

註 3 永峯光一他『縄文土器大成』 2 講談社 1981年

註 4 大野政雄『門端縄文遺跡発掘調査報告書』 清見村教育委員会 1983年

註 5 甘粕健他『新潟県史 資料編 1 原始古代 1 考古編』 新潟県 1983年

註 6 松沢亜生「長野県諏訪郡新道の中期縄文土器」 『考古学手帖』 1 1958年

註 7 和田哲『西上遺跡』 昭島市教育委員会 1975年

註 8 塚田光他「千葉県通源寺貝塚採集の中期縄文土器」 『考古学雑誌』 第59巻第1号 1973年

註 9 宮崎朝雄他『坂東山』 埼玉県教育委員会 1973年

註10 栃木県立博物館『はなひらく縄文文化』 1984年

註11 日本考古学協会『北関東を中心とする縄文中期の諸問題《資料》』 1981年

註12 大貫英明『橋本遺跡Ⅲ』 相模原市橋本遺跡調査会 1983年

註13 人見暁朗『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡 1・2 区（下）』 茨城県教育財団 1984年 第75号住居跡（第244図 8）は好例である。

## 2 土製品について

### (1) 土器片錘について

土製品の中で量的に最も多く出土したものが、土器片を利用した土錘、すなわち土器片錘である。土錘の形態分類については、渡辺誠、柳澤清一氏らの先駆的業績があり、土器片錘に関しては長軸の両端に紐かけ用のキザミ目を付すもの、短軸の両端に紐かけ用のキザミ目を付すもの、長短両軸に計 4 か所の紐かけ用のキザミ目を付すものの 3 種に大別されている。当遺跡から出土した 540 点のうち、完形のものは 309 点であり、そのほとんどが、長軸両端に紐かけ用のキザミ目をもつものである。長短両軸に計 4 か所の紐かけをもつものはなかった。特異なものとして、キ

ザミ目が片方にだけ2か所つけられているものが4点出土している。また、6区の第42号住居跡から出土したDP50は、キザミ目を3か所もつもので異例である。

形状差だけを取りあげても、各種のものがみられる。当遺跡1・2区からも多数の土器片錘が出土しており、報告者は次のように形態分類をしている。

精緻な楕円形・不整正方形・不整長方形・不整台形・不整楕円形・不整円形

この中で、精緻な楕円形と報告されているものは、わずか7点で、第348図12を除いては、丁寧に磨かれていて形状を整えられている。その他の大部分は、報告者が不整〇〇形と表現しているように不整形なものが多い点が特色である。この点は、今回報告する6区・7区でも同様であるので、形態分類については、特に示さずにキザミ目の数や位置について重視した。形状からみれば、筆者が以前に存在を指摘したいわゆる鯉節型土器片錘<sup>(2)</sup>の範疇に含まれると考えられる資料がほとんど出土していない点が特徴的である。那珂川・久慈川下流域に多く分布するいわゆる鯉節型に対して、南三島遺跡を含む利根川下流域および霞ヶ浦周辺には不整形のものが分布している。後者の地域に不整形のものが主体的に分布することは、阿玉台式期以来の伝統で、中期後半から後期前半にかけて継続している。これに対して、那珂川・久慈川下流域においては、阿玉台式期から加曾利E式期の前半にかけては不整形のものが主体を占めるが、加曾利E式期後半にはいわゆる鯉節型<sup>(3)</sup>が特徴的に分布するようになる。

土器片錘を整形手法からみると、打ち欠きによる整形だけで、磨りが加えられていないものと周縁を丁寧に研磨しているものに大別されるが、その中間的なものもある。南三島遺跡1・2・6・7区出土の資料を通してみると、打ち欠きによる整形だけのものや、わずかに磨りの認められるものが主体を占めている。使用による摩滅が観察できるものもかなりある。

土器片錘に加工されている土器の部位をみると、胴部片が圧倒的に多く、口縁部片を用いる例も少数ながら認められ、底部片を利用したものは7区の第32号住居跡から出土したDP160(第638図77)の1点だけである。また、6区の第1号溝から出土したDP547(第390図219)は、把手片を利用しており、特異なものと考えられる。

土器片錘の重量については、本遺物の用途や機能等を推定するためには欠かすことのできない事項である。重量は、最も軽いものが、7区の第21号住居跡から出土したDP73(第637図32)の5.0gで、最も重いものが6区の第333号土壇から出土したDP515(第389図206)の132.6gである。15gから45gにかけての重量を有するものが最も多くみられる。重量は、大きさや形状および厚さによって決定されるが、その差が何を意味するものかは解明されていない。大・小の差のあることが土器片錘として有効であったのか、形状や重量の差が用途の差を反映しているものかなど問題点は多い。

筆者も土器片錘を基本的には漁網用の錘具とする立場に立つが、用途をこれ1つに限定して考

えることには無理があると考えている。

当遺跡6・7区出土の土器片錘については、住居跡および土壌内の覆土中から散在的に出土しており、床面上の一定の場所からまとまって出土するような所見は得られなかった。東京都世田谷区下野毛遺跡<sup>(4)</sup>の第5号住居跡および第8号住居跡からは、それぞれ土器片錘11点と8点がまとまって床面直上から出土した調査例が報告されている。第5号住居跡では円形の礫4点が伴出したという。この調査にたずさわった大槻信次氏は、別稿においてこの事例を紹介するとともに、<sup>(5)</sup>第5号住居跡出土の土器片錘10個と円形の礫4個、第8号住居跡出土の土器片錘18個と円形礫1個は、それぞれ「この地域の河川における漁網につけられた錘具の必要セット数であったとこと」が推定されると記している。(・は報告書および論文に記されたままの数である。)

大変に貴重な報告例であるが、伴出してセットとして認定された土器片錘が、報告書中のどれに相当し、1点1点の重量以外に総合しての重量(セットとしての重量)が知りたいものであるが、それが分からなかった点は残念である。また、伴出したとされる円形礫の重量についても報告して欲しかった。それらが判明すれば、漁網の規模などをより具体的に知り得たものではないかと思われる。

なお、当遺跡1・2区出土の土器片錘および網漁に関する詳細な考察が、報告書に展開されている。

註1 a 渡辺誠『土器破片利用の土錘』に関する二、三の考察』 1961年

b 渡辺誠『縄文時代の漁業』 雄山閣 1973年

c 柳澤清一「土錘」『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会 1970年

註2 齊藤弘道「土器片錘に関する二、三のメモ」『常総台地』5 1970年

註3 勝田市三反田蛭塚貝塚、同君ヶ台貝塚、東海村御所内貝塚、同平原貝塚などの出土資料中に好例がある。

註4 浦野千佳子「土製品」『下野毛遺跡』 世田谷区教育委員会 1984年

註5 大槻信次「縄文中期末における網漁業の一資料」『武蔵野』 第61巻第1号 1983年

## (2) 土製円板について

土製円板は、土器片を再利用して直径4～5cmに丸く加工した土製品である。当遺跡6・7区出土の土製円板も直径4～5cm前後のものが多いが、直径2.5cm前後のものから直径7～8cm前後のものまでみられる。当遺跡から出土した土器の大半が、縄文中期後半の加曾利EⅢ・IV式期のものであることから、土製円板・有孔円板もこの時期のものと考えられる。

当遺跡6・7区出土の資料については、土製品の項において、整形方法および形態、重量など

を報告したもので、ここでは土製円板を中心に、一般的な時間的変遷、分布および用途について若干検討することにしたい。

この種の円板について報告している例は多いが、論攷・考察を加えている例は少ない。渡辺幸子<sup>(1)</sup>、上野佳也氏<sup>(2)</sup>の集成・分析・検討を知るだけである。報告書において考察されている例は多くあると思われるが、省略させていただいた。

土製円板の出現は、現在までのところ縄文時代草創期までさかのぼり、隆線文系土器群に伴うものとして、長崎県福井洞窟出土例<sup>(3)</sup>などがあり、撚糸文系土器群にも少数ながら伴っている。早期・前期にも類例はみられるが、量的に増加をみるのは中期後半からであり、以降晩期まで継続している。出土遺跡の地理的分布も広く、東北・関東・中部・北陸地方に多い。

土製円板の用途については、いくつかの考え方が提出されている。まず、第一にあげられるのが、土製円板を通称メンコと呼ぶがごとく、子供の玩具とする考え方である。しかし、これについては証明する術<sup>すべ</sup>がない。第二には土製円板を有孔円板の未成品とする考え方である。この考え方は、一見妥当性を有するようであるが、良く考えてみると可能性が低いように思われる。土製円板と有孔円板は同一遺跡から出土することは多いが、遺跡によって両者の出土量の差が大きい。また、穿孔途中の土製円板はみられるが、全体の出土数の中ではわずかである。更に、孔の大きさ、穿孔方法などから考えても、無孔の土製円板が使用によって有孔となったものとは考え難い。すなわち、円板の径に対して孔の径の大きいものが当遺跡出土例には目立ち、穿孔方法も表裏両面から穿たれているものがほとんどであることから、使用方法にもよろうが、一般的には使用により無孔から有孔へ変ったとは考えられない。しかし、遺跡や時期によっては、円板の径に対して孔径の小さい例が多数出土する場合もあり、上記の可能性が全く否定されるべきものともいえない。

次には、これらを土器の補修具とみる考え方がある。これは故甲野勇氏が、青森県八戸市是川中居遺跡出土土器の中に、土製円板を欠損部の補修用に使った例のあることを指摘した<sup>(4)</sup>ことによるが、その後の大規模な調査資料の増加にもかかわらず同種の例は報告されていない。したがって、上野佳也氏の考えるごとく、土製円板一般を土器の補修具とするよりも、是川例を例外的な転用例とみた方が適当であろう。

次に土製円板を換算具とする考え方<sup>(5)</sup>もあるが、第一の子供の玩具と同様に具体的に証明すべき手だてが示されておらず、可能性があるという程度にしか考えられない。

なお、この他に土製円板を出土状態から「祭祀具」の一種とみるべき可能性も指摘<sup>(6・7)</sup>されているが、これまた具体性を欠いている。

上野佳也氏は、上記の他に土製円板の用途として、重さの計量具とする考え、投げる道具としての考えなどを提出しつつも否定し、結論として土製円板を竹筒の蓋とする意見を強く打ち出し



(2)  
ている。

当遺跡出土の土製円板についても、上記の各説に対比して用途を考えるべきであろうが、いずれも可能性にとどまるものであり、今後ともに検討を重ねていくべきである。

- 註1 渡辺幸子「縄文時代における所謂「土製円板」に関する研究」 『研究紀要』 第3冊 福島大学考古学研究会 1973年
- 註2 上野佳也「縄文時代の土製円盤について」 『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』 1983年
- 註3 鎌木義昌他「長崎県福井洞穴」 『日本の洞穴遺跡』 平凡社 1967年
- 註4 甲野勇「青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報」 『史前学雑誌』 第2巻第4号 1930年
- 註5 鈴木正博他「縄紋時代の換算具」 『常総台地』 11 1979年
- 註6 町田信「土器片利用の円板」 『月刊考古学ジャーナル』 第78号 1973年
- 註7 中村良幸『立石遺跡』 大迫町教育委員会 1979年

## 終 章 む す び

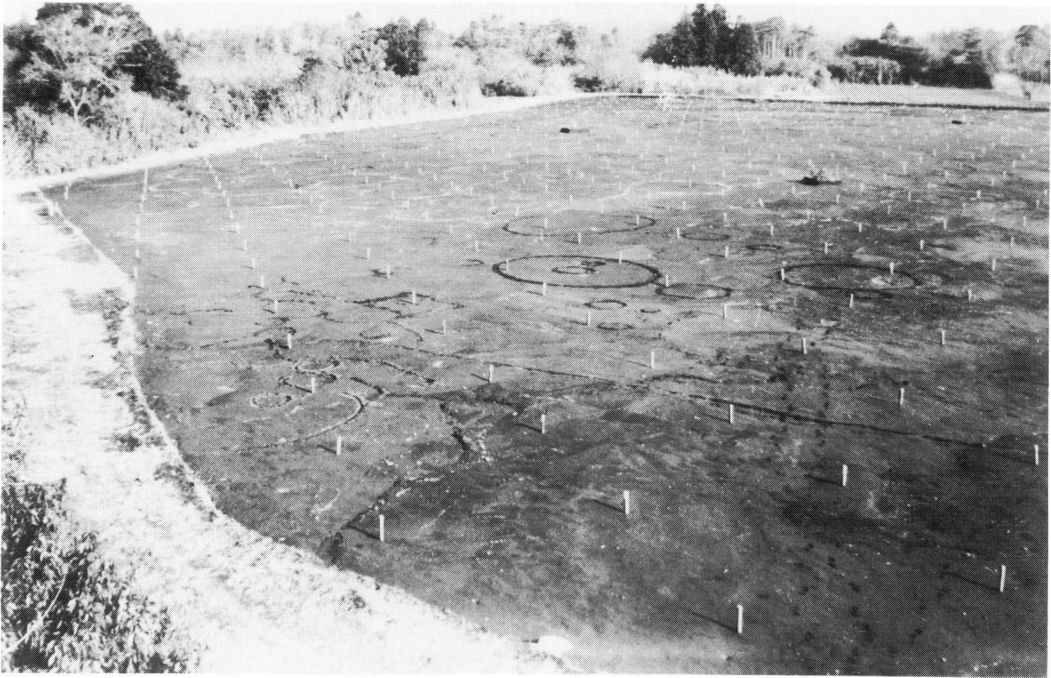
昭和57年度から58年度にかけて発掘調査を実施した、竜ヶ崎ニュータウン建設地域内における南三島遺跡6・7区からは、主に縄文時代早期・中期・後期と江戸時代前期の遺構を検出し、更に遺物としては縄文時代草創期から晩期にかけての土器片、古墳時代の土師器片、近世のものと思われる陶磁器片も少量出土している。

縄文時代早期後葉の野島式期に属すると考えられる炉穴は5基検出されたが、いずれも6区の南側部に位置していた。既に報告された2区北側部の炉穴群と密接な関連を有するものと思われる。土器からみると、野島式土器は2段階ないしは3段階に細分しようが、6区の遺構においてはこれを確認することはできなかった。中期前葉の阿玉台式期の遺構としては、6区の第149号土壙が注目される。貝ブロックを伴う円筒形を呈する深い土壙で、今後性格等の究明を進めるべきものである。当遺跡の主体をなす加曾利EⅢ・Ⅳ式期の竪穴住居跡・土壙および出土遺物については、若干の検討を加えつつまとめてきたが、最後に触れておかねばならない遺構がある。それは、7区の第409号土壙である。径2 m85cmのほぼ円形をなすもので、底面まで92cmの深さを有している。底面にはA・B・Cとしたピットが存在していて、中央部に深い柱穴が1か所穿たれている。また、炉とは考えられないが、加熱を受けた個所が1か所認められている。Bピットからは動物形土製品1点だけが出土している。本例と同様の遺構は、谷和原村筒戸A・B遺跡第28号住居跡にもみられる。底面に穿たれた土壙は2基で、遺構の周囲にピットが巡っている。本遺構からは特異な十字形の石器が出土している。このような形態および出土遺物、遺跡内における位置などを考慮すると、この種の遺構は特殊な祭祀を行う場所であった可能性も考えられ、今後充分に検討すべきものと思われる。

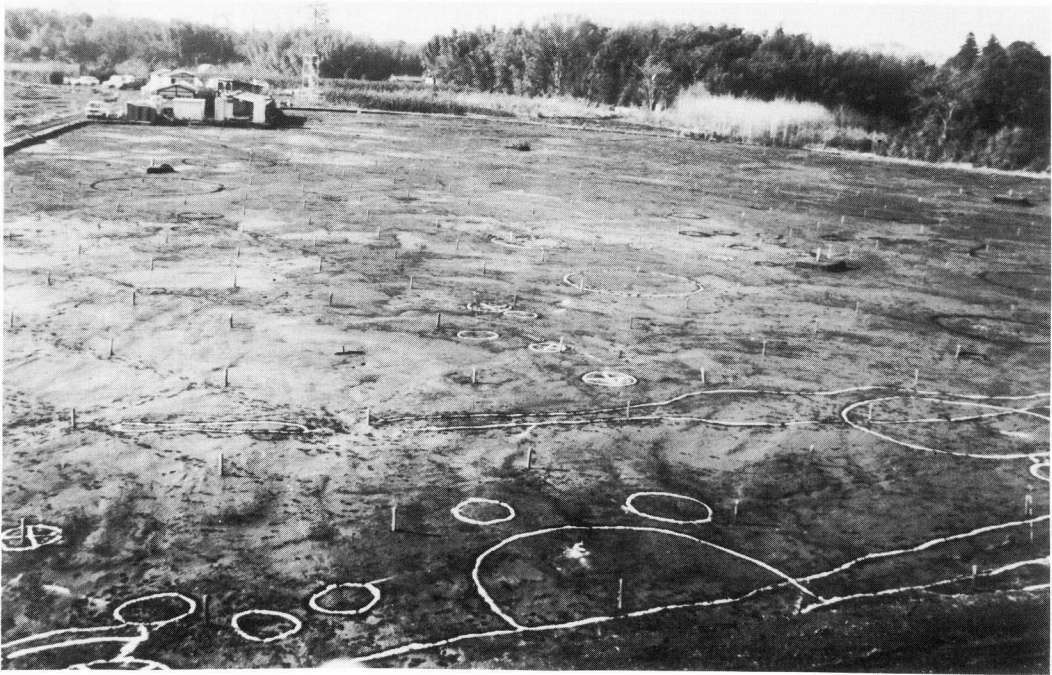
以上、当遺跡6・7区の調査の成果と問題点を提出してきた。残された問題点は多く、既に報告された1・2区および今回報告の6・7区の成果を踏まえ、更に現在調査中の5区・3区、および今後調査予定の4区の成果を待つて総合的に検討していきたい。

なお、この報告をまとめるにあたり、調査担当者のもとより、関係各位の御指導や御協力を賜ったことに対し、文末ながら厚く感謝の意を表するものである。

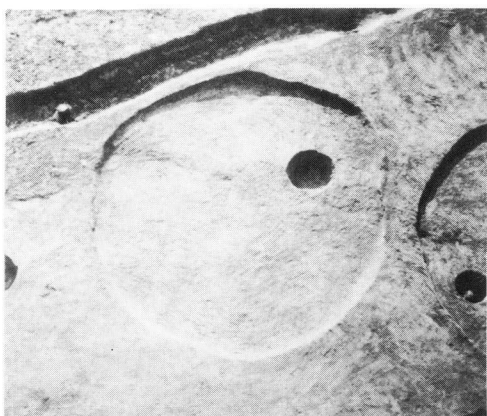
# 写 真 图 版



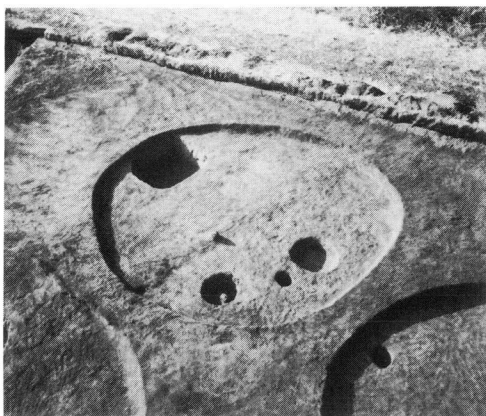
発掘前全景



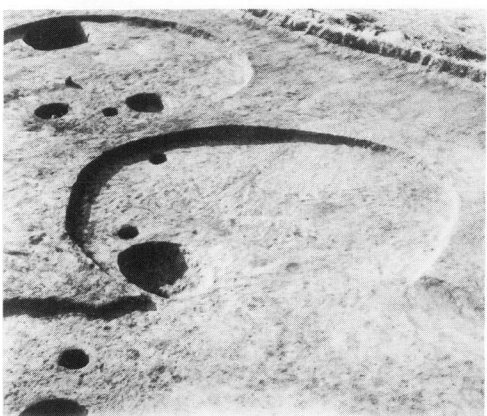
発掘前全景



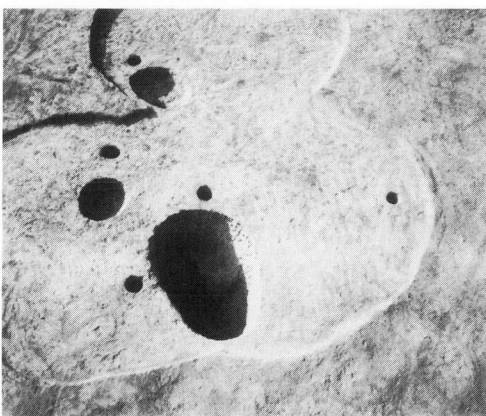
第1号住居跡



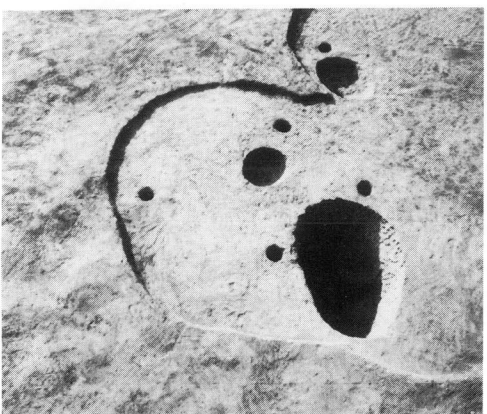
第2号住居跡



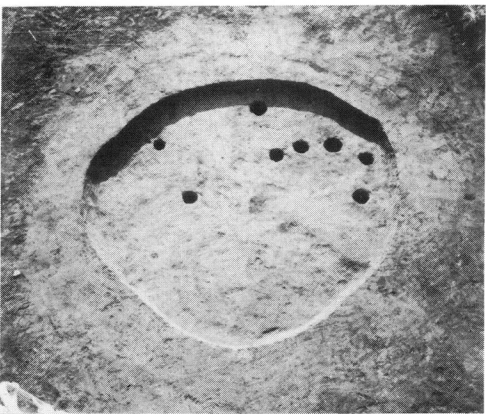
第3号住居跡



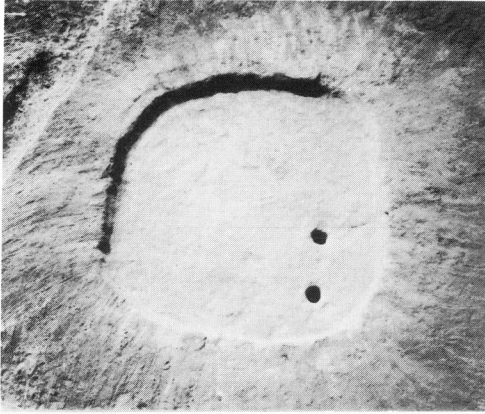
第4号住居跡



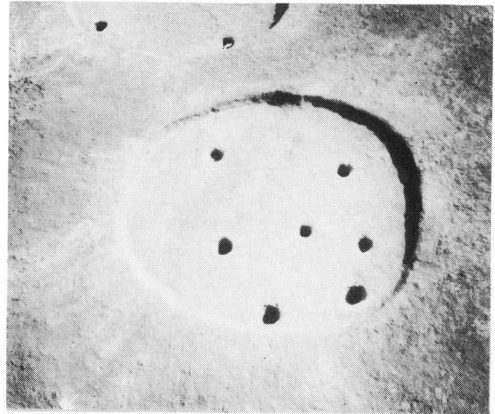
第5号住居跡



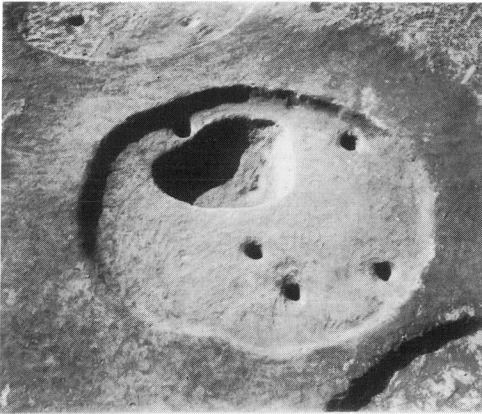
第6号住居跡



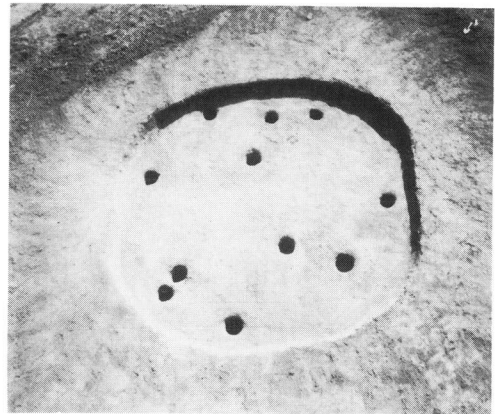
第7号住居跡



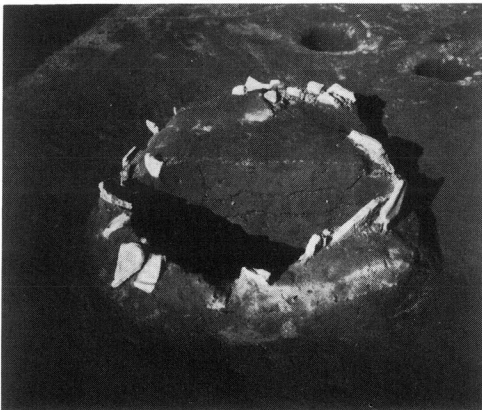
第8号住居跡



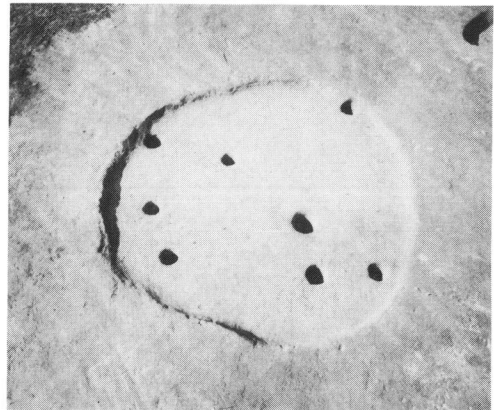
第9号住居跡



第10号住居跡



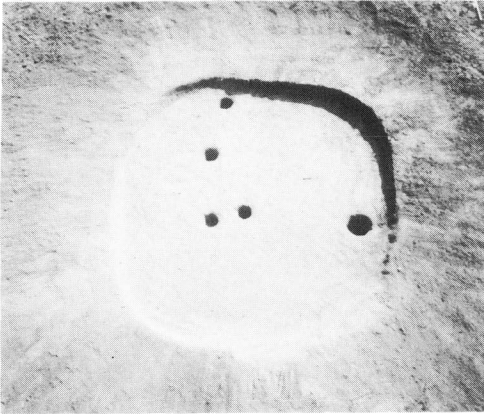
第11号住居跡炉(土器片囲い炉)



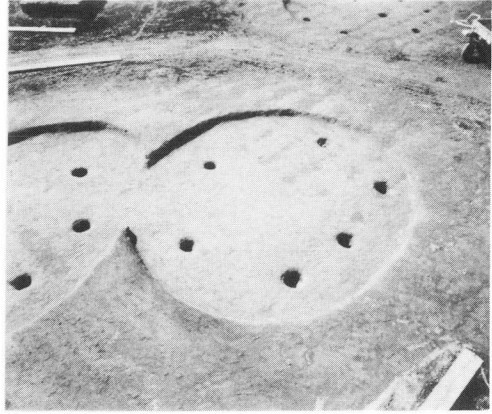
第12号住居跡

PL 4

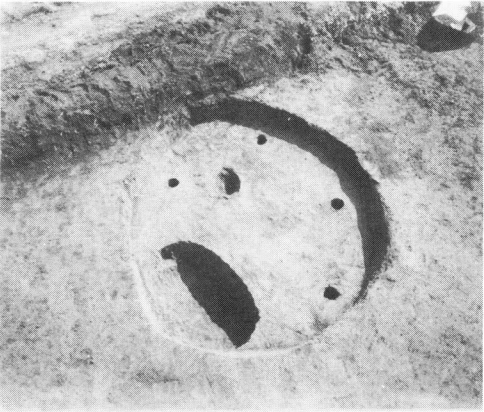
6区



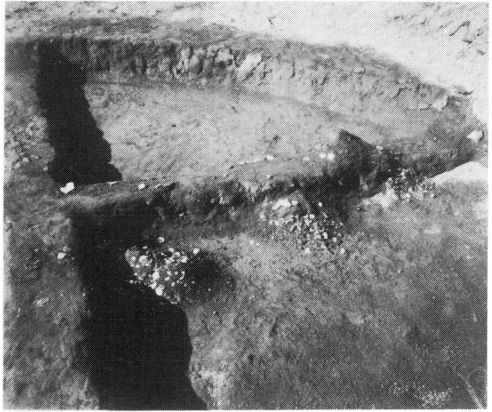
第13号住居跡



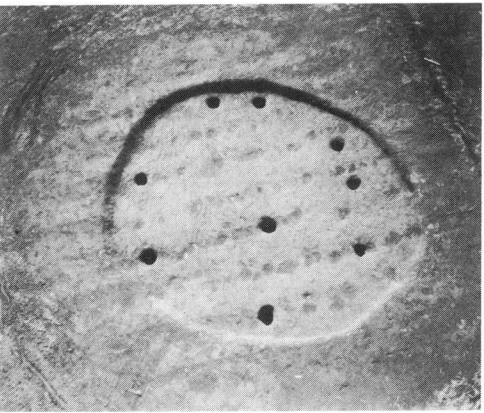
第14号住居跡



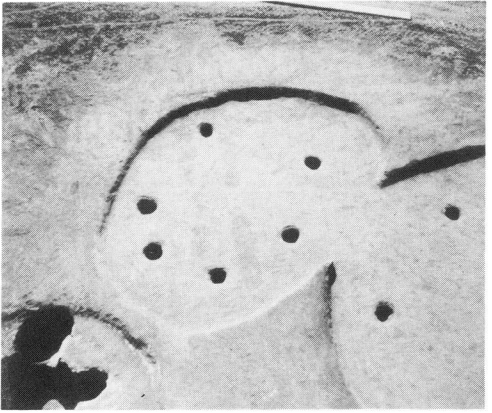
第15号住居跡



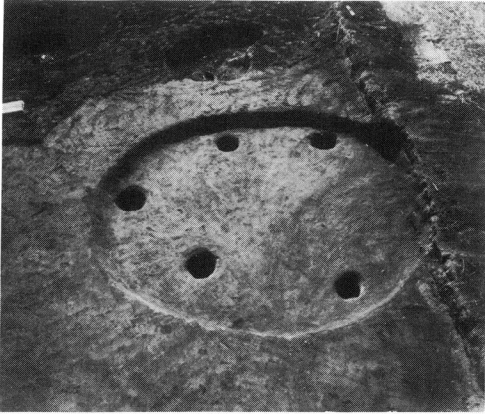
第15号住居跡内 貝層堆積状況



第16号住居跡



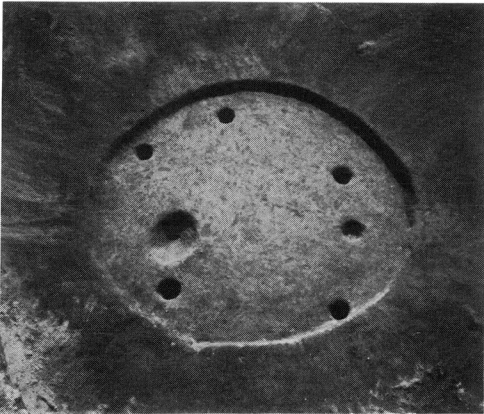
第17号住居跡



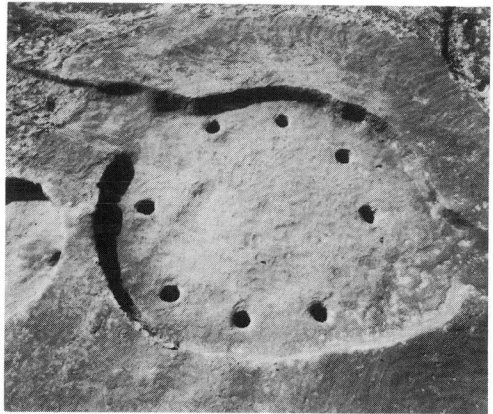
第18号住居跡



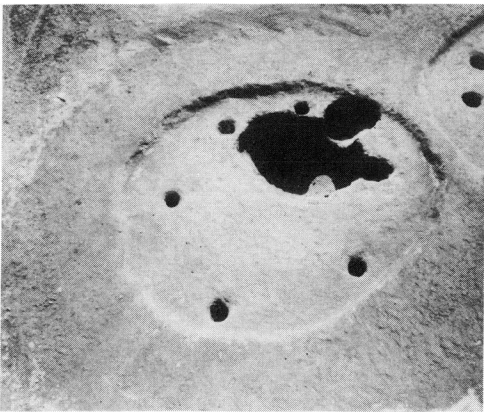
第19号住居跡



第20号住居跡



第21号住居跡

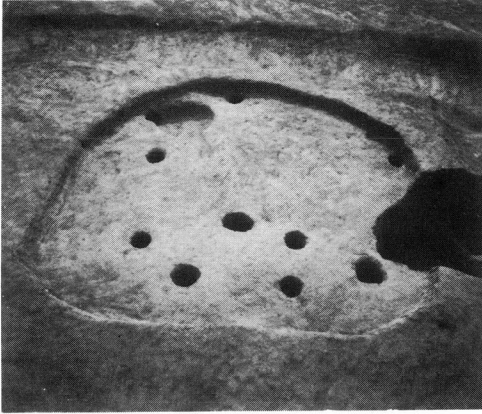


第22号住居跡

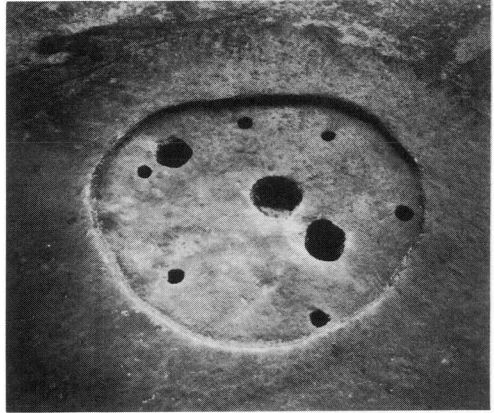


第23号住居跡

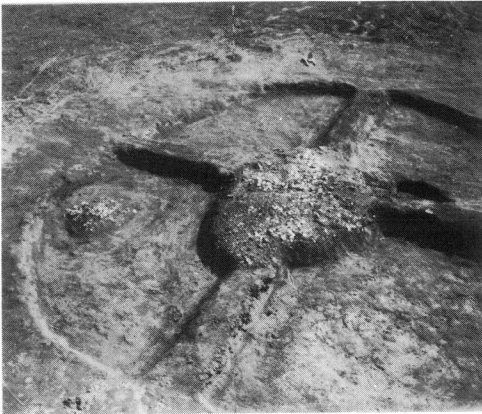




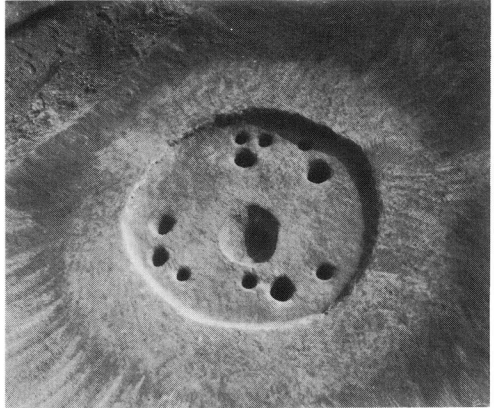
第24号住居跡・第61 A号土壤



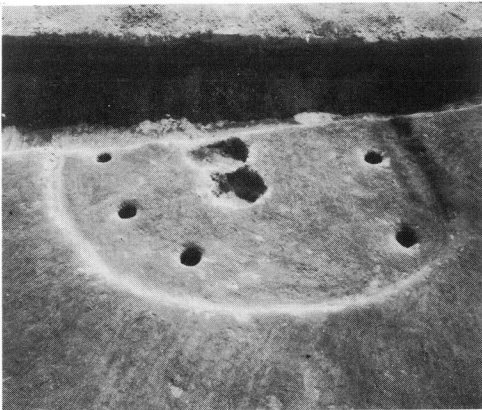
第25号住居跡



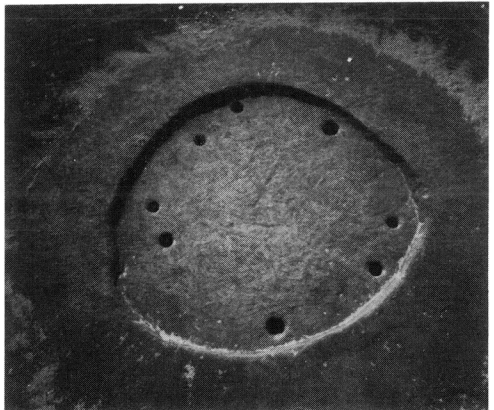
第25号住居跡内 貝層堆積状況



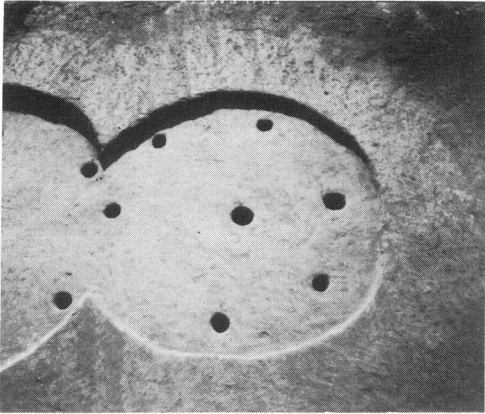
第26号住居跡



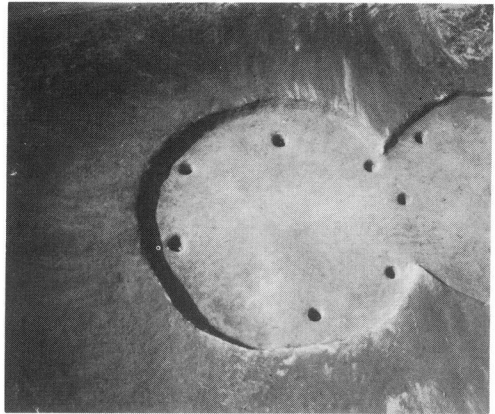
第27号住居跡



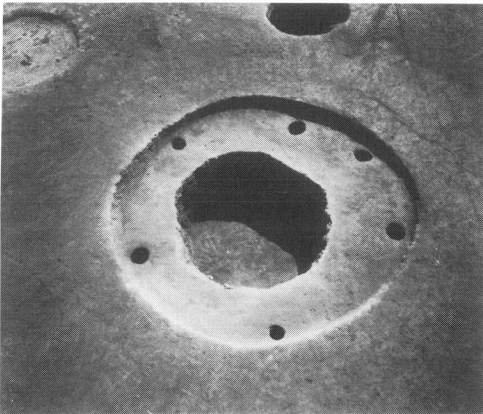
第28号住居跡



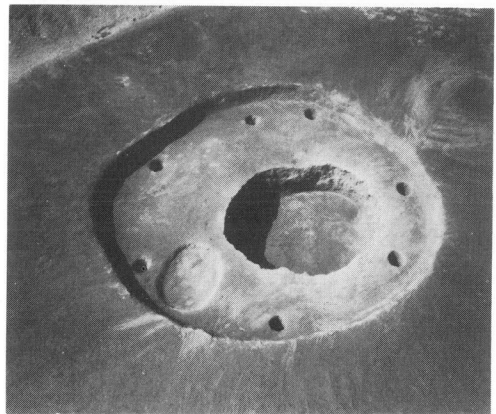
第29号住居跡



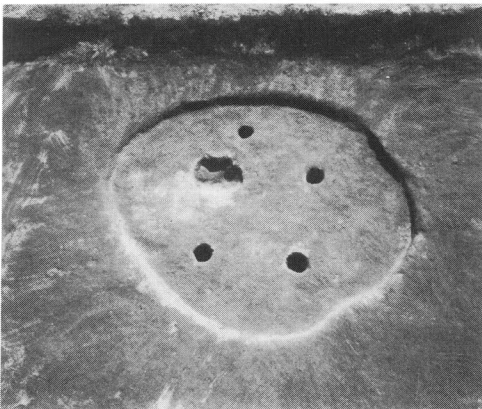
第30号住居跡



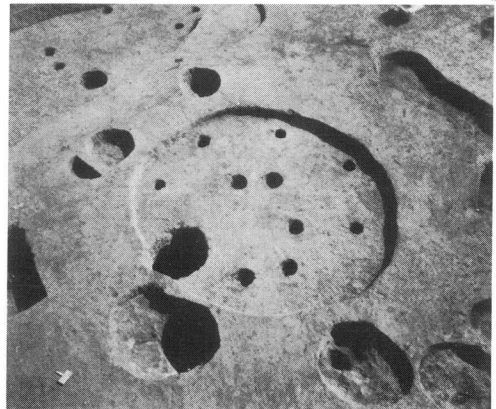
第31号住居跡・第194号土壙



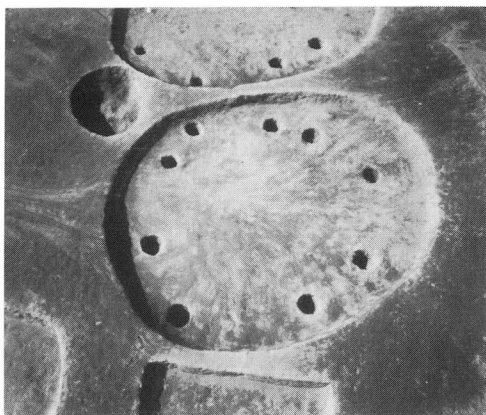
第32号住居跡・第196・199号土壙



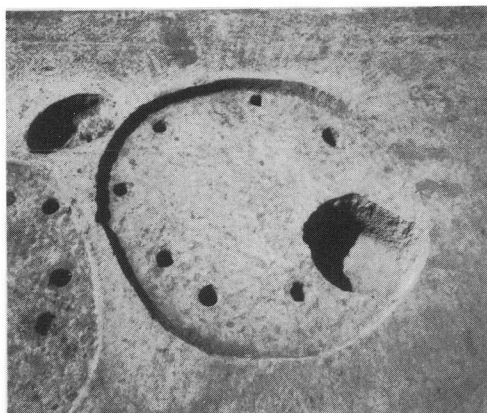
第33号住居跡



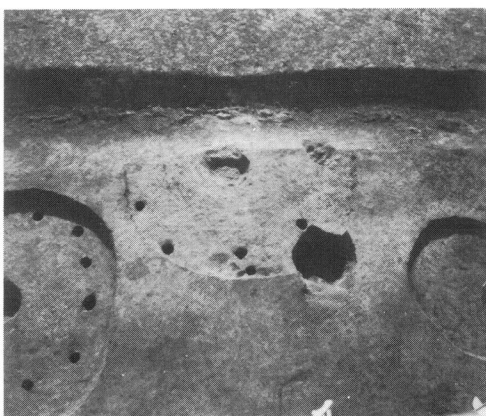
第34号住居跡・第197号土壙



第35号住居跡



第36号住居跡



第37号住居跡



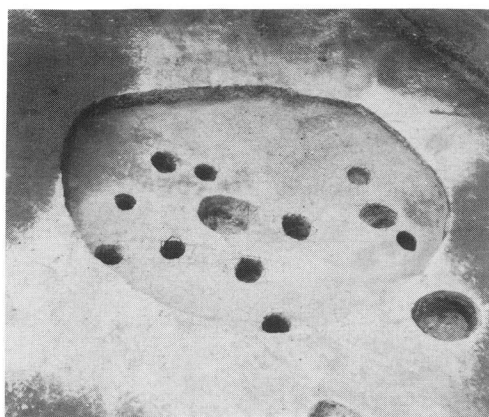
第38号住居跡



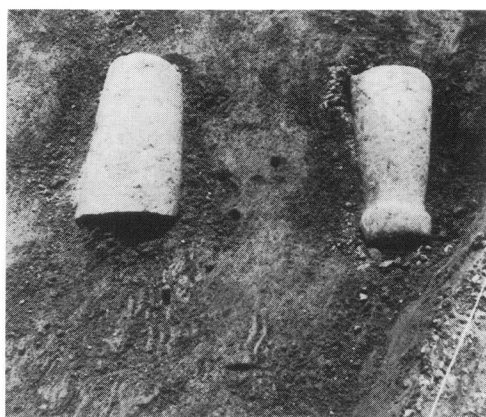
第39号住居跡



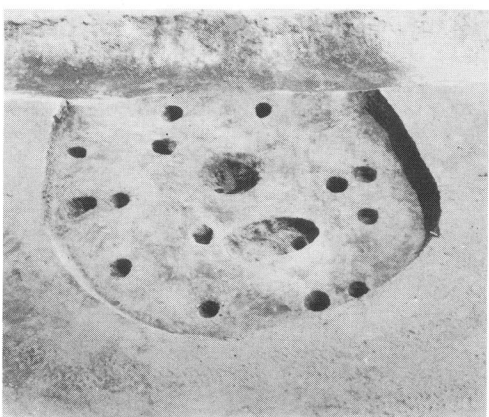
第40号住居跡



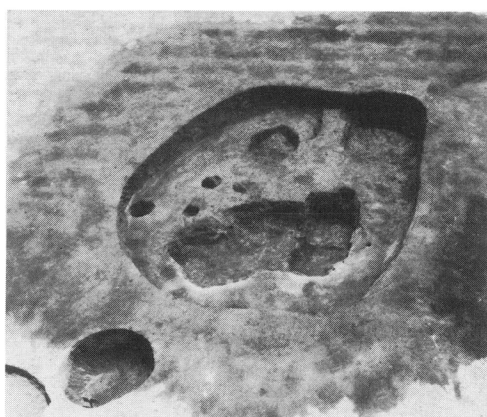
第41号住居跡



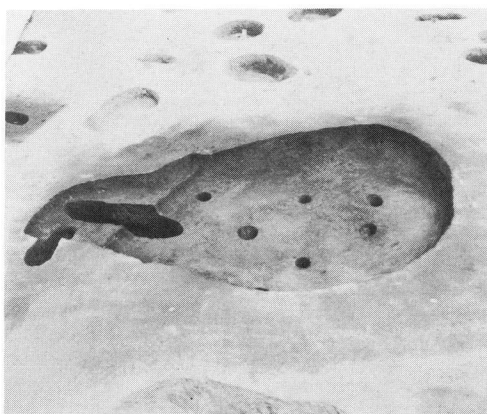
第41号住居跡出土遺物



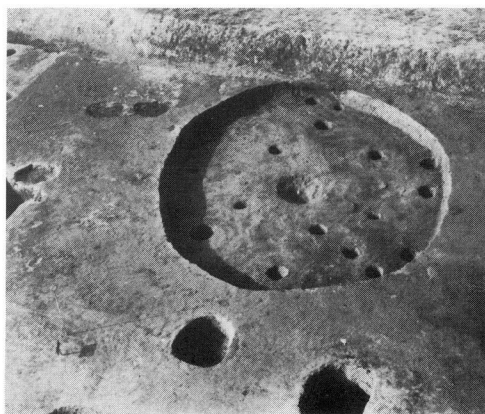
第42号住居跡



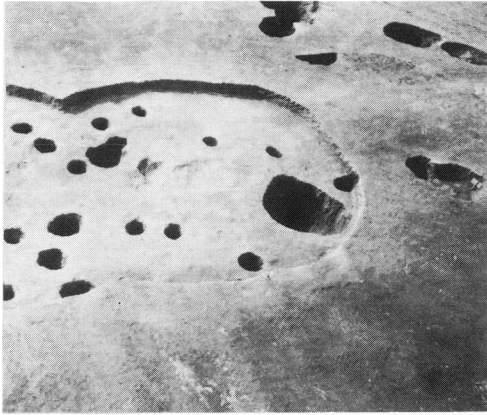
第43号住居跡



第44号住居跡



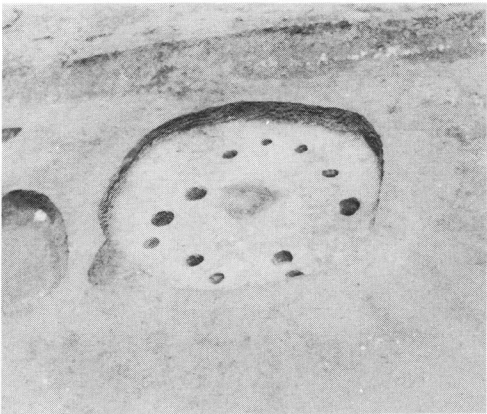
第45号住居跡



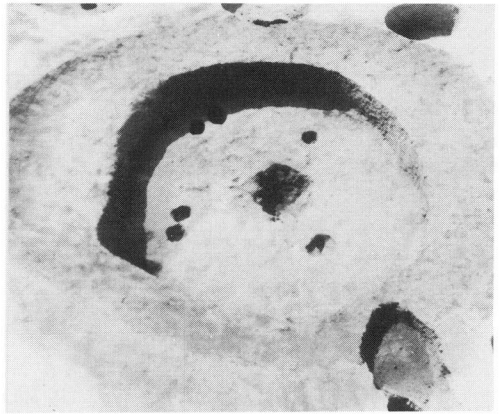
第46号住居跡



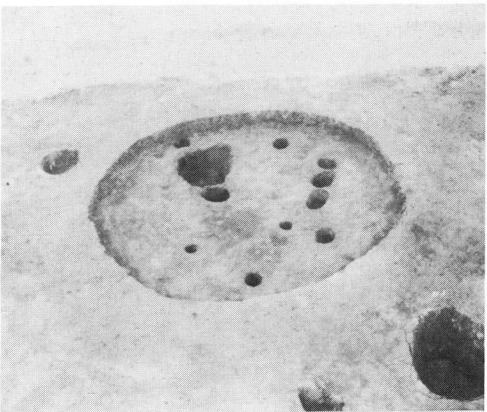
第46号住居跡出土遺物



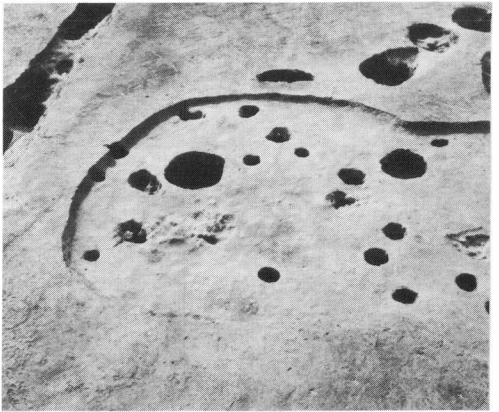
第47号住居跡



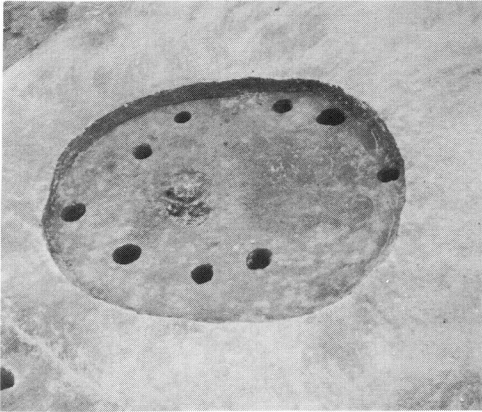
第48号住居跡



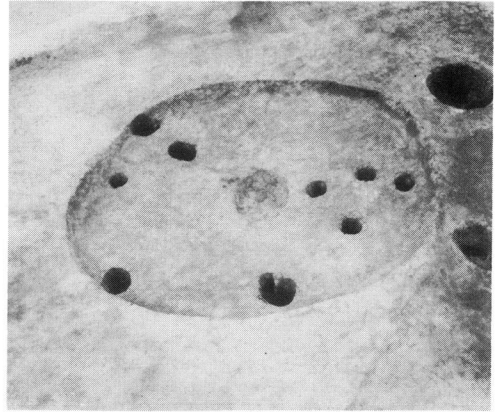
第49号住居跡



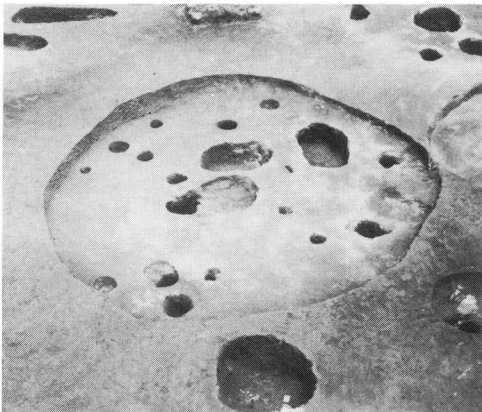
第50号住居跡



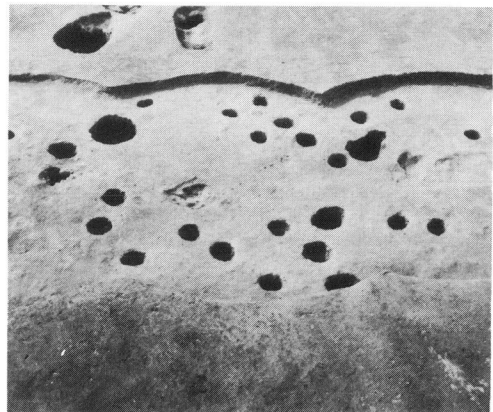
第51号住居跡



第52号住居跡



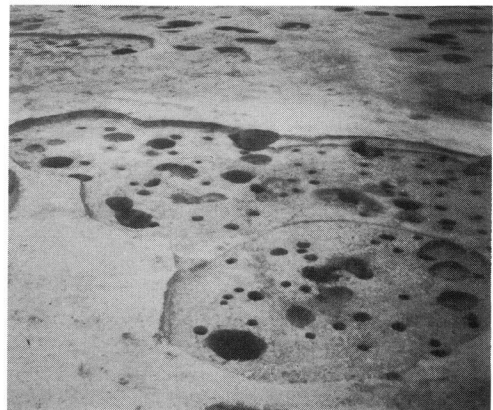
第53号住居跡



第54号住居跡



第55・74・75号住居跡



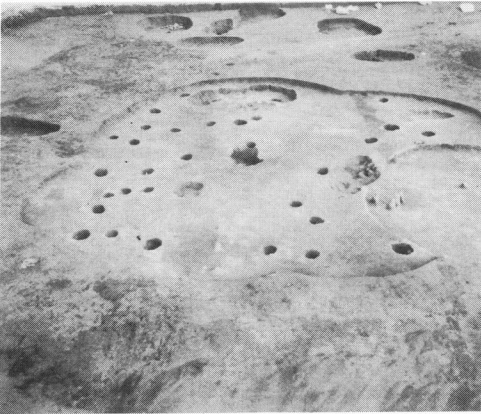
第56~79号住居跡



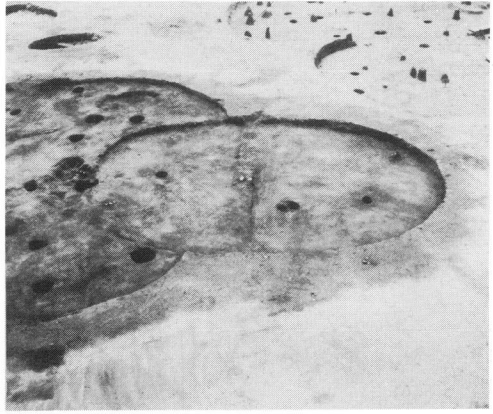
第57号住居跡



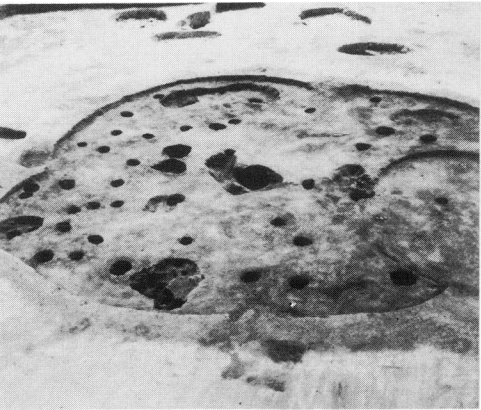
第61号住居跡



第62～64号住居跡



第64・66号住居跡



第64・66号住居跡



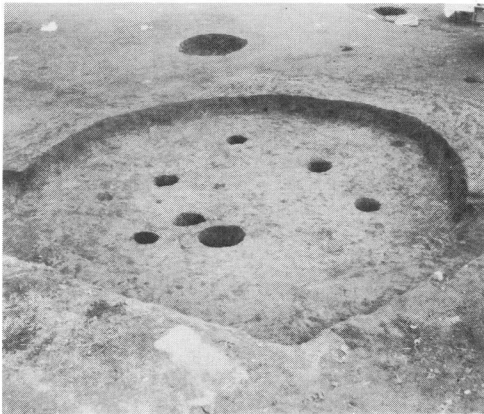
第69～71号住居跡



第74号住居跡炉(土器埋設炉)



第76・77号住居跡



第80号住居跡

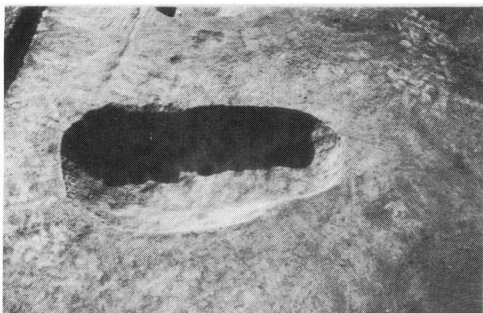


第81・84・85号住居跡

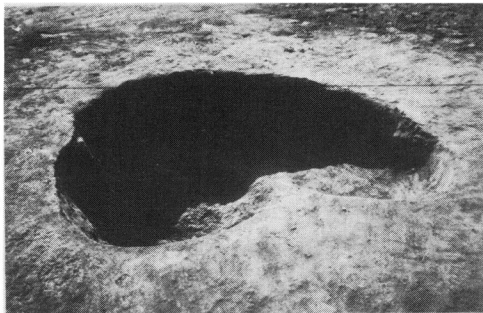


第82号住居跡





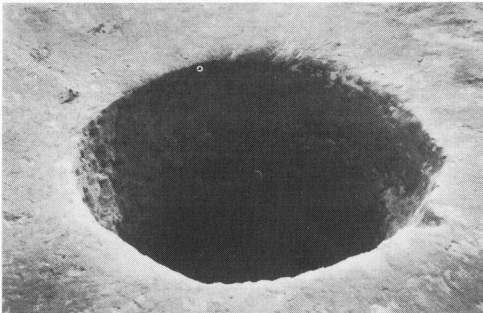
第1号土坑



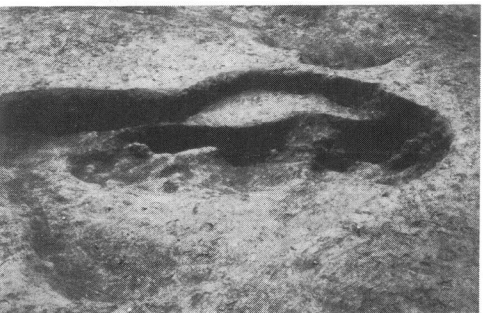
第57号土坑



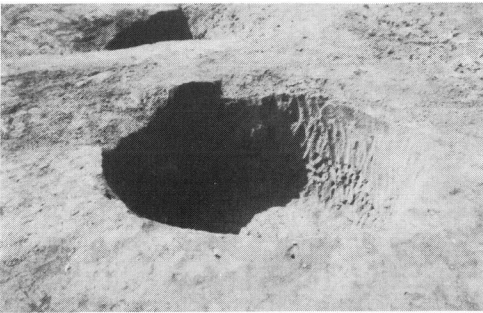
第63号土坑



第69号土坑



第74号土坑



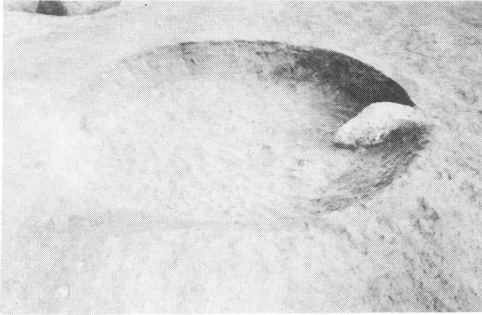
第78号土坑



第79号土坑



第84号土坑



第86号土壙



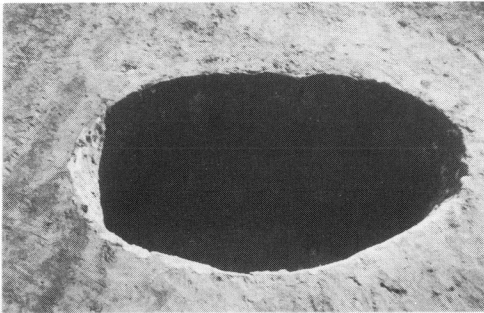
第87号土壙



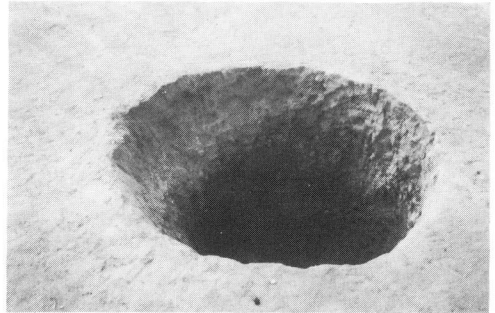
第88号土壙



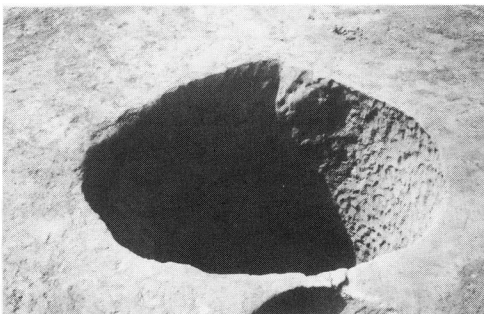
第100号土壙



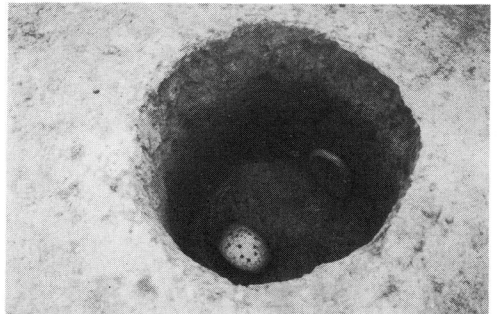
第124号土壙



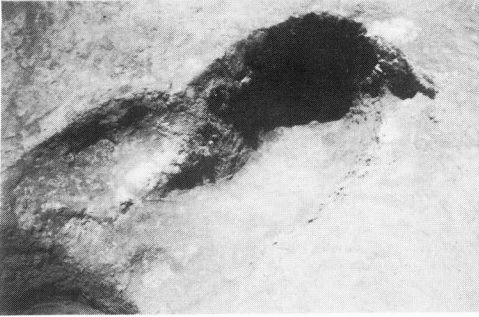
第135号土壙



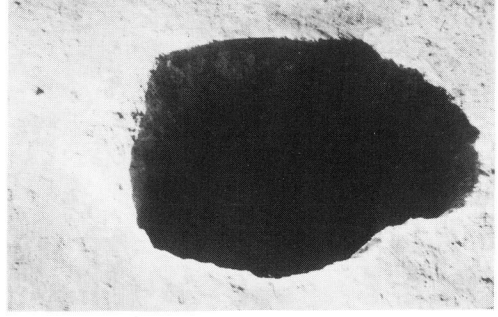
第142号土壙



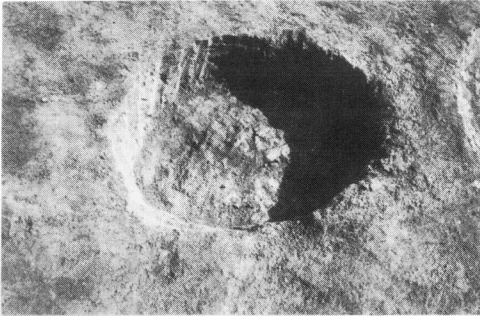
第144号土壙・遺物出土状況



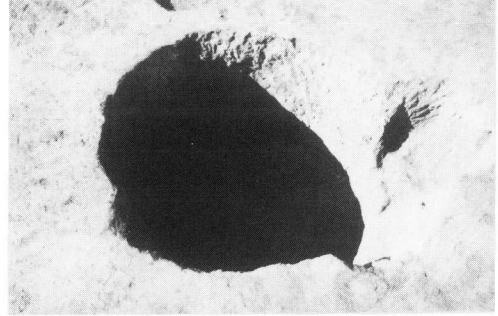
第149号土壤



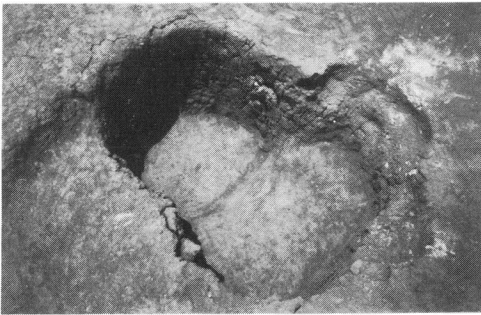
第153号土壤



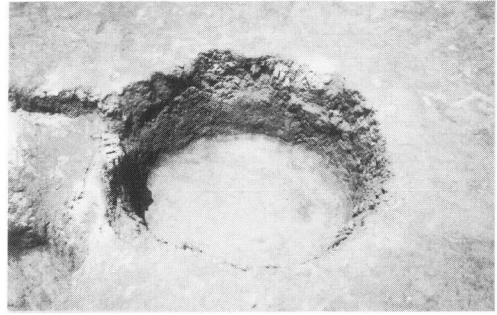
第155号土壤



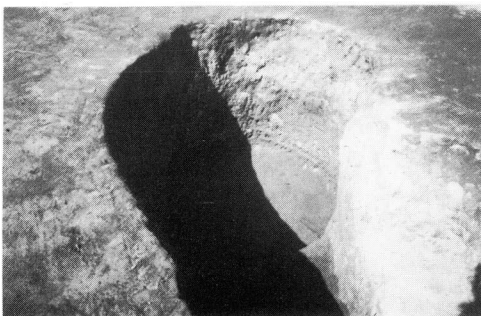
第156号土壤



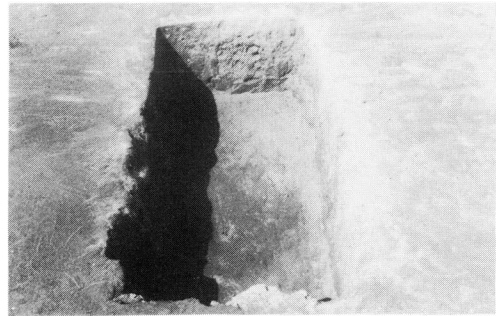
第162号土壤



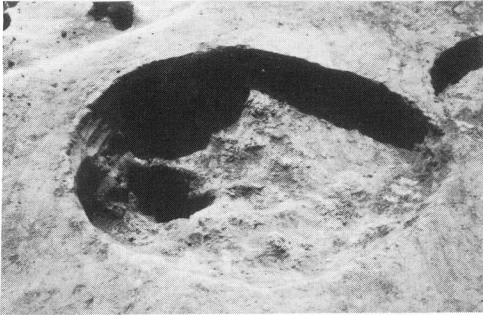
第164号土壤



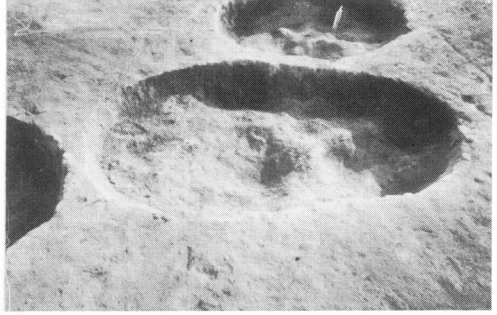
第165号土壤



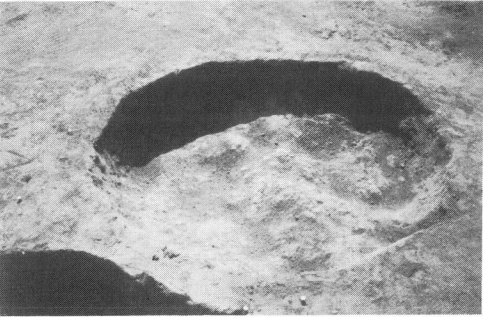
第176号土壤



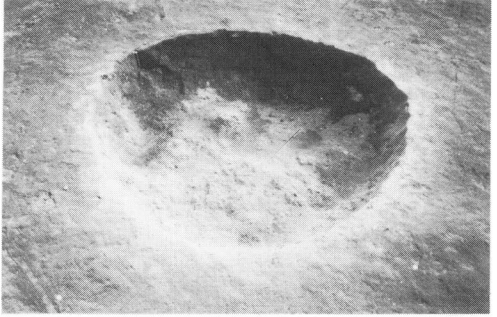
第178号土坑



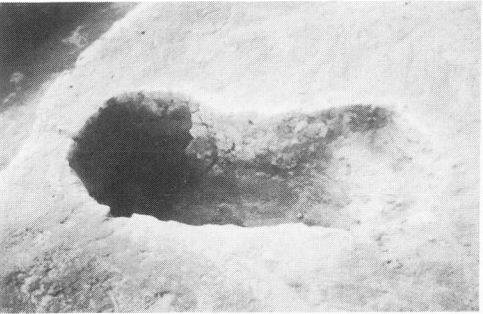
第179号土坑



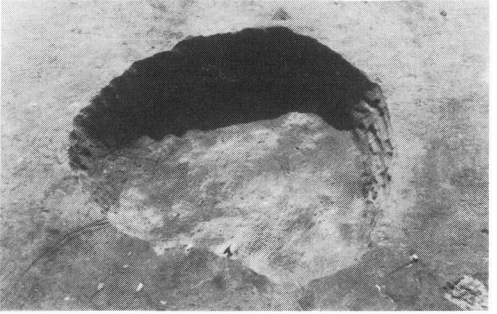
第180号土坑



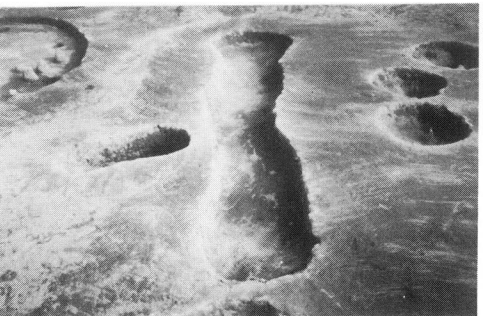
第181号土坑



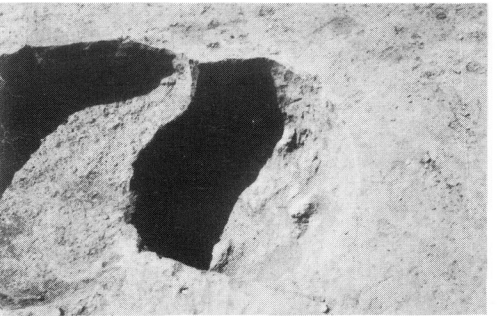
第182号土坑



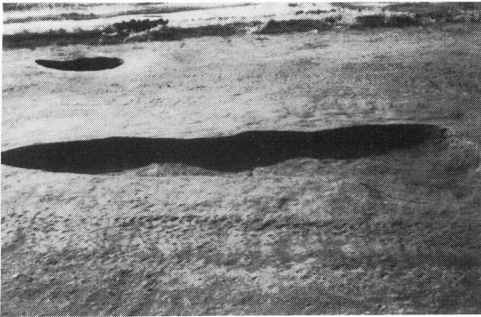
第183号土坑



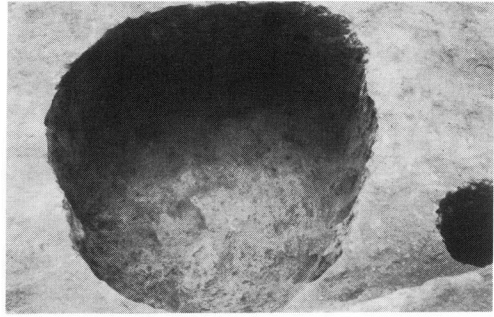
第185号土坑



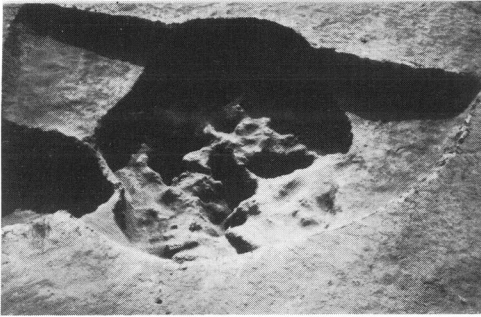
第205号土坑



第215号土壤



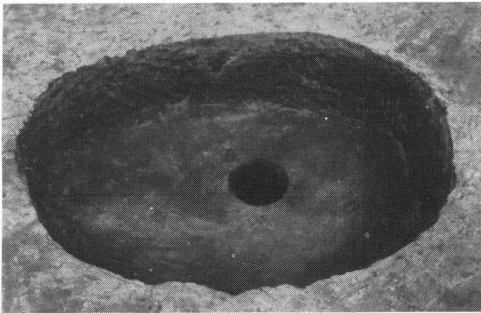
第231号土壤



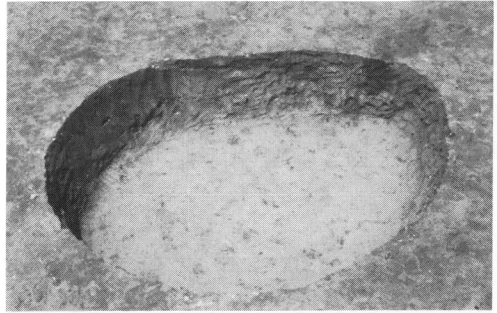
第249号土壤



第251号土壤



第252号土壤



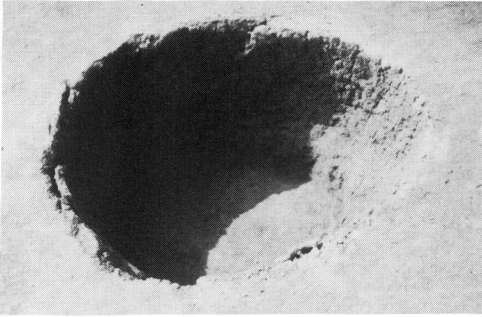
第257号土壤



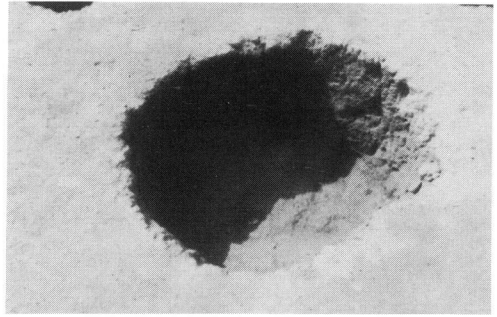
第260号土壤



第264号土壤



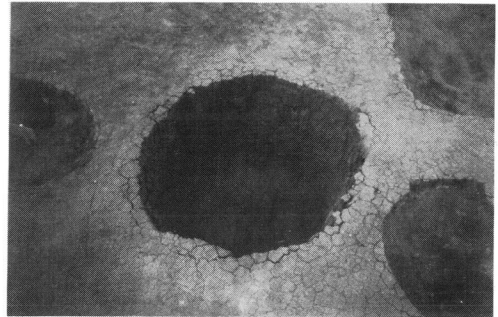
第267号土壤



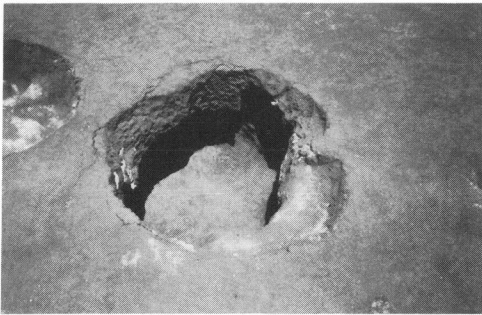
第268号土壤



第272号土壤



第281号土壤



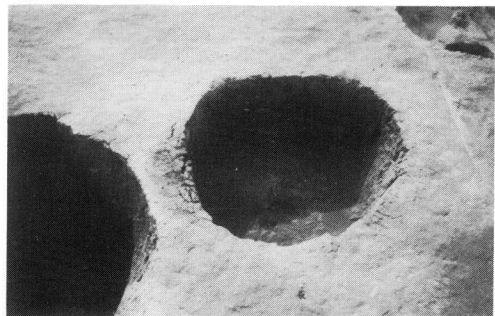
第291号土壤



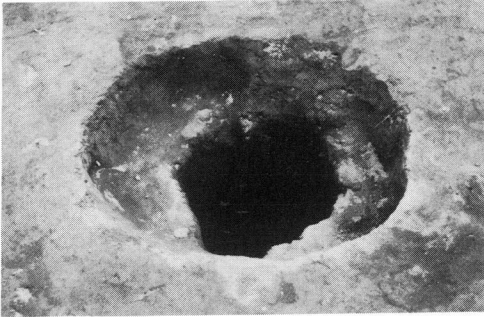
第303号土壤



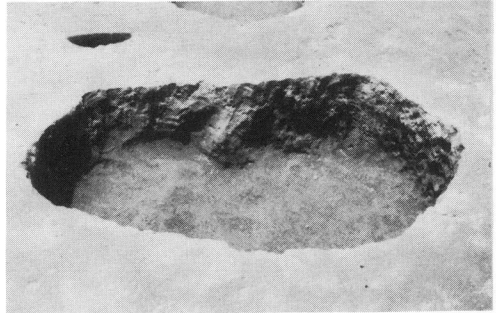
第308号土壤



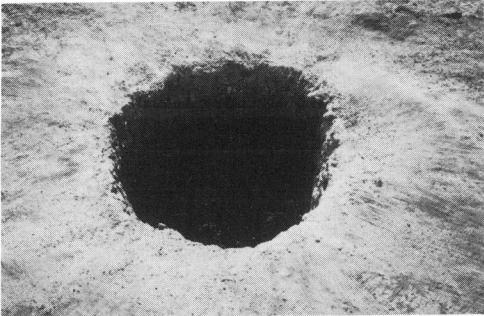
第309号土壤



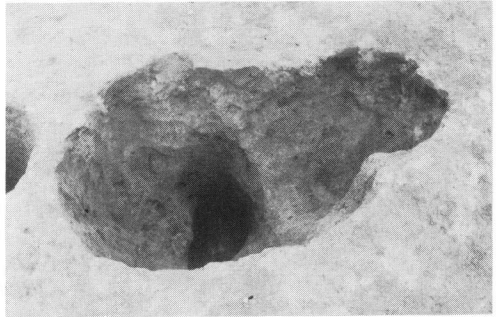
第333号土壤



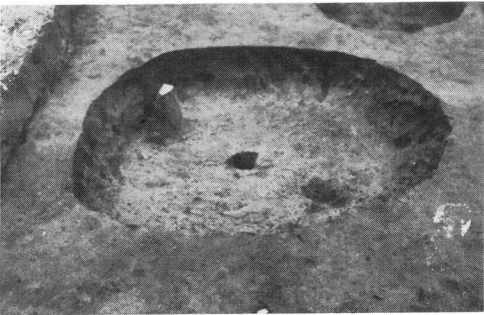
第337号土壤



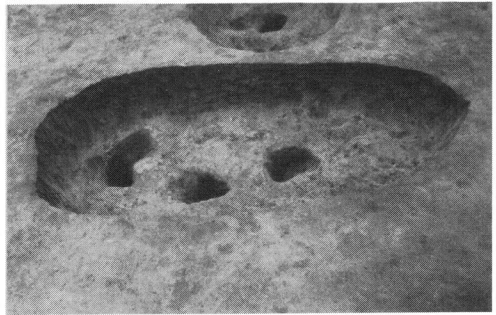
第354号土壤



第355号土壤



第359号土壤



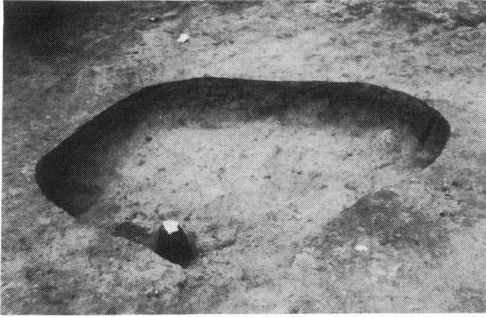
第361号土壤



第362号土壤



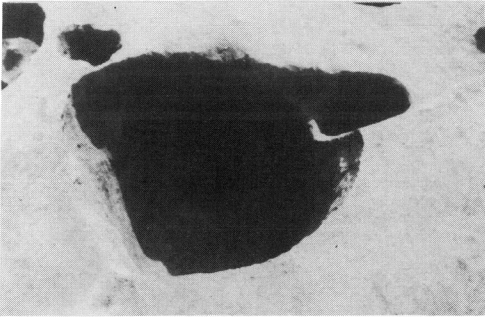
第363号土壤



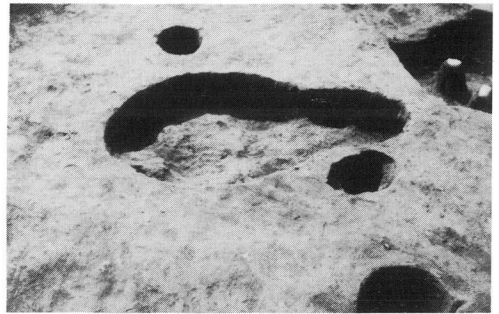
第364号土坑



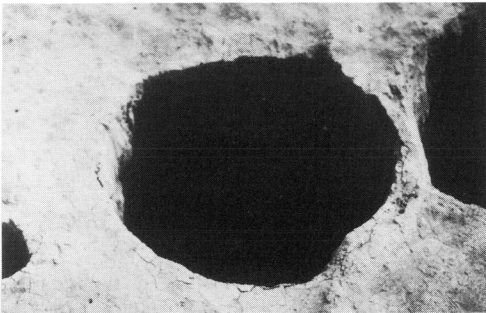
第365号土坑



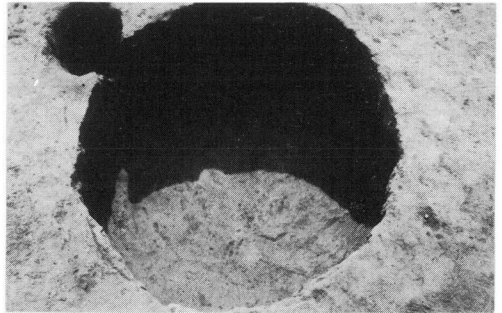
第383号土坑



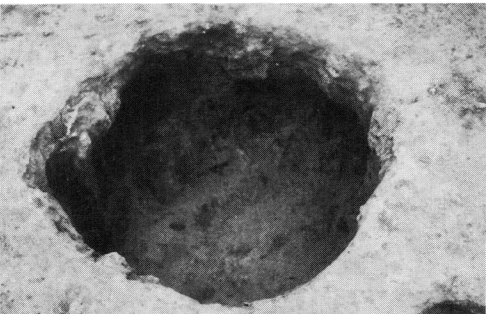
第388号土坑



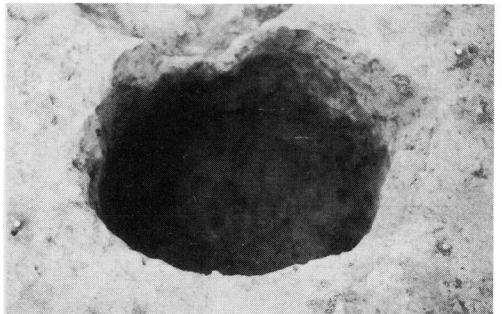
第392号土坑



第393号土坑

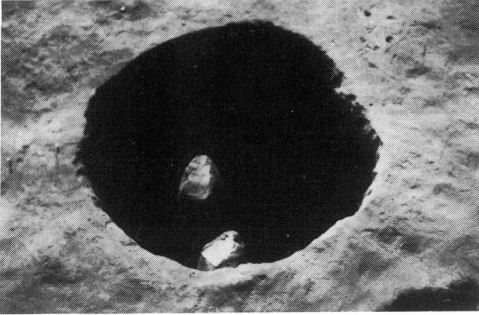


第394号土坑

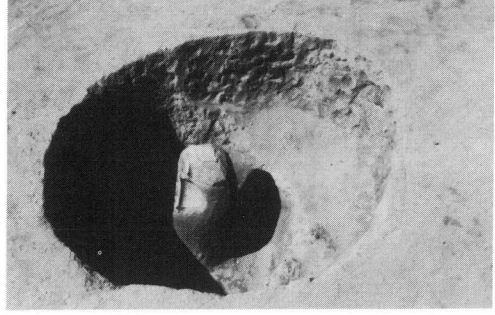


第398号土坑

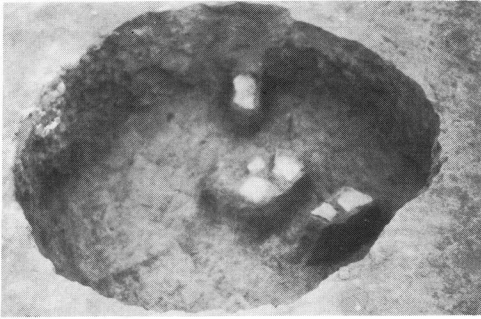




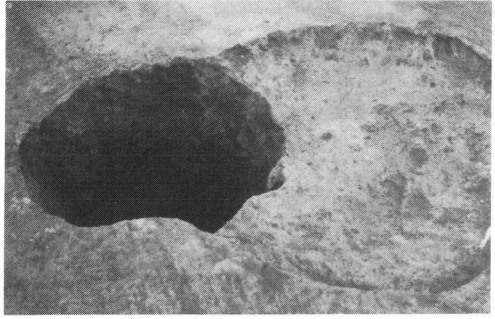
第402号土壤



第412号土壤



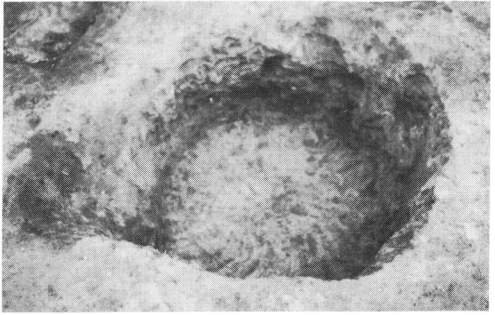
第416号土壤



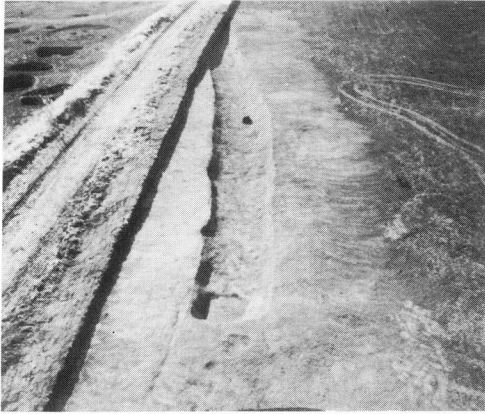
第417号土壤



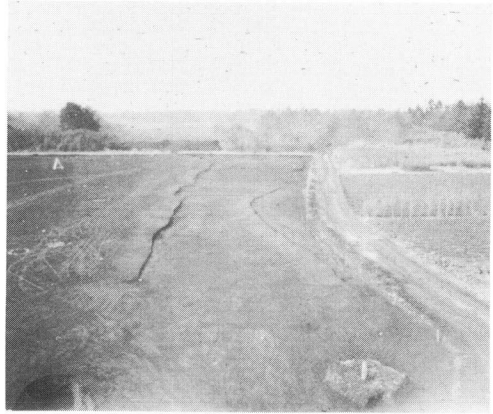
第419号土壤



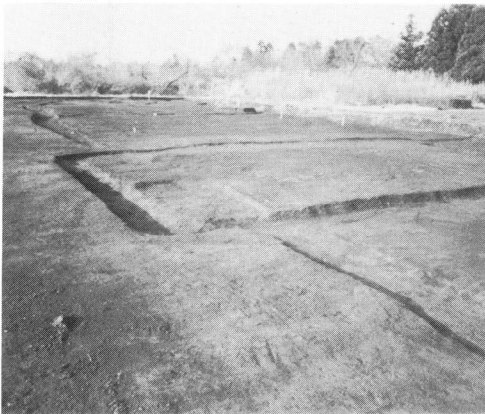
第420号土壤



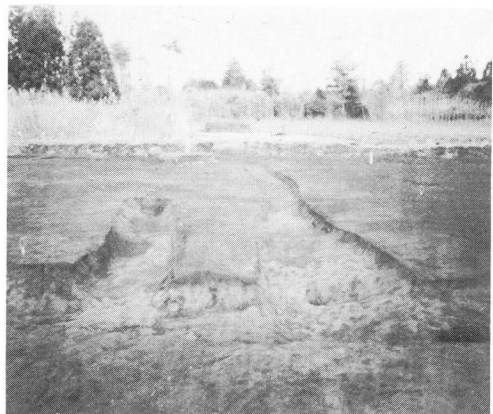
第2号溝



第3～8号溝



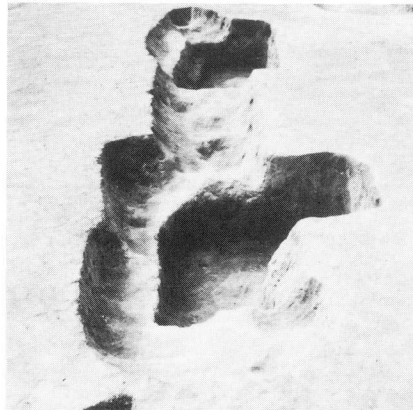
第6号溝



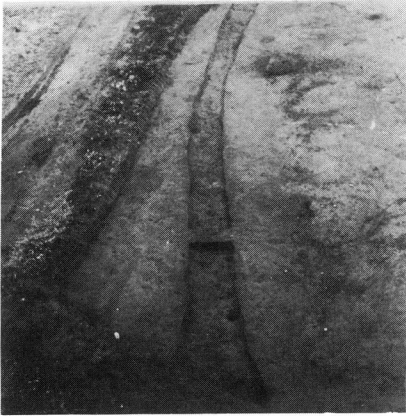
第7・8号溝



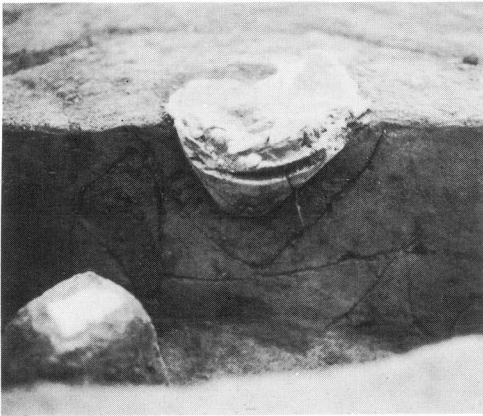
第9号溝



第10号溝



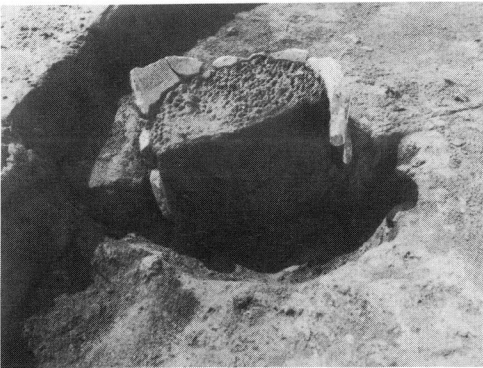
第15号溝



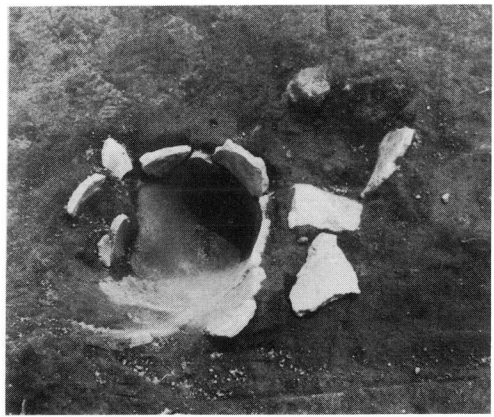
第1号埋甕遺構



第2号埋甕遺構



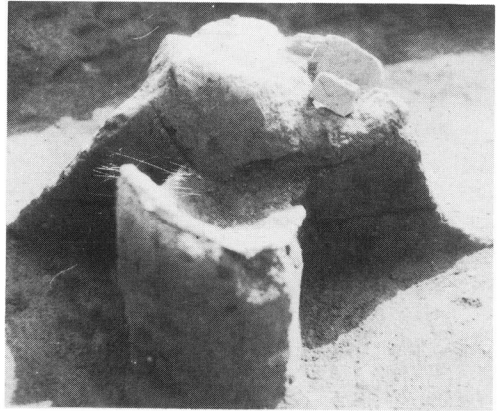
第3号埋甕遺構



第4号埋甕遺構



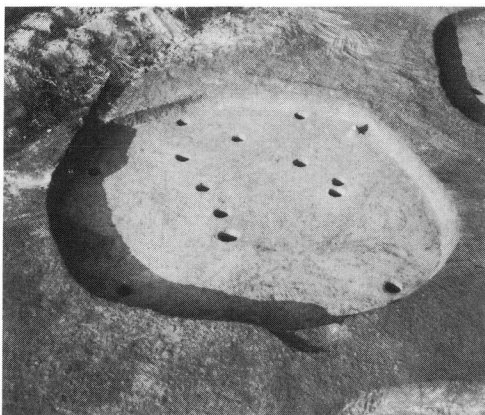
第 5 号埋甕遺構



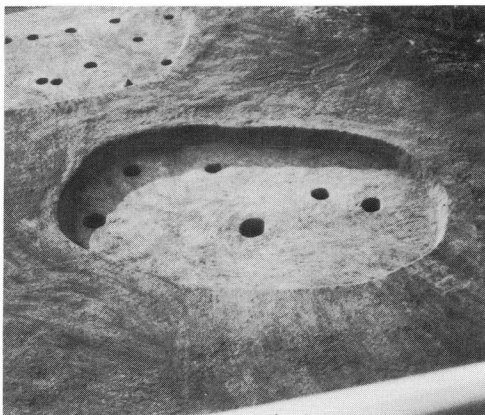
第 6 号埋甕遺構



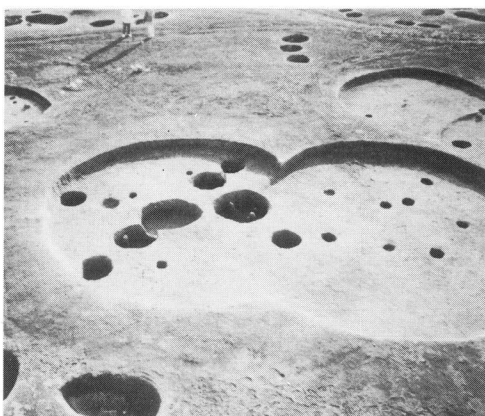
作業風景



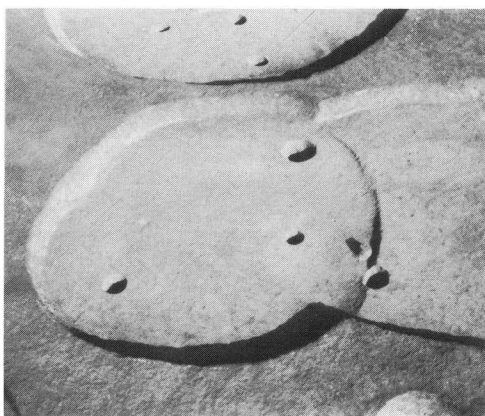
第1号住居跡



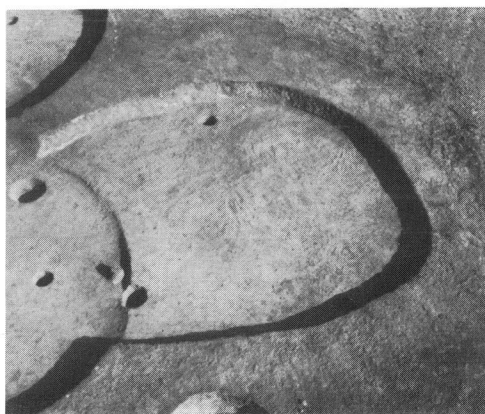
第2号住居跡



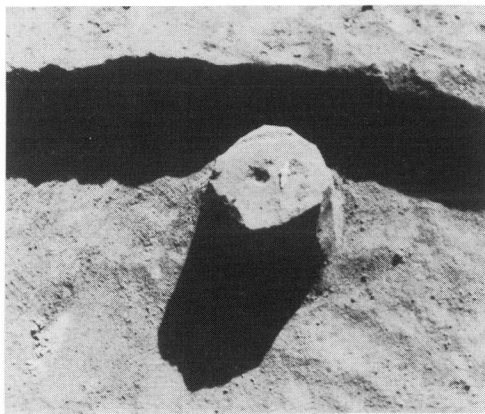
第3・4号住居跡



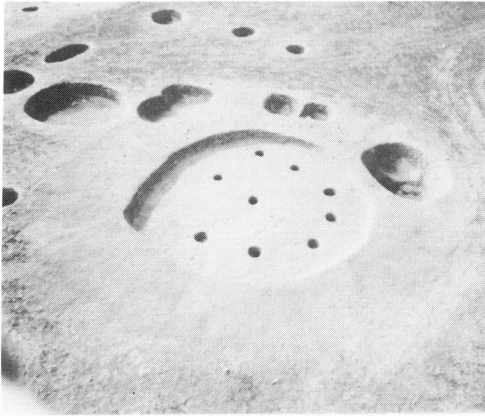
第5号住居跡



第6号住居跡



第6号住居跡出土遺物



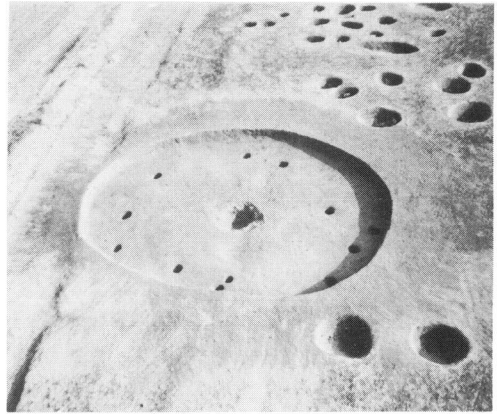
第7号住居跡



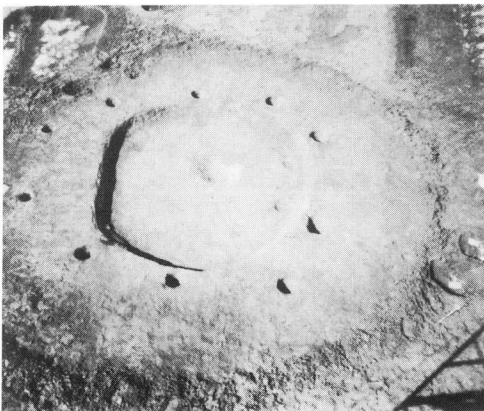
第8号住居跡



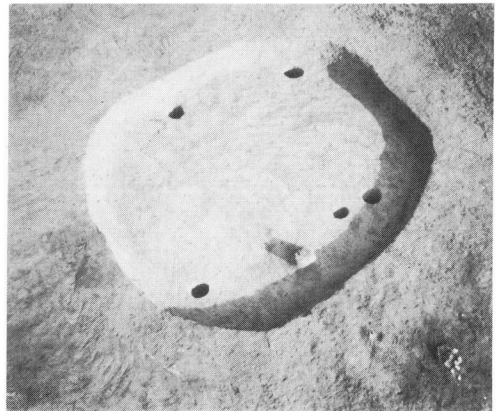
第9号住居跡



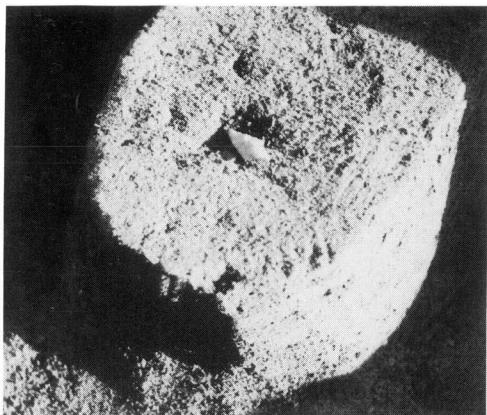
第10号住居跡



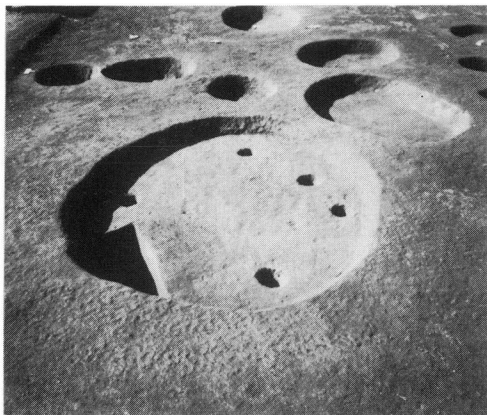
第11号住居跡



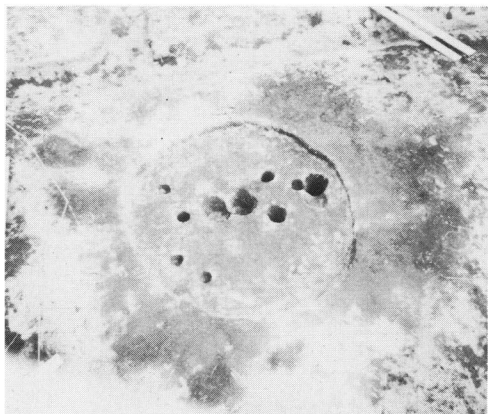
第12号住居跡



第12号住居跡出土遺物



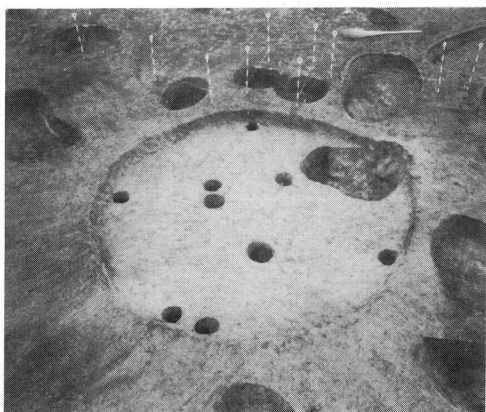
第13号住居跡



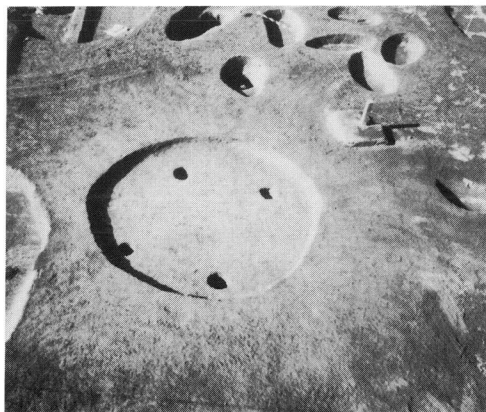
第14号住居跡



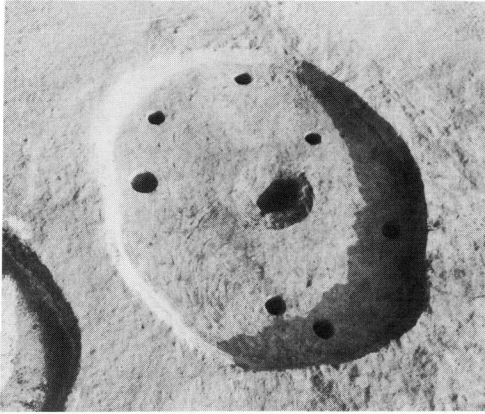
第15・16号住居跡



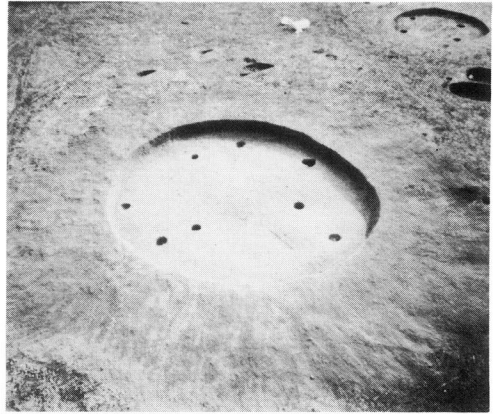
第17号住居跡



第18号住居跡



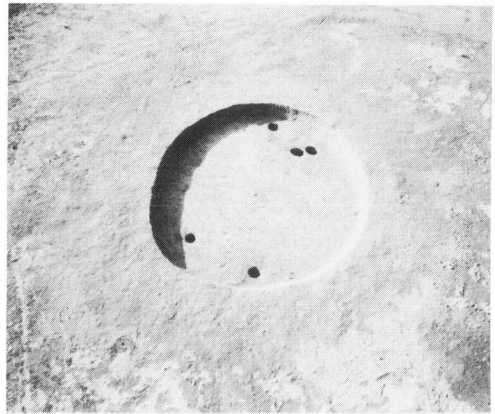
第19号住居跡



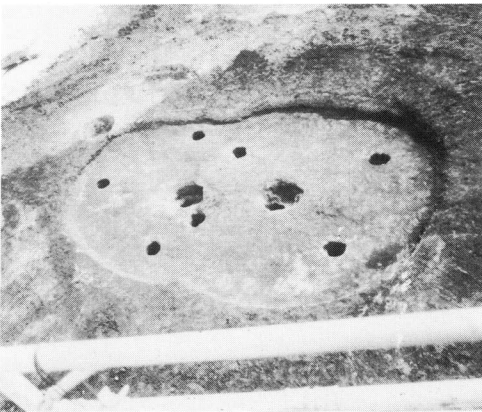
第20号住居跡



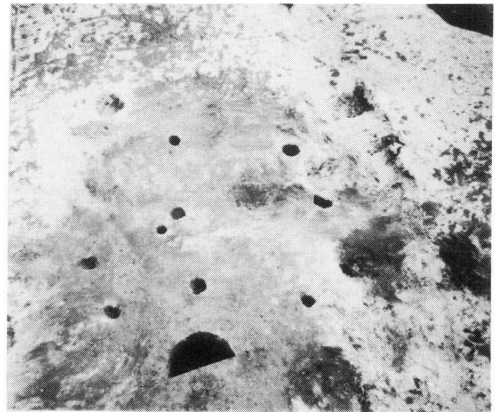
第21・23・24号住居跡



第22号住居跡

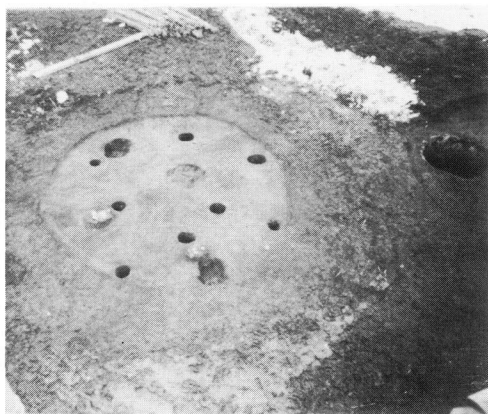


第25・27号住居跡

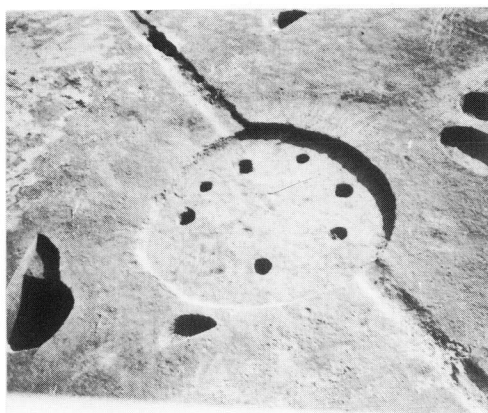


第26号住居跡





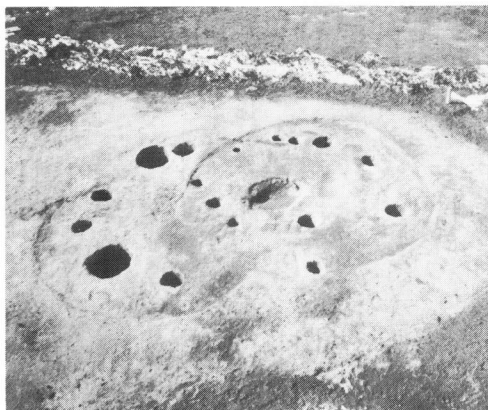
第28号住居跡



第29号住居跡



第30号住居跡



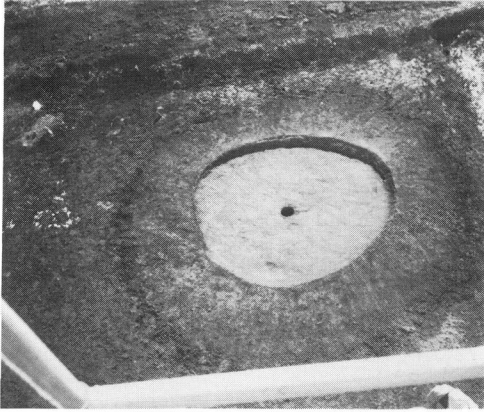
第31・33号住居跡



第32号住居跡



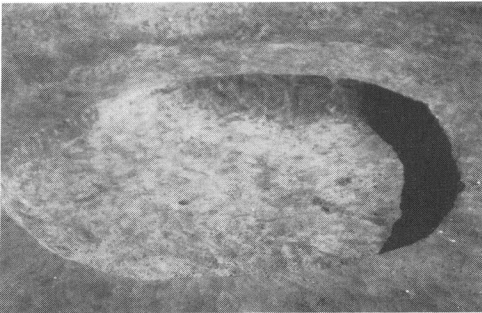
第34号住居跡



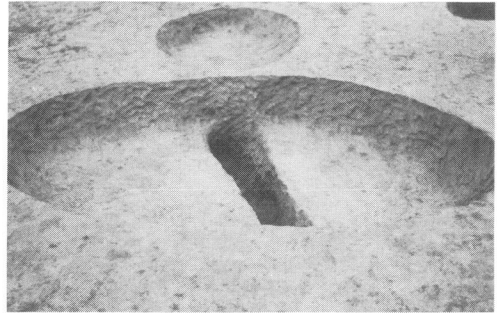
第35号住居跡



第36・37号住居跡



第13号土壇



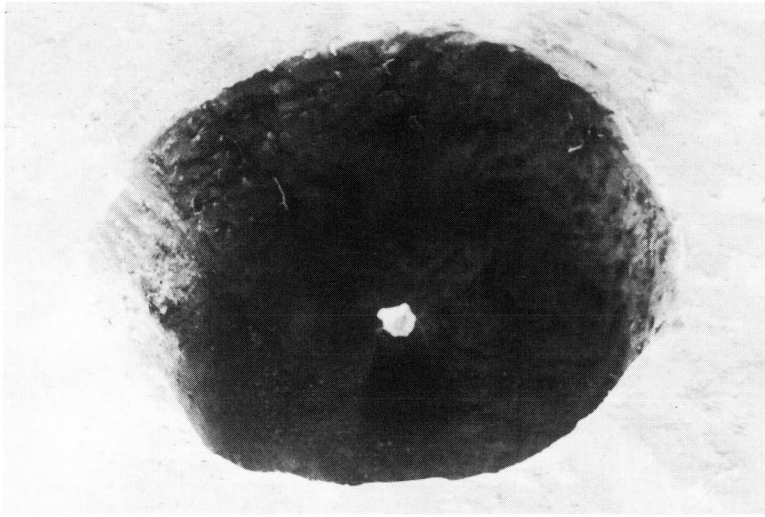
第34号土壇



第97号土壇



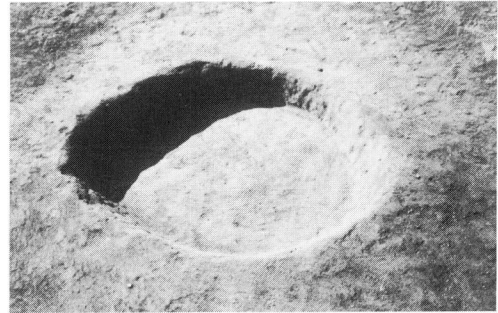
第136号土壇



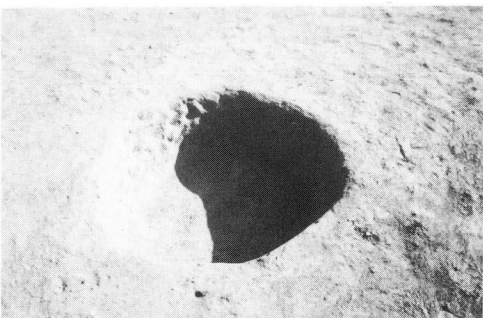
第138号土壤



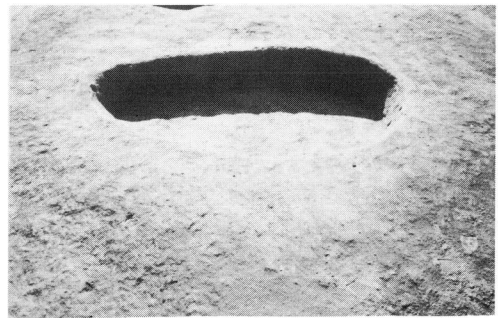
第141号土壤



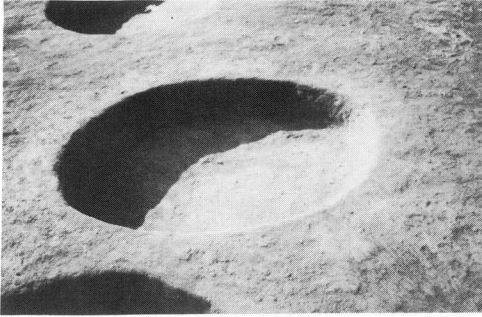
第153号土壤



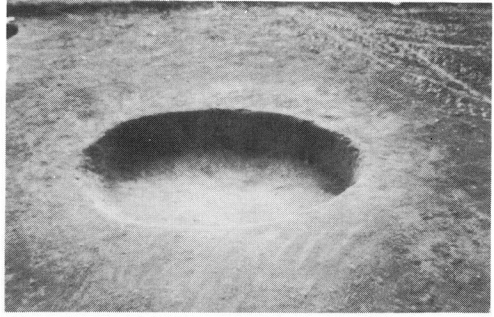
第154号土壤



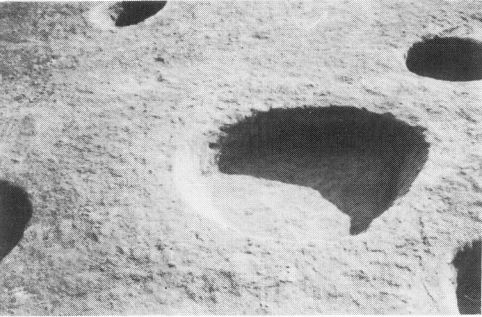
第155号土壤



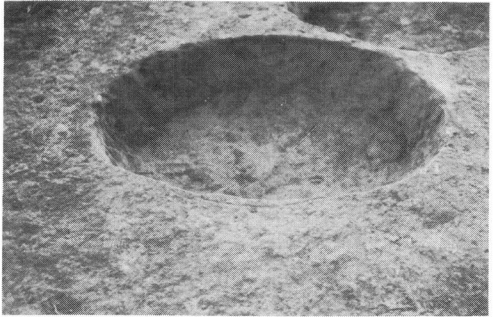
第160号土壙



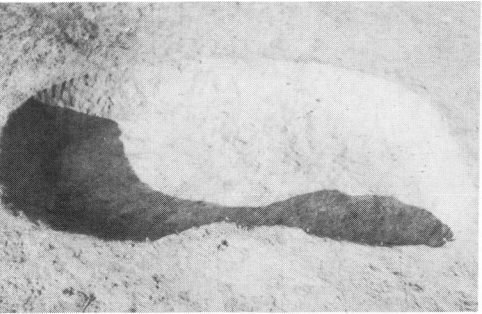
第164号土壙



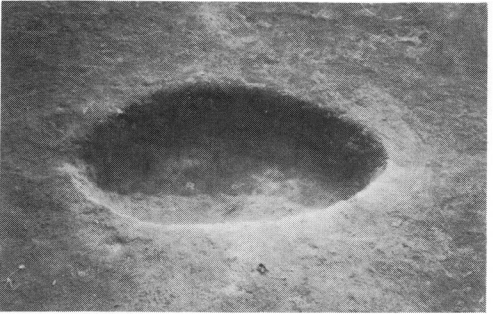
第194号土壙



第199号土壙



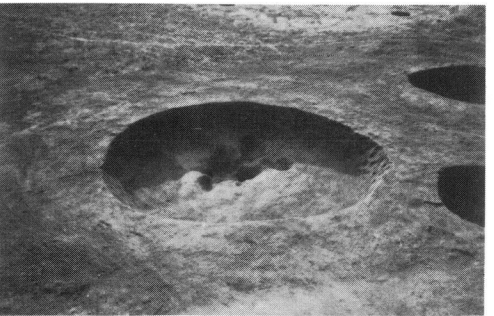
第201号土壙



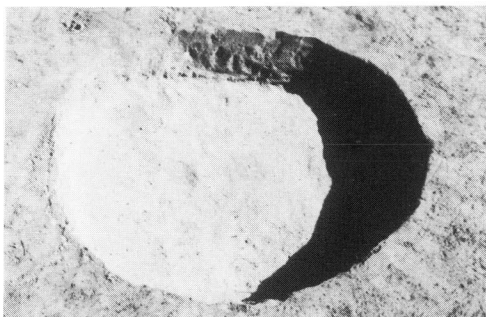
第215号土壙



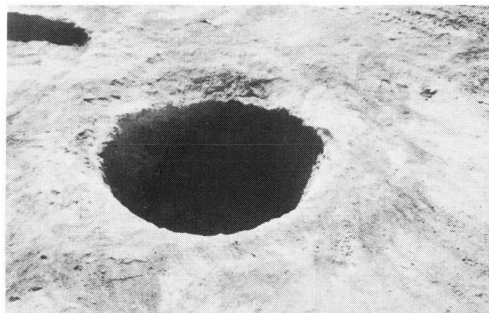
第223号土壙



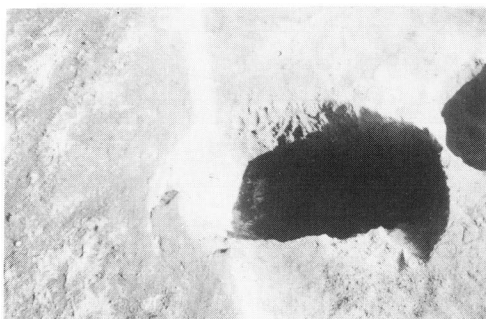
第255号土壙



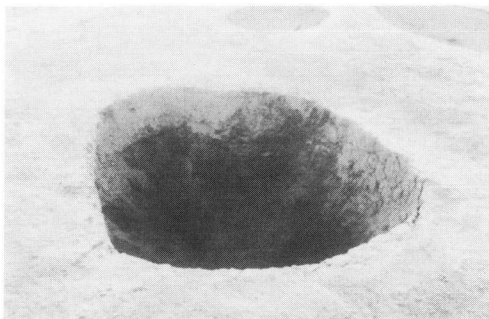
第279号土壤



第282号土壤



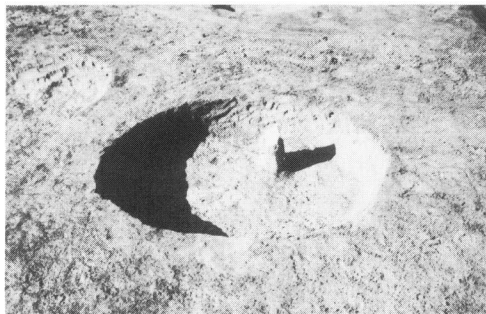
第295号土壤



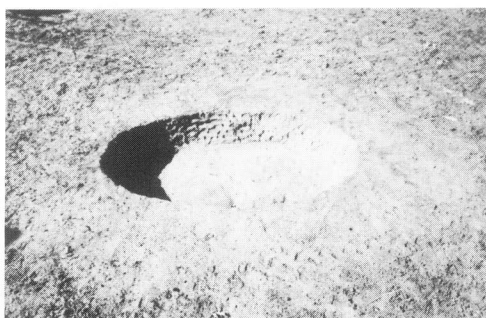
第304号土壤



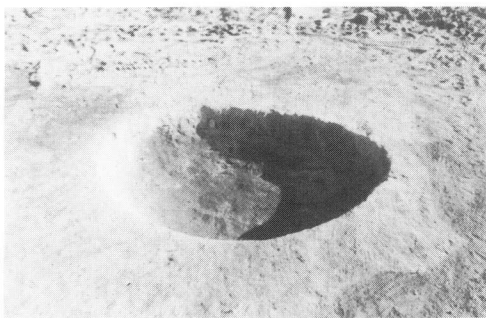
第320号土壤



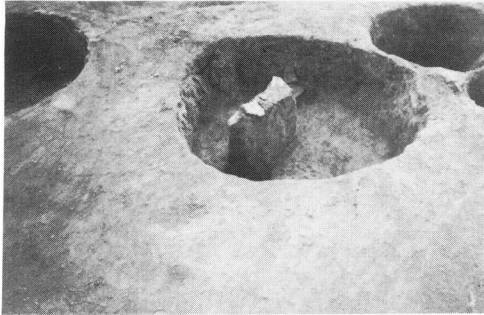
第321号土壤



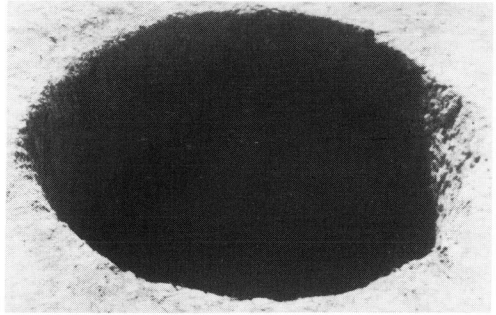
第323号土壤



第333号土壤



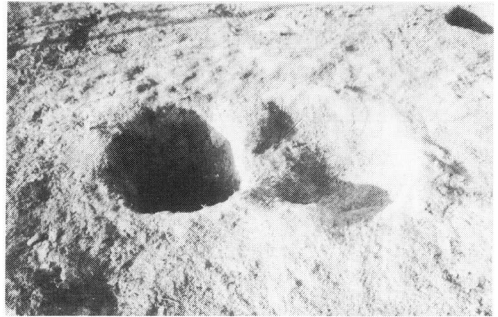
第342号土壙



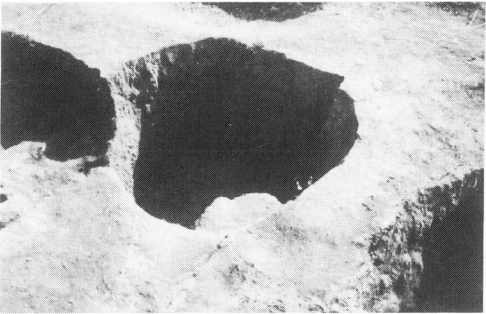
第346号土壙



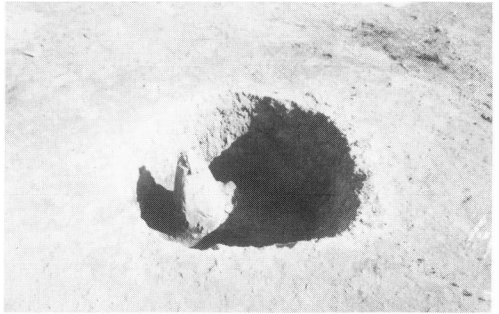
第353号土壙



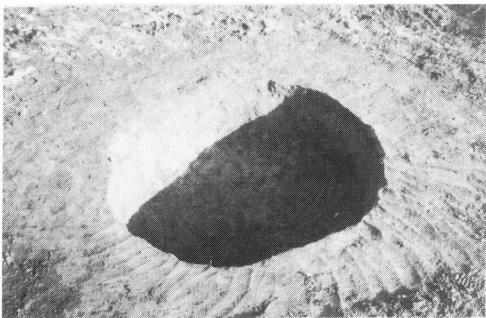
第357号土壙



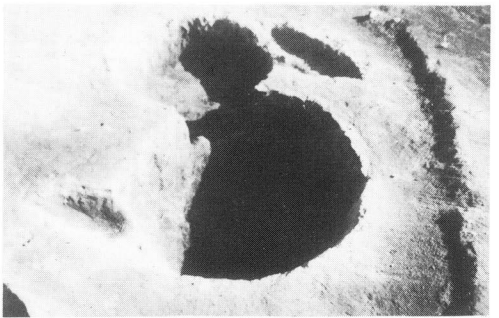
第358号土壙



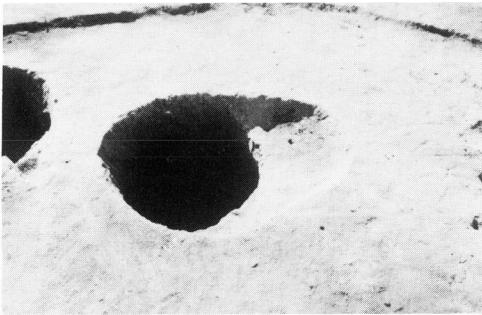
第384号土壙



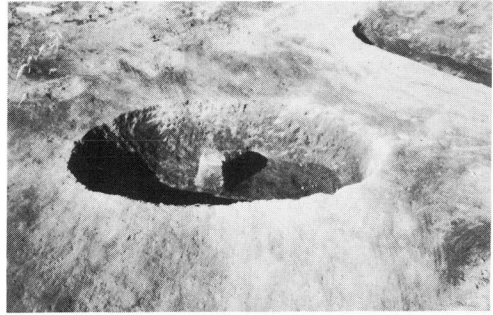
第386号土壙



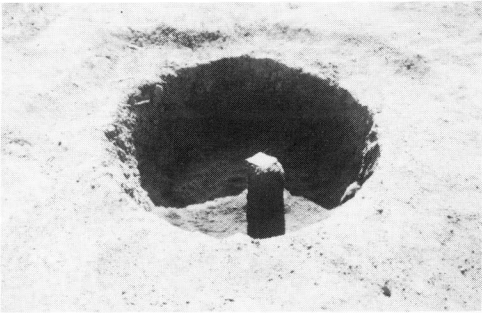
第387号土壙



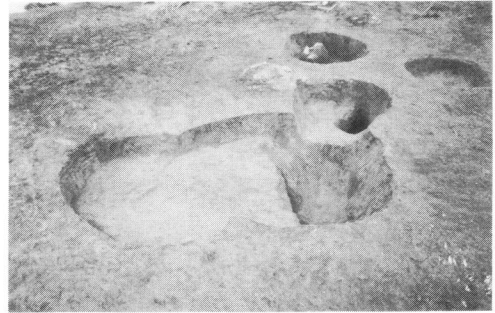
第388号土坑



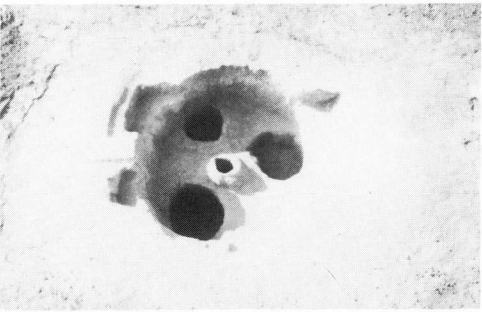
第393号土坑



第401号土坑



第407号土坑



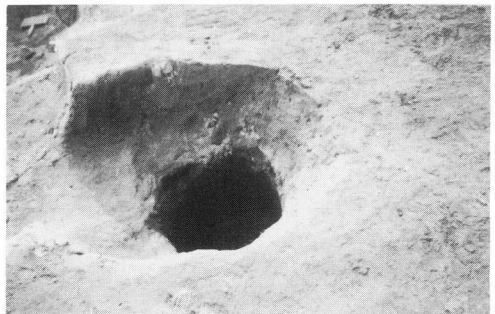
第409号土坑



第413号土坑



第415号土坑



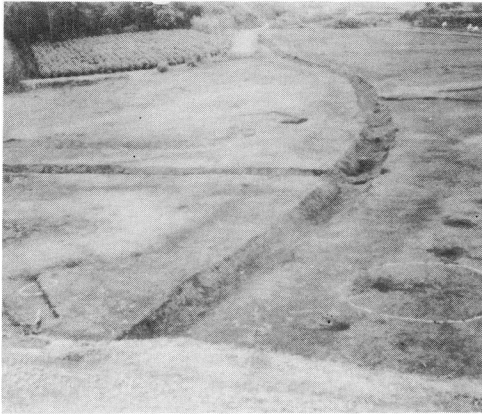
第422号土坑



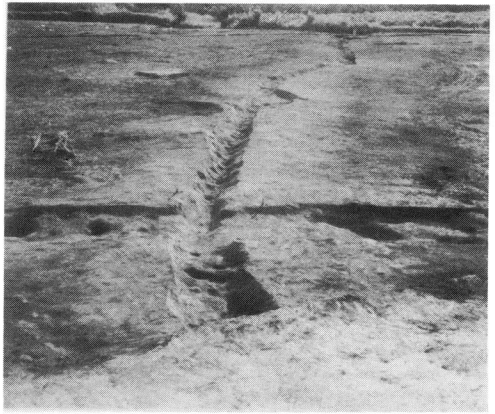
第1・2号溝



第3・5号溝



第4号溝



第6号溝

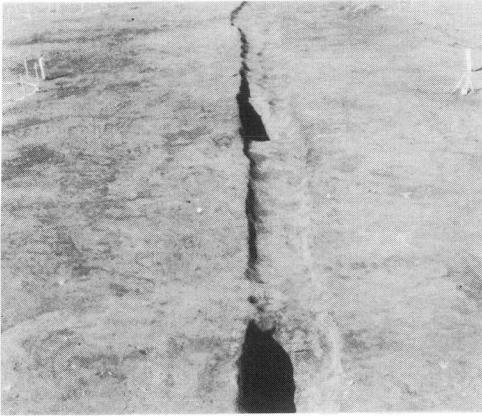


第7号溝



第8号溝

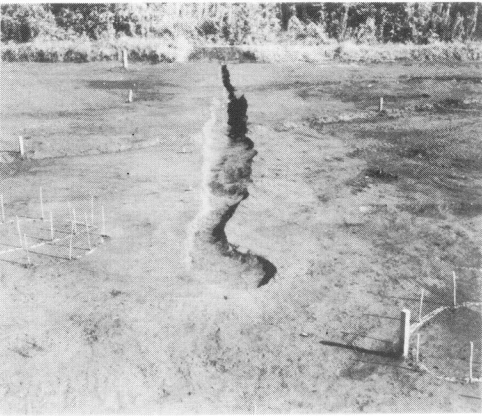




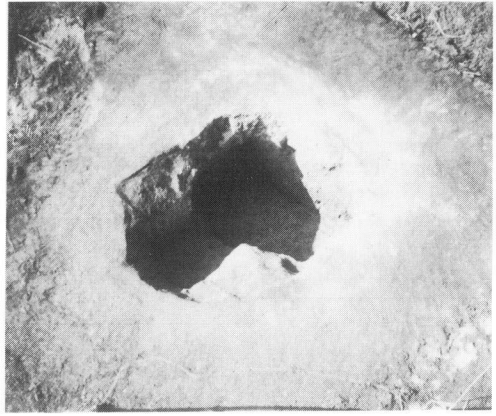
第9号溝



第10号溝



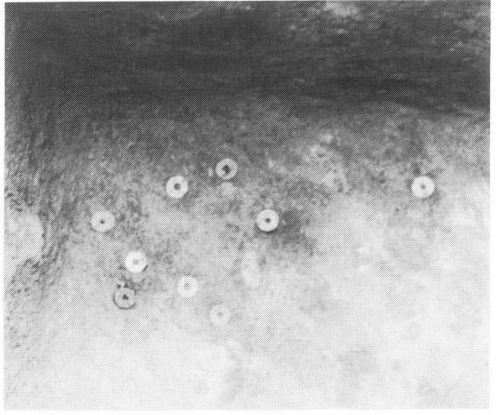
第11号溝



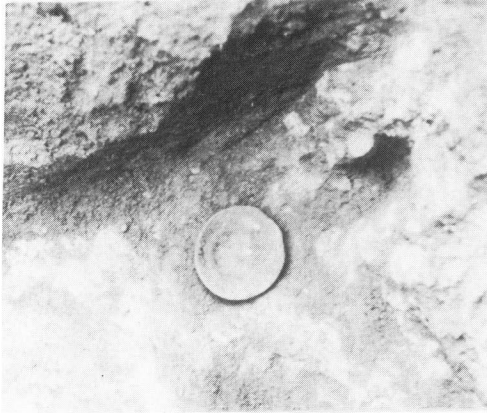
第1号地下式壙



第1号地下式壙豎坑古銭出土状況



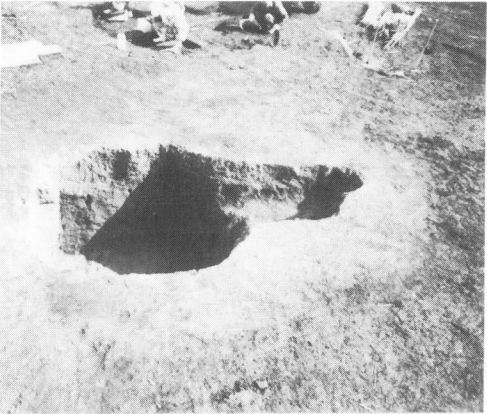
第1号地下式壙主室古銭出土状況



第1号 地下式竈灯明皿出土状況



第2号地下式竈



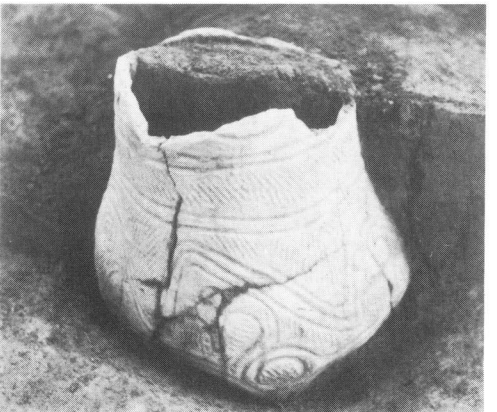
第3号地下式竈



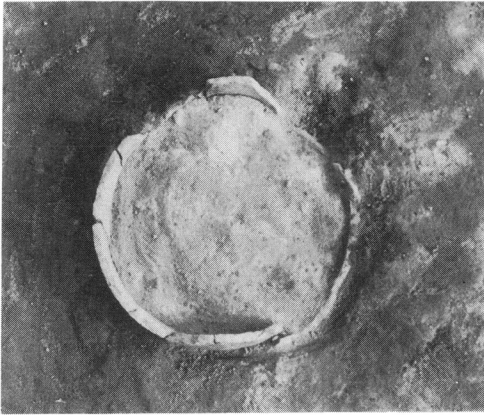
第4号地下式竈工具痕



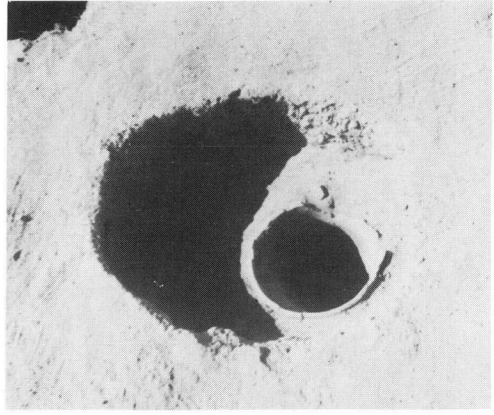
第5号地下式竈



第1号埋甕遺構



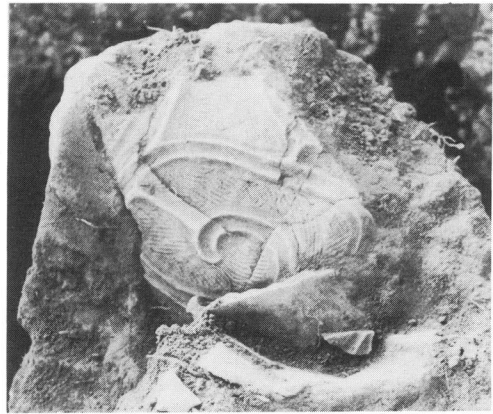
第2号埋甕遺構



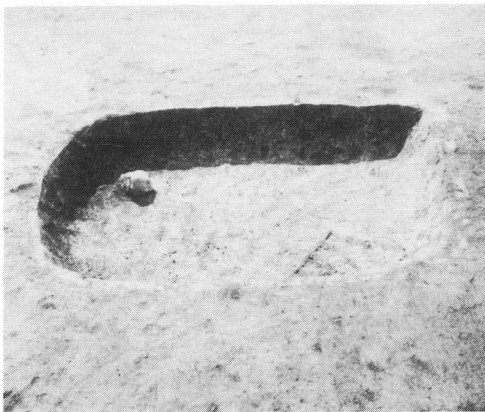
第3号埋甕遺構



第4号埋甕遺構



第5号埋甕遺構



第1号粘土貼り遺構



第2号粘土貼り遺構



作業風景



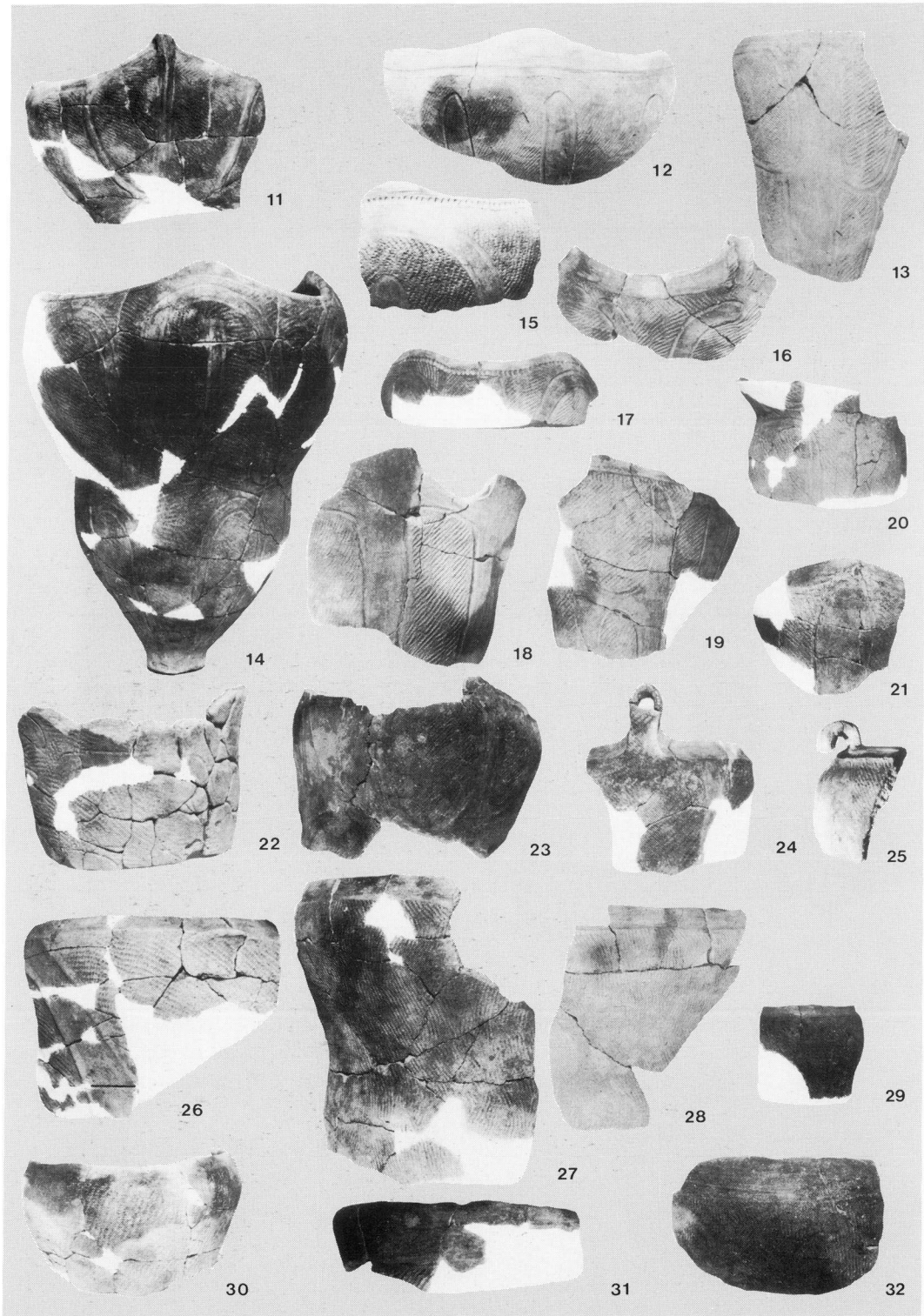
現地説明会



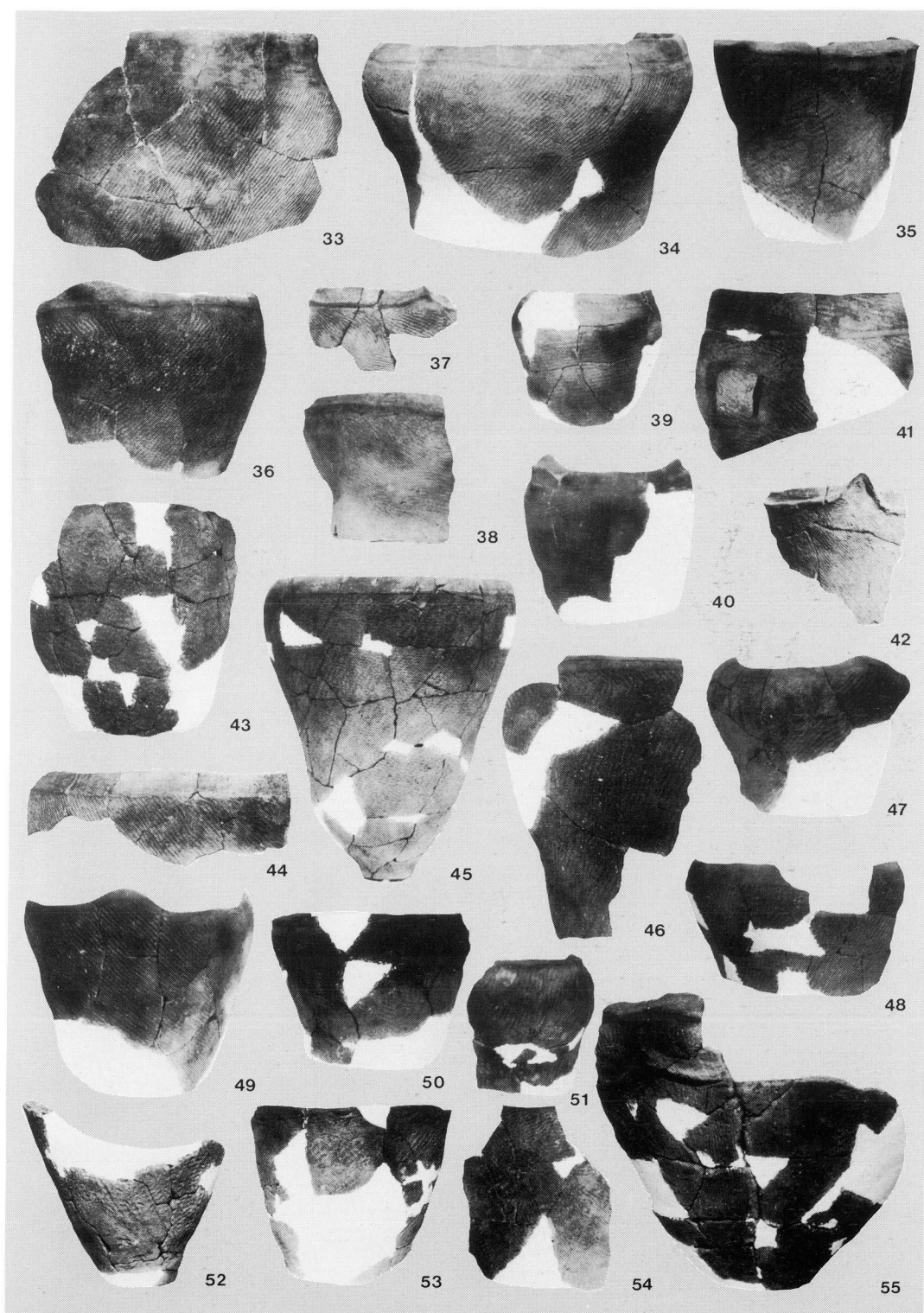
全 景



住居跡・土壙出土土器(1) S=1/6



住居跡・土壙・埋甕遺構出土土器(2) S=1/6



住居跡・土壇出土土器(3) S=1/6